

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第237集

都城市所在

お お と し
大 年 遺 跡

県道飯野松山都城線(都城志布志道路)道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1

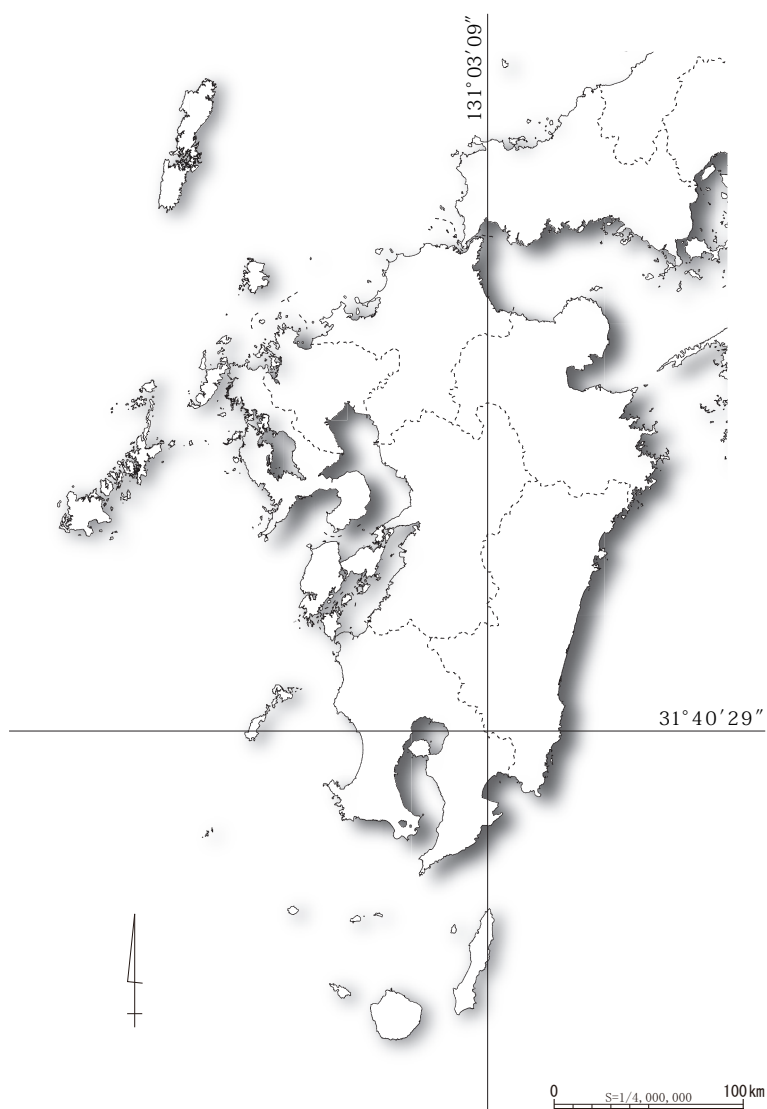
2 0 1 6

宮崎県埋蔵文化財センター

都城市所在

大年遺跡

県道飯野松山都城線(都城志布志道路)梅北工区道路整備工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 1



2016

宮崎県埋蔵文化財センター



1 調査地上空から望む霧島連山（南東から）



1 金御岳山頂からみた都城盆地と大年遺跡



2 大年遺跡南部調査区下層確認トレンチ掘削状況及び土層堆積状況



1 大年遺跡北部調査区（第1次調査区）全景（写真上が北）



1 大年遺跡南部調査区（第2次調査区）全景（モザイク合成写真、写真上が北）



1 鬼界アカホヤ火山灰下位の土層堆積状況（遺跡北部）



2 遺跡北部4層上面での遺構検出状況（番号は竪穴建物跡の番号。南から）



1 竪穴建物跡 2 埋土上層（基本土層 3 層）の遺物出土状況（西から）



2 竪穴建物跡 5 北西部遺物出土状況（北から）



1 畦状遺構 1 土層堆積状況（南から）



2 道路状遺構 1 の土層堆積状況（南から）



1 高坏（図 79-364）脚部の焼成後スリップの状況（スリップが乗って黒斑が薄くなっている。）



2 竪穴建物跡 9 出土台石（図 97-621）の鉄錆付着状況

序

宮崎県教育委員会では、県道飯野松山都城線（都城志布志道路）梅北工区道路整備工事に伴い、都城市梅北町に所在する大年遺跡の発掘調査を平成 24・25 年度に実施しました。本書は、その発掘調査の記録を掲載した報告書です。

今回報告する大年遺跡では、弥生時代から古墳時代の集落跡のほか、文明 3（1471）年に桜島が噴火した際に噴出し降り積もった火山灰の下から、道や畠跡等多くの遺構がみつかりました。また、旧石器時代以降の多様な遺物が出土しており、およそ 15,000 年以上前から断続的にこの周辺で人々が活動していたことも明らかとなりました。その中で、道は古代から使用されていた可能性が考えられており、遺跡のあった場所が 1,000 年以上にわたって道として使用されていたことが考えられるなど、多くの調査成果を得ることができました。

今回の調査で得られたこのような多くの成果は、今後、当地域の歴史を解明する上で、非常に貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書作成にあたって、御協力いただいた地元および関係諸機関の方々に心より厚くお礼申し上げます。

平成 28 年 3 月

宮崎県埋蔵文化財センター
所 長 岩 切 隆 志

例 言

- 1 本書は県道飯野松山都城線（都城志布志道路）梅北工区道路整備工事に伴い宮崎県教育委員会が実施した、宮崎県都城市梅北町に所在する大年遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施し、第1次調査を平成24(2012)年9月12日から平成25(2013)年3月22日まで、第2次調査を平成25(2013)年5月7日から平成26(2014)年1月29日まで行った。
- 3 発掘調査は加藤徹、宗廣睦子、津曲健、竹下昭彦が担当した。現地調査における図面作成および写真撮影は調査担当者が分担して行った。
- 4 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書に係わる業務については、整理作業員の協力を得て行った。
- 5 空中写真撮影業務は有限会社フジタ、有限会社スカイサーベイ九州に、基準点測量等の測量業務は株式会社平和総合技研、株式会社旭総合コンサルタントに、自然科学分析は古環境研究所にそれぞれ委託した。
- 6 実測で使用した測量基準は、国土座標平面直角座標系第Ⅱ系（世界測地系）および東京湾海拔（T.P.）で、方位は座標北を指す。また、国土地理院発行地形図は真北を指す。
- 7 本書で使用した土層・土器等の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳（2008年度版）』によるが、色調記号の記載がない場合はその限りではない。
- 8 石器石材については当センター赤崎広志主幹に、陶磁器については宮崎県立図書館福田泰典主幹に助言をいただいたが、誤りがあればそれは担当者の不学によるものである。
- 8 調査時の名称と報告書での名称等の対応は、附表の対応表に記載している。
- 9 実測時の遺構・遺物の形状等を浄図した図により細かく反映させる目的で、トレース時の線端が実測線に対応するように浄図を行った。なお、実測線とトレース線の対応は下図の通りである。ただし、附図については縮尺の都合上、下図の限りではない部分もある。



- 10 本書の執筆および編集は加藤が行った。
- 11 出土遺物およびその他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

本文目次

序
凡例
目次

第1章	調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の組織	1
第3節	調査の経過	3
第2章	遺跡の立地と歴史的環境	5
第1節	遺跡の地理的環境	5
第2節	遺跡周辺の歴史的環境	7
第3章	調査の成果	11
第1節	調査の方法と層序	11
第2節	検出遺構	14
第3節	出土遺物	66
第4章	遺構と遺物の検討	107
第1節	旧石器時代～縄文時代早期の遺物について	107
第2節	縄文時代後期～晩期の遺構・遺物について	109
第3節	弥生時代～古墳時代の遺構・遺物について	114
第4節	古代～中世の遺構について	123
第5章	総括	131
附編	自然科学分析結果	133
第1節	自然科学分析について	133
第2節	植物珪酸体分析	133
第3節	花粉分析	137
第4節	炭化種実同定	141
第5節	放射性炭素年代測定	142
第6節	蛍光X線分析（黒曜石の産地推定）	144
第7節	溝状遺構底面に堆積した鉍物粒についての観察	146

挿 図 目 次

図 1	大年遺跡調査地と周辺地形	6
図 2	大年遺跡周辺の主要遺跡分布図	8
図 3	大年遺跡グリッドおよび鬼界アカホヤ火山灰下層確認トレンチ設定状況	11
図 4	大年遺跡基本層序概略図	13
図 5	大年遺跡南部調査区土層断面図	14
図 6	土坑 1・2 平面・断面図	15
図 7	竪穴建物跡 1 平面・土層断面図	16
図 8	竪穴建物跡 1 出土遺物	16
図 9	竪穴建物跡 2 平面・土層断面図	17
図 10	竪穴建物跡 2 出土遺物	18
図 11	竪穴建物跡 3 平面・土層断面図	19
図 12	竪穴建物跡 3 出土遺物	19
図 13	竪穴建物跡 4 平面・土層断面図	20
図 14	竪穴建物跡 5 平面・土層断面図	21
図 15	竪穴建物跡 5 出土遺物	21
図 16	竪穴建物跡 6・竪穴状遺構 2 平面・土層断面図	22
図 17	竪穴建物跡 6 土層断面図	23
図 18	竪穴建物跡 6 出土遺物	24
図 19	竪穴建物跡 7 平面・土層断面図	25
図 20	竪穴建物跡 7 出土遺物	26
図 21	竪穴建物跡 8 出土遺物	26
図 22	竪穴建物跡 8 平面・土層断面図	26
図 23	竪穴建物跡 9 平面・土層断面図	27
図 24	竪穴建物跡 9 出土遺物	28
図 25	竪穴建物跡 10 平面・土層断面図	29
図 26	竪穴建物跡 10 出土遺物	29
図 27	竪穴状遺構 1 平面・断面図	30
図 28	竪穴状遺構 1 出土遺物	30
図 29	土坑 3 平面・断面図	31
図 30	土坑 4・5 平面・断面図	32
図 31	北部調査区 4 層内炭化種実出土状況 1	33
図 32	北部調査区 4 層内炭化種実出土状況 2	34
図 33	掘立柱建物跡 1 平面・断面図	35
図 34	炭集中土坑平面・土層断面図	36
図 35	北部調査区 1 層下面桜島 3 テフラ残存状況	37
図 36	北部調査区 1 下面付近土層断面図	38

図 37	小溝状遺構平面・断面図 1	39
図 38	小溝状遺構平面・断面図 2	40
図 39	畦状遺構 1 平面図 1	42
図 40	畦状遺構 1 平面図 2	43
図 41	畦状遺構 1 平面図 3	44
図 42	畦状遺構 1 断面図	45
図 43	畦状遺構 2 平面図	46
図 44	畦状遺構 3 平面図	47
図 45	畦状遺構 2・3 断面図	48
図 46	道路状遺構平面図 1 (桜島 3 テフラ除去段階 1)	50
図 47	道路状遺構平面図 2 (桜島 3 テフラ除去段階 2)	51
図 48	道路状遺構平面図 3 (桜島 3 テフラ除去段階 3)	52
図 49	道路状遺構平面図 4 (桜島 3 テフラ除去段階 4)	53
図 50	道路状遺構平面図 5 (完掘段階 1)	55
図 51	道路状遺構平面図 6 (完掘段階 2)	56
図 52	道路状遺構平面図 7 (完掘段階 3)	57
図 53	道路状遺構土層断面図 1	58
図 54	道路状遺構土層断面図 2	59
図 55	道路状遺構の変化	60
図 56	溝状遺構平面図 1	61
図 57	溝状遺構平面図 2	62
図 58	溝状遺構平面図 3	63
図 59	溝状遺構土層断面図	64
図 60	掘立柱建物跡 2 平面・土層断面図	65
図 61	土器実測図 1 (縄文土器 1)	67
図 62	土器実測図 2 (縄文土器 2)	68
図 63	土器実測図 3 (縄文土器 3)	69
図 64	土器実測図 4 (縄文土器 4)	70
図 65	土器実測図 5 (縄文土器 5)	71
図 66	土器実測図 6 (縄文土器 6)	72
図 67	土器実測図 7 (弥生土器 1)	73
図 68	土器実測図 8 (弥生土器 2)	74
図 69	土器実測図 9 (弥生土器 3)	75
図 70	土器実測図 10 (弥生土器 4)	76
図 71	土器実測図 11 (土師器 1)	77
図 72	土器実測図 12 (土師器 2)	78
図 73	土器実測図 13 (土師器 3)	79
図 74	土器実測図 14 (土師器 4)	80
図 75	土器実測図 15 (土師器 5)	81

図 76	土器実測図 16 (弥生土器・土師器底部 1)	83
図 77	土器実測図 17 (弥生土器・土師器底部 2)	84
図 78	土器実測図 18 (土師器 6)	85
図 79	土器実測図 19 (土師器 7)	86
図 80	土器実測図 20 (土師器 8)	87
図 81	土器実測図 21 (土師器 9)	88
図 82	土器実測図 22 (土師器 10)	88
図 83	土器ミニチュア品・土製品実測図	89
図 84	土製勾玉実測図	90
図 85	土師質土器・磁器実測図	91
図 86	石器実測図 1 (旧石器)	92
図 87	石器実測図 2 (打製石鏃・小型石器)	93
図 88	石器実測図 3 (磨製石鏃・磨製石器片)	94
図 89	石器実測図 4 (打製石斧)	95
図 90	石器実測図 5 (磨製石斧・横刃型石器)	96
図 91	石器実測図 6 (磨石・敲石等 1)	97
図 92	石器実測図 7 (磨石・敲石等 2)	98
図 93	石器実測図 8 (磨石・敲石等 3)	99
図 94	石器実測図 9 (台石・大型礫等 1)	100
図 95	石器実測図 10 (台石・大型礫等 2)	101
図 96	石器実測図 11 (台石・大型礫等 3)	102
図 97	石器実測図 12 (台石・大型礫等 4)	103
図 98	石器実測図 15 (石製品)	104
図 99	石器実測図 14 (砥石)	105
図 100	石器実測図 15 (石製品)	105
図 101	鉄器実測図	106
図 102	グリッド別にみた黒曜石剥片類の出土状況	111
図 103	Renfrew による交易モデル	113
図 104	大岩田上村遺跡の竪穴建物跡	114
図 105	平峰遺跡・大年遺跡の土器からみた土師器諸要素の変遷想定図	117
図 106	熊野原遺跡の間仕切付建物跡	119
図 107	大年遺跡の竪穴建物跡における埋土堆積状況模式図	120
図 108	身部に凹みをもつ磨製石鏃の諸例	122
図 109	桜島 3 テフラが堆積する溝状遺構等の諸例 1	124
図 110	桜島 3 テフラが堆積する溝状遺構等の諸例 2	125
図 111	植物珪酸体ダイアグラム	135
図 112	花粉ダイアグラム	139
図 113	暦年較正結果	144
図 114	黒曜石産地推定判別図	145

写真目次

写真1	調査地からみた桜島の噴煙	5
写真2	植物珪酸体写真	149
写真3	花粉写真	150
写真4	炭化種実同定試料写真	151
写真5	道路状遺構底面堆積物サンプル写真	151

表目次

表1	都城市内の旧石器時代～縄文時代早期の主な遺跡	109
表2	小林市教育委員会による黒曜石産地分析の結果	113
表3	都城市内の縄文時代後期・晩期の竪穴建物跡の諸例	114
表4	身部に凹みを有する磨製石鏃の諸例	122
表5	桜島3テフラが堆積した溝状遺構等の諸例	126
表6	植物珪酸体分析結果	134
表7	花粉分析結果	138
表8	種実同定結果	141
表9	放射性炭素年代測定分析試料一覧	143
表10	放射性炭素年代測定分析結果	143
表11	黒曜石蛍光X線分析結果一覧	145
表12	溝状遺構底面堆積物の顕微鏡観察結果	146
表13	テフラ略号一覧	147
附表1	報告書掲載名称と注記略号等の対応表	153
附表2	観察表凡例	154
附表3	縄文土器注記および取上番号一覧	154
附表4	土師器・弥生土器観察表	155
附表5	土製品注記および取上番号一覧	162
附表6	石器観察表	162
附表7	鉄器観察表	164
附表8	掲載遺物に関する取り上げ座標一覧	165

図版目次

- 巻頭図版 1 調査地上空から望む霧島連山
- 巻頭図版 2 1 金御岳山頂からみた都城盆地と大年遺跡
2 大年遺跡南部調査区下層確認トレンチ掘削状況および土層堆積状況
- 巻頭図版 3 大年遺跡北部調査区（第1次調査区）全景
- 巻頭図版 4 大年遺跡南部調査区（第2次調査区）全景
- 巻頭図版 5 1 鬼界アカホヤ火山灰下位の土層堆積状況
2 遺跡北部4層上面での遺構検出状況
- 巻頭図版 6 1 竪穴建物跡2埋土上層（基本土層3層）内の遺物出土状況
2 竪穴建物5北西部遺物出土状況
- 巻頭図版 7 1 畦状遺構1土層堆積状況
2 道路状遺構1の土層堆積状況
- 巻頭図版 8 1 高坏脚部（図79-364）の焼成後スリップの状況
2 竪穴建物9出土台石（図97-621）の鉄錆付着状況
-
- 写真図版 1 1 旧石器剥片出土状況
2 竪穴建物跡1検出状況
3 竪穴建物跡1床面検出状況
- 写真図版 2 1 竪穴建物跡2床面検出状況
2 竪穴建物跡3床面検出状況
3 竪穴建物跡4床面検出状況
- 写真図版 3 1 竪穴建物跡5床面検出状況
2 竪穴建物跡6床面検出状況
3 竪穴建物跡7床面検出状況
- 写真図版 4 1 竪穴建物跡8床面検出状況
2 竪穴建物跡9床面検出状況
3 竪穴建物跡10床面検出状況
- 写真図版 5 1 竪穴状遺構1床面検出状況
2 竪穴建物跡2床面検出状況
3 土坑2内壺出土状況
- 写真図版 6 1 土坑1完掘状況
2 竪穴建物跡1突出壁内遺物出土状況
3 竪穴建物跡1ピット上礫出土状況
4 竪穴建物跡1完掘状況
5 竪穴建物跡2完掘状況
6 竪穴建物跡3遺物出土状況
7 竪穴建物跡4完掘状況
8 竪穴建物跡5遺物出土状況
- 写真図版 7 1 竪穴建物跡5北西部遺物出土状況
2 竪穴建物跡5完掘状況
3 竪穴建物跡6東側灰状物質堆積状況
4 竪穴建物跡6遺物出土状況
5 竪穴建物跡6灰色粘土検出状況
6 竪穴建物跡6完掘状況
7 竪穴建物跡8遺物出土状況
8 竪穴建物跡8完掘状況
- 写真図版 8 1 竪穴建物跡9完掘状況
2 竪穴建物跡10埋土中遺物出土状況
3 竪穴建物跡10完掘状況
4 竪穴状遺構1遺物出土状況
5 竪穴状遺構1完掘状況
6 竪穴状遺構2完掘状況
7 土坑3内壺（190）出土状況
8 土坑3完掘状況

- 写真図版 9 1 遺跡北部調査区桜島 3 テフラ検出状況
2 掘立柱建物跡 1 柱穴完掘状況 3 畦状遺構 1 北端部掘削状況
- 写真図版 10 1 道路状遺構 1 底面および畦状遺構 2 検出状況
2 道路上遺構 1 内白磁 (491) 出土状況
3 道路状遺構 1 底面の「波板状凹凸面」完掘状況
- 写真図版 11 1 炭集中土坑検出状況 2 炭集中土坑土層断面
3 掘立柱建物跡 1 炉跡断面 4 掘立柱建物跡 1 柱穴断面
5 畦状遺構 1 調査風景 6 溝状遺構 5 完掘状況
- 写真図版 12 1 小溝列完掘状況 2 道路状遺構 1 北西部の土端状部掘削状況
3 道路状遺構 1 硬化面検出状況 4 「波板状凹凸面」検出状況
5 道路状遺構 1 検出状況 6 道路状遺構 1 完掘状況
- 写真図版 13 1 縄文土器 1 2 縄文土器 2
3 縄文土器 3
- 写真図版 14 1 縄文土器 4 2 縄文土器 5
3 縄文土器 6
- 写真図版 15 1 縄文土器 7 2 縄文土器 8
3 縄文土器 9
- 写真図版 16 1 縄文土器 10 2 縄文土器 11
3 縄文土器 12
- 写真図版 17 1 縄文土器 13 2 縄文土器 14
3 縄文土器 15
- 写真図版 18 1 弥生土器 1 2 弥生土器 2
3 弥生土器 3
- 写真図版 19 1 弥生土器 4 2 弥生土器 5
3 弥生土器 6
- 写真図版 20 1 弥生土器 7 2 弥生土器 8
3 弥生土器 9
- 写真図版 21 縄文土器 16・弥生土器 10
- 写真図版 22 弥生土器 11・土師器 1
- 写真図版 23 土師器 2
- 写真図版 24 土師器 3
- 写真図版 25 土師器 4
- 写真図版 26 土師器 5
- 写真図版 27 土師器 6
- 写真図版 28 土師器 7
- 写真図版 29 土師器 8
- 写真図版 30 土師器 9
- 写真図版 31 1 土師器 10 2 土師器 11
3 土師器 12

写真図版 32	1 土師器 13 3 土師器 15	2 土師器 14
写真図版 33	1 土師器 16 3 土師器 18	2 土師器 17
写真図版 34	1 土師器 19 3 土師器 21	2 土師器 20
写真図版 35	1 弥生土器・土師器底部 1 3 弥生土器・土師器底部 3	2 弥生土器・土師器底部 2
写真図版 36	1 弥生土器・土師器底部 4 3 土師器 22	2 弥生土器土師器底部 5
写真図版 37	1 土師器 23 3 土師器 25	2 土師器 24
写真図版 38	1 土師器 26 3 土師器 28	2 土師器 27
写真図版 39	1 土師器 29 3 土師質土器	2 ミニチュア土器・土製品
写真図版 40	1 白磁 1 (内面) 3 青磁・青花	2 白磁 2 (外面)
写真図版 41	1 石器 1 3 石器 3	2 石器 2
写真図版 42	1 石器 4 3 石器 6	2 石器 5
写真図版 43	1 石器 7 3 石器 9	2 石器 8
写真図版 44	1 石器 10 3 青銅器・鉄器	2 石器 11
写真図版 45	石器 12	
写真図版 46	石器 13	

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

都城志布志道路は九州縦貫自動車道宮崎線の都城 I.C. を起点として、鹿児島県曾於市を經由して同県志布志市へと至る、総延長およそ 40km として計画されている地域高規格道路である。志布志港は九州唯一の中核国際港湾であるとともに、港での取り扱い貨物量は年々増加している。道路の建設により、このような港湾と九州縦貫道宮崎線を接続する広域流通ネットワークとして、日本の中でも屈指の農畜産業が盛んである都城市や曾於市への飼料や生産物等の物流における高速化および効率化が期待されている。また、このような経済的要因だけでなく、災害時に強いことや、救急医療サービスの拡充の効果も期待されているなど、都城・大隅地域にとって重要な道路として位置づけられており早期の開通が地元住民からも期待されている。

都城志布志道路の建設は、平成 6 年 12 月に路線の計画が始まり、平成 9 年から埋蔵文化財の分布状況の紹介が行われた。都城志布志道路は、五十町 I.C. を境として、北側を国土交通省宮崎河川国道事務所が、南側を宮崎県が整備を行う区間となっており、両事務所とそれぞれの工区に応じて協議を行ってきた。その協議に基づいた文化財課の確認調査などを経て、路線内ではこれまでに平田遺跡（平成 15～16 年度）、筆無遺跡（平成 15～17 年度）、諸麦遺跡（平成 17 年度）、梅北針谷遺跡（平成 20 年）、働女木遺跡（平成 20～21 年）、平峰遺跡（平成 19～21 年）などの遺跡の発掘調査が行われ、記録保存の処置が施されるとともに、報告書の刊行まで終了している。

今回発掘調査が行われた大年遺跡は、都城志布志道路の梅北 I.C. から金御岳 I.C. を結ぶ梅北工区に位置している。梅北工区は総延長およそ 2.5km で、埋蔵文化財の分布状況についての照会が行われた結果、工区内の大部分に周知の埋蔵文化財包蔵地（6 遺跡）が含まれていることが明らかとなった。その後、用地買収済みの面積が約 8 割を上回ってきたことを受けて、平成 24 年 4 月から現地を確認しながらの協議を都城土木事務所と行ってきた。協議の結果、工事によりもともと広範囲に影響を受けると考えられ、かつ用地買収の進捗が著しい大年遺跡について、他の遺跡に先行して確認調査を実施した。大年遺跡の確認調査は遺跡の範囲とされている台地上の畑地および近接する浸食谷内の水田を対象とし、平成 24 年 5 月～7 月に断続的に実施した。確認調査の結果、水田部分では遺構・遺物は確認されなかったが、台地上において竪穴建物跡や溝状遺構と考えられる遺構や、多くの遺物が確認された。これらの遺構・遺物が確認された台地上の 7,400 m²について発掘調査を実施し、記録保存処置を講ずることとなった。

以上のような確認調査の結果を受けて、都城土木事務所からの発掘調査依頼により、宮崎県教育委員会が主体となって、埋蔵文化財センターが大年遺跡の発掘調査を行った。調査は、第 1 次調査として平成 24 年 9 月～平成 25 年 3 月に遺跡の北部 3,000 m²を、第 2 次調査として平成 25 年 5 月～平成 26 年 1 月に遺跡南部 4,400 m²を対象として行った。

第2節 調査の組織

平成 24 年度 発掘調査

所長

北郷泰道

副所長

佐々木真司

総務課長		坂上恒俊
総務課総務担当リーダー	副主幹	高園寿恵
調査第二課長		永友良典
調査第二課調査第三担当リーダー	副主幹	吉本正典
調査第二課調査第三担当	主事	加藤 徹 (調査担当)
調査第二課調査第三担当	主事	宗廣睦子 (調査担当)
調査第二課調査第四担当	主査	津曲 健 (調査担当)

(発掘作業員)

有村三雄、伊鹿倉康子、今村フミ子、岩切由紀子、上野博、栄留利盛、太山義治、上坂春雄、川口廣實、川崎カズ子、川崎文夫、河野露子、坂口米藏、庄司邦芳、庄司紀子、平良廣、高尾和子、高野正文、谷口清二、中条道安、原口昭一、平川俊充、平川洋子、蛭牟田勇、福岡咲子、福重光夫、前畑篤子、宮田エイ子、脇田節子、渡司裕美子、和田義仁

平成 25 年度 発掘調査・整理作業

所 長		向井大蔵
副所長		長津宗重
総務課長		坂上恒俊
総務課総務担当リーダー	副主幹	高園寿恵
調査第二課長		菅付和樹
調査第二課調査第三担当リーダー	副主幹	吉本正典
調査第二課調査第三担当	主事	加藤 徹 (調査・整理作業担当)
調査第二課調査第三担当	主査	竹下昭彦 (調査担当)

(発掘作業員)

飯干英子、伊地知照造、岩切由紀子、岩松りき子、岩本泉、大草廣美、大峯シゲ子、岡留一良、押川純久、尾上善則、金田八郎、鎌田義勝、上坂月夫、上森勲、亀石幸枝、川崎文夫、木上清二、久保幸一、久美田勇一、黒木みどり、境山茂男、坂留保一、佐田健治、下野俊輔、庄司邦芳、竹之下幹雄、田中政和、段秀敏、鶴田真司、鶴田洋司、寺師真一、寺師康博、富山善明、豊丸友紀、中尾康幸、中条道安、長友祐子、中村貴史、西村東、西広志、野崎憲一、栢和人、畑中由美子、羽根田拓洋、浜田正則、日高愛子、平川俊光、平川美奈子、福岡咲子、藤元涼、船越幸一、松崎金廣、松崎順子、松崎昇司、丸山幹雄、溝添節男、安摩圭一郎、山口護、山田スミ子、山田利恵子、山田芳治

(整理作業員)

河野早苗、小松陽子、菅原尚子、高山シノブ、手銭富佐江、橋口ゆり子、松岡れい子

平成 26 年度 整理作業・報告書作成

所 長		岩切隆志
副所長兼総務課長		長津宗重
総務課総務担当リーダー	副主幹	安藤忠洋
調査課長		菅付和樹

調査課調査第一担当リーダー	副主幹	松林豊樹
調査課調査第一担当	主任主事	加藤 徹（整理作業担当）

(整理作業員)

小松陽子、武野美智子、田村広子、西田久美子、畑中美穂、久嶋利香、福田理恵子、馬籠直美、松岡れい子、吉住由美子

平成 27 年度 整理作業・報告書作成

所 長	岩切隆志
副所長兼調査課長	菅付和樹
総務課長	上谷政隆
総務課総務担当リーダー	副主幹 安藤忠洋
調査課調査第一担当リーダー	主幹 松林豊樹
調査課調査第一担当	主任主事 加藤 徹（報告書担当）

(整理作業員)

高野良文、高山千代美、松岡れい子

事業調整

平成 24 ～ 25 年度	宮崎県教育庁文化財課	主査	堀田孝博
平成 26 年度	宮崎県教育庁文化財課	主査	二宮満夫
平成 27 年度	宮崎県教育庁文化財課	主査	松本 茂

第 3 節 調査の経過

(1) 発掘調査等の経過

第 1 次調査

平成 24 年 9 月 12 日～14 日まで、重機により表土および客土と考えられる 1 層の除去を行った。その後、9 月 21 日より発掘作業員を雇用し人力による掘削を行う。

桜島 3 テフラを検出した後、10 月 2 日に第 1 回目の空中写真撮影を行い、桜島 3 テフラ層以下の掘削を開始する。10 月 26 日から一部基本土層 4 層で検出した竪穴建物跡などの掘削を開始する。

12 月 18 日に竪穴建物等の状況を撮影するために、第 2 回目の空中写真撮影を行う。

平成 25 年 2 月 3 日に、現地説明会を行い 181 名の参加があった。

鬼界アカホヤ火山灰下層の確認を目的とした下層確認を行うために、平成 25 年 2 月 5 日～8 日に、基本土層 6 層（霧島御池軽石層）～基本土層 8 層（鬼界アカホヤ火山灰層）までの無遺物層について部分的に重機で掘削を行う。その後 2 月 13 日より、これまでの調査と平行して、基本土層 9 層以下のトレンチ掘削を行い、3 月 15 日まで調査区の掘り下げ等を行う。

3 月 18 日～22 日まで、安全のために重機による埋め戻しを行って、第 1 次調査を終了した。

第 2 次調査

工事の工程による都合上、東西周辺部と中央部の 2 区に調査区を分け、周辺部の調査を先に行うこととなった。周辺部の調査は、平成 25 年 5 月 7 日～9 日まで、重機による掘削を行い、5 月 13

日より作業員を雇用して人力による掘削を開始する。6月5日に中世面の撮影を目的として第1回目の空中写真撮影を行う。掘り下げを行った後、8月13日に第2回目の空中写真撮影を行う。周辺部については、8月18日まで掘削等を行った後、19日～23日まで中央部の表土掘削と平行して埋め戻しを行う。

中央部については、重機による表土掘削の後、8月27日より人力による掘削を開始した。その後、中世面の撮影を目的として第3回目の空中写真撮影を行った。包含層および遺構の掘り下げを行った後、第4回目の空中写真撮影を行った。

その後、鬼界アカホヤ火山灰層下層の確認を目的とした調査を行うために、12月10日～13日まで、基本土層6層（霧島御池軽石層）～基本土層8層（鬼界アカホヤ火山灰層）の無遺物層の掘削を重機で行い、12月16日から人力による下層の掘削を開始した。掘削を進めた後、平成26年1月23日に、トレンチの掘削状況撮影のため第5回目の空中写真撮影を行い、24日に掘削作業を終える。安全のため、1月27日～29日まで重機による埋め戻しを行い調査を終了した。

なお、第2次調査では業務委託として、植物珪酸体分析および花粉分析を行った。

（2）整理作業等の経過

平成25年10月～平成26年3月まで、第1次調査の遺物を中心として水洗および注記を行った。

平成26年4月～5月に第2次調査の遺物を中心とした遺物の水洗・注記を行う。5月～9月まで土器の接合作業を行った後、10月～3月まで実測を行った。このほか、業務委託として、炭化種実同定・放射性炭素年代測定・黒曜石原産地推定のための蛍光X線分析を行った。

平成27年8月は石器の実測等を行い、9月は収蔵前の整理作業等を行った。なお、平成27年4月～7月までは作業員を雇用せずに、担当者のみで報告書作成作業を行った。

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 遺跡の地理的環境

大年遺跡は県境に近い都城市南部の梅北町に所在し、標高約163mの台地北端部に位置している。東側には金御岳（標高472m）から天ヶ峯（標高352m）に連なる山塊を望み、山塊が途切れた南側は鹿児島県曾於市へとぬけている。北側には台地や段丘などの低地が広がっており、遠方には高千穂峰を頂とする霧島火山群を望むことができる。西方には低丘陵が広がっているが、遠くに桜島の噴煙をみることができる。桜島の噴火の際には遠雷のような轟音を耳にすることもあり、調査中はそれにより噴火に気づく場合が多く、その時には既に噴煙が上空まで上がっている（写真1）。

大年遺跡の周辺には小さな谷が入り組んでいるが、区画整理などによる削平や埋没が進んでおり、現在では平坦な畑地が一带に広がっている。そのため、本来の地形に由来する起伏を正確に反映しているとは言い難い。台地の北側では、西からきた床丸川と、東から北流してきた梅北川が合流している。この二つの河川によって形成された低地部には現在水田が営まれている。しかし、水はけは悪いようで、調査中には降雨後もしばらくは水が貯まった状態をみることができた。文化財課が行った確認調査でも、地表下1mほどで湧水が確認されている。確認調査で遺構等は認められなかったが、弥生時代早期や前期など、谷部にある自然の湧水を利用した水田稲作には適しているように思われる環境である。

大年遺跡が位置する都城市は、平成23（2011）年の新燃岳噴火の際には、日中にもかかわらず市内が真っ暗になった事は記憶に新しい。このように、都城盆地に住む人々の活動は霧島火山群および桜島の火山活動に大きく影響を受けてきており、精神的な面への影響も大きかったと思われる。大年遺跡は台地の縁辺部に立地しているが、この台地もおよそ26,000～29,000年前の始良カルデラの火山活動による入戸火砕流の堆積物(A-Ito)によって形成されたものである。発掘調査により、⁽¹⁾現地表下およそ3mの深さで入戸火砕流の二次堆積物（いわゆる「二次シラス」）（大年遺跡基本土層15層、以下「大年遺跡」は略）を確認している。この基本土層15層は、断面ではラミナ状の堆積や、鉄分の沈着による赤化した層がいくつもみられることから水成堆積であると考えられる。層の中には30cm程度の軽石も含んでいる。基本土層15層は水分を多く含むためか、この軽石の硬度は低く、繊維状で簡単に崩れる。低地部の確認調査では、現水田下にもシラスの堆積が認められることから、この層は5m以上堆積しているものと考えられる。

この二次シラスの上部には、灰白色粘土層（基本土層14層）の堆積が10cm前後みられる。粘土層は一般的に流れが停滞した水場で形成される。また、都城盆地は入戸火砕流によつ



写真1 調査地からみた桜島の噴煙

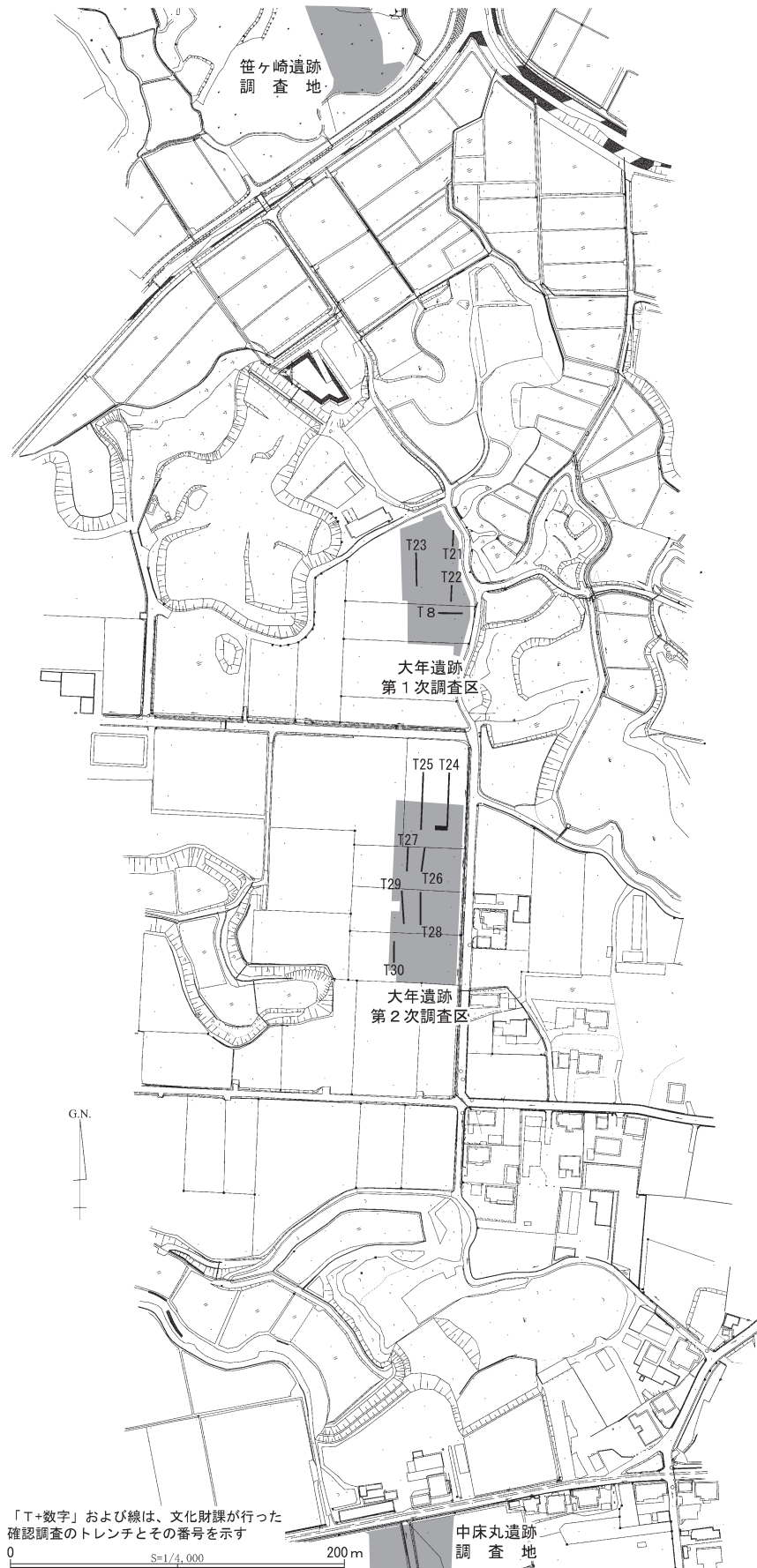


図1 大年遺跡調査地と周辺地形

て南流していた河川が堰き止められて、一時湖を形成したと考えられており、その際に堆積した層であると考えられる。この灰色粘土層の上には、厚さ10 cm程度の風化礫に似た岩石の固結した砂礫層（基本土層13層）がみられる。この砂礫層は岩塊状に分散してみられ、その間に下の灰色粘土層などが入り込んでおり、堆積は安定していない。また、その堆積要因は明らかではない。基本土層13層の上部には、厚さ60～70cmの明褐色～暗褐色のシルト層（基本土層12層）が堆積している。この層は厚いこともあり、下部は明褐色、上部は暗褐色を呈するが、肉眼観察において層中に含まれる碎屑物の構成に変化が観察できないことから同一の層として扱った。このシルト層は、その上位層に約12,800年前の桜島薩摩火山灰（Sz-S）と考えられる細粒火山灰を含む層（基本土層11層）が堆積しているため、最終氷期のピークを迎える、およそ29,000～13,000年前の寒冷期に堆積した層で

あると考えられる。上の層に比べて黒ボク土化がみられない背景には、寒冷気候において草原環境を形成できない植生であったことが考えられる。本層に対応すると考えられる層の土壌学的な分析からは、この12層が堆積する間に次第に乾燥した気候へと変化したことが想定されている（井上ほか2001）。なお、桜島薩摩火山灰は、二次堆積と思われるが、他の火山灰のような水平な堆積ではなく、ブロック状の塊をなしている。

これまでの都城盆地周辺における植物珪酸体や花粉の分析では、およそ8,000年前に降下した桜島11テフラ（Sz-11）直下からは照葉樹の植物珪酸体は検出されておらず、黒ボク質土壌が確認されている（杉山1999、杉山ほか2002）。しかし、遺跡内の土層では、褐色のシルト層（基本土層12層）～鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）（基本土層8層）下までは、土色は褐色を呈しており、典型的な黒ボク土は発達していない。そのため、大年遺跡周辺では、鬼界アカホヤ火山灰降下前まで、典型的な黒ボク土を形成するような環境にはなかったと考えられる。ところで、桜島11テフラは下部がやや密度が高くなる傾向にあるが、基本土層9層中全体に分散している。その堆積要因は明らかでない。

およそ7,300年前の鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）の降下によって、一時的であるものの植生に大きな変化が起こったことが想像される。しかし、植物珪酸体分析からは、幸屋火砕流（K-Ky）が及んだ薩摩半島南部と大隅半島南部では照葉樹林の衰退がみられるものの、その他の地域では鬼界アカホヤ火山灰直下層と大きな変化はみられないことが指摘されている（杉山1999）。一方、遺跡内の土層からは、鬼界アカホヤ火山灰を挟んだ上下の層では大きな違いがみられ、上層では、黒ボク土の発達が著しい。さらに、約4,600年前に降った霧島御池軽石層（Kr-M）よりも上の層でも黒ボク土の発達がみられ、その上部に黒色が弱い土層（基本土層4層）を挟んで、黒ボク土層は桜島3テフラ（Sz-3）（AD1471年）直下層までみられる。黒ボク土層間にみられる基本土層4層は、植生の変化、近隣の火山や大陸からのレス（黄土）の混入、あるいは人の活動などに起因する堆積速度の変化によって、有機物の濃集が弱まった時期と考えられる。基本土層3層は、黒ボク土であるが、上面には畠を検出している。この層は平坦にならされている可能性もあり、下位の基本土層4層とは逆に畑作などを含めた人間の活動によって黒ボク土化が促された可能性も考えられる。

桜島3テフラ降下以降については、後世の耕作により削平されており、その後の環境については不明である。桜島3テフラより上層が削平された状況は、近隣の多くの遺跡でみられる状況である。

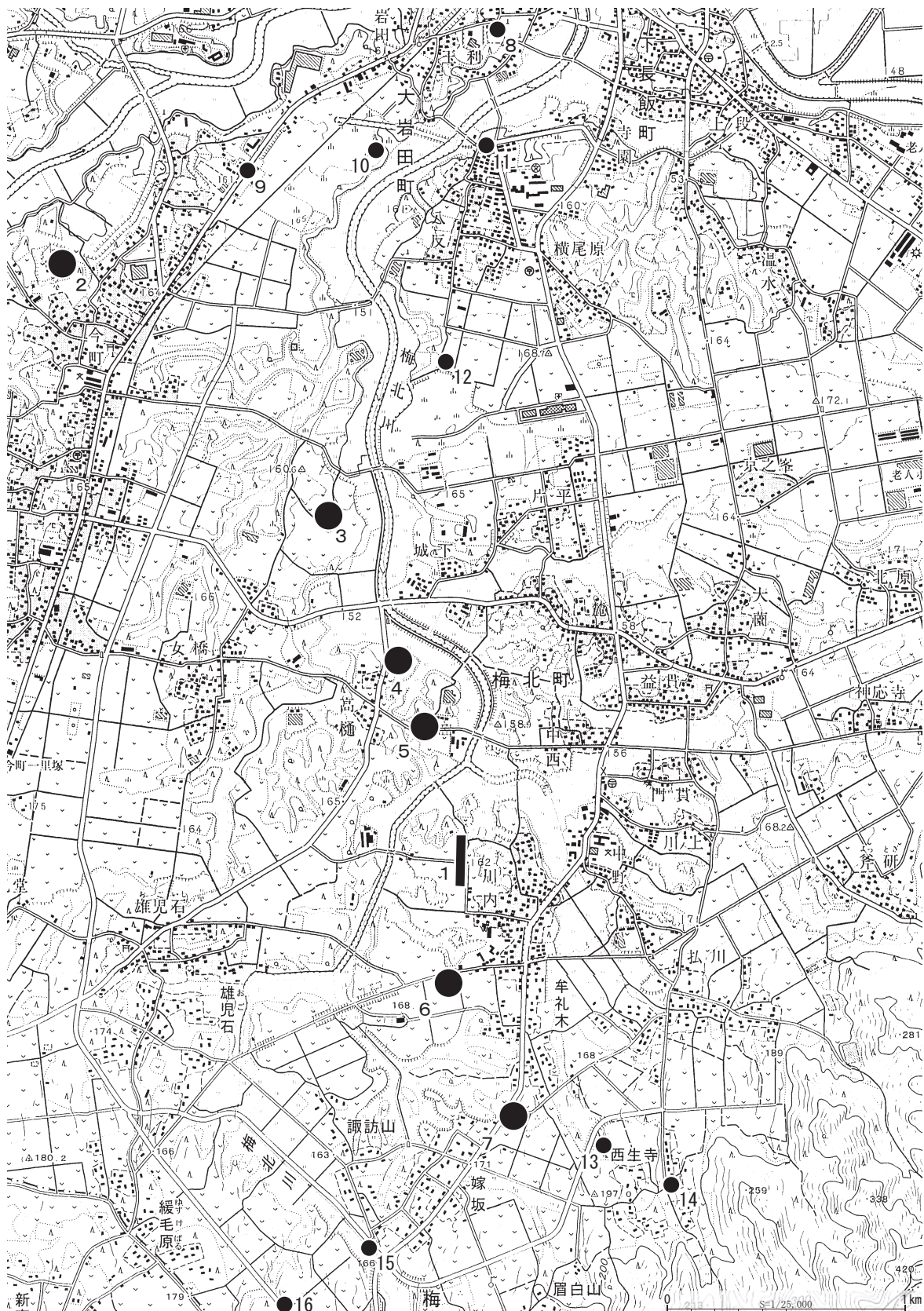
第2節 遺跡周辺の歴史的環境

旧石器時代

都城盆地では、旧石器時代から人々の生活の痕跡は少ないながらも確認されているが、梅北町内では当該期の遺跡の調査事例はない。市内をみれば、現在のところ、当該期の遺跡として大岩田上村遺跡（大岩田町）・雀ヶ野遺跡（高城町）・王子山遺跡（高城町）・平松遺跡（高崎町）・池増遺跡（山田町）（宮崎県埋蔵文化財センター2003、高城町教育委員会2005、都城市教育委員会2012・2013a、都城市2006）などが知られている。これらの遺跡の多くは旧石器時代の終わり頃の細石刃文化期のもので、桜島薩摩火山灰（Sz-S、P14）直下でみつまっている点で共通している。

縄文時代

続く縄文時代草創期の遺跡も非常に少ないが、梅北町内では川原谷出水遺跡（都城市教育委員会2014）が知られており、梅北町内でも古い時期から生活の痕跡を確認することができる。早期にな



- 1:大年遺跡 2:筆無遺跡 3:梅北針谷遺跡 4:高樋遺跡 5:笹ヶ崎遺跡 6:中床丸遺跡 7:保木島遺跡
 8:大岩田前ノ村遺跡 9:宮尾・立野遺跡 10:大岩田上村遺跡 11:黒土遺跡 12:横尾原遺跡 13:梅北佐土原遺跡 14:西生寺跡(平安)
 15:嫁坂遺跡 16:緩毛原第2遺跡

[1～7は都城志布志道路建設に伴って発掘調査を行った遺跡]

図2 大年遺跡周辺の主要遺跡分布図

ると、梅北町や東に隣接する安久町において遺跡が多く確認されている。梅北町内だけでも、梅北北原遺跡・梅北佐土原遺跡・川原谷出水遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター 2001、都城市教育委員会 2007a・b、2014b）などの遺跡がある。これらの遺跡では、土器などの遺物だけでなく、陥穴や土坑、集石などの遺構もみつまっている。

前期～中期の遺跡は少ないが、梅北町内でも緩毛原第 2 遺跡（都城市教育委員会 1987）で前期の土器が出土しており、鬼界アカホヤ火山灰降下後にも人々が生活を行っていたことをうかがうことができる。一方、後期～晩期は遺跡の数は多い。ただし、多くの遺跡でこの時期の遺物を確認できるものの、遺構は土坑などが中心で、住居と思われる竪穴建物跡は少ない。その中で、安久町の野添遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター 2004）では、後期後半～晩期前半の竪穴建物跡が 7 軒みつまっている。

弥生時代

都城盆地では、坂元 A 遺跡（南横市町）（都城市教育委員会 2006）にみるように縄文時代晩期末頃のの水田跡および石庖丁等が出土しており、弥生時代早期の設定が可能である。ただし、この頃の遺跡は全体的に少なく、横市川周辺において確認されているなど偏りがみられる。また、早期～前期の遺物自体も少なく、その生活様式には不明な点が多い。その中で、大年遺跡に比較的近い黒土遺跡（大岩田町）（都城市教育委員会 1994）では弥生時代早期と位置付けられる遺物が出土している。

遺跡が増加するのは中期以降で、多くの遺跡で土器などの遺物がみつまっている。大年遺跡と同じく都城志布志道路の建設に伴って調査が行われた働女木遺跡（五十町）（宮崎県埋蔵文化財センター 2011b）では中期後半～後期にかけての集落がみつかっており、南部九州地域の特色である「花弁状住居」も含まれる。大年遺跡が位置する梅北町では、弥生時代の集落等のまとまった遺構が調査された例はまだないが、少し南に行った大浦遺跡において弥生時代中期の竪穴建物跡がみつまっている（都城市教育委員会 1997）。

古墳時代

続く古墳時代の遺跡は比較的多いが、古墳時代前期～中期の遺跡は少ない。この中で平峰遺跡（平塚町）（宮崎県埋蔵文化財センター 2012a・b）で中期～後期の、鶴喰遺跡（横市町）（都城市教育委員会 2004）で後期の大規模な集落がみつまっている。一方、梅北町周辺ではそのような古墳時代の集落は確認されていない。しかし、大年遺跡を含めて都城志布志道路建設に伴う調査において、古墳時代の竪穴建物跡がみつかっており、今後の調査でもみつかる可能性がある。

上記のように集落遺跡は散見されるが、埋葬遺構に関する調査事例は非常に少ない。弥生時代以前も墓の調査事例は少ないが、通常、古墳時代はその象徴である古墳によって調査がなくてもわかっていることが多い。市内では、都城盆地北部で古墳や地下式横穴墓が知られている程度である。土器様式からすれば、えびの盆地などの内陸部と共通した墓制と想定される。

古代・中世

古墳時代までは文化における独自性が強かった都城地域でも、律令制度に組み込まれて以降はその独自性も弱まっていく。その中であって、万寿年間（1024～1028年）には、太宰府の大監であった平季基によって、無主の荒地の開発と、時の関白藤原頼道への寄進が行われており、その後日本最大の荘園となる契機となったことはよく知られている。桜島 3 テフラ降下前の古代～中世の遺跡では、調査された多くの遺跡で溝状遺構や道路状遺構が掘削されている状況を確認することができ、上記のような土地の改変を伴う開発がこの時期に活発に行われていた様子の一端をうかがうこ

とができる。また、真米田遺跡（高城町）（都城市教育委員会 2014a）や国指定史跡である大島島田遺跡（金田町）（宮崎県埋蔵文化財センター 2008）では、有力者の居館跡と考えられる遺構がみつまっている。梅北町内で調査された遺跡は少ないが、古代の遺跡として梅北針谷遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター 2011a）があり、活発な鍛冶作業を行っていた様子をうかがうことができる。

註

(1) 各テフラの年代については、『新編 火山灰アトラス』（町田・新井 2003）を参照している

引用・参考文献

- 井上 弦・米山忠克・杉山真二・岡田英樹・長友由隆 2001 「都城盆地の累積性黒ボク土における炭素・窒素安定同位体自然存在比の変遷」『第四紀研究』第 40 巻第 4 号、第四紀研究会、307～308 頁
- 奥野 充 2002 「南九州に分布する最近約 3 万年間のテフラの年代学的研究」『第四紀研究』第 41 巻第 4 層、pp. 225-236
- 杉山真二 1999 「植物珪酸体分析からみた最終氷期以降の九州南部における照葉樹林発達史」『第四紀研究』第 38 巻第 2 号、第四紀研究会、109～123 頁
- 杉山真二 2002 「鬼界アカホヤ噴火が南九州の植生に与えた影響-植物珪酸体分析による検討-」『第四期研究』第 41 巻第 4 号、第四紀研究会、311～316 頁
- 杉山真二・渡邊眞紀子・山元希里 2002 「最終氷期以降の九州南部における黒ボク土発達史」『第四期研究』第 41 巻第 5 号、第四紀研究会、361～373 頁
- 高城町教育委員会 2005 『雀ヶ野遺跡』高城町文化財調査報告書第 18 集
- 町田 洋・新井房夫 2003 『新編 火山灰アトラス』、東京大学出版会
- 都城市 2006 『都城市史』資料編 考古
- 都城市教育委員会 1994 『黒土遺跡』都城市文化財調査報告書第 28 集
- 都城市教育委員会 1987 『都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内南部）』都城市文化財調査報告書第 6 集
- 都城市教育委員会 1997 『大浦遺跡』都城市文化財調査報告書第 37 集
- 都城市教育委員会 2004 『鶴喰遺跡（古墳時代編）』都城市文化財調査報告書第 61 集
- 都城市教育委員会 2006 『坂元 A 遺跡 坂元 B 遺跡』都城市文化財調査報告書第 71 集
- 都城市教育委員会 2007a 『梅北佐土原遺跡』都城市文化財調査報告書第 76 集
- 都城市教育委員会 2007b 『梅北北原遺跡』都城市文化財調査報告書第 83 集
- 都城市教育委員会 2012 『王子山遺跡』都城市文化財調査報告書第 107 集
- 都城市教育委員会 2013a 『平松遺跡』都城市文化財調査報告書第 108 集
- 都城市教育委員会 2013b 『都城市内遺跡 6』都城市文化財調査報告書第 110 集
- 都城市教育委員会 2014a 『真米田遺跡 七日市前遺跡』都城市文化財調査報告書第 111 集
- 都城市教育委員会 2014b 『川原谷出水遺跡』都城市文化財調査報告書第 112 集
- 都城市教育委員会
- 宮崎県地質研究会編 2013 『宮崎県の地質フィールドガイド』、コロナ社
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2001 『梅北佐土原遺跡 中尾遺跡 蓑原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 42 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2003 『大岩田上村遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 77 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2004 『豊満大谷遺跡 野添遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 83 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008 『大島島田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 178 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011a 『梅北針谷遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 204 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011b 『働女木遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 205 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012a 『平峰遺跡（1 次・2 次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 211 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012b 『平峰遺跡（3 次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 219 集
- 宮崎県編 1998 『宮崎県史』通史編 古代 2

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法と層序

(1) 調査の方法

工事および調査の工程上、遺跡北部を第1次調査、遺跡南部を第2次調査に分けて調査を行っている(図1)が、遺跡地図上では一つの遺跡として記載されている。そのため、グリッド名や遺構名、遺物の取り上げ番号などが両調査区で混在しないように、図3に示すように1次・2次の調査を通して、遺跡全体に1辺10mのメッシュをかけてグリッドの設定を行った。同様に、遺構番号および遺物番号も、第1次調査と第2次調査を通して連番でつけている。なお、遺構の実測は世界測地系に基づいた方位座標を基準としており、人の手による実測とトータルステーションの測点を図化する実測方法を併用している。実測時の縮尺は平面図・断面図ともに1/20を基本とし、遺構の種類に応じて1/30～1/50で行っている。ところで、遺跡北部調査区(第1次調査区)では、堅穴建物跡を多数検出しているが、遺構掘削面よりも上位と考えられるレベルで遺構を検出している。最終的な埋土である黒色土(基本土層3層)が円形を呈していたことや出土している土器から、弥生

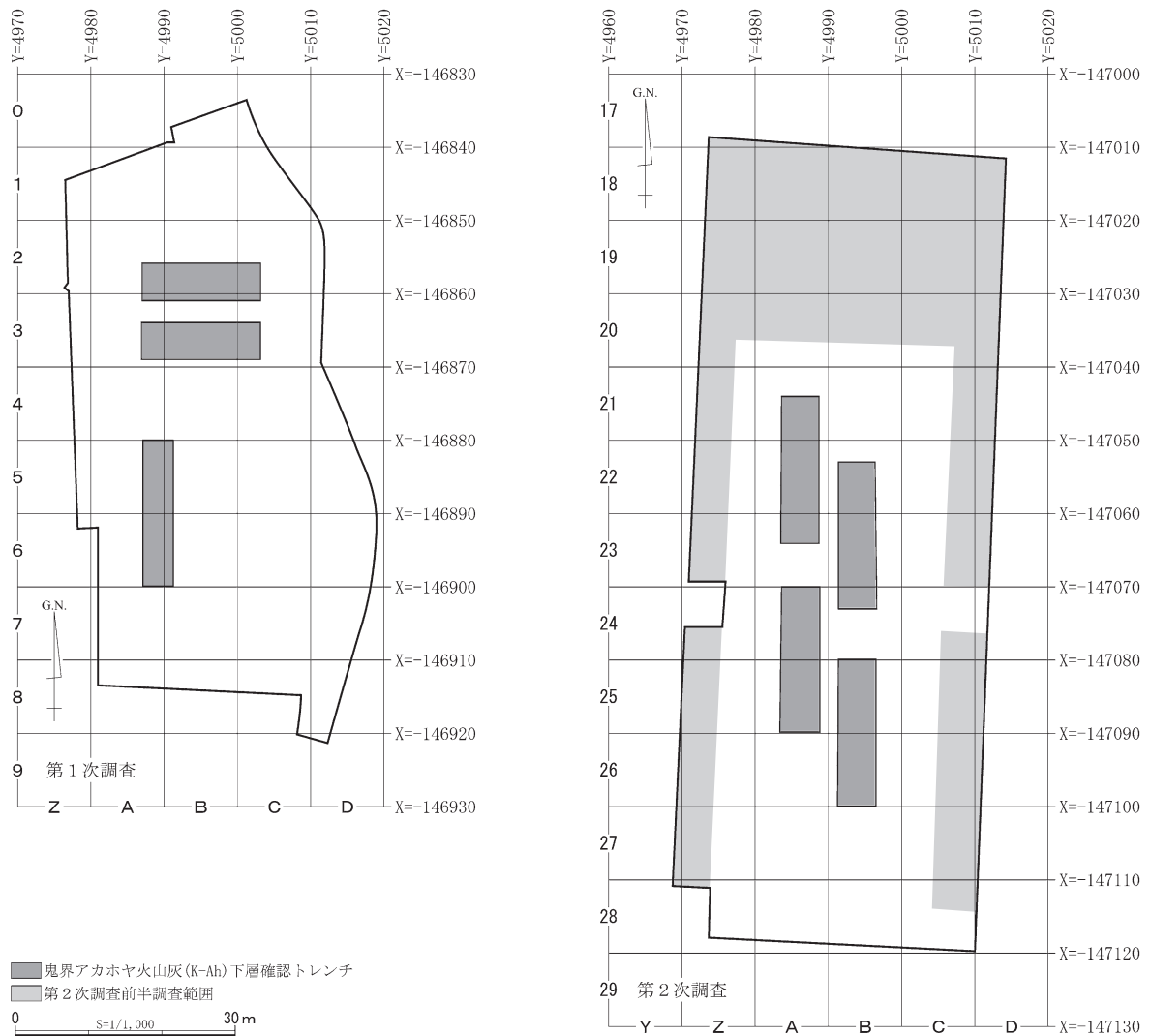


図3 大年遺跡グリッドおよび鬼界アカホヤ火山灰下層確認トレンチ設定状況

時代の中期以前にみられる平面円形の竪穴建物跡を想定し、東西南北の軸を基本とした土層観察用のベルトを設定した。しかし、想定と異なり、実際には弥生時代後期～古墳時代の竪穴建物跡であり、遺構の平面形状は方形であるものが多かった。そのため、結果的に土層観察ベルトは主軸に対して斜行してしまったものがある。また、竪穴建物は霧島御池軽石（Kr-M）層（基本土層6層）あるいはその下の黒色土（基本土層7層）まで掘り込んで作られているが、霧島御池軽石層の上に堆積する霧島御池軽石混じりの黒色土（基本土層5層）の土と建物跡埋土は類似しており、両者の区別が非常に困難な状態であった。そのため、遺構上部での平面形の把握を試みたものの、最終的には想定される遺構の範囲よりも若干外側の範囲について、霧島御池軽石層付近（基本土層5b層）まで掘り下げて平面形の確認を行った。

本調査に先立って行われた文化財課による確認調査では、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）層（基本土層8層）までトレンチを入れて遺構・遺物の確認を行っており、それよりも下位については掘削深度等の安全面の問題から確認を行っていない。しかし、近年の調査では縄文時代早期以前の遺跡の類例も増加してきていることと、一定の安全を確保しつつ下層を掘削できる広さの調査面積であることから、鬼界アカホヤ火山灰から入戸火砕流（A-Ito）二次堆積層上面（いわゆる二次シラス）について部分的に調査を行った。当センターでは格子状に掘削する方法が多いが、調査の工程や掘削方法などの諸事情から、トレンチ状の掘削方法（図3）をとった。

遺物の取り上げは、遺構埋土および遺構周辺の遺物については、トータルステーションによる3次元の点座標データを基本として、建物跡の床面付近の遺物など必要と判断したものについては実測により図化を行った。包含層内の遺物については、一定程度の大きさのものや特徴的な遺物について3次元の点座標データで記録し、そのほかの土器小片などの遺物については、グリッド毎にまとめて取り上げを行った。

発掘調査時の写真撮影は、遺構の検出段階、土層堆積状況、床面あるいは底面の検出状況、完掘状況の各段階で行っている。撮影機材はNIKON F3、ZENZA BRONICAを使用し、それぞれモノクロフィルムとリバーサルフィルムを使用した。空中写真撮影は、遺構の検出段階あるいは床面検出段階など、遺跡・遺構の性格に合わせて行った。また、その際に空中写真撮影でしか行うことができない、周辺地形を含めた遺跡の立地環境や都城志布志道路の路線把握を目的とした撮影も行った。このほか、報告書掲載の遺物写真の撮影にはNikon D800を使用した。

自然科学分析は、発掘調査時に植物珪酸体分析と花粉分析を、整理作業時に炭化種実同定、放射性炭素年代測定および蛍光X線分析による業務委託で行った。花粉分析・植物珪酸体分析は、遺跡北部で畦状遺構を検出し、遺跡南部でも予想されたため、作物や当時の環境を復元する目的で計画した。しかし、遺跡南部では、畦状遺構の遺存状況が悪く十分な成果が得られないことが予想されたため、桜島3テフラ（Sz-S）降下前の環境復元を試みる目的を含めて、基本土層3～4層、道路状遺構の埋土について分析を行った。炭化種実同定は、遺跡北部で出土したイチイガシと予想された炭化種実等の種類を確認するために行った。放射性炭素年代測定は、各遺構の年代について参考および確認を行うことを主な目的とした。その中で、遺跡北部で出土した炭化種実については、弥生時代から古墳時代の生活面と予想していた基本土層4層の時期の確認も目的の一つとした。なお、現状の放射性炭素年代測定法では、結果として放射性炭素年代のみしか記載されないことが多いが、それは“測定値”ではないため、科学的客観性を確保する意味で“測定値”の記載も行った。最後に、蛍光X線分析による黒曜石の産地同定は、黒曜石の剥片が目立ったことと、肉眼観察により複

数の原産地が想定されたため、それ確認を確認する目的で行った。

なお、当センターでは、建物内の埋土についてフローテーションやフルイを用いた微細な炭化物等の選別作業を行うことが多い。しかし、大年遺跡の調査において、調査時に目立った炭化物等が認められなかったため、今回は行っていない。

ところで、遺構の名称については、調査中は「S○」のように略号を使用しており、調査時作成の実測図および整理作業時の注記もこの略号で行っている。ただし、報告書では理解しやすいように各遺構に番号を振って「竪穴建物跡○」等のように表記している。そのため、本文中で両者を記すとともに、附表において報告書名と調査時および注記略号の対応関係を記載している。また、調査時において、遺構略号の番号・土層番号・遺物の点上げ番号は、それぞれ通し番号（遺構：S 1～、土層：1層～、遺物：No. 1～）で行っている。土層については、遺構略号と同じく、報告書の土層番号と調査時の土層番号の対応関係を附表の対応表に記載している。このように通し番号をつけるのは一般的な手法ではない。しかし、調査段階および整理作業段階において、遺構の種類と番号の変更等に伴う混乱を防ぐことが可能であることと、各番号が重複しないことによって、単独の番号のみでも個々の遺構・土層・遺物等を特定することが可能であることから、この方法を採用している。

(2) 地形と層序

前節でも述べたが、調査区内の基本土層は次の通りであるが、ここで示す色調は肉眼観察によるもので、土色帳に依ったものではない。また、テフラ以外の土は基本的にシルト質である。

- 1層：表土（客土）層
- 2層：桜島3テフラ（Sz-3）層
- 3層：黒色土層
- 4層：暗褐色土層
- 5層：霧島御池軽石を含む黒色土層
- 6層：霧島御池軽石（Kr-M）層
- 7層：黒色土層
- 8層：鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）層
- 9層：桜島11テフラ（Sz-11）を含む暗褐色土層
- 10層：明褐色土層
- 11層：桜島薩摩テフラ（Sz-S）を含む褐色土層
- 12層：明褐色～褐色土層
- 13層：淡青灰色砂礫層
- 14層：灰白色粘土層
- 15層：入戸火砕流（A-Ito）二次堆積層

調査区内の層序は、遺跡南部と北部は同じで、また、これまでの調査で確認された周辺の遺跡でみられる基本的な堆積とも大きな違いはない。遺跡北部は北側と東側が谷へと落ちる地形であるが、調査区内の土層堆積状況に大きな変化はなく、地形の変化

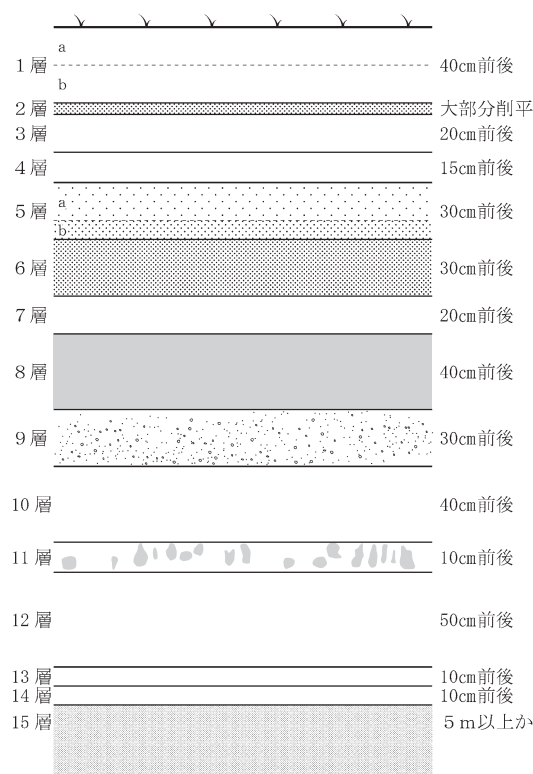


図4 大年遺跡基本層序概略図

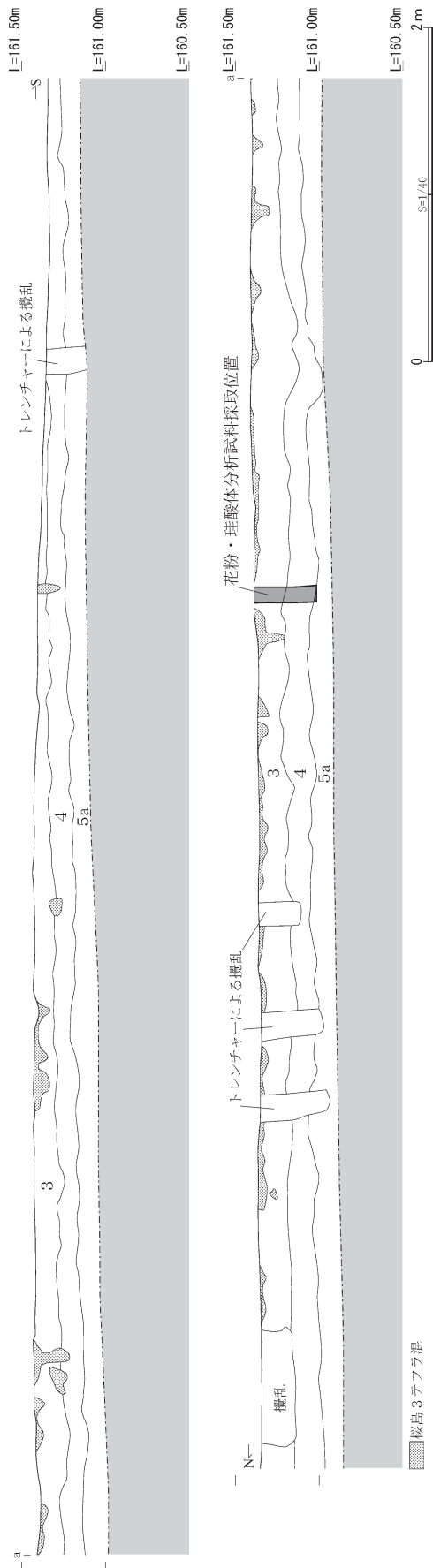


図5 大年遺跡南部調査区土層断面図

は小さい。遺跡南部も同様に地形の変化は少ないが（巻頭図版2-2、図5）、表土直下では北側に若干厚く基本土層3～4層が堆積しているため、現在道路が通っている遺跡の中央付近には浅い谷が入っていた可能性がある。遺跡南部南側では西側から谷が入っていた可能性を考慮したが、調査区内ではそのような地形による土層の変化はみられなかった。むしろ、南側では1層下に基本土層4～5層がみられたため、若干地形的に高かったようである。

このほか、遺物包含層である基本土層4層は、上下のいわゆる黒ボク層とは異なり、暗褐色を呈する層である。遺物の出土状況からすると、この基本土層4層が竪穴建物を作って人々が生活を営んでいた生活面であったと考えられる。これまで調査が行われた弥生時代～古墳時代の遺構が検出されている付近の遺跡でも、大年遺跡のこの4層に対応すると考えられる層が存在している。このような状況から、基本土層4層が黒ボク化していない背景には、人々草原を切り開いて一定期間生活を営んでいたことが影響している可能性も考えられる。ただし、当該時期の遺物・遺構が検出されていない遺跡ではどのような状況であるのかということも今後確認していく必要がある。

第2節 検出遺構

(1) 旧石器時代

約12,800年前に降下した桜島薩摩火山灰層より下位の基本土層12層が旧石器時代の層に該当する。それ以下については、入戸火砕流二次堆積物が厚く堆積しているため、調査を行うことは困難である。ここでは明確な遺構は検出できなかった。遺跡南部調査区・北部調査区ともに土層中に拳大程度の礫がわずかにみられたが、礫群や散礫を構成するほどの量ではない。基本土層12層はローム層でこのような礫は基本的にほとんど含まれないことから、人為的に持ち込まれた可能性がある。しかし、礫に人為的と考えられる加工や、被熱による変色は確認できなかったため遺構としては認定していない。前章でみたように、この基本土層12層は、土壌学的な研究において湿地性の植物珪酸体等がみついている土層に対応すると考えられるため、下部になるほど住環

境としては適していなかった可能性がある。ただし、遺物の次節でのべるように、上部で剥片が出土しているため、基本土層 12 層上部に対応する層では今後遺構が見つかる可能性は十分に考えられる。

(2) 縄文時代

縄文時代の包含層は、桜島薩摩火山灰層から鬼界アカホヤ火山灰層に挟まれた草創期～早期に該当する層と、霧島御池軽石層上位の後期～晩期に該当する層の大きく二つに分けることができる。

下部の草創期～早期に該当する基本土層 9～11 層では、旧石器時代と同様に、遺構は検出できなかったものの、押型文土器 (図 61- 1) や、図化していないが黒曜石の剥片がわずかながら出土している。全体的に西側から出土している印象があり、西側調査区外に当該時期の集落等が存在する可能性がある。

上部の霧島御池軽石層上位の基本土層 4～5 層では、該当する時期の遺物は多く出土しているものの、草創期～早期と同様に、遺物に対応するような明確な遺構は検出していない。晩期の黒川式土器を中心として多くの土器が出土しており、また、この時期のものと思われる石器も多く出土しているため、やはり付近に集落があったと考えられる。調査時においても、遺物の出土量などから、竪穴建物跡が存在している可能性を考え、その点を意識して精査を行ったが遺構の検出はできなかった。このような中、明確な時期比定の根拠に乏しいが、検出した層位などから当該時期のものと思われる土坑 2 基 (土坑 1・2) を検出している。

土坑 1 (図 6)

南部調査区 25 C グリッドの、溝状遺構 6 の底面で検出した土坑である。規模は径 0.8～0.9 m で、深さは約 0.4 m である。ちょうど溝の幅に対応したような位置にあるため、溝の掘削に関係するようにもみえるが、他の箇所ではみられないことから溝掘削以前のもと考えられる。上部は溝によって削られていると思われる。西壁寄りにピットがみられるが、本土坑に伴うものかは明らかでない。遺物は出土していないため、時期は不明である。

調査時の略号はつけ忘れのため該当する略号はない。

土坑 2 (図 6)

21 B グリッドの基本土層 5 b 層で検出した土坑で、幅約 1.0 m、長さ約 1.1 m で深さは約 0.2 m である。掘削自体は 5 a 層など、より上位の層から行われていると考えられる。遺物は出土していないため、時期は不明である。

調査時および注記の略号は「S 43」である。

(3) 弥生時代～古墳時代

本遺跡が形成された主要

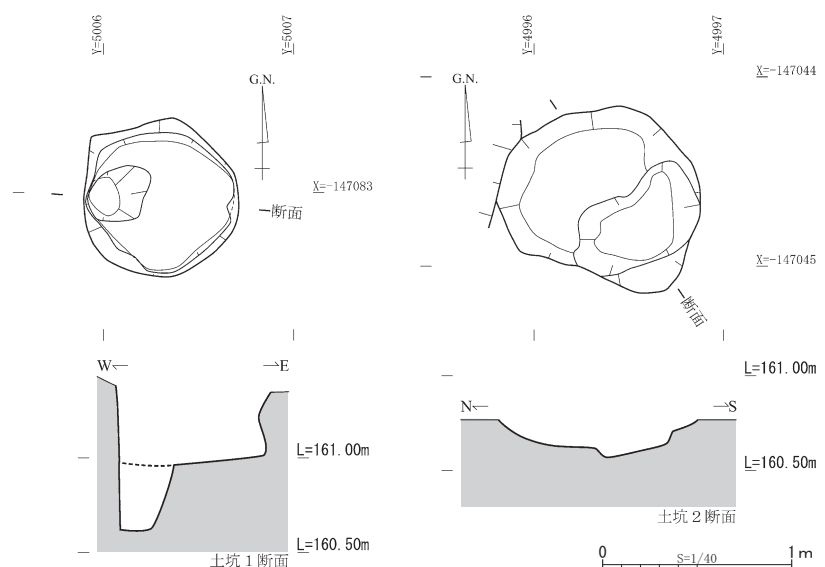
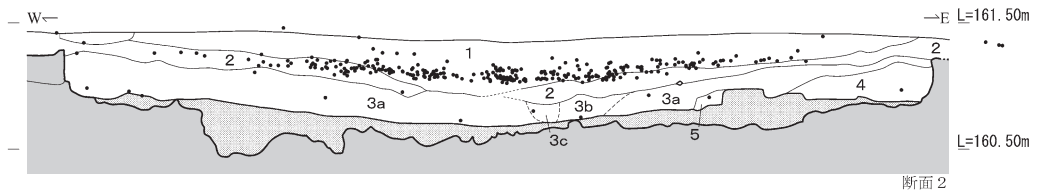
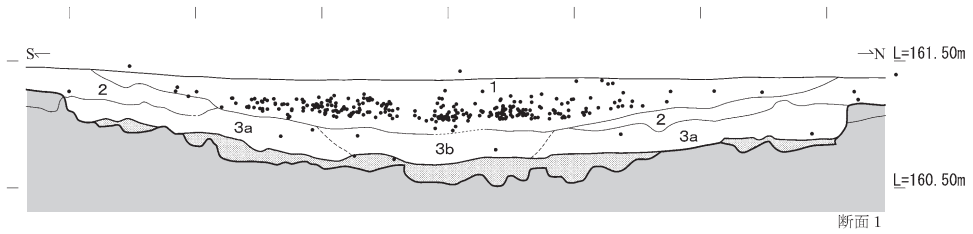
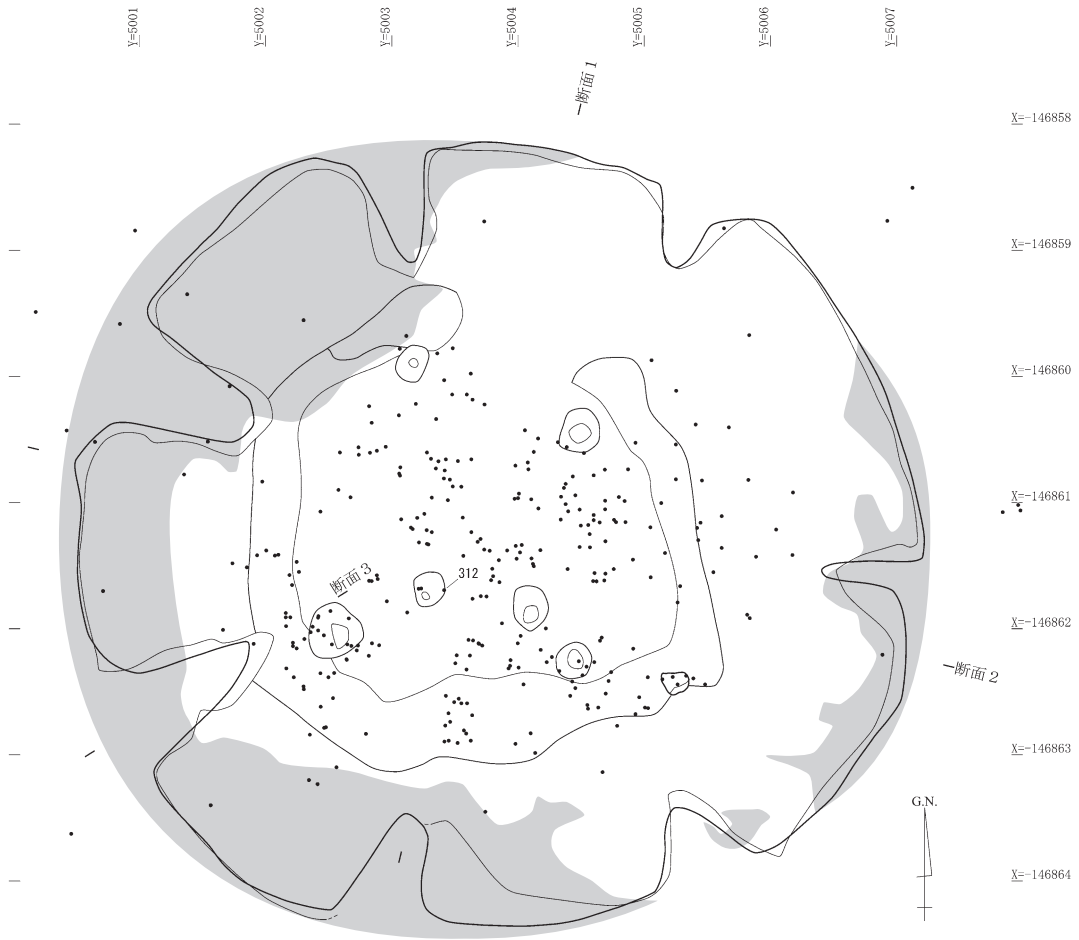


図 6 土坑 1・2 平面・断面図



土層注記

- 1：黒色シルト層、粘性無・しまり弱-有、橙色軽石(2mm以下)3%、下部に土器を含む、基本土層3層相当
- 2：黒褐色シルト層、粘性無-有・しまり弱-有、橙色軽石(3mm以下)5%、基本土層4層相当
- 3：黒色シルト層、粘性無・しまり有、橙色軽石(3-5mm主体+7mm)15-20%、a層→b層→c層の順で黒みが強くなる。
- 4：黒色シルト層、粘性無・しまり有、橙色軽石(5mm前後主体+7-10mm)25-30%
- 5：黒色シルト層、粘性無・しまり有、橙色軽石(5mm前後主体)20-25%

※土色帳による色調は注記し忘れ

貼床 基本土層6層残存部

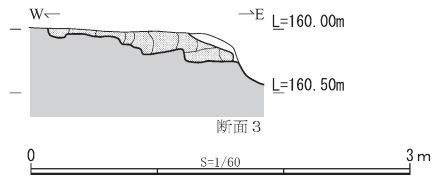


図9 竪穴建物跡2 (S9) 平面・土層断面図

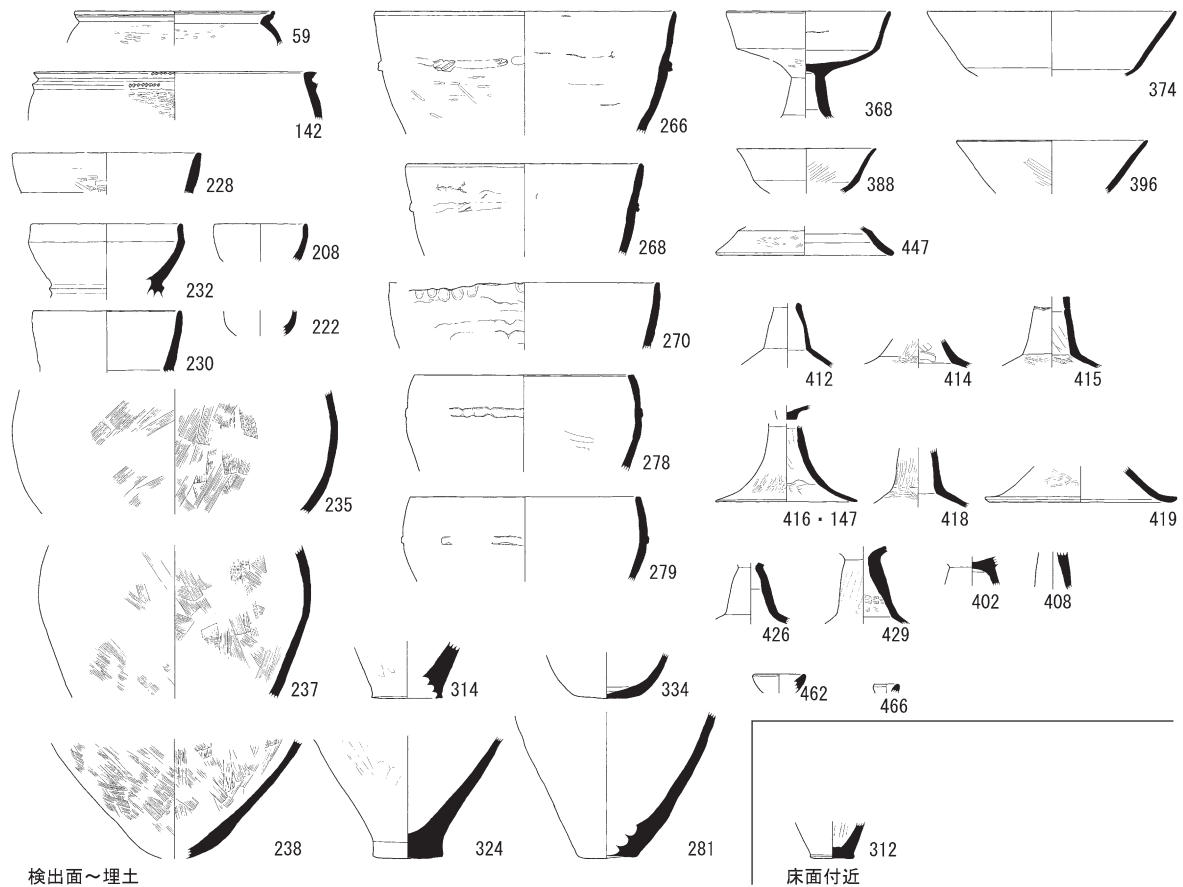


図 10 堅穴建物跡 2 (S9) 出土遺物 (縮尺不同)

な時期の一つであり、堅穴建物跡、堅穴状遺構、土坑等を検出している。遺構は台地端部の遺跡北部でみつかっており、遺跡南部では当該時期の遺構はほとんどみられない。

a 堅穴建物跡

遺跡北部の調査では、当初、基本土層 4 層上面において円形を呈する黒色土（基本土層 3 層）の埋土がみられたため、弥生時代中期以前の堅穴建物跡と予想した。そのため、円形の堅穴建物跡を想定して、東西南北を基準とした土層観察用のベルトおよびトレンチを設定して遺構の形状の確認を行った。確認を行った結果、遺構は想定に反して平面円形ではなく、多くは方形を基調としたものであった。これらの中で、堅穴建物跡 2・3・9 については、霧島御池軽石層下の基本土層 7 層までの掘り込みが少ないといった構造上の特徴から、他の建物跡に比べると遺構の形状把握が難しかった。また、遺構は埋土の上層に基本土層 4 層と考えられる土層が入るため、基本土層 4 層下部～5 a 層の間で掘り込まれていると考えられる。しかし、遺構の埋土はこれらの基本土層と類似しており、特に基本土層 5 a 層との区別は非常に困難である。そのため、最終的には霧島御池軽石が多い基本土層 5 b～6 層付近まで掘り下げなければ平面形の確認はできなかつた⁽¹⁾。したがって、遺構上部の壁面も検出できておらず、建物跡の深さは土層断面からの推定となる。

なお、遺物が出土していない建物跡の時期比定に関する検討は次章で行っているため、ここでは省略している。

堅穴建物跡 1 (図 7・8)

2 B グリッド南東部を中心にして検出した、平面円形を基調とする間仕切付の堅穴建物跡であ

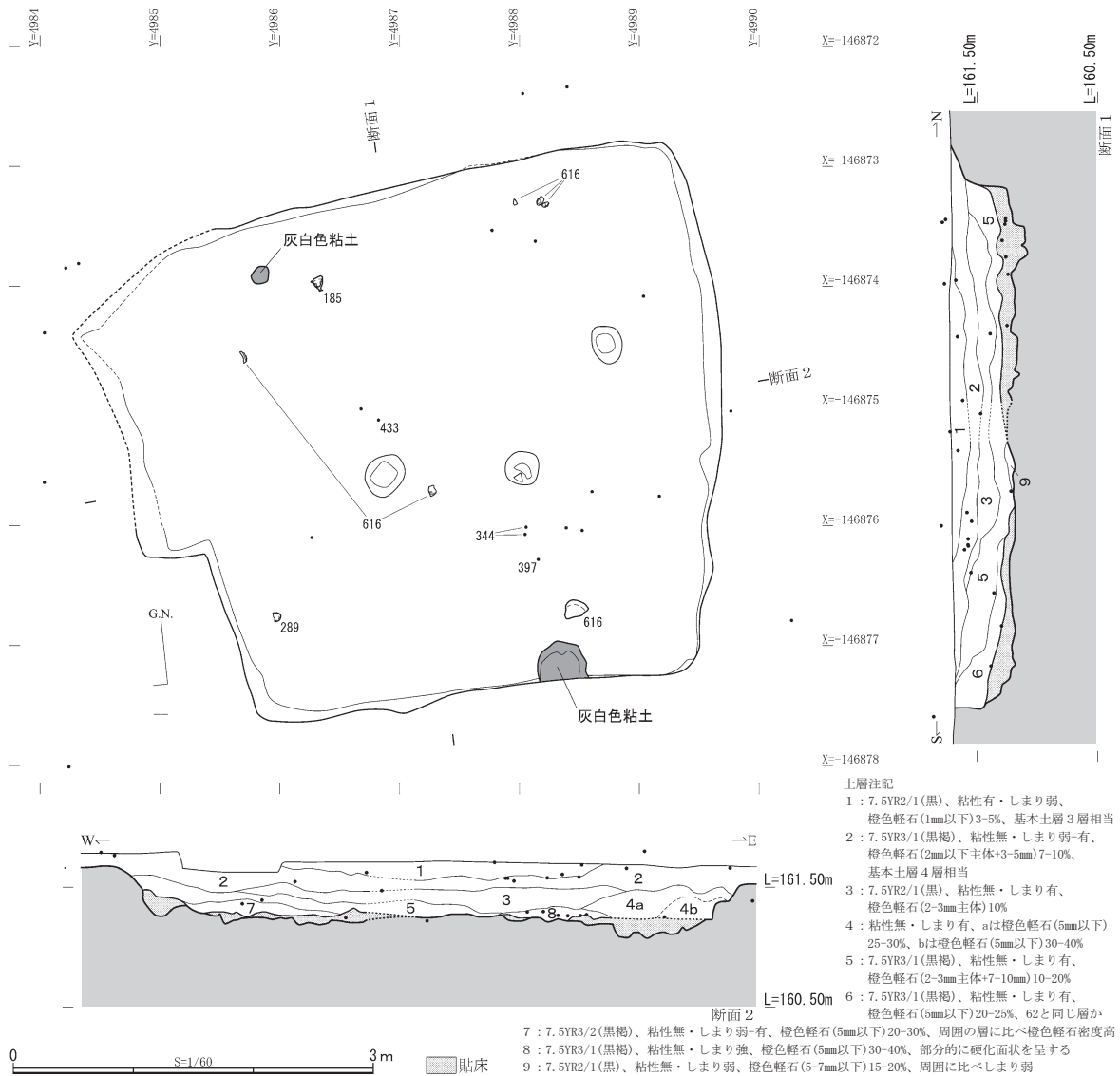


図11 竪穴建物跡3 (S11) 平面・土層断面図

る。床面での径は5.9～6.2 m (南北軸約5.9 m・東西軸約6.2 m、床面積約26.6 m²)で東西軸が若干広がっている。土層断面から推定される深さは0.4～0.5 mである。

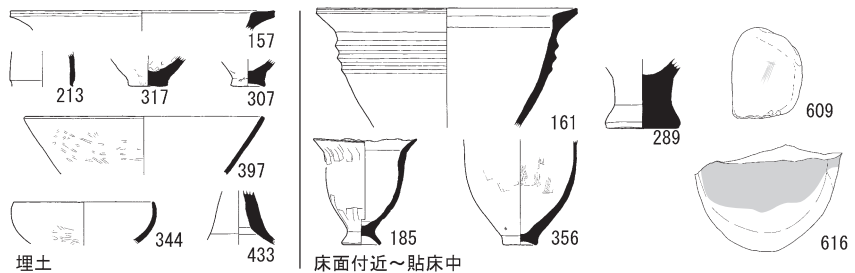


図12 竪穴建物跡3 (S11) 出土遺物 (縮尺不同)

間仕切りは中央から北側にはほぼ等間隔に4か所設けられているが、南側には存在しない。この間仕切りは部分的に、霧島御池軽石を含む明るい色調の盛土によってつくられている。間仕切りに該当する部分は、検出面からの掘り下げ途中には確認できていないため、高さはそれほど高くなかったものと考えられる。建物の中央付近は、東西約2.7 m、南北約2.8 mの不整形形状の範囲で一段低くなっており、南西部はやや外側に広がっている。この一段凹んだ部分の四隅に柱穴と思われるピットを検出している。ピットの深さは0.8～0.9 mある。なお、建物の掘方は基本土層7層に達し

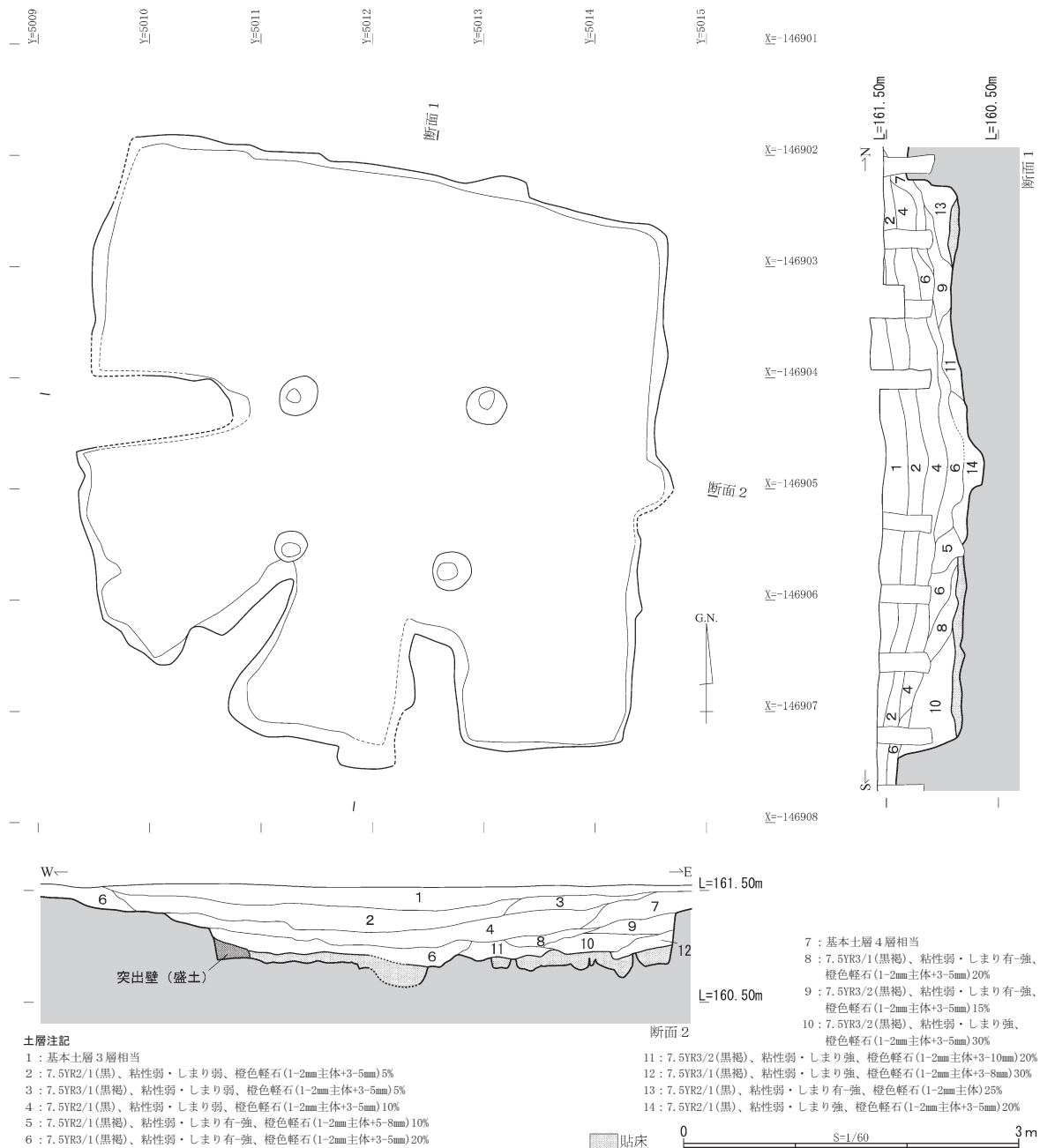


図13 竪穴建物跡4 (S16) 平面・土層断面図

ているが、部分的に霧島御池軽石層を掘り残している。床面には厚さ10～30cmの貼床を施している。

遺物は全体的に少ないが、床面付近から鉄鏟と考えられる鉄器片(図101-640)が出土している。ところで、西側の間仕切り中から比較的大きな縄文土器の底部片が出土しているが、意図的に埋めたものかは明らかでない。時期は建物の形状等から、弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃のものであると考えられる。

調査時および注記の略号は「S7」である。

竪穴建物跡2 (図9・10)

2～3Cグリッドで検出した平面円形を基調とする間仕切り付の竪穴建物跡である。一部を除き、ほぼ等間隔で7箇所の間仕切りを作り出している。大きさは径約6.5m(床面積約29.4㎡)、土層断面から推定される深さは0.4～0.5mである。竪穴建物跡1と同様に中央付近は長さ約3.6mの

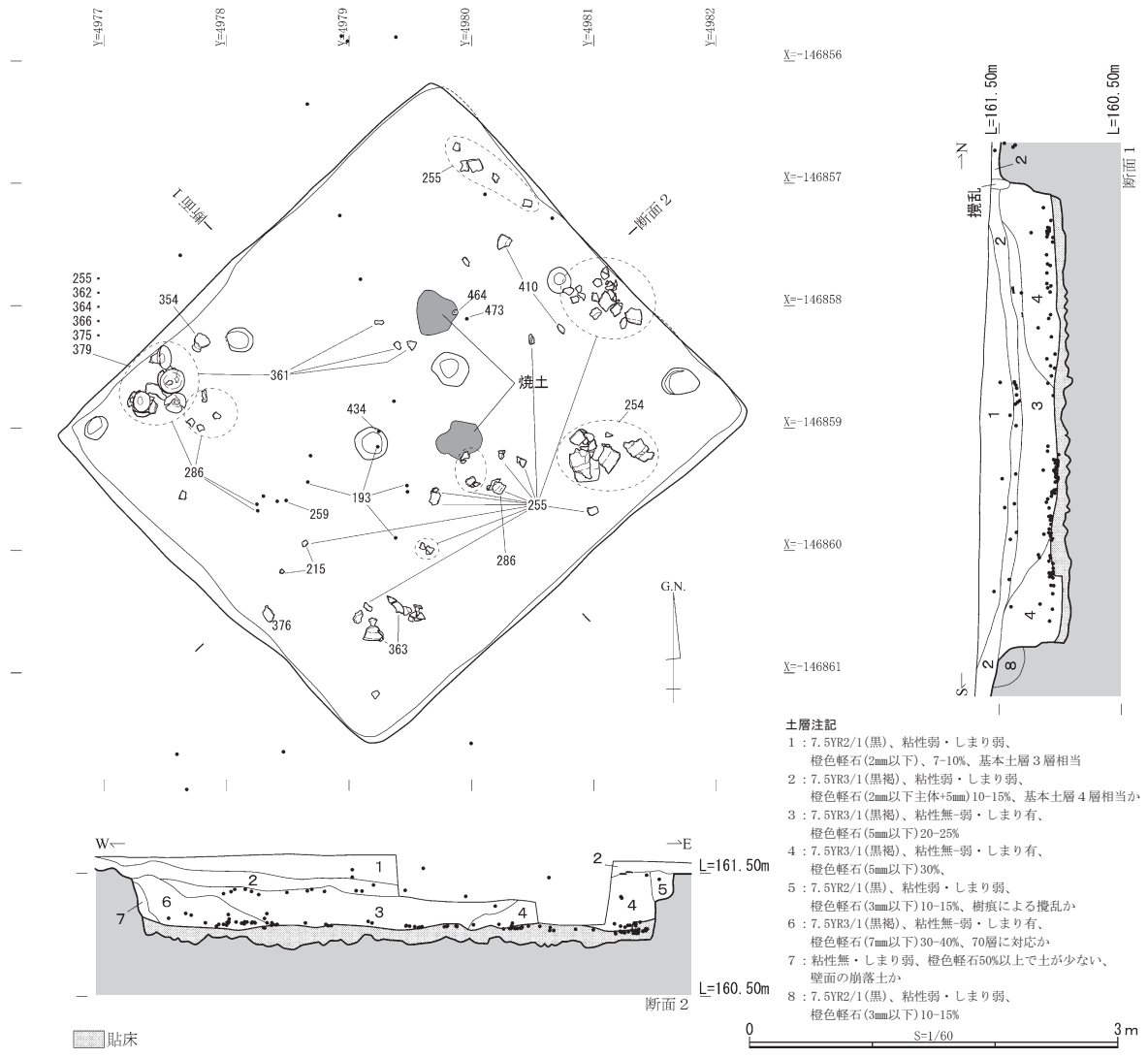


図14 竪穴建物跡5(S13)平面・土層断面図

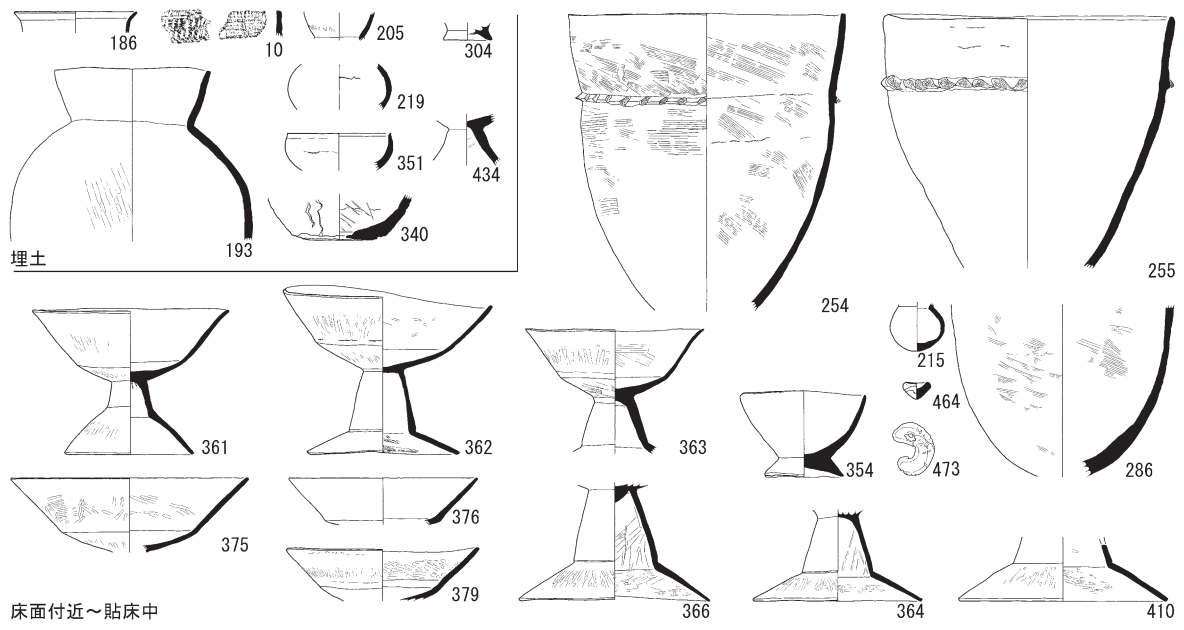


図15 竪穴建物跡5(S13)出土遺物(縮尺不同)

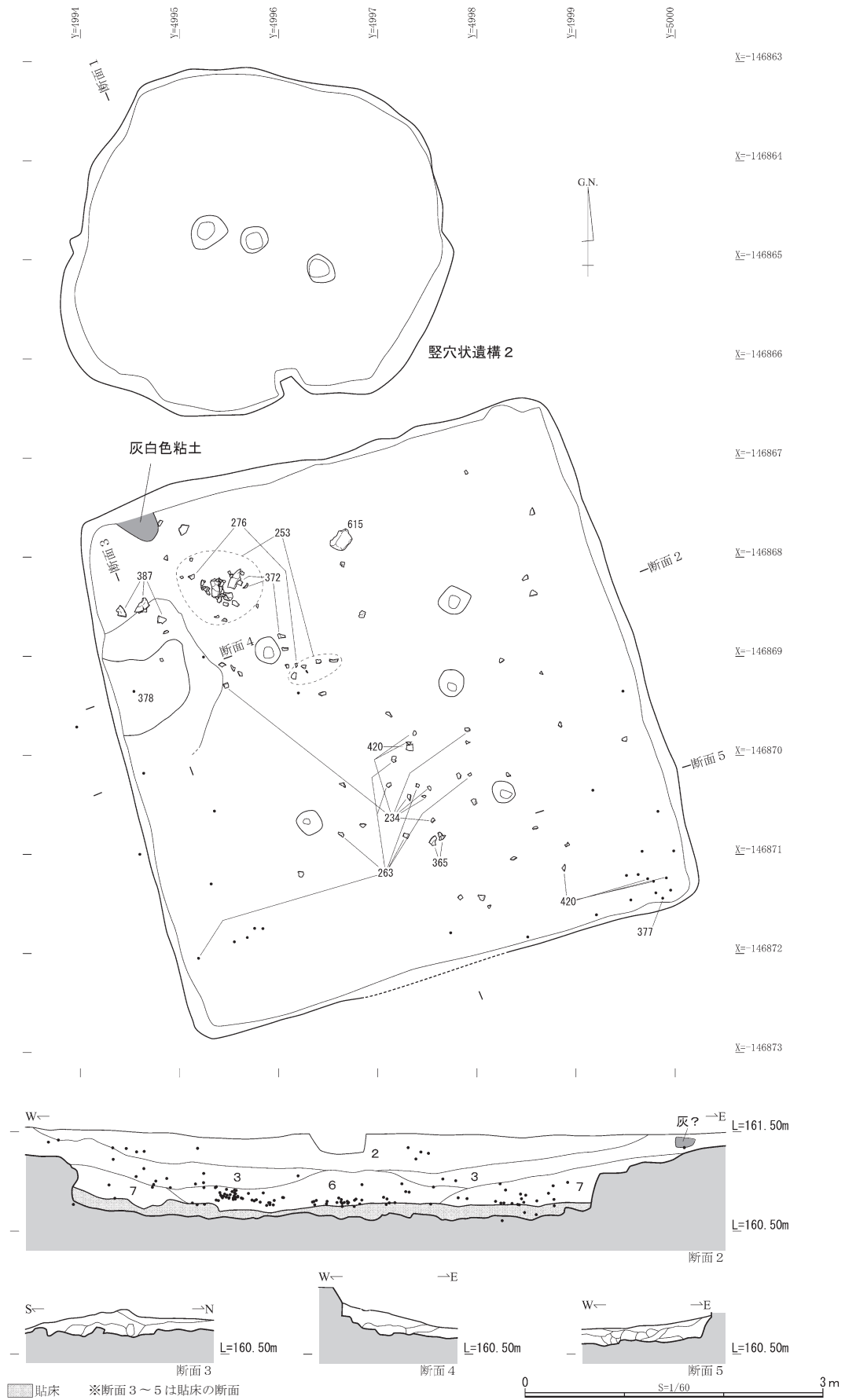


図 16 竖穴建物跡 6 (S10)・竖穴状遺構 2 平面・土層断面図

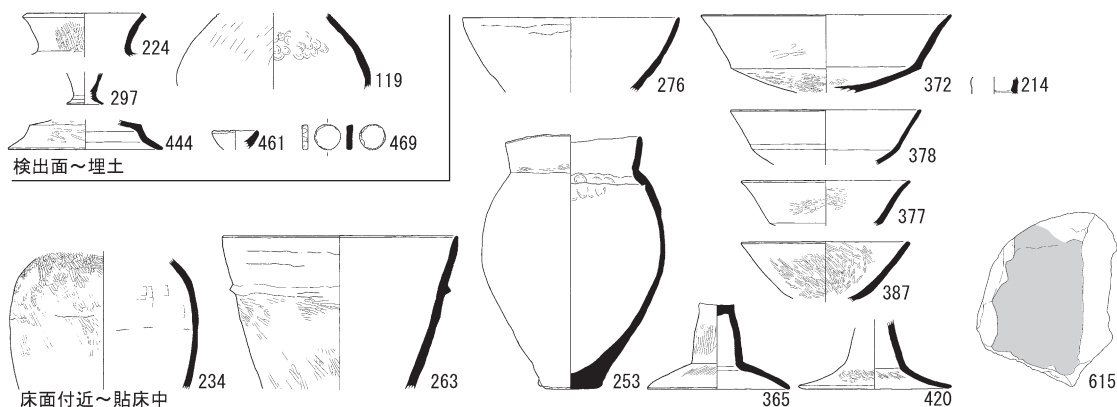


図 18 堅穴建物跡 6 (S10) 出土遺物 (縮尺不同)

他の建物跡とやや離れた場所に位置している。建物跡の大きさは、南北・東西約 5.0 m (床面積約 21.3 m²) で、土層断面から推定される深さは約 0.4 m である。柱穴と考えられるピットを 4 基検出している。ピットの深さは約 0.7 m である。このピットは、北東部のものを除いて、それぞれ間仕切りの前にあり、特に南西部の 1 期は間仕切りに非常に近い位置にある。なお、床面には厚さ 10～15 cm の貼床を施している。また、この貼床内からは炭が多く出土している点で特徴的である。

埋土および床面から出土した遺物はほとんどないため、建物跡の時期は不明である。建物の形状から、弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃のものと考えられる。

調査時および注記の略号は「S 16」である。

なお、本遺構の貼床内から出土した炭について、放射性炭素年代測定を行った結果、測定値である pMC が 79.17 ± 0.20% で、年代は 2σ の範囲で cal AD 76～215 (94%)、1σ の範囲で cal AD 80～138 (65.8%) の値が出ている。年代測定値では、堅穴建物跡 3 とほぼ同じか若干新しい時期となっている。

堅穴建物跡 5 (図 14・15)

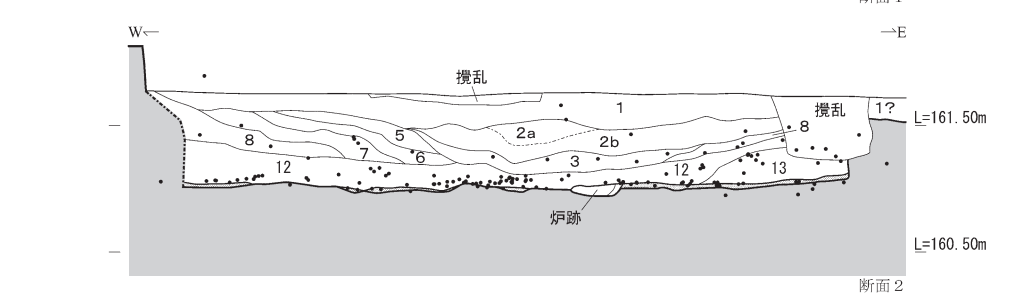
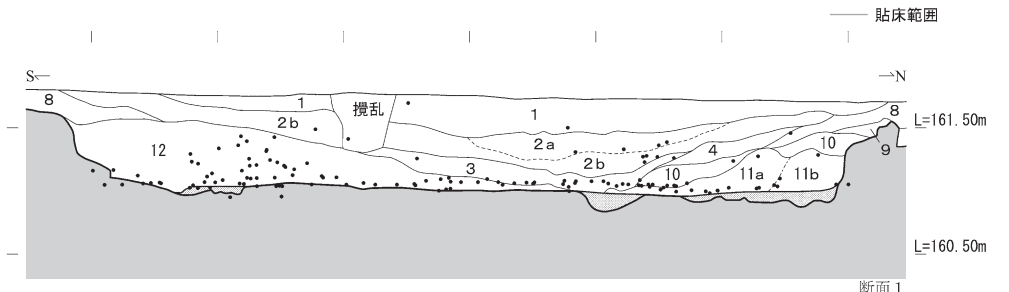
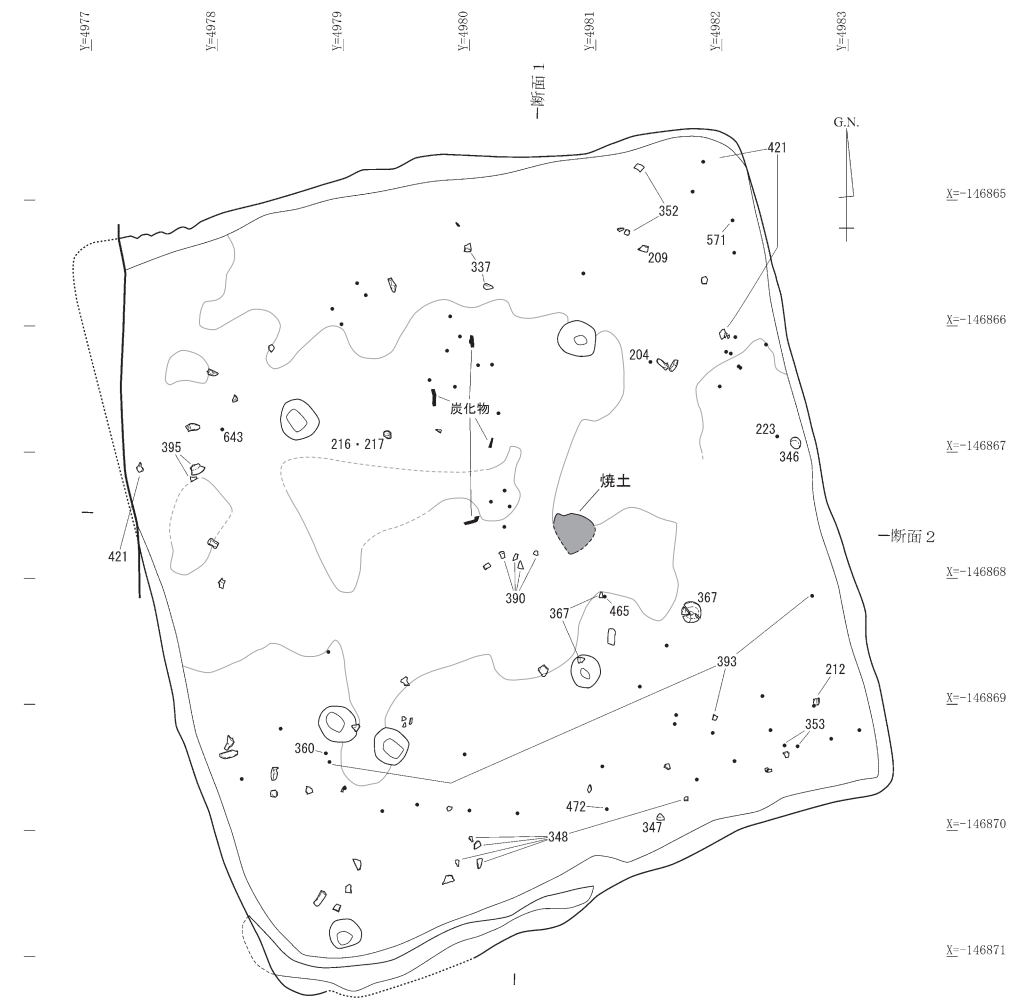
3 Z～A グリッド南部を中心として検出した方形の堅穴建物跡で、主軸は他の堅穴建物跡に比べると大きく傾いている。大きさは北西-南東軸長 3.6～3.7 m、北東-南西長約 4.1 m (床面積約 15.0 m²) で、土層断面から推定される深さは 0.4～0.5 m である。柱穴と考えられるピットを建物中心付近で 2 基検出しており、2 本柱であったと考えられる。ピットの深さは約 0.5 m である。なお、床面中央付近で、炉跡と考えられる焼土を 2 箇所検出している。

遺物は床面で多く出土しており、これらについてはほぼ一括遺物と考えて良いと思われる。北壁付近では高坏の坏部と脚部を意図的に分離させて遺棄している (巻頭図版 6-2) が、脚と坏が接合しないものもある。建物跡中央付近では、土製勾玉やミニチュア土器が出土している。また、甕 2 点 (図 74-254・255) が割れた状態で出土しているが、いずれも底部付近のみ見つかっていない。このように、他の建物跡の遺物の出土状況とは大きく異なり、やや特殊である。弥生時代後期後半頃には堅穴建物跡の床面に土器を多くの残すものがみられるので、その名残であるのかもしれない。時期は、床面の出土遺物から、古墳時代前期後半頃と考えられる。

調査時および注記の略号は「S 13」である。

堅穴建物跡 6 (図 16～18)

3～4 B グリッドで検出した方形の堅穴建物跡である。大きさは南北約 5.2 m、東西 4.9～5.1 m (床面積約 26.2 m²) で、床面までの深さは 0.5～0.6 m である。北側には堅穴状遺構 2 が位置



- 土層注記**
- 1 : 7.5YR3/2(黒褐)、粘性弱・しまり弱、橙色軽石(1-2mm)7-10%、基本土層4層に類似
 - 2 : 基本土層3層相当か、aは7.5YR2/1(黒)、粘性有・しまり弱、橙色軽石(1-2mm)2%、
bは10YR3/1(黒褐)、粘性弱・しまり有、橙色軽石(3-4mm)3-5%
 - 3 : 10YR4/2(灰褐)、粘性弱・しまり有、橙色軽石(2-3mm)5-7%
 - 4 : 10YR3/2(黒褐)、粘性有・しまり有、橙色軽石(1-2mm)7-10%
 - 5 : 10YR3/1(黒褐)、粘性弱・しまり有、橙色軽石(3mm以下)7-10%
 - 6 : 10YR3/1(黒褐)、粘性弱・しまり有、橙色軽石(1-2mm主体+5mm)10-15%
 - 7 : 10YR3/1(黒褐)、粘性弱・しまり有、橙色軽石(5mm以下)25-30%
 - 8 : 7.5YR3/2(黒褐)、粘性弱・しまり有、橙色軽石(4mm以下)7-10%、基本土層4層相当か
 - 9 : 7.5YR3/1(黒褐)、粘性弱・しまり弱、橙色軽石(1-2mm)7-10%
 - 10 : 7.5YR3/2(黒褐)、粘性弱・しまり有、橙色軽石(4mm以下)30%、54相当か
 - 11 : 7.5YR3/1(黒褐)、粘性無・しまり強、橙色軽石(5mm以下主体+7-10mm)をaは30-40、bは40%
 - 12 : 7.5YR3/2(黒褐)、粘性弱・しまり強、橙色軽石(5mm以下)30%
 - 13 : 7.5YR3/1(黒褐)、粘性無・しまり強、橙色軽石(5mm以下主体+7-10mm)40%、55bに対応か
- 0 3m
S=1/60

図19 竪穴建物跡7(S12)平面・土層断面図

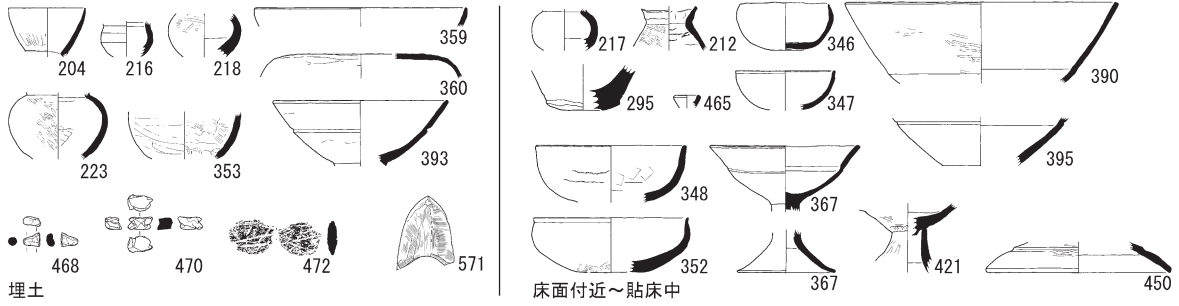


图 20 竖穴建物跡 7 (S12) 出土遺物 (縮尺不同)

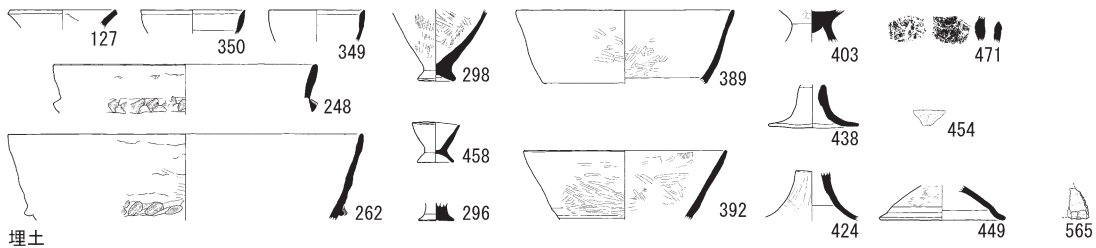


图 21 竖穴建物跡 8 (S14) 出土遺物 (縮尺不同)

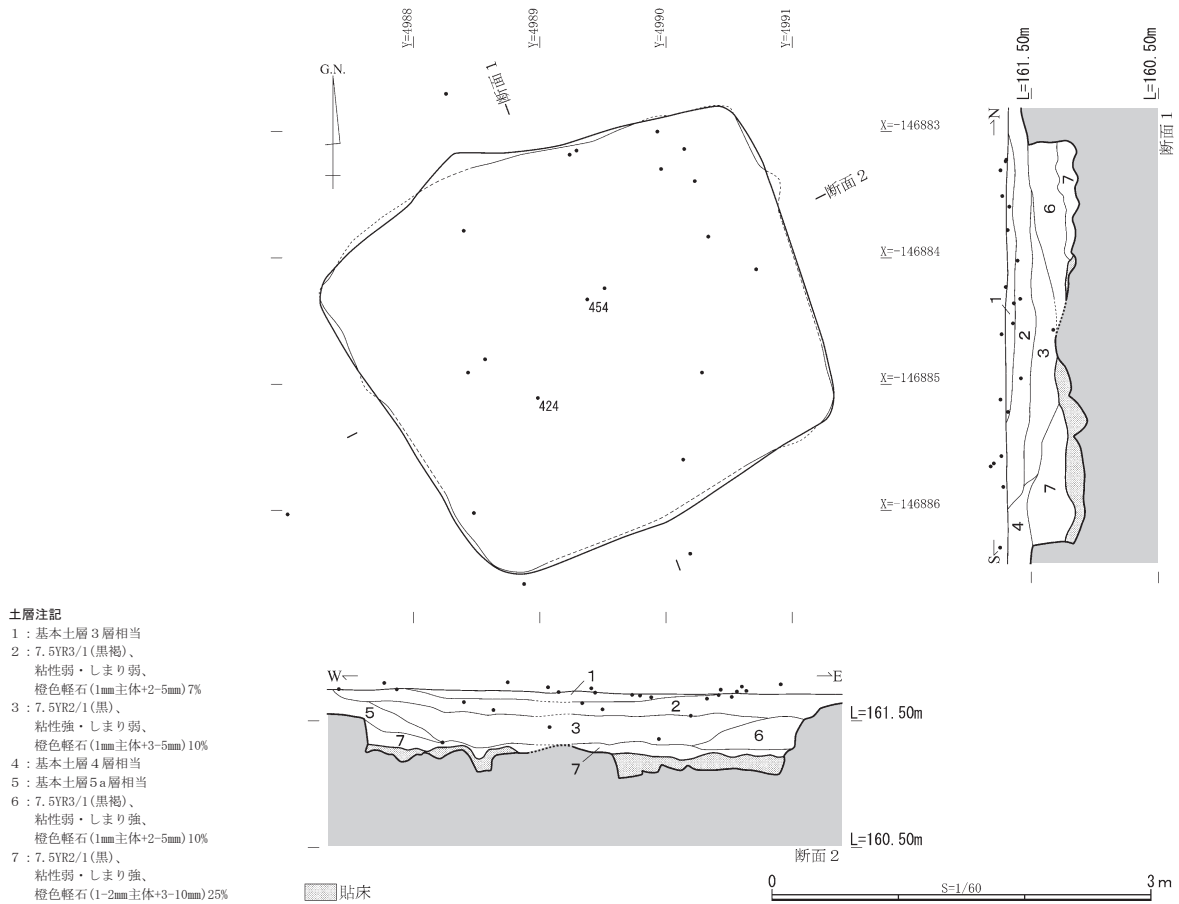
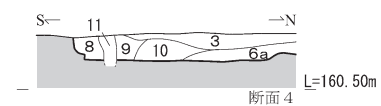
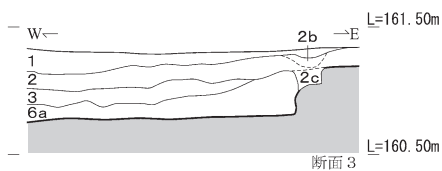
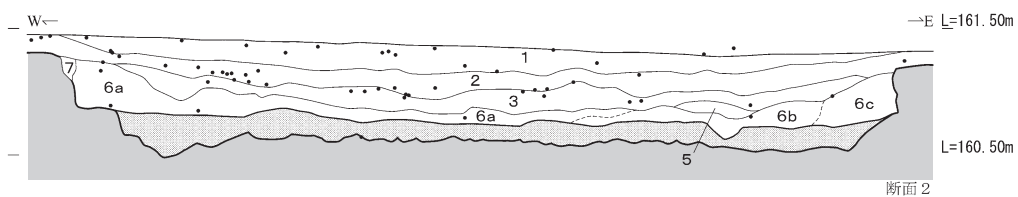
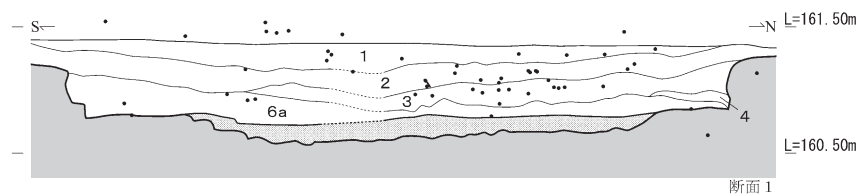


图 22 竖穴建物跡 8 (S14) 平面・土層断面図



土層注記

- 1 : 7.5YR2/1(黒)、粘性無-弱・しまり弱-有、橙色軽石(2mm以下)3-5%、基本土層3層相当
- 2 : 7.5YR3/2(黒褐)-7.5YR3/1(黒褐)、粘性弱・しまり弱、橙色軽石(2mm以下主体+5mm)10-15%
遺構中心付近はやや黒みを帯びる、基本土層4層相当、細分b層は若干黒みを帯びる
- 3 : 7.5YR3/1(黒褐)、粘性弱・しまり弱-有、橙色軽石(3mm以下)15%、92層に比べやや暗い
- 4 : 7.5YR3/1(黒褐)、粘性弱・しまり有、橙色軽石(5mm以下)20-25%
- 5 : 7.5YR2/1(黒)、粘性弱・しまり有、橙色軽石(7mm以下)20-25%
- 6 : 7.5YR3/1(黒褐)、粘性無-弱・しまりあり、橙色軽石(2mm以下主体+5mm)20-25%、
bは25-30%で細かな軽石が目立つ、cは橙色軽石(5mm以下)30-40%

- 7 : 7.5YR2/1(黒)、粘性弱・しまり弱、橙色軽石(2mm以下)7-10%、樹根による攪乱か
- 8 : 7.5YR3/2(黒褐)、粘性無-弱・しまり強、橙色軽石(3mm以下)20-25%
- 9 : 7.5YR3/2(黒褐)、粘性弱・しまり有-強、橙色軽石(3mm以下)20-25%
- 10 : 7.5YR3/1(黒褐)、粘性弱・しまり有、橙色軽石(2mm以下主体+5mm)15-20%
- 11 : 7.5YR2/1(黒)、粘性弱・しまり弱、橙色軽石(3mm以下)10-15%、樹根による攪乱か

貼床 基本土層6層残存部

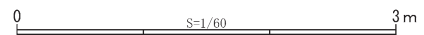


図23 竪穴建物跡9(S15)平面・土層断面図

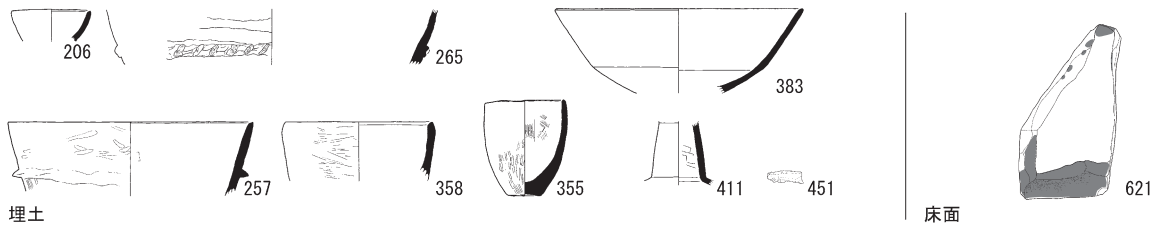


図 24 堅穴建物跡 9 (S15) 出土遺物 (縮尺不同)

しているが、床面は堅穴建物跡 6 の床面よりもかなり高い位置にある。土層の堆積状況からすると同時期か、堅穴状遺構 2 よりも古い時期のものと考えられる。柱穴と考えられるピットは 5 基検出しているが、おそらく 6 本柱であったものと思われる。また、中央寄りのピットについては、主柱と考えられる 4 本のピットを結んだ辺よりも 10 cm 程浅いため、主柱 4 本 + 支柱 2 本の可能性が考えられる。ピットの深さは 0.5 ~ 0.7 m である。床面には貼床を施しており、貼床の厚さは約 15 cm である。北西部は周囲よりも若干傾斜がついて段状に高くなっている (断面 3・4)。また、北西部ほどではないが、南東部においても若干壁面側が高くなっている (断面 5)。

遺物は堅穴建物跡 5 と同様に床面付近から出土しているが、建物跡 5 に比べると散漫であり破片が多い。北壁の西側床面付近で、灰色の粘土状物質の塊が出土している。堅穴建物跡 3 で出土しているものに似ている。また、建物跡の外側になるが、灰状の物質が堆積しているのを確認している。この灰状物質は、土層断面の観察から、掘り込み面かそれよりも若干上位のレベルに位置するものと考えられる。遺構の時期は、出土している土器から古墳時代前期後半 ~ 中期前葉頃と考えられ、堅穴建物跡 5 よりも新しいと考えられる。

調査時および注記の略号は「S 10」である。

堅穴建物跡 7 (図 19・20)

3 Z ~ A グリッド南部を中心として検出した方形の堅穴建物跡で、北東隅は調査区外に広がっている。大きさは南北約 5.6 m、東西約 5.3 m (床面積約 28.7 m²)、で土層断面から推定される深さは 0.5 ~ 0.6 m である。床面には貼床を施しているが、部分的である。そして、他の堅穴建物跡が基本土層 6 層下の黒色土まで全体を掘り込んで貼床をしているのに対して、堅穴建物跡 7 は、床の半分近い部分の黒色土を掘り残してそのまま床としている。床面で 6 基のピットを検出しているが、その位置から 4 本柱であったと考えられる。ピットの深さは 0.6 ~ 0.7 m である。

遺物は、埋土と床面付近から出土している。この中で、埋土中からは、形態が特徴的な磨製石鏃 (図 88-571) や、須恵器を模倣した坏の可能性があり、調整が須恵器坏蓋に類似している土器 (図 78-360) などが出土している。一方、床面付近出土遺物は他の建物跡とは異なり、鉢が多くなっている点に特徴がある。また、床面から炭が広い範囲に散布した状態で出土している。遺構の時期は、床面出土の遺物から古墳時代後期前半 (6 世紀前半頃) と考えられる。

調査時および注記の略号は「S 12」である。

なお、本遺構床面から出土した炭化材について、放射性炭素による年代測定を行った結果、測定値である pMC で 82.22 ± 0.24%、年代は 2 σ の範囲で cal AD 422 ~ 543 (95.4%) の値が出ている。分析結果でみると、建物跡 3・4 とは 300 ~ 400 年程度の時間的な差があることとなる。

堅穴建物跡 8 (図 21・22)

5 A ~ B グリッドで検出した、平面方形を呈する小型の堅穴建物跡である。大きさは南北 2.7 ~ 3.1 m、東西 3.0 ~ 3.6 m (床面積約 9.9 m²) で、貼床は部分的である。深さは約 0.3 m と推定さ

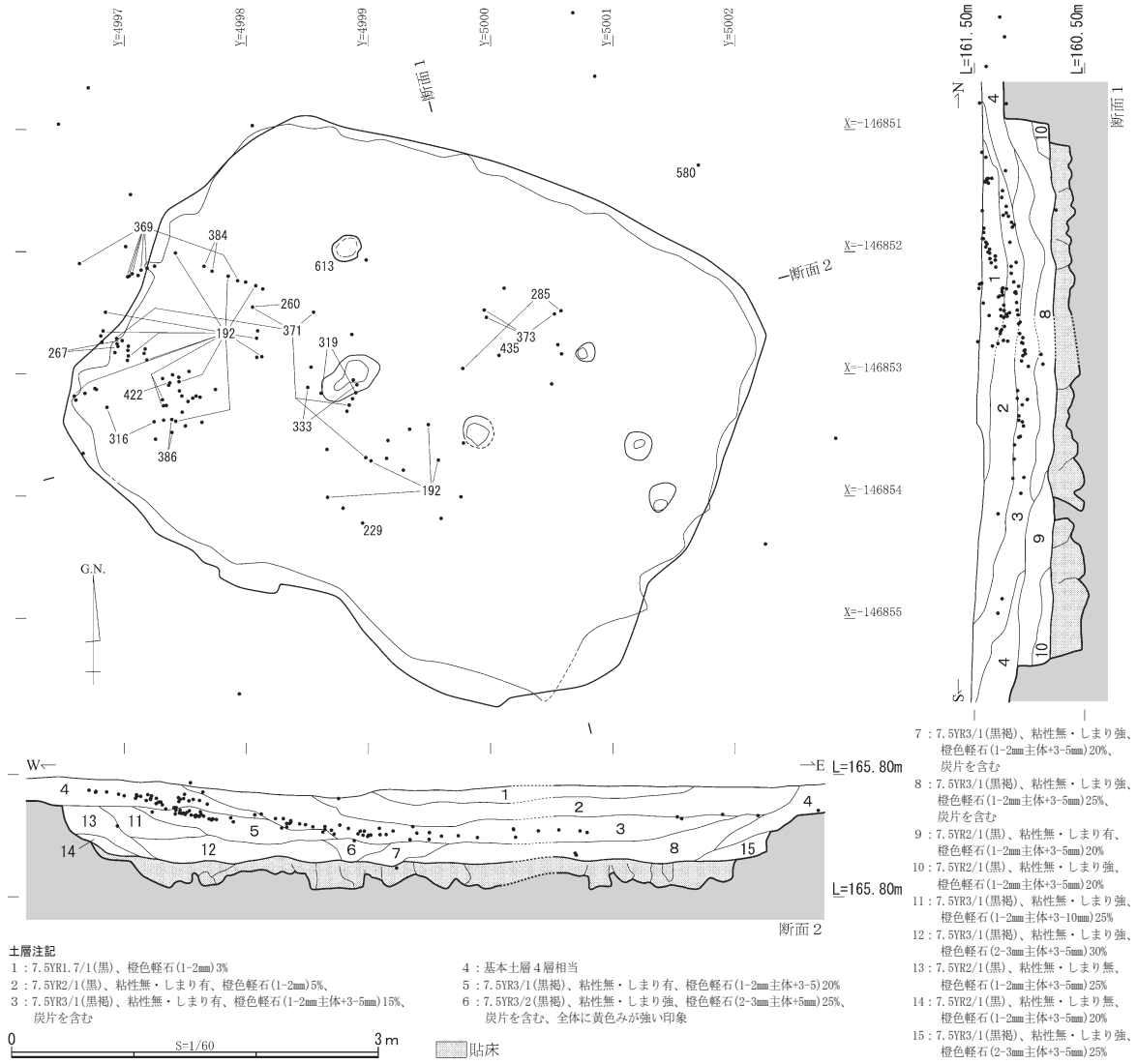


図25 竪穴建物跡10(S8)平面・土層断面図

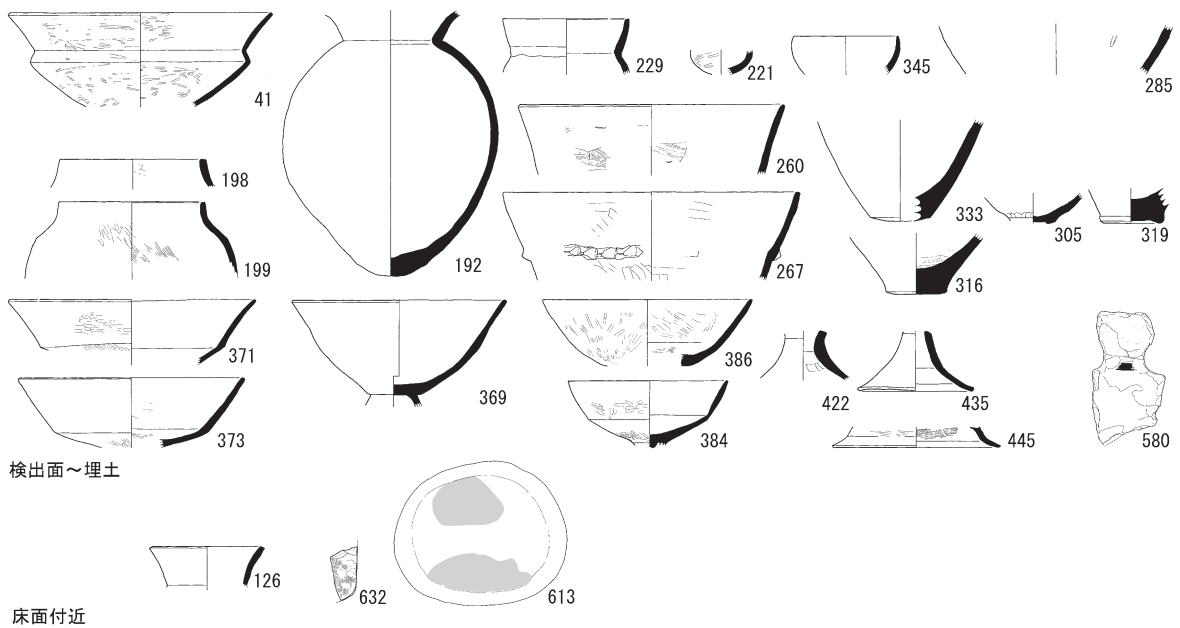


図26 竪穴建物跡10(S8)出土遺物(縮尺不同)

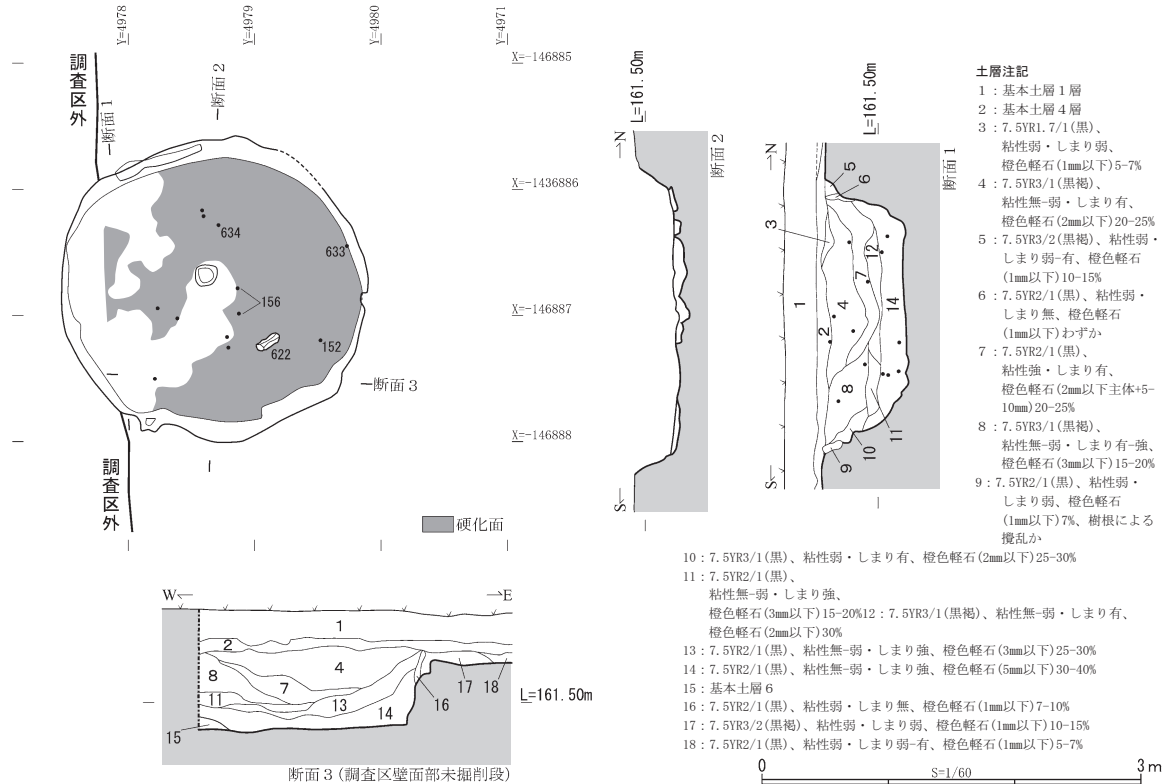


図 27 竪穴状遺構 1 平面・断面図

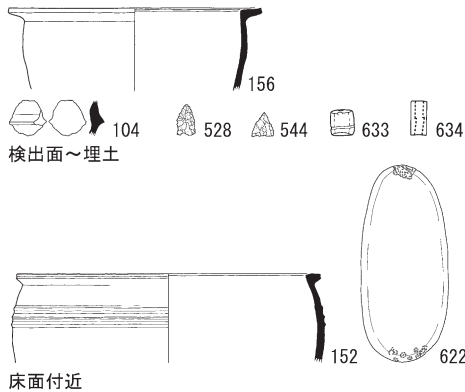


図 28 竪穴状遺構 1 出土遺物 (縮尺不同)

れる。柱穴と考えられるピットは検出できなかった。

遺物は、埋土中からの出土であり、床面付近から出土した遺物はほとんどない。遺構の時期は、床面出土遺物が無いため明らかでないが、埋土の堆積状況の検討から弥生時代後期頃のものと思われる。

調査時および注記の略号は「S 14」である。

竪穴建物跡 9 (図 23・24)

5 C~Dグリッド北部を中心にして検出した竪穴建物跡で、若干離れた場所に位置している。平面形は不整形で、北西壁の中央付近と北東壁の北側に、不明瞭ながら突出壁状の箇所がみられる。掘方は基本土層 6 層を深く掘削しておらず、周辺に基本土層 6 層の霧島御池軽石層が残っているため、平面形の把握が難しい部分が多かった。このように、6 層を掘り残すものは、竪穴建物跡 1 や 2 など、間仕切付建物跡にみられるため、間仕切付建物跡が崩れた形態である可能性もある。ピットは直線的に並んだ 5 基とその列から離れた北東部の 1 基を検出しているが、中央付近の 2 本が主柱になると考えられる。他の間仕切付建物跡と異なり、4 本柱ではないようである。ピットの深さは 0.6~0.7 m である。

遺物は、主に埋土中から出土しており、床面出土の土器はみられず、台石状の石器 (図 97-621) が出土しているのみである。埋土掘削中に鍛造剥片と思われるような微細な遺物は検出していないが、台石状の石器には全体的に鉄錆が付着するだけでなく、1 面には厚く付着している (巻頭図版 8-2) ため、金床石と考えられる。強く被熱した鍛冶炉本体はみつかっていないが、鍛冶作業を行っていた可能性が考えられる。建物跡の時期は、床面出土の土器がないため明らかでないが、建



図 29 土坑 3 平面・断面図 (190 は断面軸に反映)

4.9 m、東西 3.5 ～ 3.9 m (床面積 16.9 m²) と南側の方がやや幅が広い。土層断面から推定される深さは約 0.4 m である。柱穴と考えられるピットは検出できなかった。なお、平面形や貼床の様子から切り合っている可能性、あるいは拡張している可能性があるが、調査時の観察で区別できなかったため、1 軒の建物跡として記録を行った。基本的に建物跡の切りあいがないことから、あるとすれば拡張の可能性が高いと考えられる。

遺物は、埋土中からの出土が多く、床面付近出土の遺物は限られる。また、埋土中の遺物は、堅穴建物跡 2 と同様に基本土層 3 層下部付近から多く出土している。遺構の時期は、床面出土の土器がないため明らかでないが、埋土の堆積状況の検討から、堅穴建物跡 7 に近い時期が考えられるため古墳時代後期頃のものとして推定される。

調査時および注記の略号は「S 8」である。

b 堅穴状遺構

上記の堅穴建物跡のほかに、小型の堅穴状遺構を 2 基 (堅穴状遺構 1・2) 検出している。

堅穴状遺構 1 (図 27・28)

5 Z グリッドで検出した平面円形を呈する小型の堅穴状遺構である。大きさは径 2.0 ～ 2.2 m (床面積約 3.8 m²) で、土層断面から推定される深さは約 0.7 m である。柱穴の可能性のあるピットを中央で 1 基検出している。貼床は部分的で、東側を中心に硬化している。

遺物は、埋土中から弥生土器、管玉等が出土しており、床面からも弥生土器片が出土している。遺構の時期は、弥生土器のみの出土であることや、基本土層 4 層の堆積状況から他の堅穴建物跡よりも一段階古い時期が考えられるため、弥生時代中期前半頃と考えられる。

調査時および注記の略号は「S 17」である。

堅穴状遺構 2 (図 16・17)

3 B グリッド中央付近、堅穴建物跡 6 の北側に位置する、平面隅丸方形を呈する小型の堅穴状遺構である。大きさは南北約 3.5 m、東西約 3.4 (床面積約 9.8 m²) である。土層断面から推定される深さは約 0.5 m で、床面には貼床を施す。床面のレベルは他の遺構に比べるとやや高い。本遺構

物跡の構造や埋土の堆積状況から、古墳時代前期前半頃の時期と考えられる。この時期が妥当であるとすれば、中期にみられる高坏脚部を転用する鍛冶の前身的な位置付けを与えることができる。

調査時および注記の略号は「S 15」である。

堅穴建物跡 10 (図 25・26)

2 B ～ C グリッドで検出した平面形が不整形を呈する堅穴建物跡である。建物の主軸が 45° 近く傾いているため、土層観察用のベルトは対角線上に近い位置になってしまった。大きさは南北約

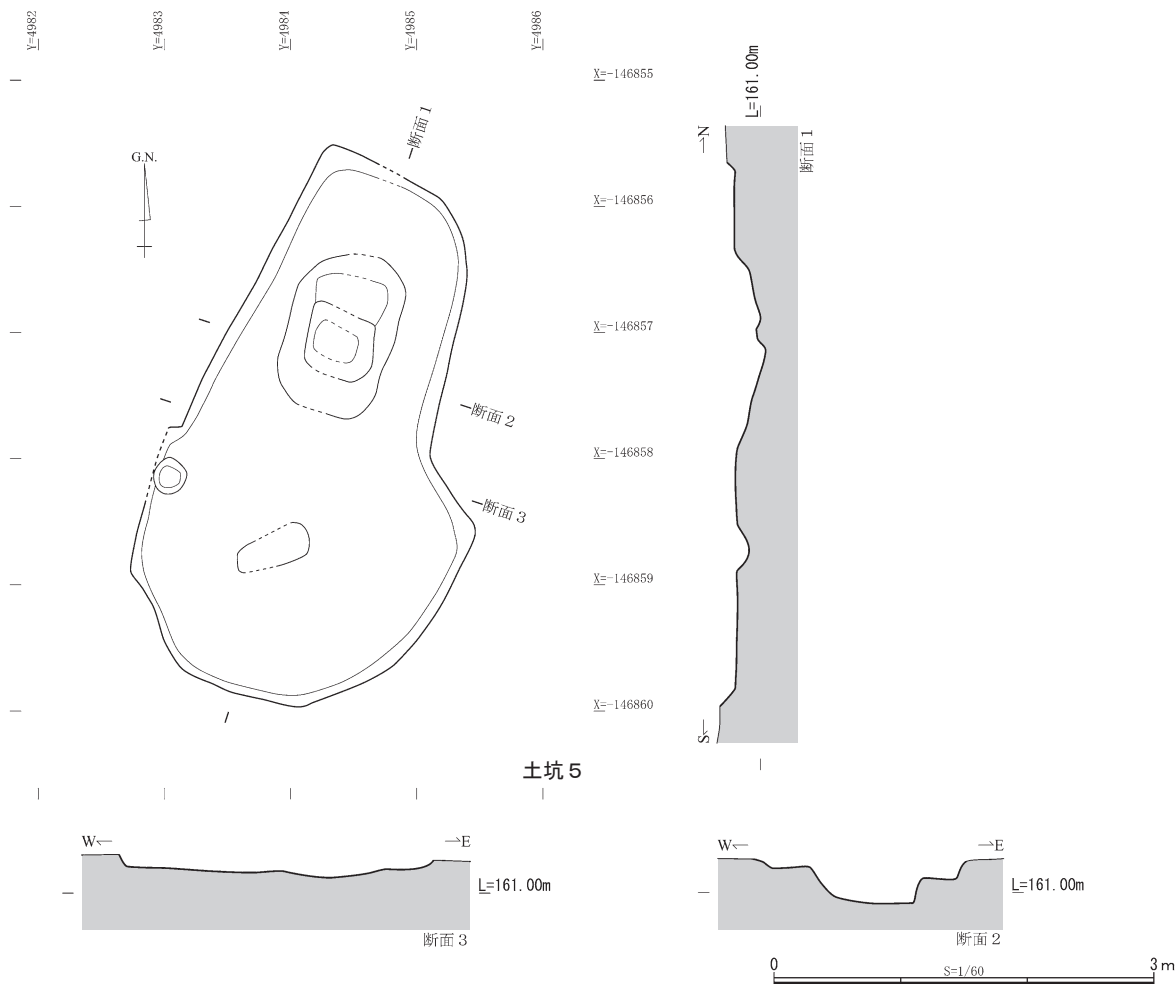
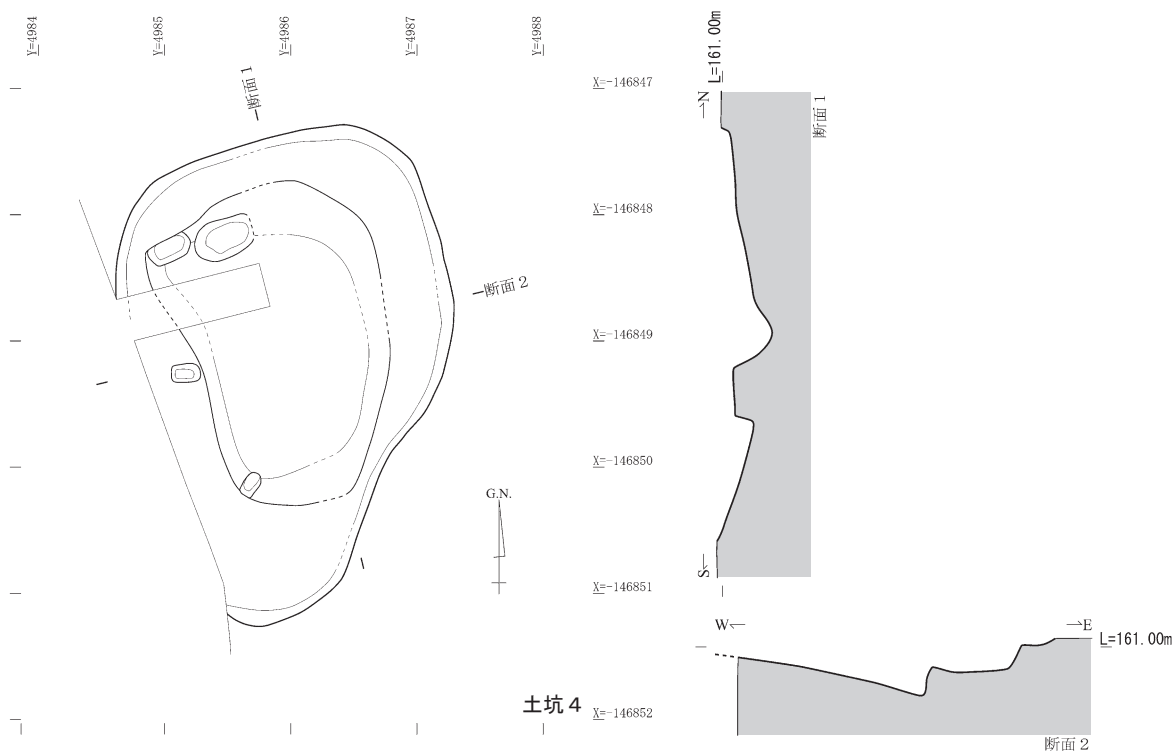


图 30 土坑 4 · 5 平面 · 断面图

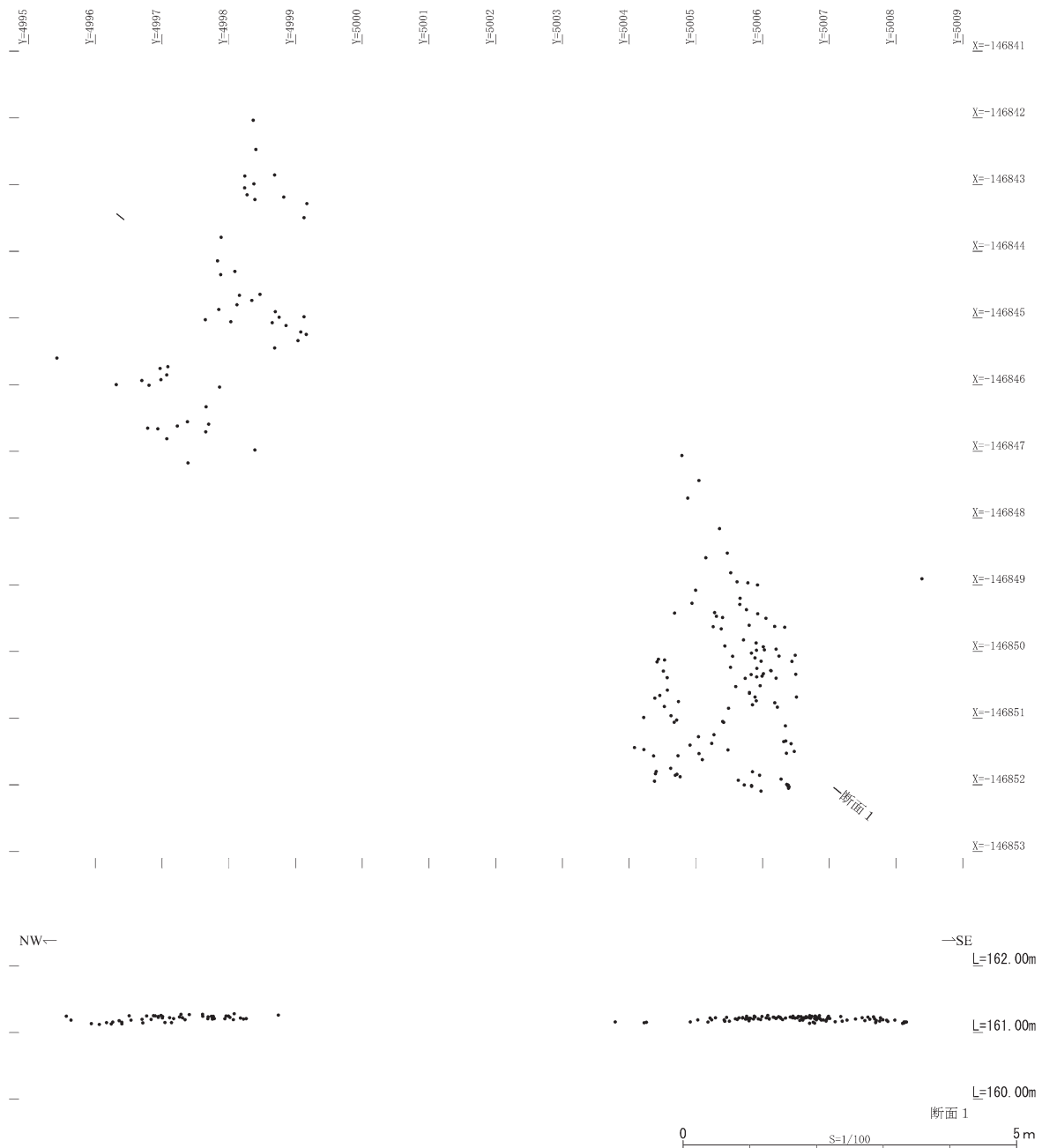


図 31 北部調査区 4 層内炭化種実出土状況 1

の上部において、基本土層 4 層中に 5 a 層に類似した黒色土（埋土 1）が平面的に検出されたため、遺構の存在を想定して、精査を繰り返すとともに、土層観察のベルトを残していた。しかし、結果的に遺構の検出ができたのは基本土層 5 b 層付近であった。埋土の堆積状況から、埋土 1 は、新しい時期の遺構を掘削した際の土であるのかもしれない。

本遺構に伴う遺物は出土していないため時期は明らかでない。埋土の堆積状況から竪穴建物跡 6 と同じかそれよりもやや新しい時期のものと考えられるので、古墳時代中期頃のものであろうか。

調査時および注記の略号は「S 21」である。

c 土坑

当該時期の土坑は 3 基（土坑 3～5）検出しているが、土坑 4・5 は遺構ではない可能性がある。

土坑 3（図 29）

2 Bグリッド北側、堅穴建物跡8の西側で検出した土坑である。頸部以下がほぼ完存する壺（図71-190）が底面からやや浮いた状態で出土している。この壺の出土から、土坑などの存在を考えたトレンチなどを設定したが、トレンチの長さが短かったことと、埋土の区別が難しかったことから、壺が出土した段階では土坑を認識することができなかった。土坑の存在が否定できなかったため、壺を取りあげた後、その部分をベルト状に残したまま周囲を掘り下げていったところ、基本土層5層内で土坑の輪郭を確認することができた。土坑の大きさは長さ約1.9m、幅約1.6mである。時期は出土した土器から古墳時代初頭頃の時期と考えられる。なお、壺内の基本土層5a層に類似した土を水洗した後、含まれる鉱物類の観察を当センターの赤崎主幹に依頼したところ、Sz-4降下以降の土である可能性が指摘されているため、後世に埋め直した可能性も否定できない。

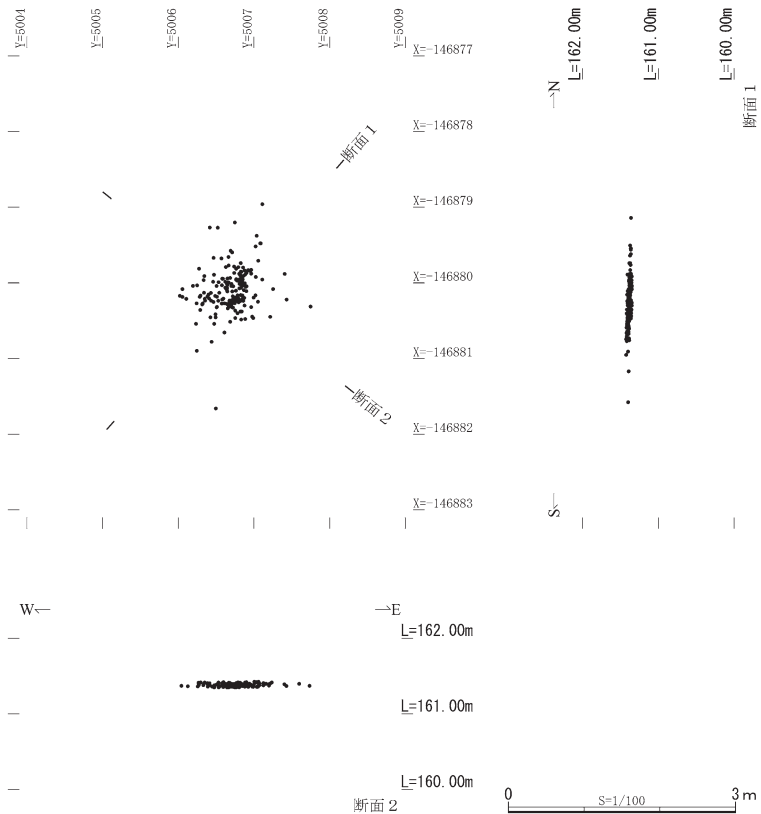


図32 北部調査区4層内炭化種実出土状況2

調査時および注記の略号は「S 25」である。

土坑4 (図30)

1～2 Aグリッド、堅穴建物跡1の東側で検出した土坑である。不整形であり、床面のレベルも一定していない。人為的なものでない可能性がある。遺物は出土していない。

調査時および注記の略号は「S 6」である

土坑5 (図30)

2 Aグリッド南側、堅穴建物跡7の東側で検出した土坑である。底面は東西軸では比較的安定しているが、南北軸では起伏が大きい。土坑2と同様に人為的な遺構ではない可能性がある。目立った遺物は出土していない。

調査時および注記の略号は「S 24」である

d その他

以上の遺構のほかに、イチイガシを中心とする炭化した種実がまとまって出土している箇所が2箇所確認された。炭化種実集中部1 (図31) では、炭化種実が1 Bグリッド東側～2 Cグリッド北側にかけての範囲において、南東部を起点として北西方向へ扇状に散布している。図化した炭化種実は71点分である。途中、1 Cグリッド西側において、炭化種実の分布がみられない部分がある。分布状況からすると、なんらかの影響によって炭化種実が消失したのと考えられる。上層からの掘り込みなどは確認できなかったが、出土状況から土坑などの遺構にともなう可能性は低いと思わ

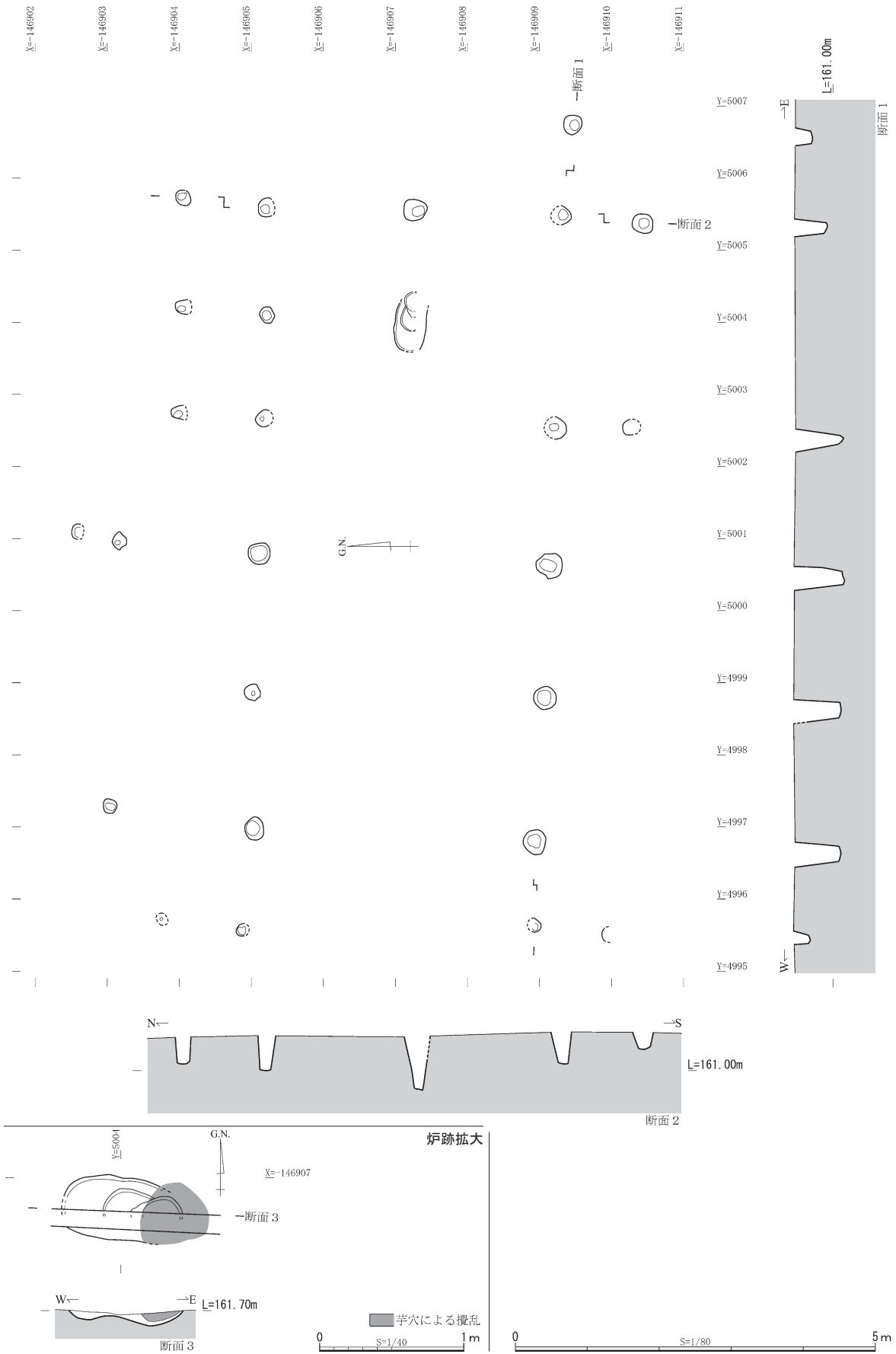


図33 掘立柱建物跡平面・断面図

れる。出土層位から集落が営まれた弥生時代～古墳時代の頃のものと考えられる。なお、1 B グリッドと2 B グリッド出土の炭化種実では出土レベルには大きな差はみられない。このほか、炭化種実集中部1は、南東部に

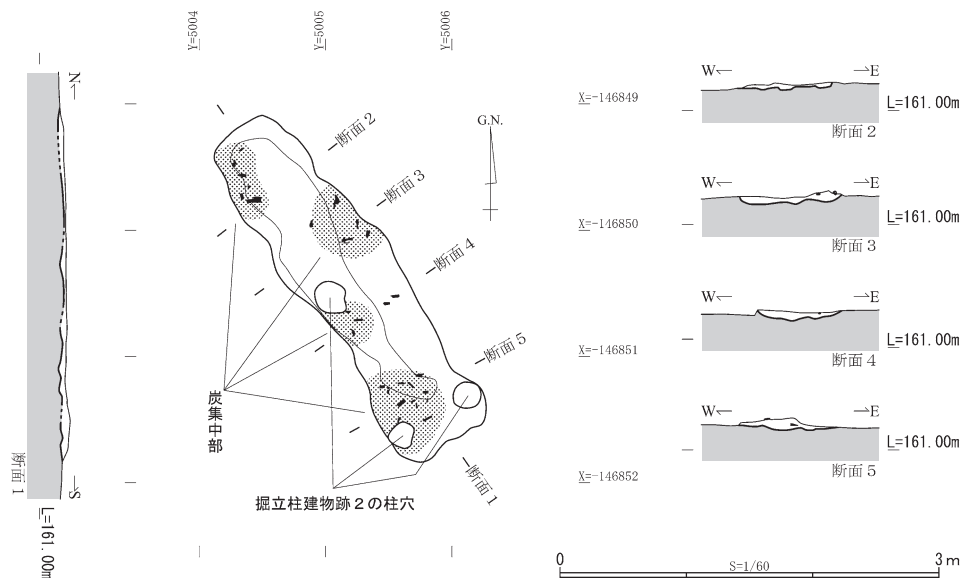


図 34 炭集中土坑平面・土層断面図

において一部、後述する炭化物集中土坑と重なっている。

一方、炭化種実集中部2（図 32）は集中部1とは異なり、4 C・5 C グリッドの境界付近の直径2 m程度の範囲に集中している。図化した炭化種実は190点である。調査時にも集中している出土状況を認識していたため、土坑など何らかの遺構底部に堆積した状況を想定して精査を行ったが、遺構は検出できなかった。取りあげた種実の出土レベルをみても、上下で大きな差がないため、特に掘り込みはなかったと考えられる。

ところで、散布図として図化した炭化種実は、ある程度個体のカウントが可能な形状が残っているものについて点上げを行った分である。個数の計数には使用できない半分に分かれたものや、炭化種実集中部として認識する以前にとり挙げたものもあるため、本来の数はさらに多かったと考えられる。いずれの集中部も基本土層4層を中心に出土している。

出土したこれらの炭化種実について集中部1の1点のみであるが、放射性炭素年代測定を行った結果、測定値であるpMCで $79.09 \pm 0.19\%$ 、年代は 2σ の範囲でcal AD 69～174 (91.1%)の値が出ている。他の炭化物の放射性炭素年代測定の結果と比較すると、およそ竪穴建物跡3・4と同じ時期に該当している。建物跡の時期などから弥生時代後期後半頃～古墳時代初頭頃のものと考えられる。また、これによって、基本土層4層が竪穴建物跡を建て、人々が生活していた生活面であるという可能性が一段と高くなったといえることができる。

(4) 古代～中世

本遺跡が形成されたもう一つの主要な時期として、桜島3テフラ降下前の15世紀中頃の時期をあげることができる。削平されている部分も多いが、遺跡全体にわたって当該時期の生活の痕跡を認めることができる。遺構としては、畦状遺構や道路状遺構・溝状遺構などを検出している。また、それよりも古い、基本土層4層上面でも掘立柱建物跡や炭が集中する土坑などを検出しており、これらは古代に遡る可能性が考えられる。また、道路状遺構の最初の掘削時期も、次章での検討から8世紀頃まで遡る可能性があり、ここではこれらの基本土層4層上面～桜島3テフラの間で検出された遺構について、古代～中世の遺構として報告を行うこととする。

a 掘立柱建物跡 (図 33)

7 B～Cグリッドを中心として検出した、2間×5間で東側を除く三面に庇をもつと考えられる掘立柱建物跡である。建物跡は4層上面で検出しているが、中央東寄りに炉跡状の灰を含む土坑がみられる。検出面や炉跡の位置から、この掘立柱建物跡に伴うものと考えられる。また、炉跡の検出から、この検出面が生活面に近いレベルと考えられる。柱穴と考えられるピットは直径20～40cmで、外側に底部と考えられる一回り小さい柱穴を伴っている。ピットの深さは60～70cmである。

なお、炉跡と考えられる遺構内の炭について、放射性炭素年代測定を行った結果、現代のものであるという結果がでており、また、炭化材は竹材とされている。試料の採取には細心の注意をはらったつもりであるが、現代のゴボウの耕作にともなうトレンチャーや芋の貯蔵穴に切られていることから、現代のものが混入した可能性が考えられる。遺構に伴う遺物がないため、時期は明らかでないが、基本土層4層上面での検出あることから、古代頃のものである可能性がある。

調査時および注記略号は「S18」である。

b 炭集中土坑 (図 34)

1～2Cグリッドの基本土層4層上面付近で検出した炭化物が集中した遺構である。炭化物が集中している状況は、4層に近い3層下部から確認でき、4層上面でそ

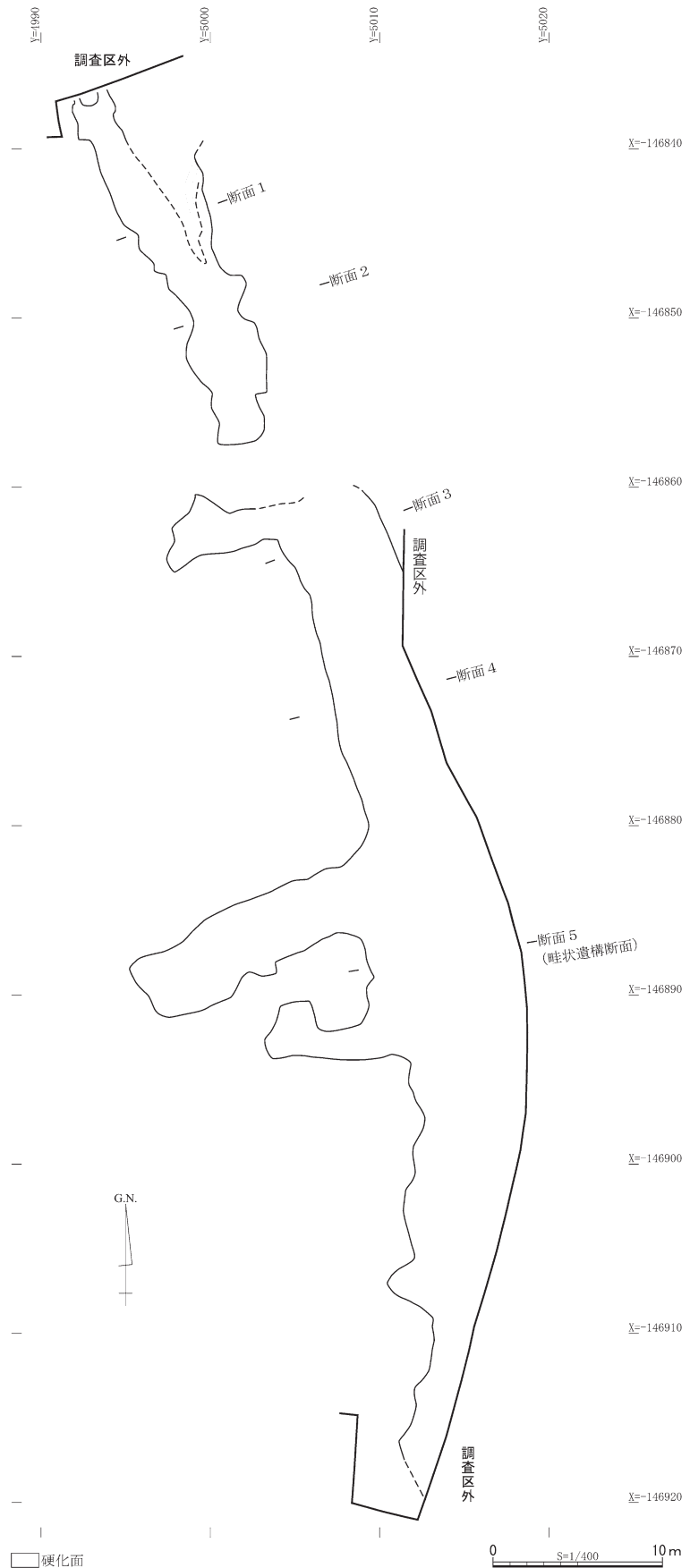


図 35 北部調査区 1層下面桜島3テフラ残存状況

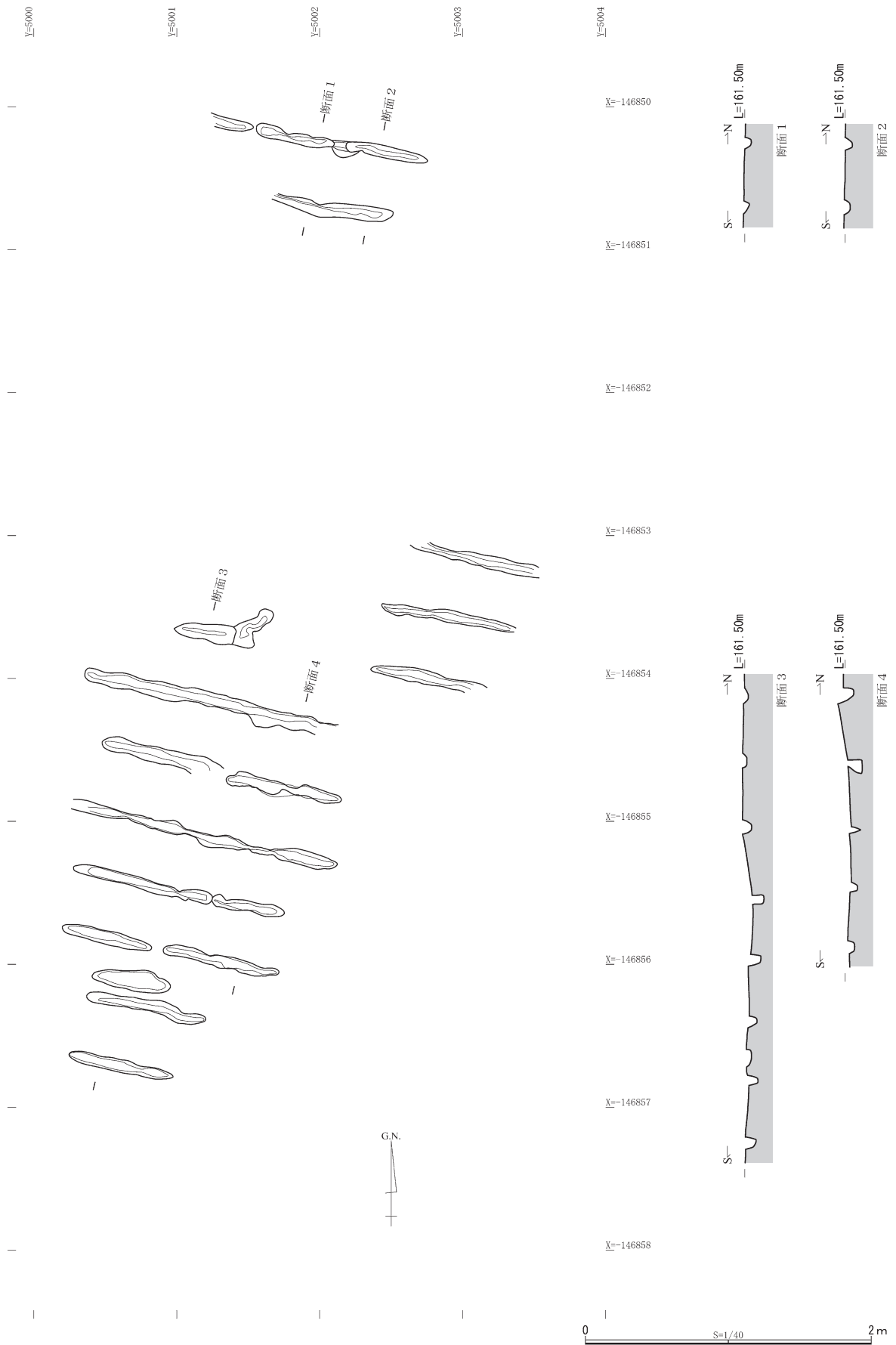


图 37 小溝状遺構平面・断面图 1

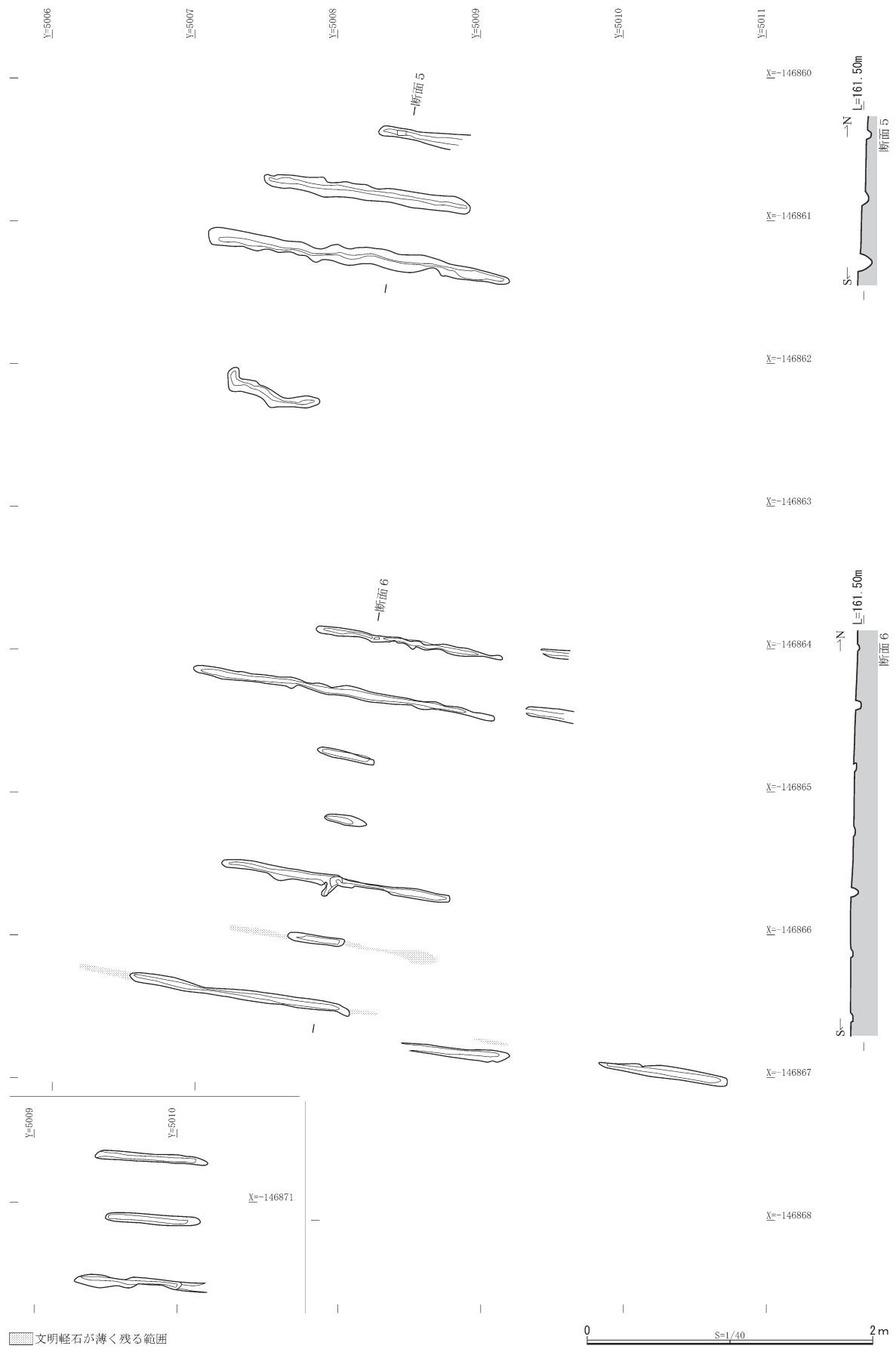


図38 小溝状遺構平面・断面図2

の輪郭を把握することができた。長さ約 3.0 m、幅 0.7～0.9 mで、深さは 0.1 mと浅く、掘り込み自体は本来それほど深くないと考えられる。土坑内の 4 箇所特に炭が集中している状況が確認できた。放射性炭素年代測定に出していないが、各箇所での炭サンプルの採取は行っている。土坑の性格については不明である。なお、炭化種実集中部 1 の種実も本土坑に混じって多く出土している。

出土遺物は付近から壺破片（図 72-227）が出土している程度であり、時期は明らかではない。3 層下部から 4 層上面で検出しているため、古代～中世の遺構であると考えられる。

調査時および注記の略号は「S 20」である。

c 小溝列（図 37・38）

2 C グリッド西側と 3 C グリッド東側の桜島 3 テフラ直下で検出した、細い溝状の掘り込み列である。この遺構は、長さ 1.5～2.0 m、幅 0.1 m 程度の細い溝状の凹みが、幅 0.3～0.4 m 程の間隔で並んでいる。形状や溝の間隔が類似することから、畦状遺構と同様に、複数の溝は一体の遺構であると考えられる。溝の埋土は桜島 3 テフラが充填しているものが多いが、中には基本土層 3 層に類似する黒色土を挟んで、底面に薄く桜島 3 テフラが堆積している箇所がある。このような状況から桜島 3 テフラ降下後の遺構である可能性もあるが、ほとんどは軽石が底面まで詰まった状態であるため、桜島 3 テフラ降下前のものと考えている。底面付近でみられる桜島 3 テフラについては、その堆積要因は明らかでない。畦状遺構の上部付近にも桜島 3 テフラが混じった部分がみられるため、定説と異なるが、1471 年とされる大規模な噴火の少し前にも、類似するテフラを供給する小規模な噴火があったのではないかと考えている。

この小溝列については、その性格は明らかでない。根拠が乏しいが畑作に関係するものではないかと考えられる。南側で検出している畦状遺構とは異なる構造であるため、異なる作物を対象としたものと推定される。なお、名称については、既往の調査で「小溝状遺構」という名称が使用され、定着しているため、混乱を避けるために「小溝列」とした。名称は似ているが、形状は全く異なる点に注意が必要である。

調査時および注記の略号は「S 2」である。

d 畦状遺構

今回の調査では桜島 3 テフラの直下において、畦状遺構を 3 基検出しているが、後世の耕作などにより失われている部分も多い。ただし、遺跡北部では桜島 3 テフラ層が南北に帯状に残存している状況（図 35、写真図版 9-1）を確認しており、この部分では遺存状況が良好である。この桜島 3 テフラ堆積部分については、当初、溝状遺構の可能性を考えたが、その後、後世の耕作の影響を受けていない範囲であり、桜島 3 テフラが残っていない範囲は耕作により消失していることがわかった。溝状遺構 1 では上層の堆積土（桜島 3 テフラが混じった灰色がかった土）の混入や、基本土層 3 層の上層への顕著な移動がみられない。また、畦状遺構 1 では道路の溝が平行していることから、これらの畦状遺構は復旧痕ではなく桜島 3 テフラ降下以前の畠の状況を反映していると考えられる。

なお、畦状遺構 2 からやや離れた場所であるが、桜島 3 テフラ直下層内からは、少量であるがイネやムギ類の珪酸体が検出されており、付近でこれらの植物の栽培が想定されている。これらの植物が畦状遺構で作られていた可能性がある。

遺構の時期は、いずれも桜島 3 テフラの直下であるため、15 世紀中頃である。

畦状遺構 1（図 39～42）

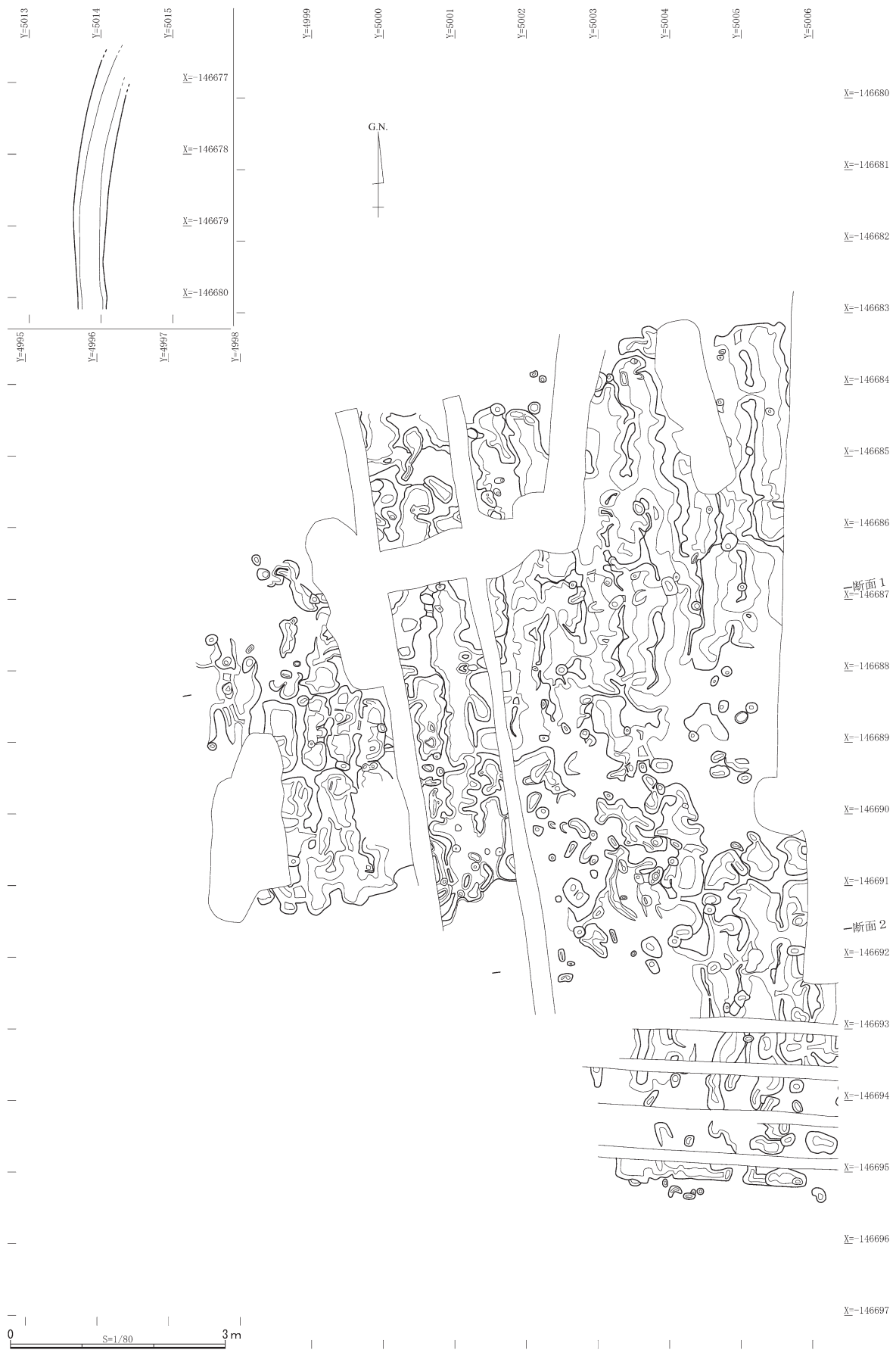


图 39 畦状遺構 1 平面図 1

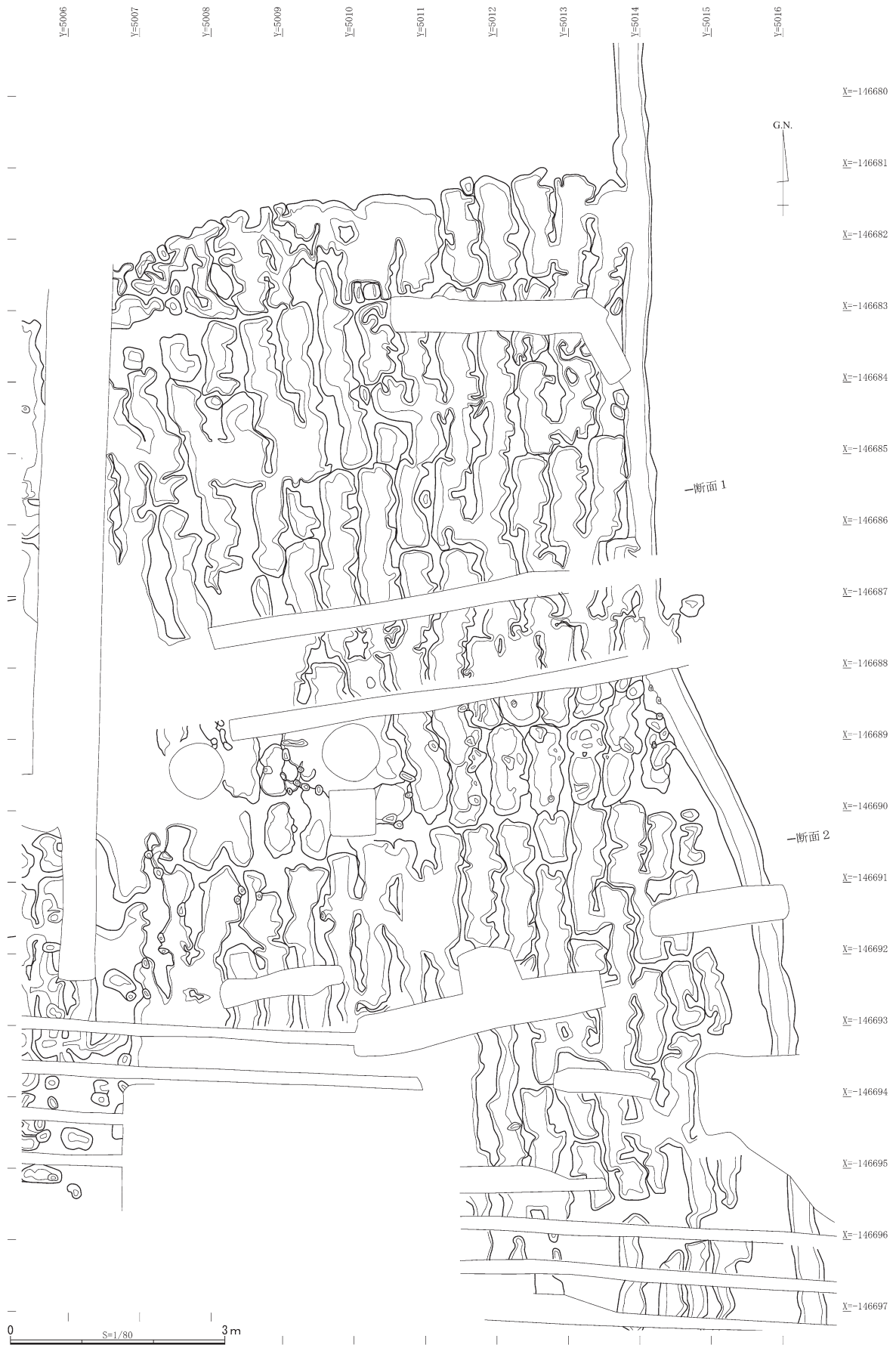


图 40 畦状遺構 1 平面图 2

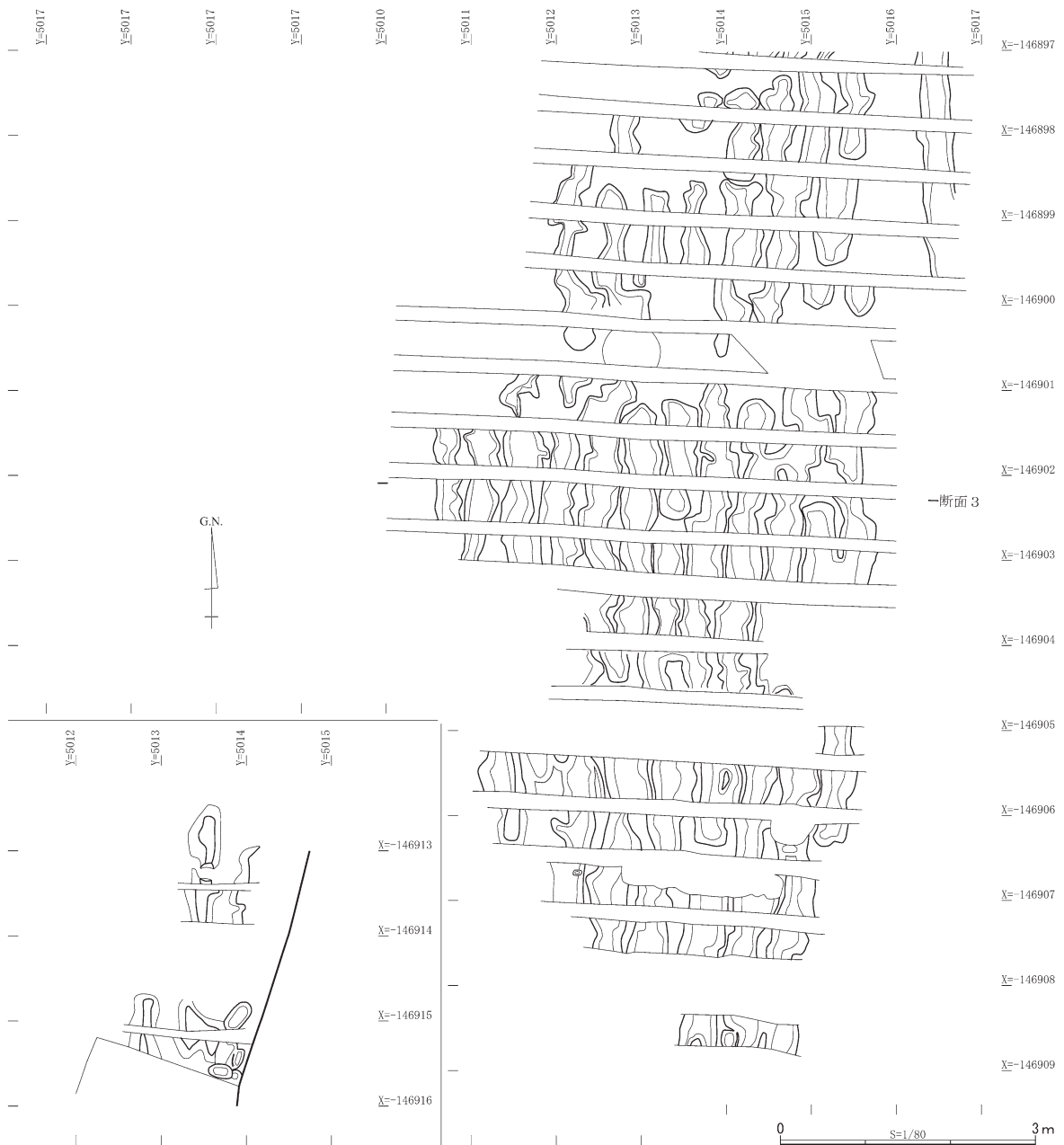


図 41 畦状遺構 1 平面図 3

遺跡北部調査区の東側を中心に検出している。上記のように、桜島 3 テフラが残存している範囲における遺構の残存状態は比較的良好である。畦状遺構を形成する基本土層 3 層の黒色土表面付近では、桜島 3 テフラと混じった部分が存在している。そのため、桜島 3 テフラを丁寧に取り除いたところ、畦に該当する盛り上がりは非常に幅が狭くなってしまった。実際には、図 36 の断面にみるように、上部に若干桜島 3 テフラが入る土層までが、畦の範囲であったと考えられる。

畦状遺構 1 の特徴としては、畠の東端を通る道と思われる凹みを検出している点と、畠の端とを思われるラインを検出している点にある。畠の東端を通る道は、南北に延びており、遺存状態のよい北側は調査区外まで延びている状況を確認することができた。この道を境に東側はほぼ平坦な状況で、畦状遺構はみられない。巻頭図版 7-1 にみるように、この道状の凹みは桜島 3 テフラで完全に埋没しており、畦状遺構が道を境にして西側に作られている状況からも、この畦状遺構が復

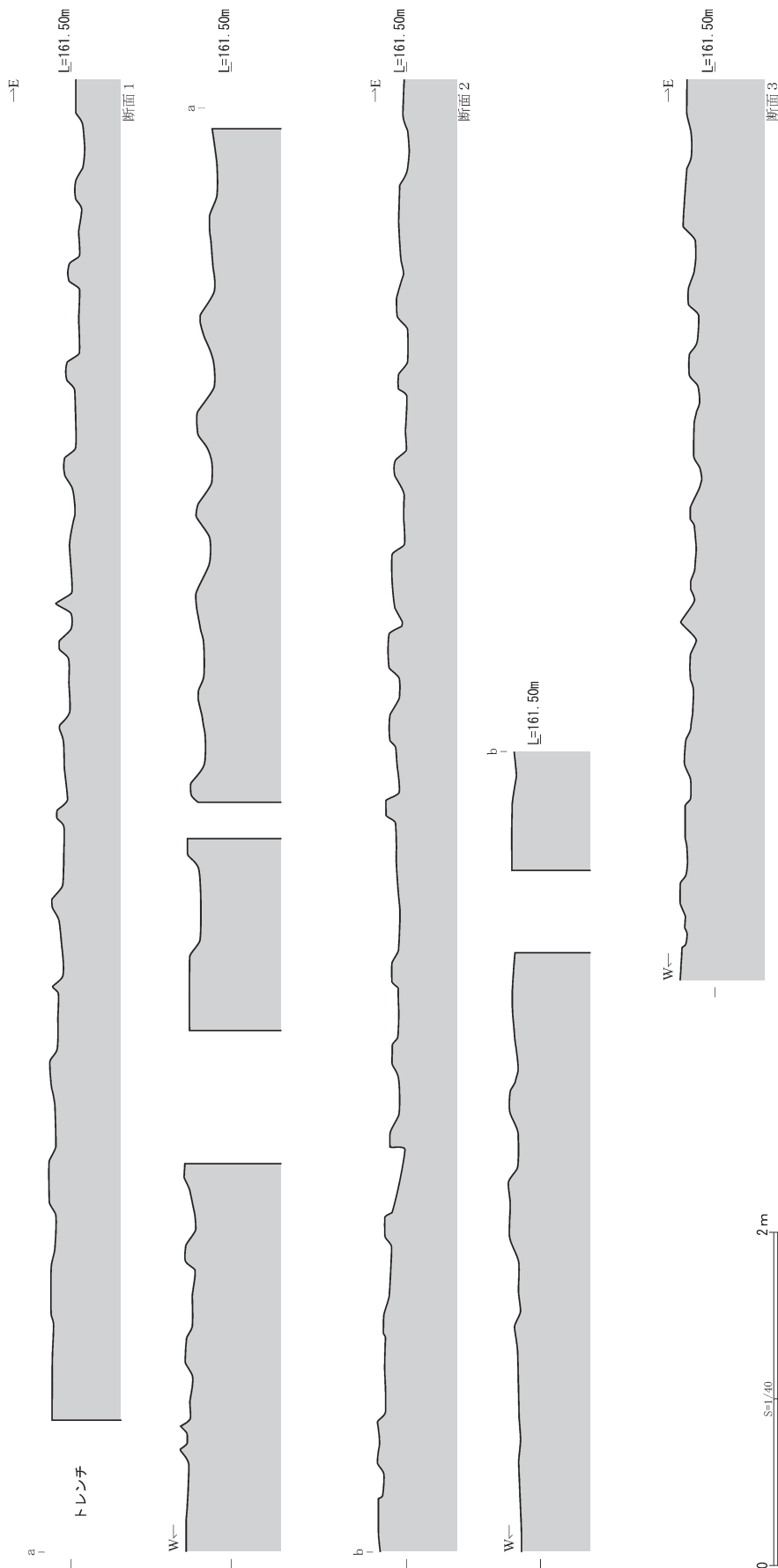


図 42 畦状遺構 1 断面図

旧痕ではないことを示している。このように考えると、畦状遺構の表面にある桜島3テフラ混じりの黒色土の形成要因が気になるところである。小溝列の箇所ですべてのように、桜島3テフラに黒色土が挟まれている部分があり、そのような状況を考えると、基本土層2層を形成するような大規模な噴火の前に、少量の軽石を供給するような噴火があったのではないかと推測される。その小規模噴火後の人々の活動によって、遺構の中に桜島3テフラ類似の軽石が混じることになったのではないだろうか。

一方、畠の端については北側で確認することができた。特に道に近い北東部では畠が形成されていない場所を明瞭に確認することができる。南側および西側については、そのような端部を確認することは難しいため、さらに広がっていた可能性もある。したがって、畠の範囲は南北 30 m 以上、東西 16 m 以上の範囲になる。畦状遺構をさらに細かくみる

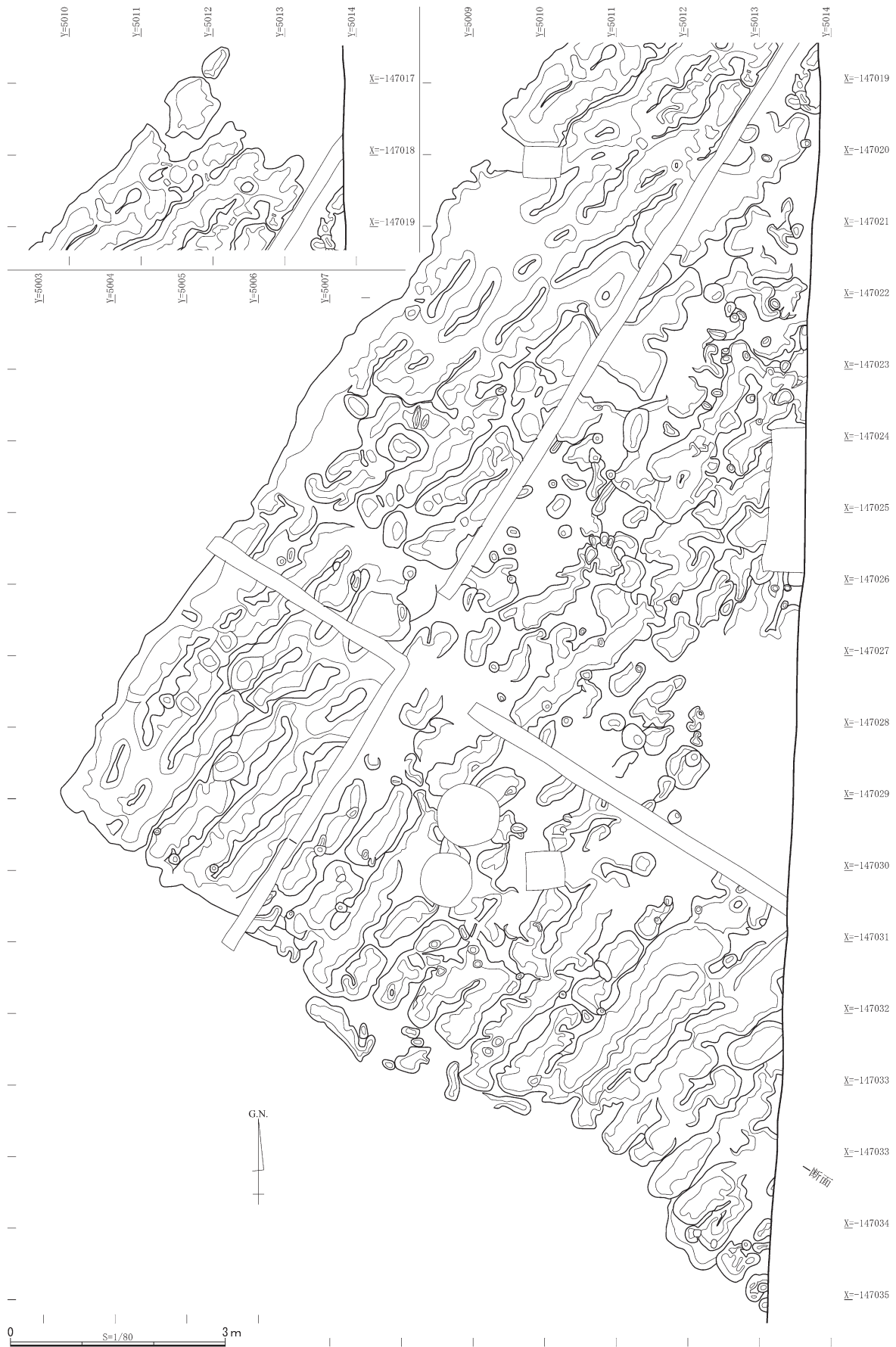


图 43 畦状遺構 2 平面図

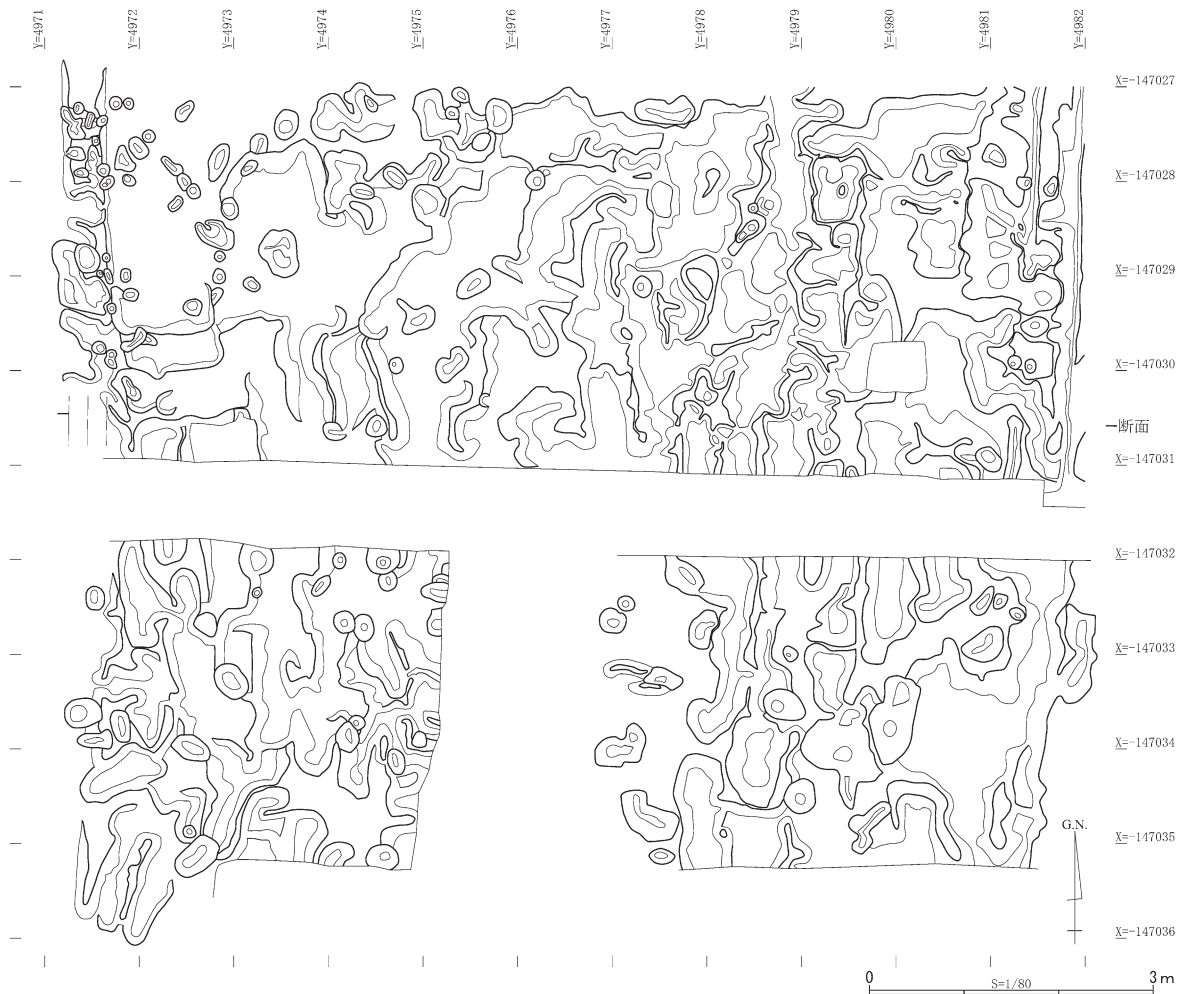


図 44 畦状遺構 3 平面図

と、構造として、畦に該当する部分は南北の長さ 1.3～1.5 m 程度を単位として位置を若干東西にずらして並んでいる状況を確認できる。ただし、南側では後世の耕作に伴うトレンチャーの影響もあって不明瞭であり、同じ列が続いているようにも見える。また、西側では畦状の盛り上がりの列が乱れており、不明瞭になっている。

調査時および注記の略号は「S3」である。

畦状遺構 2 (図 43・45)

遺跡南部の北東部付近、18 D～20 C グリッドで検出している畦状遺構である。検出した範囲は一部であり、さらに東側の調査区外へと広がっていると考えられる。遺跡北部と比べると基本土層 2 層である桜島 3 テフラの遺存状況は不良で、調査区壁面寄りの部分では、後世の耕作による影響が大きい。畦状遺構 1 と同様に、およそ長さ 1.3 m 単位の畦状の盛り上がり単位としてみとめることができる。

また、畦状遺構の残存状況から、畝の南西端付近にあたると思われる。西側と南側には畦状遺構の凹凸は広がっていない。さらに、西端部は道路状遺構の上端から 1.5 m 前後の距離があり、道路状遺構に平行している。畦状遺構と道路状遺構の間は比較的平坦となっている。このような道路状遺構との位置関係から、畦状遺構 2 も復旧痕ではなく、桜島 3 テフラ降下以前の畝の痕跡であると考えられる。一方、南端部については、西辺とはほぼ直交する位置であるが、分岐して西側に延びた道路状遺構のラインとは若干ずれている。この南端部の南側には、この畝を区画するような

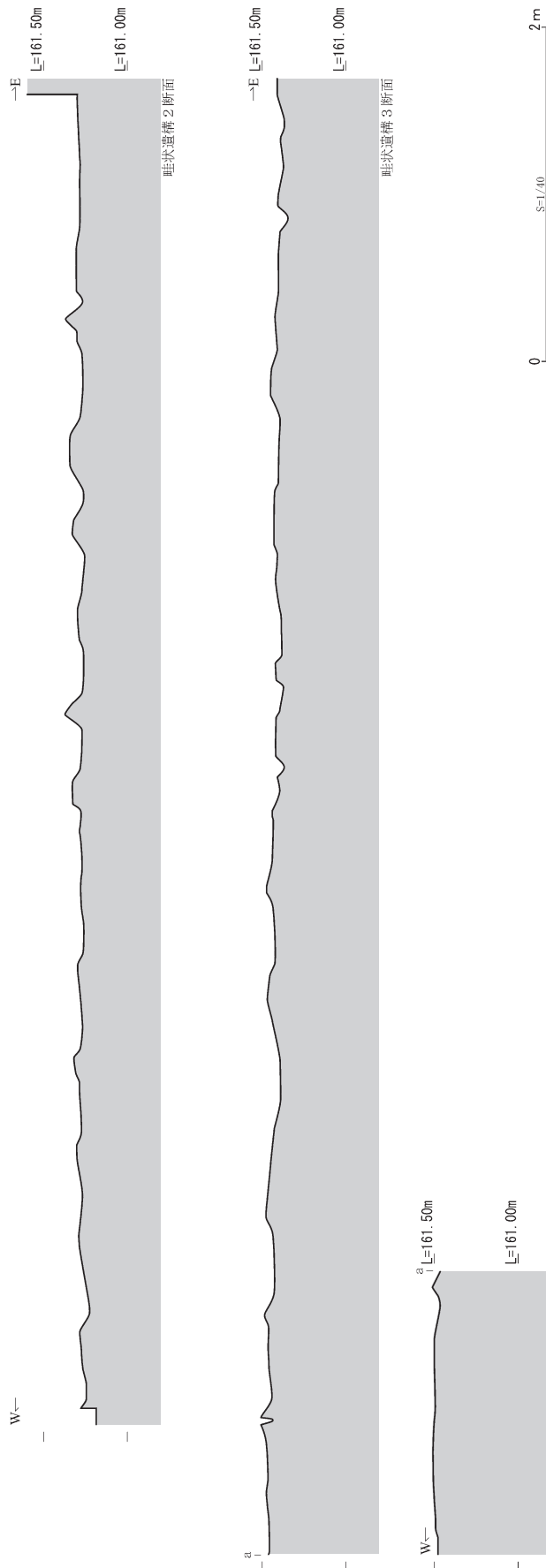


図 45 畦状遺構 2・3 断面図

溝などの遺構は検出していない。

なお、さらに南側にもわずかに桜島 3 テフラが堆積した部分があり、別の畦状遺構が存在した可能性もあるが、ほとんど削平されており明らかではない。

畦状遺構を構成する黒色土の上部において、青磁片（図 85-497）や滑石製石鍋の再加工品（図 100-635）が出土している。

調査時および注記の略号は「S 29」である。

畦状遺構 3（図 44・45）

畦状遺構 2 から道路状遺構を挟んで西側の、19～20 A グリッドを中心として検出した畦状遺構である。後世の耕作の影響により、桜島 3 テフラの残存状況が非常に悪い。検出時には、桜島 3 テフラのわずかな残存状況から、畦状遺構が残存している可能性を考えたが、図のようにほとんど畦列を確認できなかった。ただし、北端部については、図の北側にさらに広がっている様子はみられないため、およその範囲を示していると考えられる。この部分については、溝状遺構 2 と同様に、道路状遺構の上端から約 1.5 m の位置にあり、道路状遺構に平行している。このほか、溝状遺構 1 に挟まれた位置にあるため、その関係が注目されるが、溝状遺構に近い南側の形状は明らかにできなかった。

調査時および注記の略号は「S 30」である。

e 道路状遺構（図 46～55）

遺跡南部の北側、18～24 グリッド列にかけて検出した遺構で、南部調査区の中程の 23 B グリッドで東方向へと向きを変えている。また、北側の 19 B～C グリッド付近で分岐して西側へと伸びている。南北に直線的に延びた部分の長さはおよそ 60 m である。この道路状遺構は、直線的に延びた部分と、西側へ分岐した部分は埋土の上部に桜島 3 テフラが厚く堆積している。しかし、23 B グリッド付近から東側へと方向を変えてい

る部分では、直交する溝状遺構4に堆積したものを除いては、桜島3テフラの堆積はほとんど確認できていない。ただし、24 Cグリッド付近では、わずかに桜島3テフラの堆積を確認しているが、東側に広がっているかは不明である。そのため、調査範囲部分に限られるが、桜島3テフラ降下前にはこの東へ延びる道路部分はほとんど埋没していたと考えられる。

道路状遺構の桜島3テフラ下位の埋土は、大きく上下二層に分けることができる。上層は基本土層3層に類似した黒色シルト層で、霧島御池軽石をほとんど含まない、あるいは含んでもわずかである。また、層のしまりもそれほど強くはない。一方、下層はしまりがあるほか、霧島御池軽石を含み、基本土層5 a層に類似している。そのため、遺跡南部の前半期の調査では、道路状遺構の最初の掘方は検出できていない。前半期の調査でもトレンチなどで土層の確認を行ったが、桜島3テフラの下層では基本土層5 aとの区別ができなかったため、テフラ降下前に掘削されたものと判断した。ただし、土層断面において、桜島3テフラ下面よりも下位のレベルで、硬化面でみられるような鉄分の沈着によると思われる赤化したライン（図53-断面4・6・7の点線）を確認している。調査時は分層が困難であったため、道路底面よりも下層に何らかの理由で鉄分が沈着したものと解釈した。しかし、調査の全体を通してみると、この部分に掘方底面あるいは上層埋土の底面が位置している可能性が高い。ただし、この北端部付近では基本土層5 b層においても掘り込みは確認できなかったため、遺構底面までの深さ自体が浅かったものと考えられる。

道路状遺構の主な使用面を各掘削段階と仮定すると、使用面は掘方底面と、上層埋土底面の2つが存在する。ただし、桜島3テフラ層上面にも硬化面が形成されていることや、桜島3テフラ層下面の状態などから、掘削段階にかかわらず恒常的に使用されていたものと考えられる。このような状況から、以下では、削平により不明瞭な桜島3テフラ上面を除き、桜島3テフラ下面、上層埋土下面、掘方底面の各段階についてその様相をみってみる。上層埋土下面の掘削面は、遺構全体を通しては検出することはできていないが、図55にみるように、土層観察ベルトとして残しておいた極狭い範囲については、上層埋土下面の検出に注意しながら掘り下げを行った。なお、このような上層埋土と下層埋土における霧島御池軽石の含み方の違いが大きいことから、両者の時間的な間隔が大きいと考えられる。

このほか、道路状遺構の土層断面箇所からサンプルを採取して、当時の環境を復元する目的で、植物珪酸体分析と花粉分析をおこなった。その結果、日当たりの良い草原的な環境で、周辺に照葉樹林を初めとする樹木が存在していた環境が想定されている。その中で、桜島3テフラ直下では、数量は少ないながらもイネやイネの籾殻に由来すると思われる珪酸体が検出されている。分析の所見では、稲藁にともなう珪酸体と推定されており、様々な利用方法が考えられている。道路という性格上、低地の水田から稲等を運んでいた可能性も考えられる。あるいは、基本土層3層からもイネ、ムギ類の珪酸体も検出されているため、周辺で栽培されていた作物を示している可能性もある。

調査時および注記の略号は「S 27」であるが、遺構の範囲が広いため、出土遺物等の細分には遺構略号とともにグリッド名を付けて区別を行っている。

桜島3テフラ層下面

桜島3テフラ降下直前に使用されていたと考えられる面で、「上層埋土上面」ということもできるが、上層埋土が桜島3テフラ硬化前に掘削されている可能性があるため、「桜島3テフラ下面」としておく。規模は、南北の長さ約60 m、幅は上端で1.4～2.4 m、底面で0.5～1.7 m、検出面からの深さは0.5～0.8 mである。19 B～Cグリッドで西側へと分岐しているが、西へ延びる

道路状遺構は上端で幅 1.3～1.5 m、底面で 0.6～0.7 m とやや狭くなっている。また、19 B～C グリッド南部付近の分岐点は一端狭くなったのち、再び広がってさらに南側へと延びている。この狭くなっている箇所は何らかの施設が存在する可能性が考えられたため、精査を行いながら掘り下げたが、ピットなどの遺構は確認できなかった。そのため、この狭くなっている部分の意味は明らかでない。この分岐点よりも若干北寄り、19 C グリッド西側中央付近には、道から上がるスロープ状の細い道が分かれている。また、19 A グリッド西側にも、西へ延びる道を横断する土橋状の高まり（写真図版 12- 2）が形成されている。これらのスロープや土橋状の高まりの存在から、道路状遺構で囲まれた調査区の北西部分（18・19 A～C 区）に、建物跡などの何らかの遺構が存在する可能性を考えて精査を行ったが、屋敷跡やピットなどの明確な遺構は検出できなかった。

19 B～C グリッドの分岐点より北側では、西側から来た道と、南側から来た道の凹みが、そのまま平行して続いている。途中で一端途切れるものの、やや離れた位置から再び北側へ続いており、18～19 C 区で「Y」字状に大きく 2 本の道に分かれている。この内、「Y」字状の道の東側部分はそのまま北に延びている。それに対して、西側の道の底部にはさらに細かい凹みを確認することができる。この「Y」字状に分岐する西側の道は、調査区端付近ではさらに 3 本程度に分岐するとともに、深さが次第に浅くなり、調査区壁面に近い部分で消失している。表面には薄いものの桜島 3 テフラが堆積しているため、スロープ状に浅くなっていったと考えられる。

一方、19 B～C グリッドの分岐点より南側では、ほぼ同じ幅で変わらず南へ延びて、23 B グリッド付近で次第に浅くなって消失している。底面には浅い凹みが形成されており、北寄りでは 2 本、中央から南では 1 本の浅い凹みが確認できる。南端部ではこの凹んだ部分を中央にして 3 本の細い

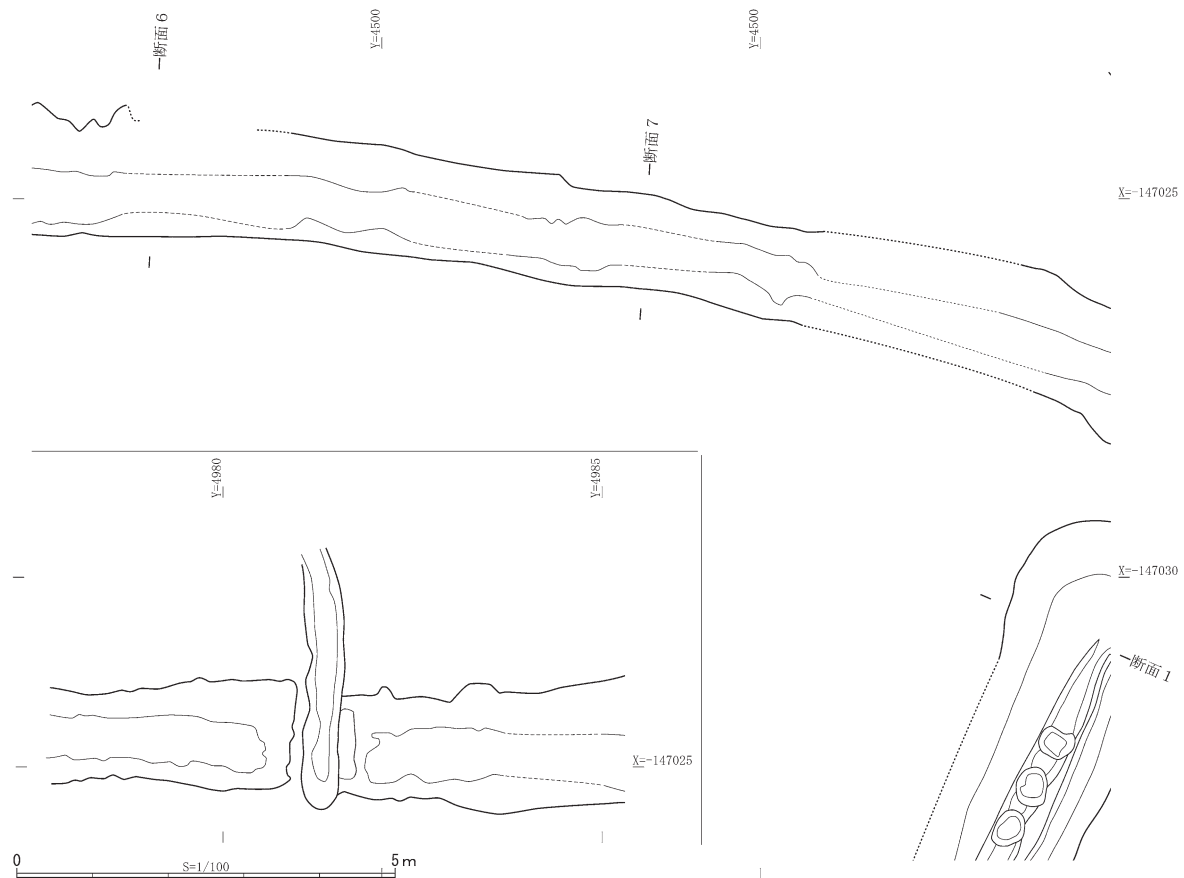


図 46 道路状遺構平面図 1（桜島 3 テフラ除去段階 1）



図47 道路状遺構平面図2 (桜島3テフラ除去段階2)

道に分岐している。
 また、部分的に不明瞭ながら 20 B 区では「波板状凹凸面」状の凹みがみられるが、硬化面は形成していない。下層の「波板状凹凸面」が埋没する途中の状況を示しているのかもしれない。

この面の時期は、桜島 3 テフラにより覆われているため、1471 年という定点を与えることができる。ただし、土層断面の観察から、上層埋土の厚さにバラツキがみられる。すなわち、23 B グリッドから東へのびる部分はこの段階では完全に埋没している程度の厚さに対して、南北に直線的に延びる部分の上層埋土は薄い。そのため、桜島 3 テフラ降下前にも掘り直されている可能性が高いが、上層埋土内における掘削面の分層はできなかった。

上層埋土下面

基本土層 3 層に類似した上層埋土の底面にあたる。下層埋土の上部はこの時点

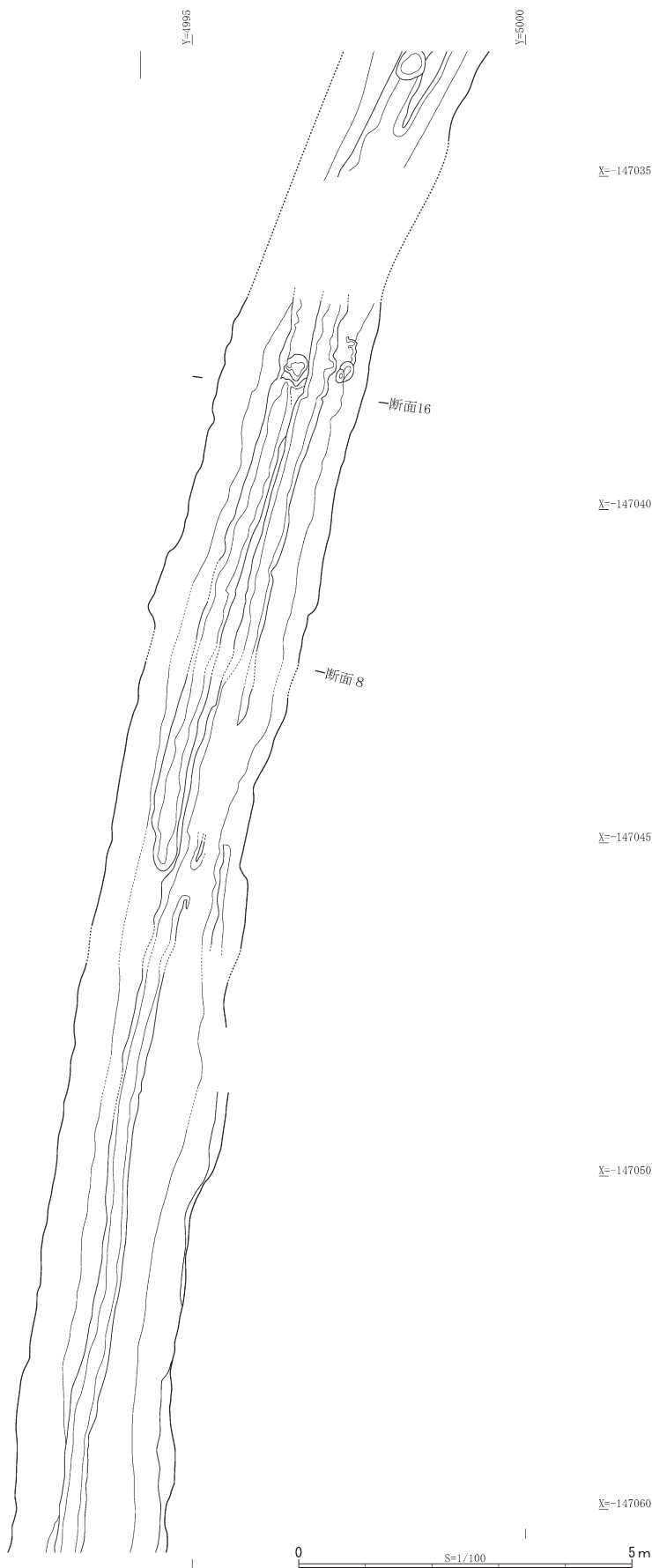


図 48 道路状遺構平面図 3 (桜島 3 テフラ除去段階 3)

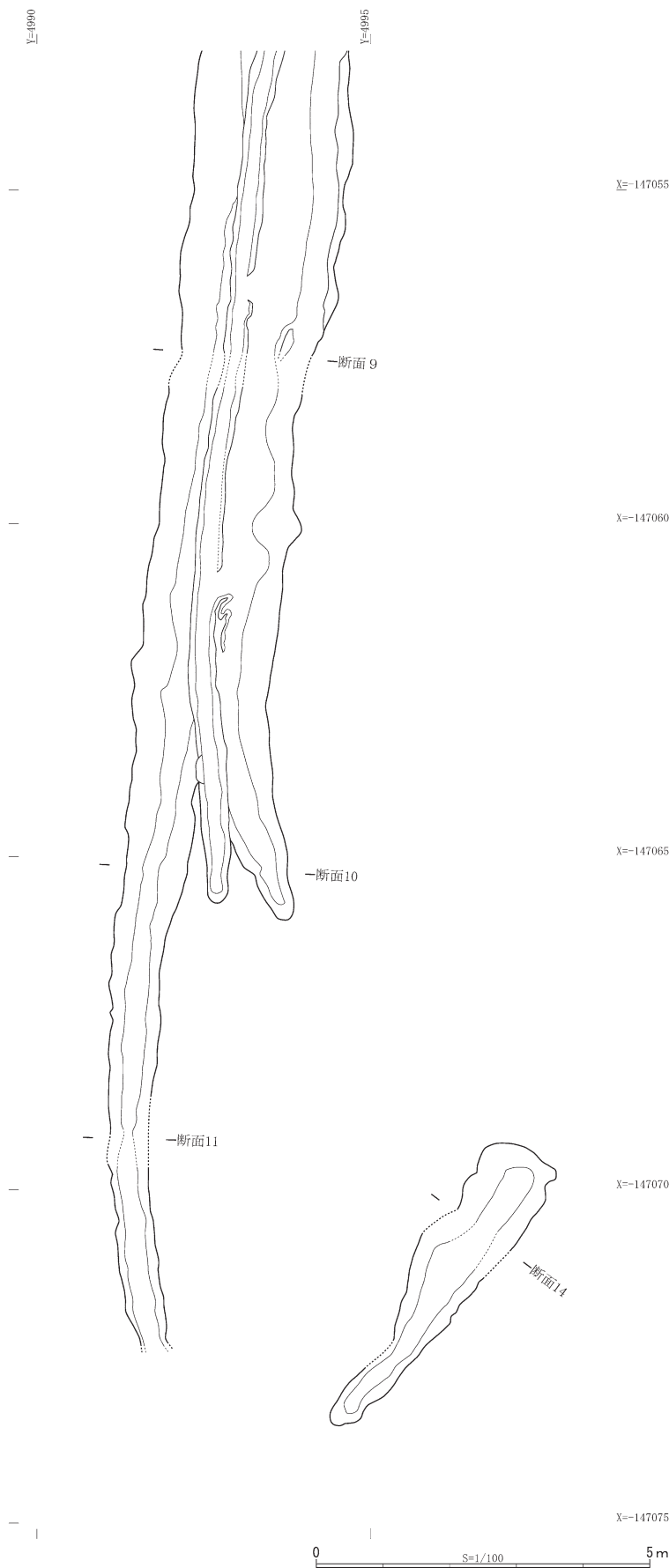


図 49 道路状遺構平面図 4 (桜島 3 テフラ除去段階 4)

では掘削されて消失していると考えられることから、「下層埋土上面」ではなく「上層埋土下面」と表現している。上層埋土と下層埋土は霧島御池軽石と思われる橙色軽石の含み方で区分ができるものの、平面的な掘削では両層ともに黒色シルト層が基本となるため、境界面の区別が難しい。しかし、部分的であるものの上層埋土下面に鉄分が沈着して赤化した部分があり、そこはやや硬化した面を形成しているため区別が可能である。ただし、硬化の程度は下層に比べると弱い。なお、20 B グリッド半ばから北側では、既述のように黒色土中の赤化面としてしか確認できていないため、形状は不明である。

写真図版 22- 3 にみるように、硬化面はある程度の幅をもった筋状に延びており、間に硬化していない部分が存在している。また、写真図版や図 53 断面 9 にみるように、硬化面は一段高い平坦面とほぼ同じレベルとなる箇所がみられるため、この範囲が上層埋土下面の掘削面になると考えられる。ただし、各土層観察用のベルトで観察する限り形状は異なっており、また、全体に硬化面を検出しているわけでない。

この上層埋土下面の掘削面は、掘方と同様に 23 B グリッドから東側へのびる部分でも確認することができ、23 B グリッドから南側へのびる道よりも幅が広い。そのため、東へ延びる道の方が主要な道であったと考えられる。また、

東へ延びる部分は、下層埋土自体のしまりが硬化面状に強く、往来が多かった可能性を示している。

この掘削面の時期は、赤化した弱い硬化面上付近で白磁Ⅳ類が出土していることや、南東部では桜島3テフラ降下前に埋没しきっていることから、12～13世紀頃の時期が考えられる。

掘方底面

本道路状遺構が最初に掘削された段階である。上層埋土下面と同様に、20 Bグリッドの半ばから北では検出できていない。この段階では、底面の硬化が強く、部分的に「波板状凹凸面」が形成されている。上層埋土下面と同様に、南東部の硬化が著しい。この掘方底面では、道路の東側が一段低く掘削されている。図上では、西側に一段高い面ができていますが、これは上層埋土下面の掘削面に対応しているため、この段階ではこの平坦面は存在していない可能性が高い。このように考えると、最初の段階では、23 Bグリッドから南へ延びる道に相当する凹みはなかった可能性がある。図 51 にみるように、底面の「波板状凹凸面」の凹みの中には、両方の道をまたぐような状態のものがみられるため、最初の掘削と上層埋土下面の掘削時期の間に道が変化していったのかもしれない。このように考えると、土層断面では確認できないが、上層埋土下面の掘削以前にも何度かの掘削が行われていた可能性がある。

既述のように、掘方底面には「波板状凹凸面」が形成されている部分がみられる。この「波板状凹凸面」は主に 21 Bグリッドと 23 Bグリッドから東へと延びる部分にみられ、特に東へ延びる部分は連続している様子を確認できる。また、両者はおおよそ横方向に長い楕円形状を呈している点で類似しているが、詳細な形状では差がみられる。21 B区付近の凹みは、切り合ったような形状を呈しており、形状が一定していない。一方の 23 Bグリッド以東では、中央が一段低く、両端が高くなっている形状のものが多い。底面の硬化も、南東部の 23 Bグリッドの凹みの方が強い。「波板状凹凸面」の埋土は、21 Bグリッドでは硬化の程度は弱いが、23 Bグリッド以東の「波板状凹凸面」では、充填している下層埋土全体が硬化している。そのため、調査時において、南東部の「波板状凹凸面」掘削の際には、下層埋土の掘削に力はあるものの、「波板状凹凸面」の硬化面で埋土が剥がれるように取れるため容易に検出することができた。さらに、21 Bグリッド以東では、「波板状凹凸面」の間隔が不規則な部分や、凹みが重なったような部分がみられるため、形成時期は一時期ではなく、長い期間にわたっていると考えられる。

はじめにみた埋土の差異だけでなく、以上のような状況を考えると、最初の掘削から上層埋土底面の掘削までには、かなりの時間的な差があると考えられる。なお、掘方底面付近で、極僅かながら黒色シルト層の埋土とは明らかに異なる砂状の堆積物を検出している。この砂状堆積物の観察の結果では、8世紀後半頃の桜島や霧島火山群の噴火に由来する可能性がある軽石を多く含んでいることが確認されている。掘削時期の年代について、他に判断する根拠に乏しいことから、8世紀後半以降に掘削された可能性を考えておきたい。

f 溝状遺構 (図 56～59)

遺跡南部調査区において7条の溝状遺構を検出しているが、遺跡北部では溝状遺構は検出していない。全体的にみると、道路状遺構の部分で途切れているものが多いが、東西方向へ延びるものが5条、南北方向へと延びるものが2条である。東西方向、南北方向へ延びる溝は、いずれもおおよそ平行関係にあり、南北方向と東西方向の溝では直交する位置関係にある。埋土は南端の溝状遺構7を除き、基本的に黒色土で共通している。溝状遺構7のみは、褐色土や黒色土がブロック状に混在しており、様相が異なる。土層の観察からは人為的に埋め戻されている可能性が考えられる。溝状

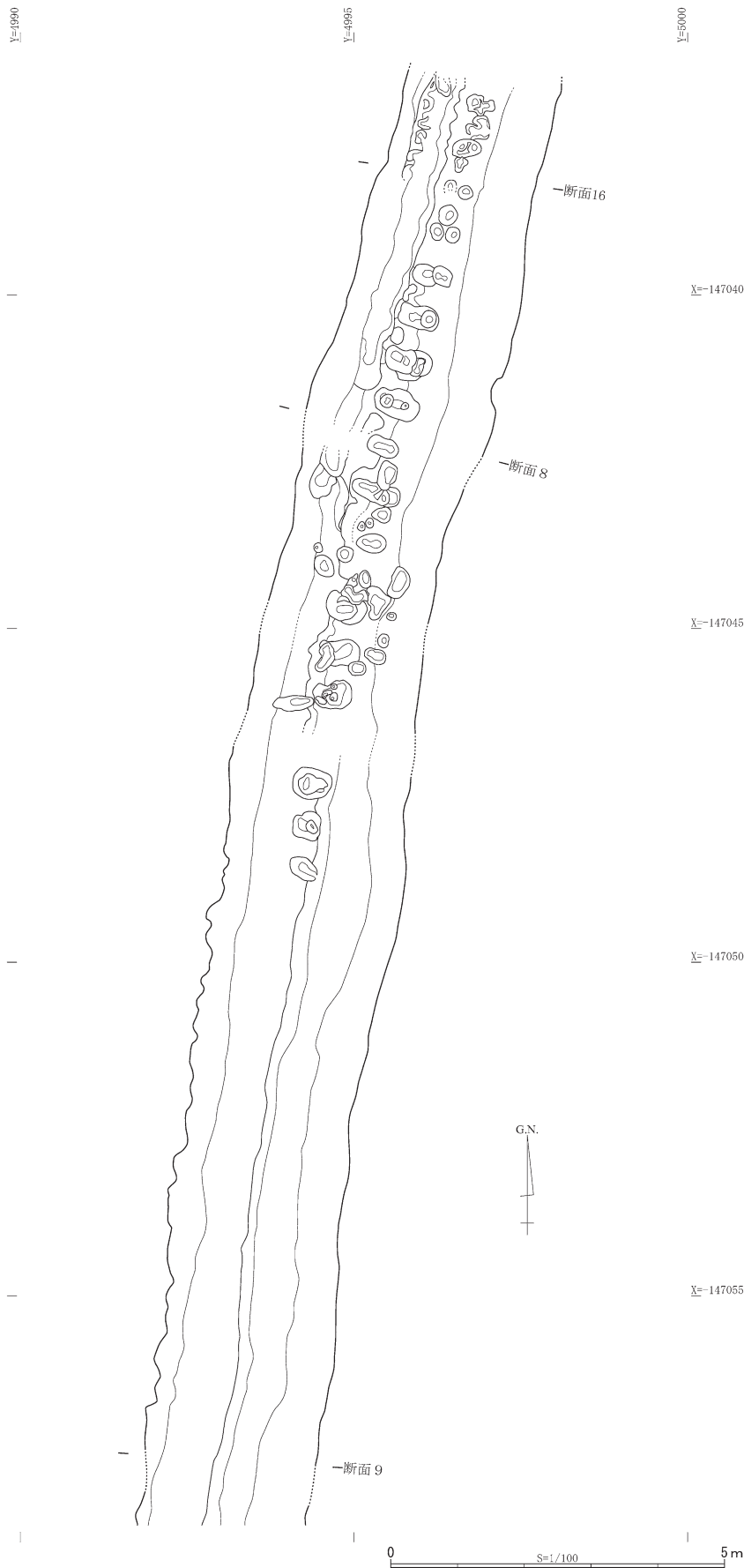


図50 道路状遺構平面図5 (完掘段階1)

遺構7は他の溝状遺構と比べて幅が広く、形状が若干異なることから、遺構の性格も異なる可能性がある。なお、道路状遺構2・4・5は途中で途切れているが、その位置はほぼ共通している。溝状遺構4・5の途切れている位置は道路状遺構が南へ延びている部分の延長にあたるため、この途切れた部分は道部分に該当する可能性が考えられる。この途切れ方と、各道路状遺構の位置、および道路状遺構の掘削時期の対応を考えると、これらの溝状遺構は同時期ではなく、時期差が存在することが考えられる。

なお、各遺構ともに長く、複数のグリッドにわたっているため、道路状遺物の出土位置の細分には、遺構略号の後にグリッド名をつけて区別を行っている。また、前半期の調査では、東西両端の溝が同一のものかの判断ができなかったため、結果的に同じ遺構でも複数の遺構略号がついてしまうこととなった。しかし、遺構略号の変更は後々混乱を招くことと、同一遺構と理解していれば、遺物の細分も可能であることから注記にはそのまま

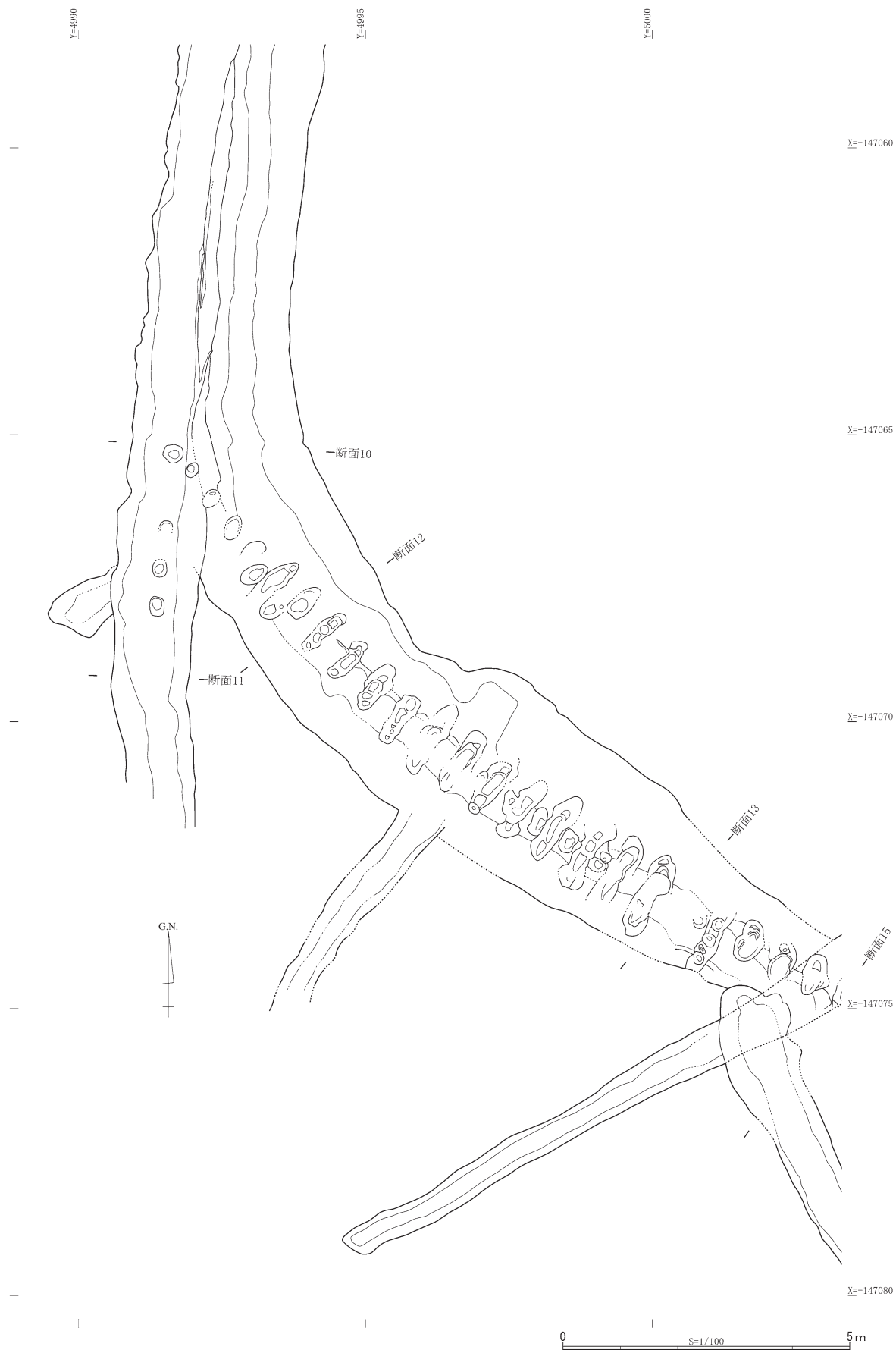


图 51 道路状遺構平面图 6 (完掘段階 2)

の略号を用いている。

以下の7条の溝のほか、溝状遺構7を切る、南北方向に延びる時期が不明な浅い溝状遺構（「S 42」）を1条検出している。この溝状遺構の埋土は、桜島3テフラが混じった砂質土であり、桜島3テフラ降下以降のものである。また、この埋土は基本土層1b層に近い土質であり、時期的にはかなり新しい遺構と考えられるため、本報告書内では図示していない。なお、附図には参考として本溝状遺構を加えている。

溝状遺構 1

主に21グリッド列に位置する、東西方向へと延びる溝状遺構で、道路状遺構の手前で途切れており、道路状遺構を意識していると考えられる。検出した範囲では、長さ約21.2m、幅0.9mである。上部は削平されていると考えられ、実際にはもっと深さがあったものと思われる。他の溝状遺構との関係は不明である。

調査および注記の略号は「S 41」である。

溝状遺構 2

24グリッド列の西部に位置する溝状遺構で東西方向へと延びている。検出範囲で長さ約24.6m、幅0.8～0.9mである。道路状遺構の手前で途切れており、道路状遺構を意識したものと考えられる。道路状遺構と切り合う形で本溝状遺構の続きの可能性がある凹みを検出しているが、東側へと延



図 52 道路状遺構平面図 7 (完掘段階 3)

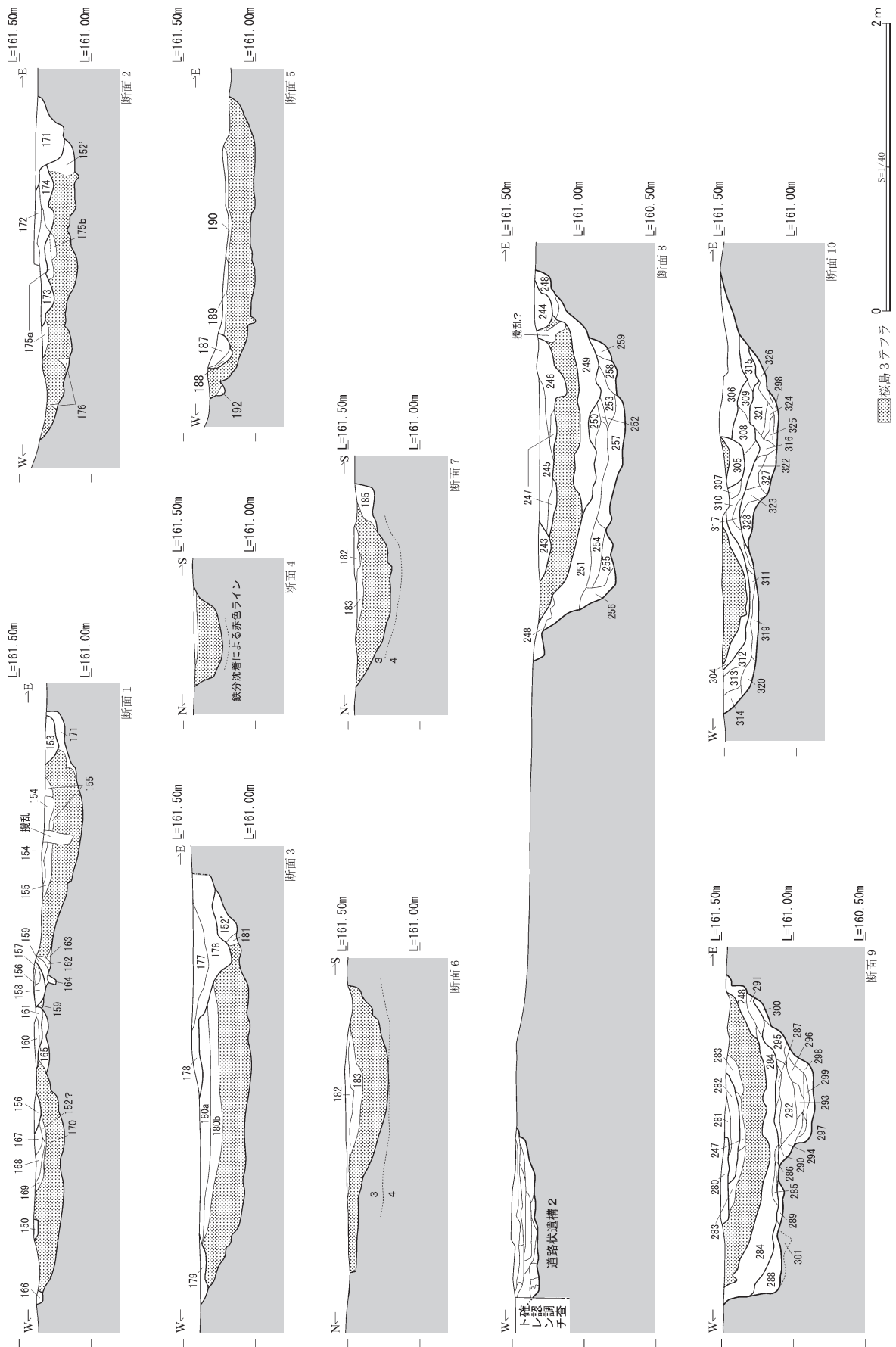


図 53 道路状遺構土層断面図 1

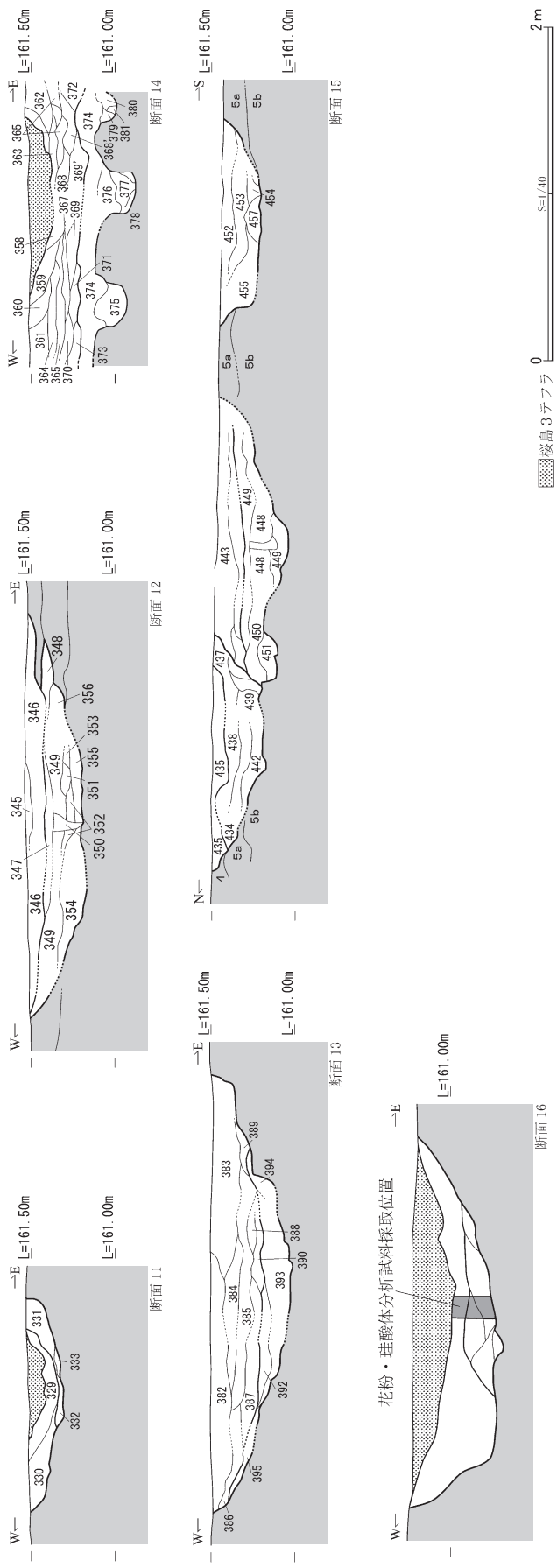


図54 道路状遺構土層断面図2

びておらず、一連のものかどうかはあきらかでない。また、切り合う両者の埋土の区別が困難であるため、道路状遺構との前後関係は不明である。また、調査区西端部で溝状遺構3と切り合っているが、埋土による先後関係は明確でないものの、道路状遺構位置関係などから、溝状遺構4・5よりも古い可能性が考えられる。

調査時略号および注記名は「S 37」である。

溝状遺構3

23～24 Zグリッドに位置する南北方向へと延びる溝状遺構であり、大部分は調査区外に位置していると思われる。検出範囲で長さ約8.8m、幅約1.0mである。溝状遺構2と切り合っており、明瞭な区分は難しいが、土層の観察から本遺構の方が古いと考えられる。

調査時および注記略号は「S 36」である。

溝状遺構4

25 Z～23 Cグリッドに位置する溝状遺構で、間で二箇所途切れている。途切れた中央部分は、東西の溝とは若干方向が異なり、方向としては溝状遺構5の延長のようにもみえる。しかし、溝状遺構5の埋土に桜島3テフラが含まれないこと、溝状遺構4西側部分の埋土に桜島3テフラがみられることから、溝状遺構4で一体として機能していたと考えられる。検出範囲で長さ約48.3mで、途切れている範囲は西側で約3.7、東側で約7.5mである。

西側部分の一部と、中央部分において桜島3テフラが埋土に含まれているため、近接する3本の溝状遺構の中では最も新しい時期に位置付けることができる。

調査時および注記略号は、「S 33」・「S40」である。

溝状遺構5

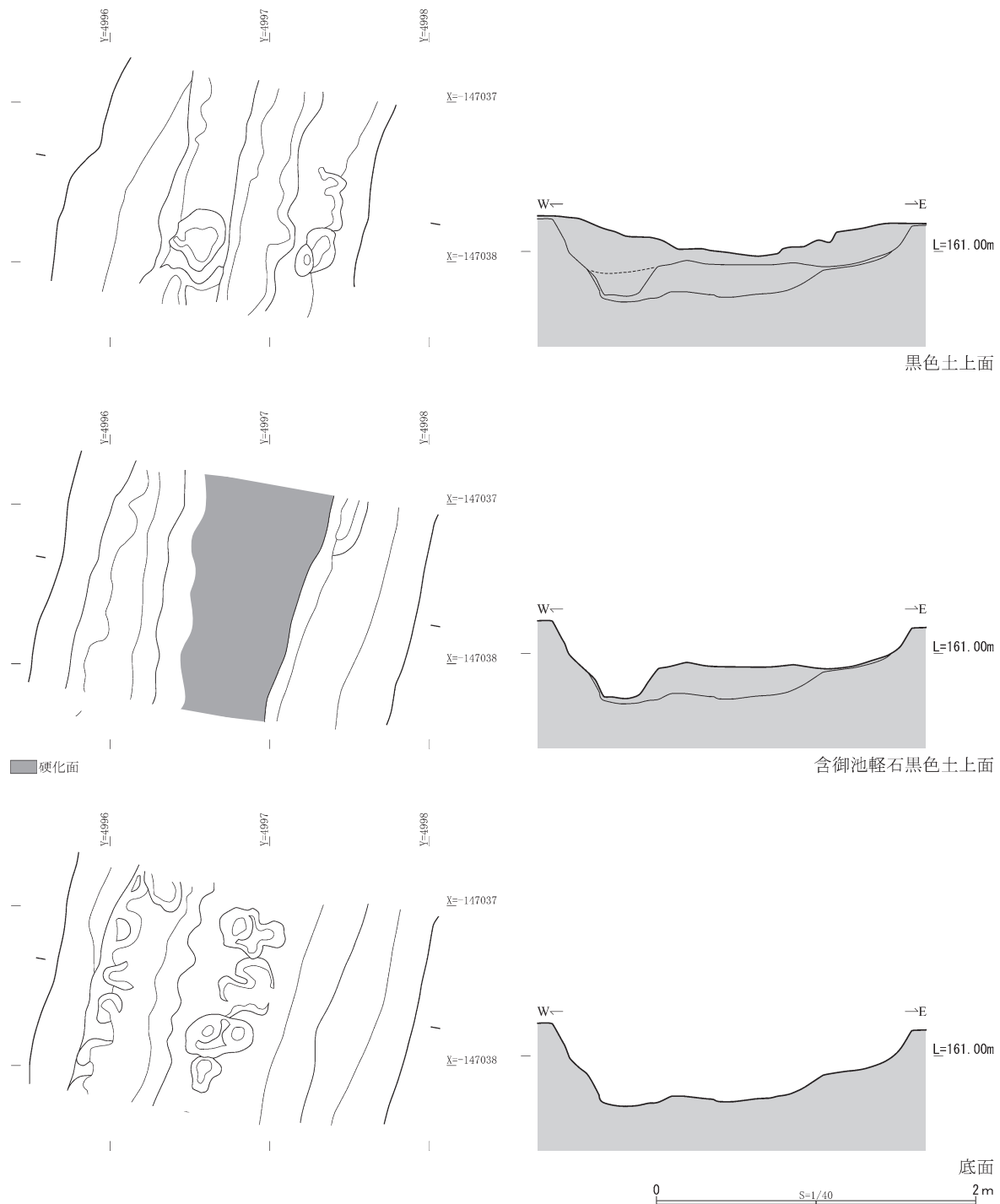


図 55 道路状遺構の変化

26 Z～24 Cグリッドに位置する溝状遺構で、途中一箇所途切れている。しかし、その範囲は他の溝状遺構に比べると狭く、道路状遺構をあまり意識していない様子をうかがうことができる。検出範囲で長さ約 48.0 m、幅 1.0 m である。

掘削状況などから、本溝状遺構は道路状遺構を切っており、また、土層では不明瞭であるが溝状遺構 6 も切っていると考えられる。溝状遺構 6 が道路状遺構の上層埋土を切っていることから、それよりも新しい時期のものと考えられる。道路状遺構との位置関係などを含めると、溝状遺構 2 → 溝状遺構 5 → 溝状遺構 4 の順で掘削されたのではないかと考えられる。



図 56 溝状遺構平面図 1

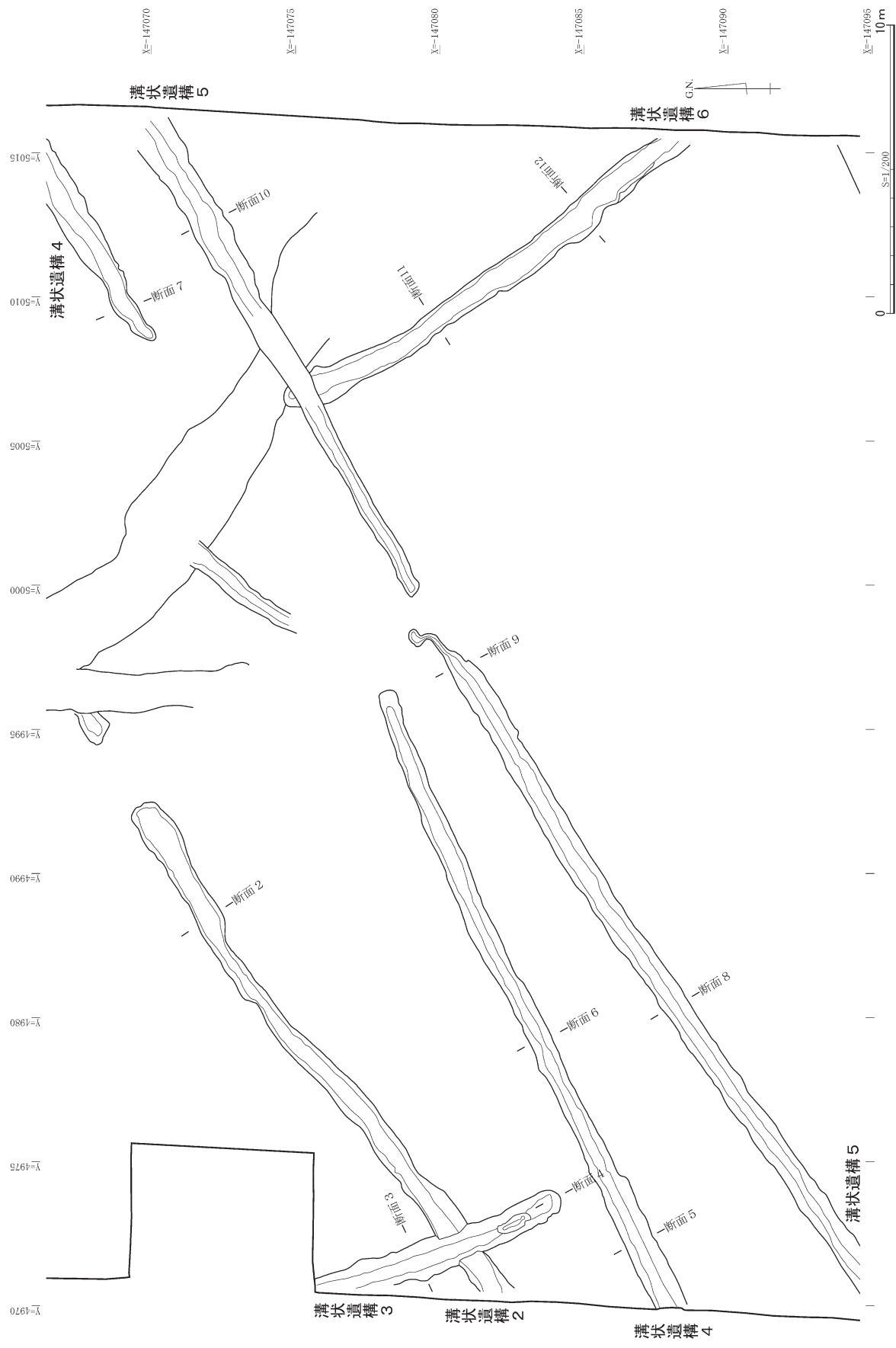


图 57 溝状遺構平面图 2

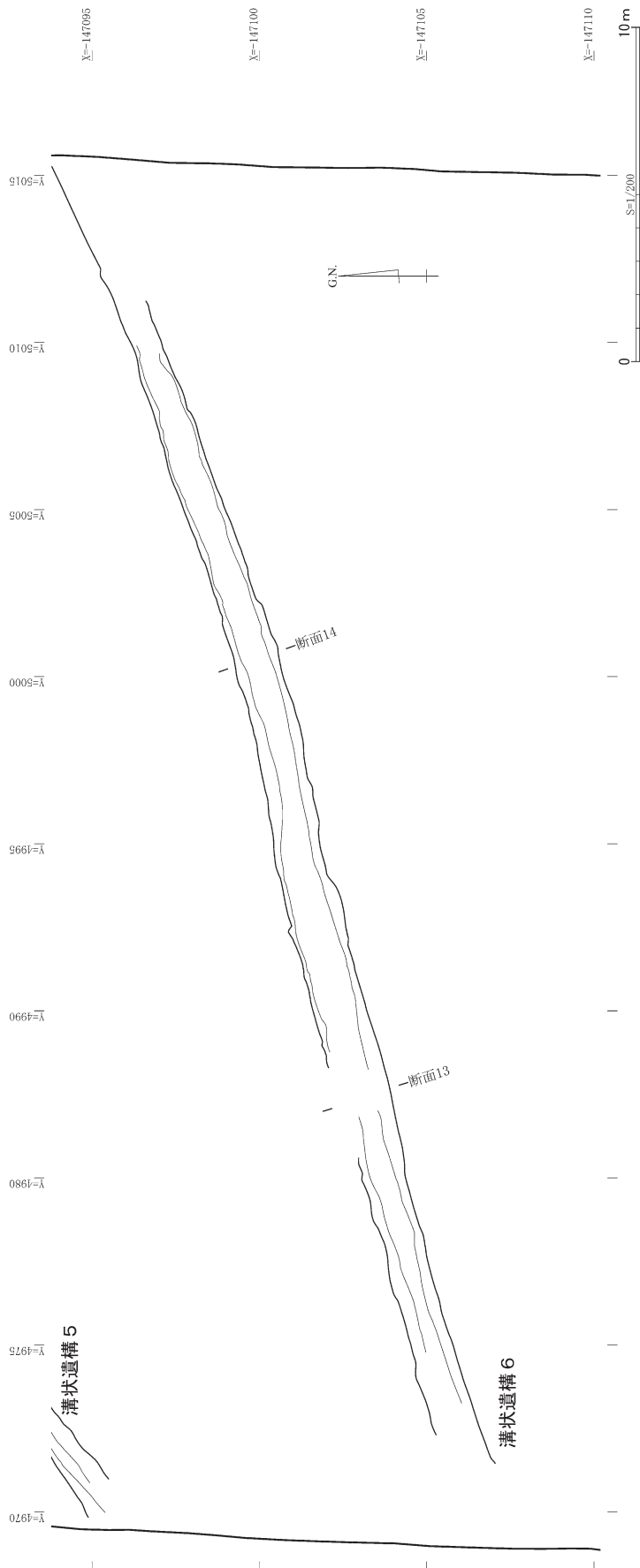


図 58 溝状遺構平面図 3

調査時および注記略号は「S 38」である。

溝状遺構 6

24～25 C グリッドに位置する溝状遺構で、南北方向へと延びており、さらに東側調査区外へと続いている。検出範囲で長さ約 16.8 m、幅 0.8～1.2 m である。

土層の観察から、道路状遺構の上層埋土を切っており、それよりも新しく位置付けることができる。溝状遺構 5 との前後関係は土層でははっきりしないが、掘削状況から溝状遺構 6 が古いと考えられる。

なお、25 C グリッドでは、溝底面で土坑 1 を検出している。位置的には、底面の範囲に収まっていることから、溝に伴う可能性もあるが、他の溝状遺構では同様な掘り込みはみられないことや機能的な面から、縄文時代の遺構と考えた方が良いでしょう。

調査時および注記略号は「S34」である。

溝状遺構 7

南部調査区の最も南側、27 Z～26 C グリッドに位置している溝状遺構である。検出範囲の長さ約 41.0 m、幅 1.3～1.6 m であるが、後世の耕作による攪乱が著しく、断片的に確認した部分が多く、図示した形状も不確実である。最初に述べたが、他の溝状遺構よりも幅が広く、埋土も黒色土だけではなく、褐色土のブロックが混じっている。自然堆積というよりも埋めもどしたような堆積という印象を受ける。底面も比較的平坦であることから、溝というよりも道路としての機能があったの

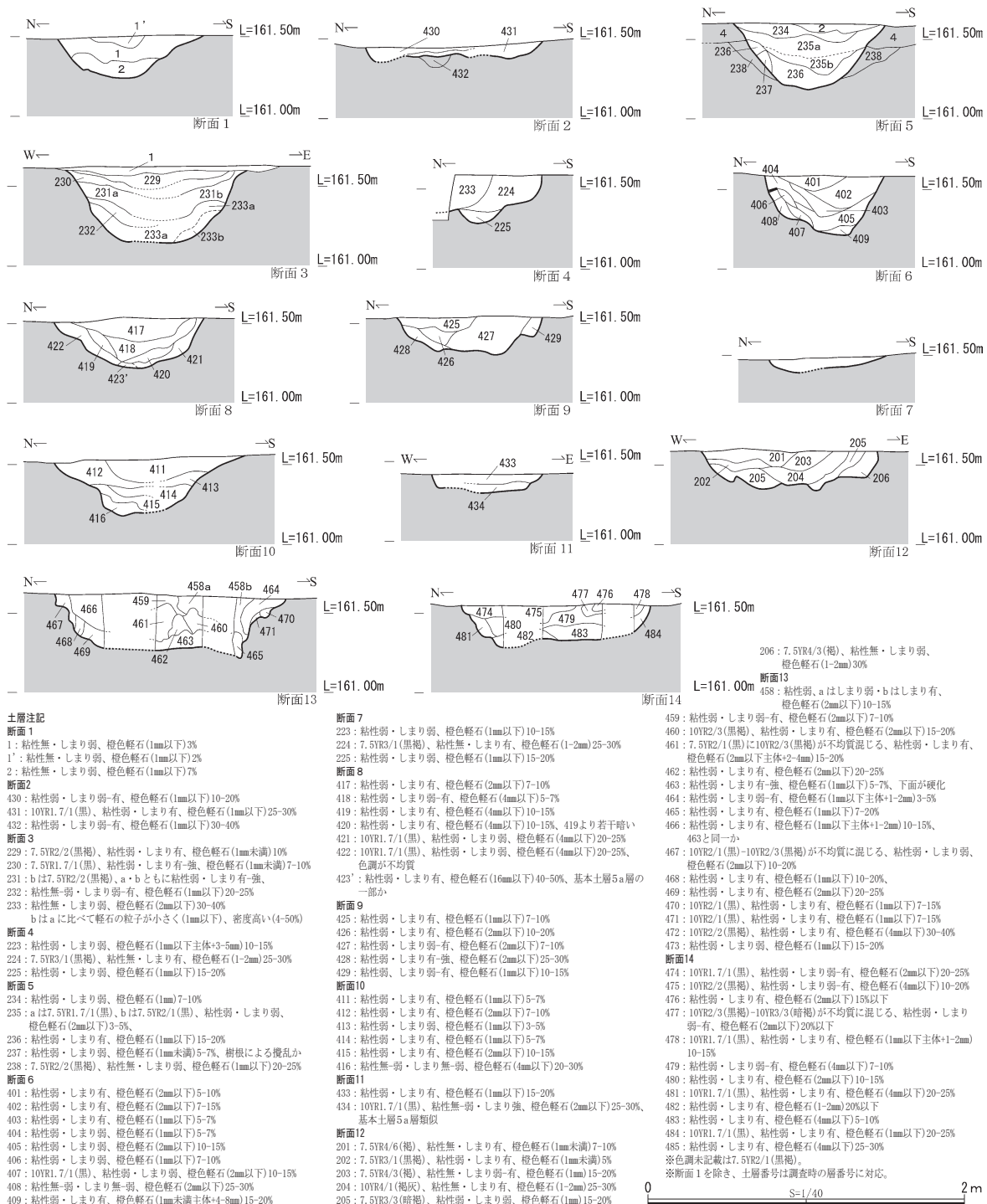


図59 溝状遺構土層断面図

かもしれない。

調査時および注記の略号は、「S 35・39」である。

(5) 近世以降

桜島3テフラ降下以降の遺構としては、掘立柱建物跡、道路状遺構、溝状遺構がある。

掘立柱建物跡2

掘立柱建物跡2は、北部調査区の北東部に位置している総柱の建物跡で、南北軸で11間、東西軸

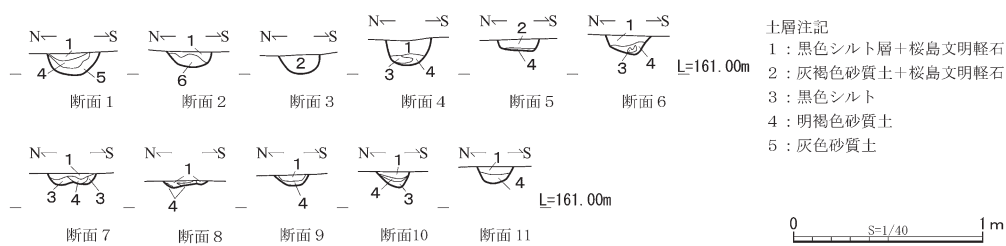


図 60 掘立柱建物跡 2 平面・土層断面図

で9間以上の規模と考えられる。

現在の道路の向きに対応しているため、比較的新しい時期のものと思われるが明らかではない。

調査に参加した作業員の話では、昔寺が建っていたという話を聞いたことがあるということであり、その寺院の跡であるのかもしれないが、時期は不明である。

道路状遺構 2・3 (付図2、巻頭図版4)

近世以降の道路状遺構を、古代～中世の道路状遺構に平行して検出している。この近世以降の道路状遺構については、2時期のものを検出している。道路状遺構2は、掘方内に砂質土を敷き固めたやや幅が狭いもの(付図2の20B区以北)である。この上面を道路とした可能性がある。道路状遺構3は、幅が広く、長方形の掘方内に拳大から長さ20cm程度の礫を敷き詰めたものが一定の間隔で並んだもの(付図2の20B区以南)である。おそらく、さらにその上に道路本体に相当するなんらかの構造物が存在したものと考えられる。この2つの道路状遺構は、道路状遺構3が道路状遺構2を切っている。時期は近世～近・現代の道路状遺構と考えられる。これらの道路の存在から、大年遺跡では、古代以降道路としての機能が1,000年以上ほとんど変わることなく機能していたことが明らかとなった。

調査時および注記の略号は、「S 28」である。

第3節 出土遺物

(1) 土器・土製品

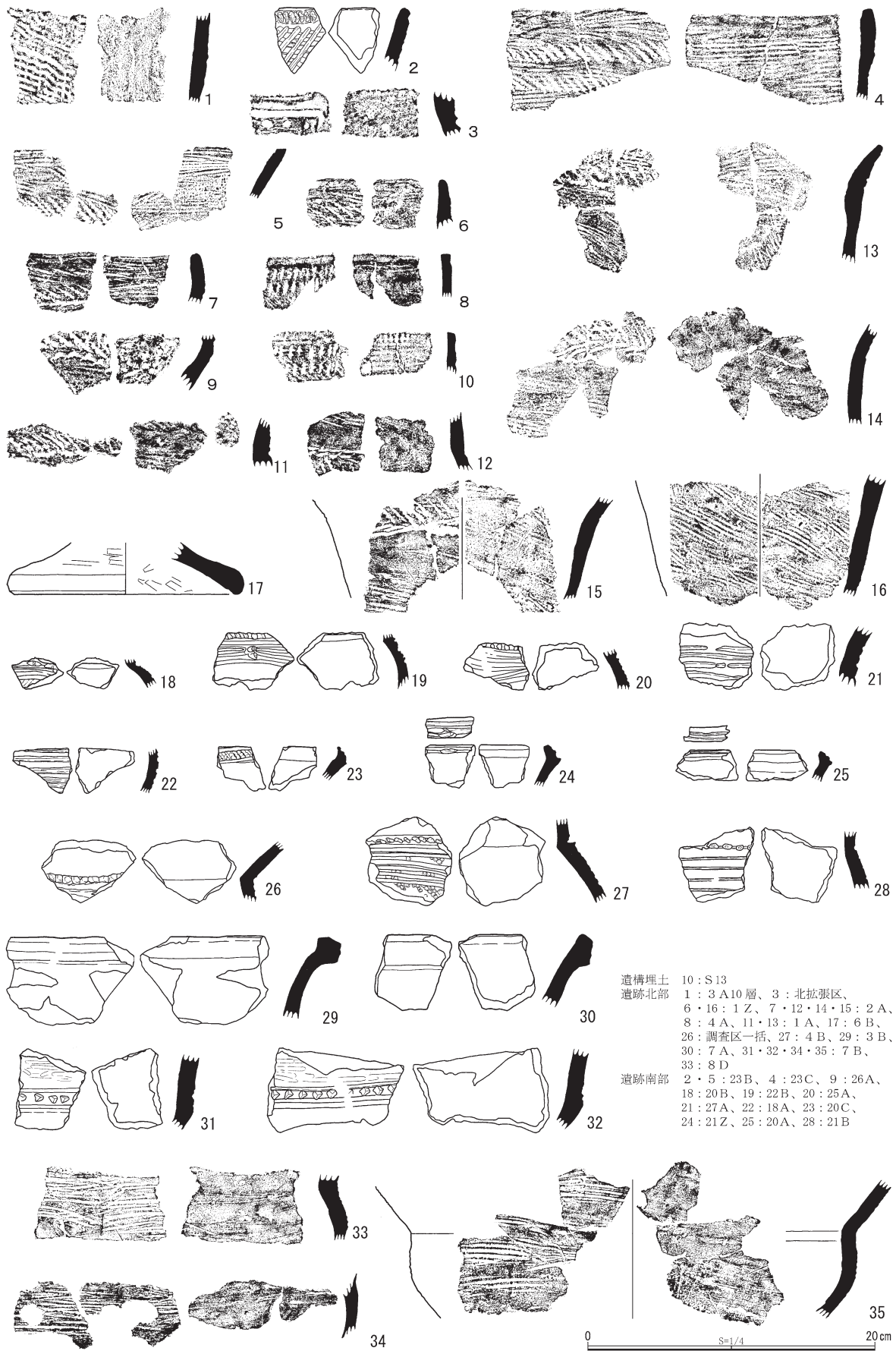
出土遺物も遺構と同様に、時代別に報告すべきであるが、石器については包含層出土のものが多く、明確に帰属時期を示すことが難しいため、本節では遺物の種類ごとにおいて報告を行う事とした。

縄文土器 (図61～図66)

縄文土器は、晩期のものを中心として出土しており、その他に早期土器(図61-1)がわずかと、後期土器が若干出土している。

1は押型文土器で、3A区の10層から出土している。文様は山形と思われるが、山の凹凸は弱く不明瞭である。早期の土器については、図示した押型文土器以外に、無文土器の破片が数点出土しているが、細片のため図化していない。なお、基本土層10層は、桜島11テフラを含む基本土層9層と、桜島薩摩火山灰を含む基本土層11層に挟まれているため、およそ12,800～8,000年前の時期に相当する。

2～15は後期土器と考えられる土器の破片である。2は口縁外面に長さ6mm程度の刺突文を連続して廻らせ、その下に斜行の連続した沈線を施したものである。刺突文はわずかに凹凸が認められ、貝殻腹縁によるものと思われる。また、沈線間には横方向にのびる凹が若干間隔をあけて数条みられ、縦断面では凹凸をなしている。縄文を意識したものと考えられる。3は指宿式系と考えられる土器であり、列点とその周囲に凹線が廻っている。4～16は市来式系と考えられる土器で、条痕地に二枚貝復縁による刺突文や短沈線などが施されている。4～6は長さ2cm程度の貝殻腹縁による刺突文を廻らせており原体は類似している。4・5は刺突文が2段であるが、5については口縁部側の刺突文は全周していないことから、波状口縁になる可能性がある。また、5は内面にコゲ状の付着物が若干みとめられる。7も長さ2cm程度の貝殻腹縁による刺突文を廻らせるほか、刺突文の下部に列点文と思われる凹みが確認できる。刺突文の原体は4～6と異なっているようであ



遺構埋土 10: S13
 遺跡北部 1: 3A10層、3: 北拡張区、
 6・16: 1Z、7・12・14・15: 2A、
 8: 4A、11・13: 1A、17: 6B、
 26: 調査区一括、27: 4B、29: 3B、
 30: 7A、31・32・34・35: 7B、
 33: 8D
 遺跡南部 2・5: 23B、4: 23C、9: 26A、
 18: 20B、19: 22B、20: 25A、
 21: 27A、22: 18A、23: 20C、
 24: 21Z、25: 20A、28: 21B

図61 土器実測図1 (縄文土器1)

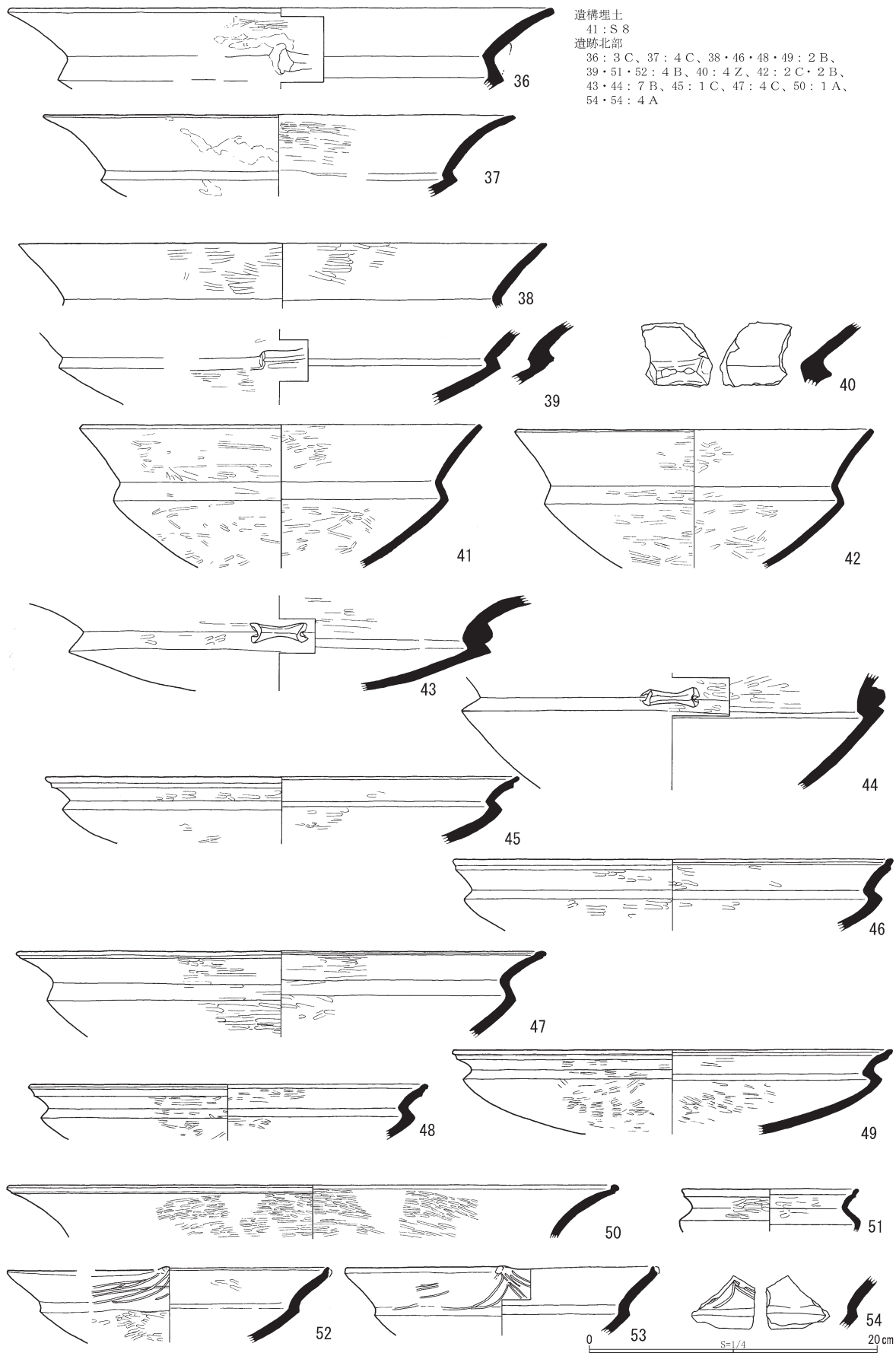


図 62 土器実測図 2 (縄文土器 2)

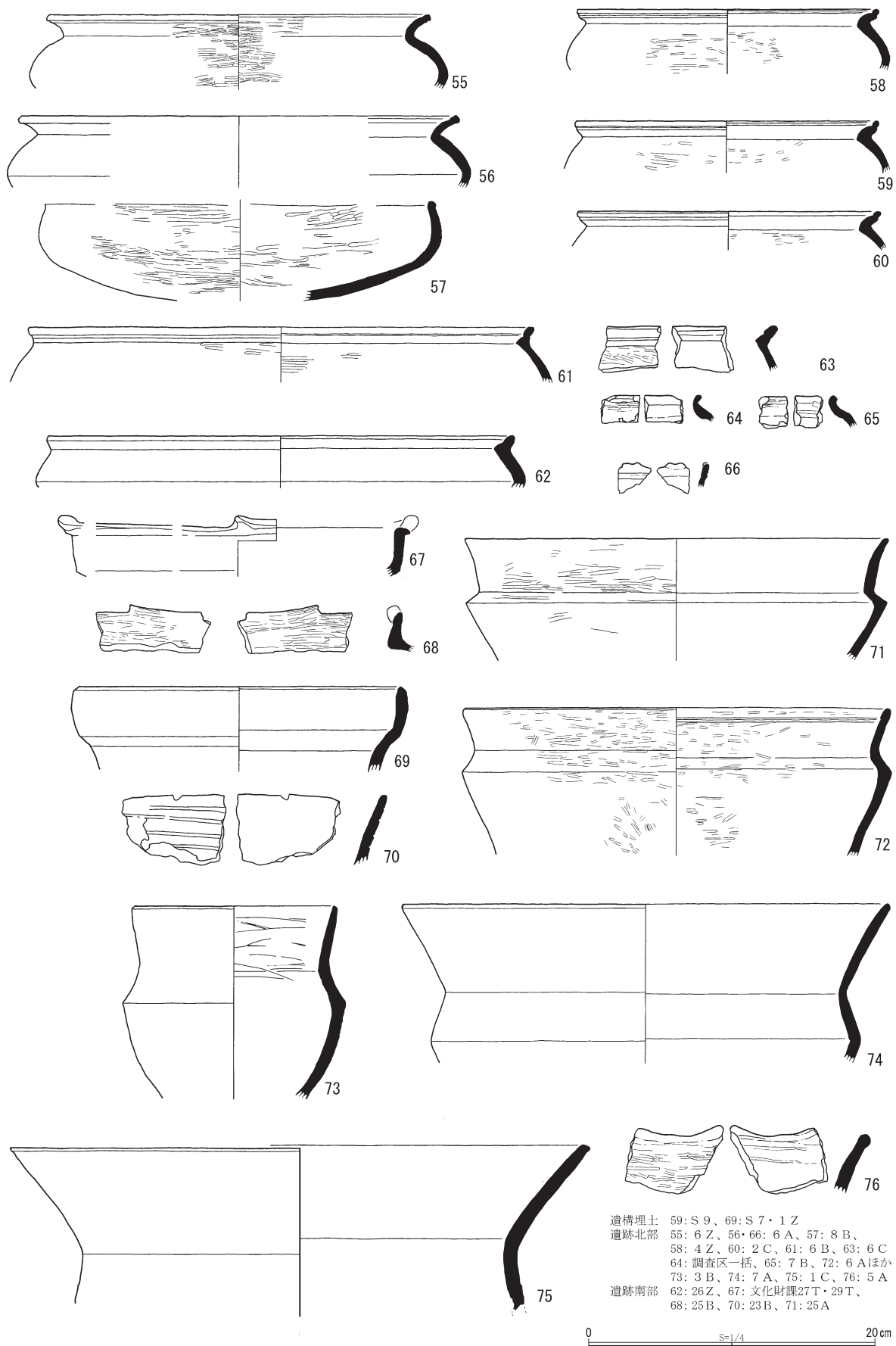
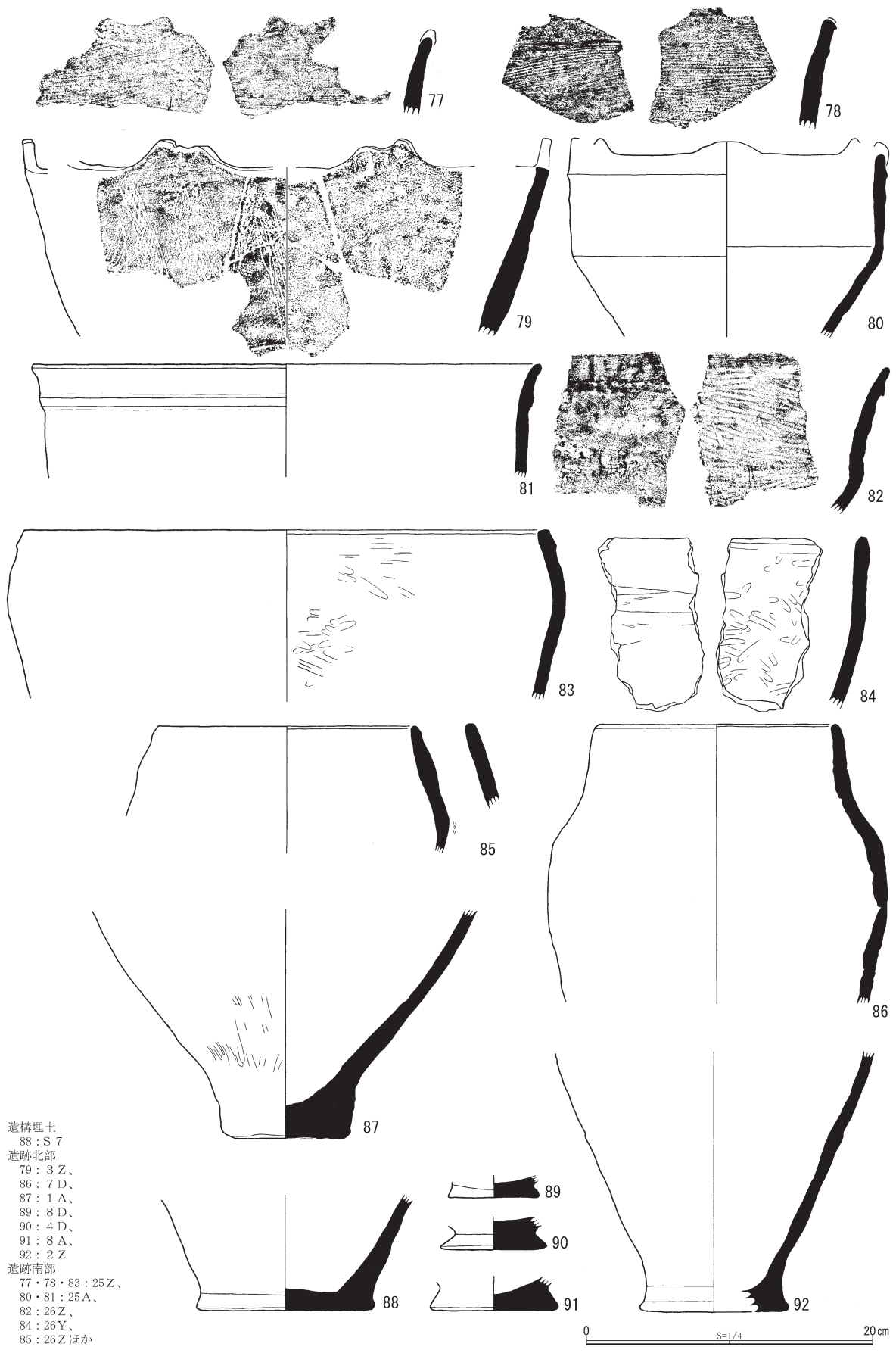


図 63 土器実測図 3 (縄文土器 3)



遺構埋土
 88 : S 7
 遺跡北部
 79 : 3 Z、
 86 : 7 D、
 87 : 1 A、
 89 : 8 D、
 90 : 4 D、
 91 : 8 A、
 92 : 2 Z
 遺跡南部
 77・78・83 : 25 Z、
 80・81 : 25 A、
 82 : 26 Z、
 84 : 26 Y、
 85 : 26 Zほか

図 64 土器実測図 4 (縄文土器 4)

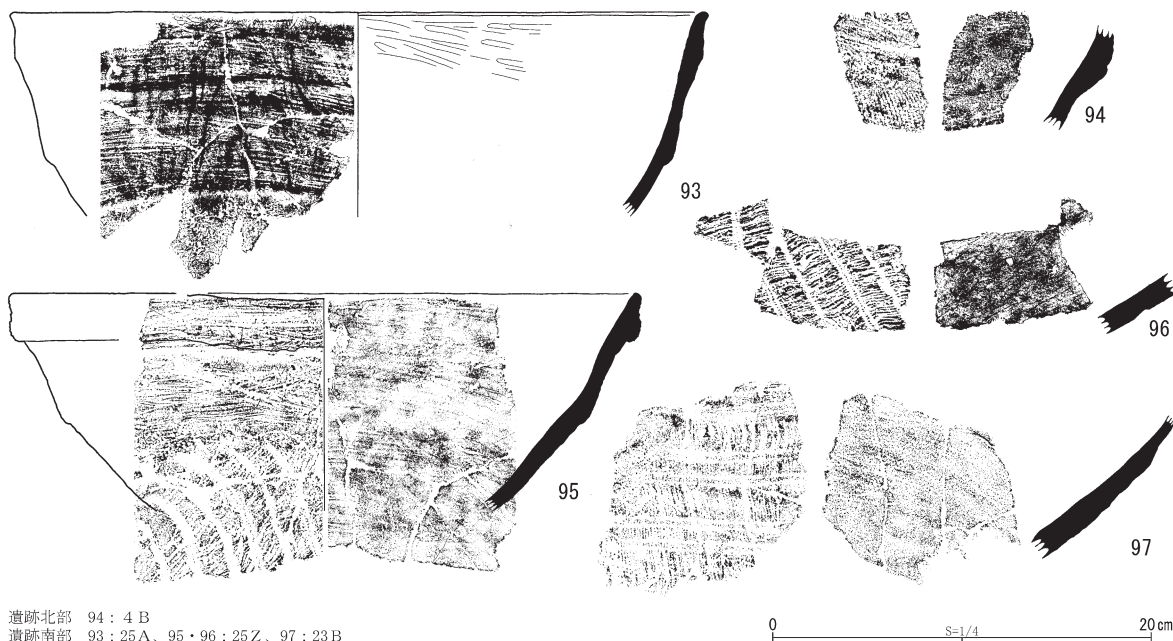
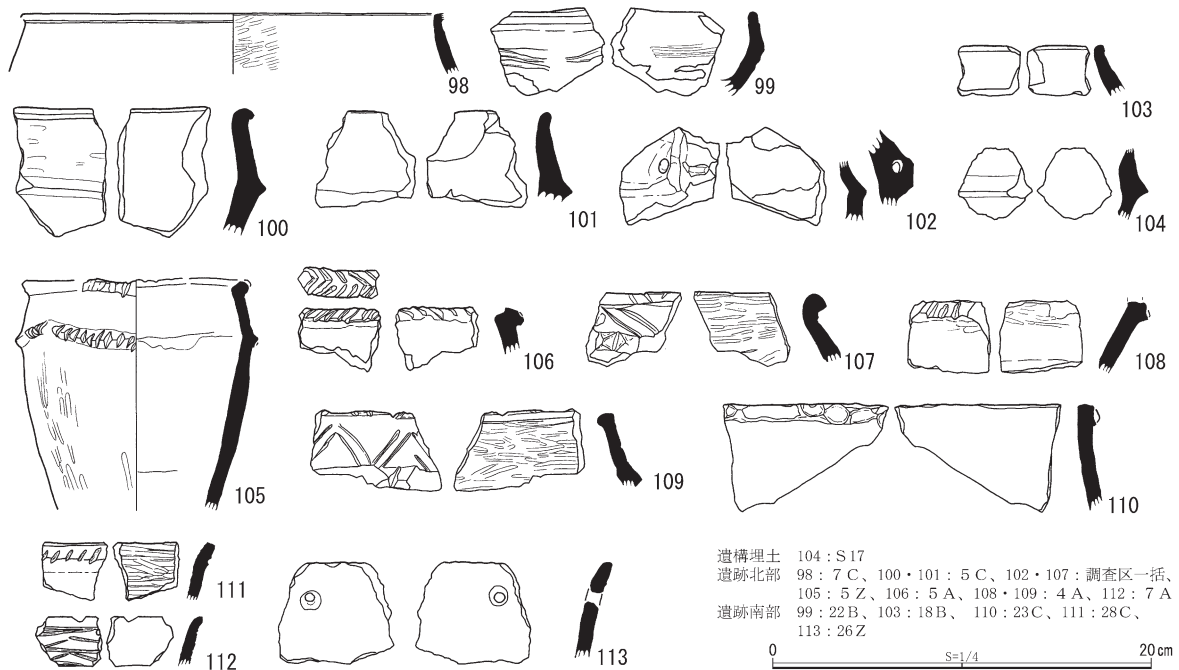


図 65 土器実測図 5 (縄文土器 5)

る。8は長さ0.8 cm程度の貝殻復縁によると思われる短い刺突文を2段廻らせている。9は長さ2.5 cmほどの貝殻腹縁による刺突文を廻らせるが、不規則でやや粗い。7と同様に、刺突文の下部に押し引き状の列点文を施す。10は、8に類似した個体で、幅1.0 cm程度の短い貝殻腹縁による刺突文を2段廻らせている。11・13は幅2.0 cm程の貝殻腹縁による刺突文と、その下に同じく貝殻腹縁による列点文状の刺突を廻らせているが、上段の刺突に比べると長さが1.5 cm程とやや短い。12は、貝殻腹縁による連続した刺突文の下部に2条の連続した短沈線、あるいは押し引き刺突文を廻らせている。14・15も貝殻腹縁による刺突文の下部に2条の短沈線を施している。12に類似しているが、短沈線の施文の仕方が異なる。11～14は、胎土や色調などの雰囲気は似ている。16は、14・15と同一個体の可能性がある胴部片で内外面に条痕調整を行っている。17は市来式系の台付鉢の破片と考えられるが、文様などは施していない。市来式系の土器については、大年遺跡から南に数百m離れた中床丸遺跡において多量に出土しており、その関係性が注目される。

18～22は磨消縄文系の土器と考えられる破片である。18は列点文の下部に沈線状の凹みがめぐるが、細片のため文様構成は明らかでない。19・20は列点文の下部に5条の沈線をめぐらせている。19は中央の3本は破片中程で交わっているほか、20も破片右端で沈線が収束しつつある。なお、両者ともに列点間が高くなっており、突帯上を呈している。21～22は複数の沈線をめぐらせているが、21はほかの破片に比べると沈線は幅広である。

23～28は西平式系と考えられる破片である。23～25は、いずれも内面上部方向に屈曲した口唇部を文様帯としている。23は上下端に沈線をめぐらせ、その間を縄文で充填している。屈曲部内面は浅く「U」字状に湾曲している。24・25は2条あるいは3条の沈線を廻らせているが、24の沈線は破片中央付近で刺突状を呈している。26～28は、頸部付近の破片で、屈曲部に列点文を施し、その下部に沈線を複数状めぐらせている点で共通しているが、細部は異なる。26は列点文を施した後に下部の沈線をめぐらせているが、破片の上下が間違っていないとすれば、列点の刺突方向が他のものとは逆であり、左利きの人間による可能性がある。27は太めの沈線を引いた後、その部分に刺突文に近い列点文をめぐらせているが、沈線および列点の際に押し出された粘土が下



遺構埋土 104 : S 17
 遺跡北部 98 : 7 C、100・101 : 5 C、102・107 : 調査区一括、
 105 : 5 Z、106 : 5 A、108・109 : 4 A、112 : 7 A
 遺跡南部 99 : 22 B、103 : 18 B、110 : 23 C、111 : 28 C、
 113 : 26 Z

図 66 土器実測図 6 (縄文土器 6)

辺において突帯状に突出している。28 は 27 と同様に沈線を引いた後に列点を施しており、沈線が切られているが、列点部の沈線は浅く細い。また、下部の沈線もほかの個体に比べると浅く細い。28 は胎土に雲母を多く含んでおり、大隅地域からもたらされた可能性がある。

29 ～ 32 は中岳Ⅱ式系と考えられる破片である。29・30 は肥厚した口縁部を有するが、29 が凹線状の浅い凹みを 2 条めぐらせるのに対して、30 は明瞭な文様をもたない。また、29 が肥厚部の内面を浅い「U」字状に凹ませるのに対して、30 は大きな変化をみせないなどの違いがある。31・32 は屈曲部の上部に列点文を施しており、その上下には沈線がめぐる。いずれも沈線を施した後、列点文をめぐらせているが、29 はやや逆「C」字状、30 は「D」字状を呈する。

33 から 35 は、条痕調整を施した無文土器である。条痕や器形などから、後期の土器と考えられる。

36 から 113 は晩期の土器片である。36 ～ 68 は黒川式系の浅鉢と考えられる破片であるが、図示した以外にも、口縁部を中心とする破片が多く出土している。36 ～ 44 は、胴部と頸部の屈曲が強く、口縁部が長くのびる一群で、36・37・39 は頸部の屈曲も強い。41・42 は同一個体の可能性がある。逆に 41 ～ 44 は頸部の屈曲が弱い。36・39・40・43・44 には屈曲部にリボン状突起が付くが、36 は他の個体と異なり、両端が上にのびて正面観で「凹」字状を呈する。また、45・44 は頸部付近に独立して付けられているのに対して、39・40 は胴部の屈曲部と一体化している。また、45・44 の左右両端には刺突文状に凹んでいるのに対して、39・40 は浅く「U」字状に緩く凹んでいる程度である。突起の形状からすれば、古い方から 36 → 43・44 → 39・40 と位置付けることができる。なお、36・37 は口縁部に、41・43 は胴部にコゲあるいはスス状物質が付着しているが、36・37 は付着が顕著である。

45 ～ 51 は口縁部がやや短めで、口唇部の内外に段を有する一群である。外面の段は沈線状に近いものもある。この中で、47・50・51 は内面の段が他のものよりも顕著である。また、50 は他の個体に比べると著しく口縁部が長い。

52 ～ 54 は口縁部に沈線文を施したもので、波頂状に突出した部分を中心として放射状に沈線が

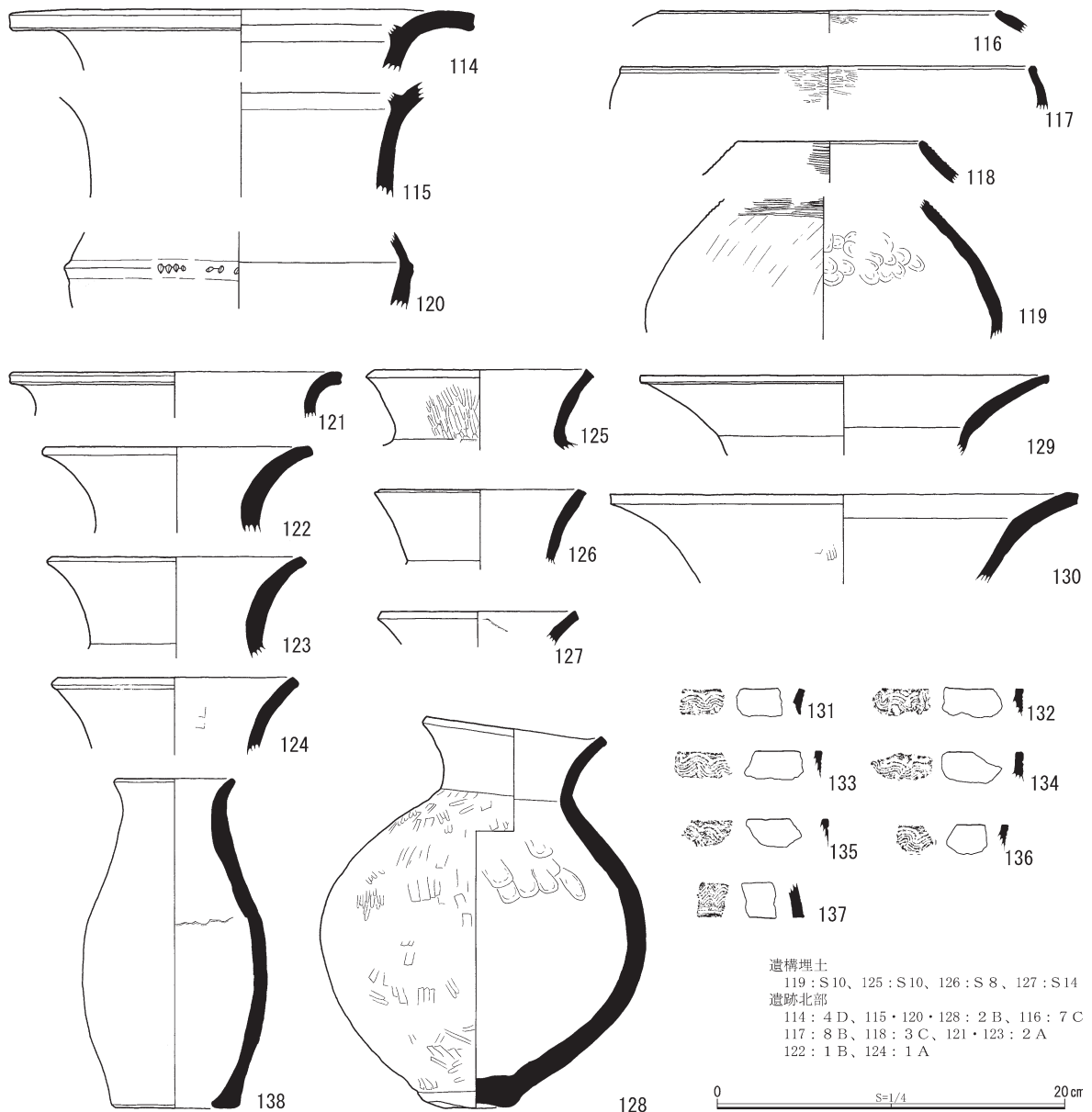


図 67 土器実測図 7 (弥生土器 1)

広がっている。いずれも似るが、形状が若干異なるため別個体として報告しておく。

55～57は、胴部の屈曲が弱く断面が緩い「S」字状を呈するものである。口縁部が残る55・56は口唇部外面に沈線を廻らせているが、内面はヘラミガキによって削り出し状の稜を作り出している。58～63は、口縁部が著しく短い一群である。58～60は同一個体の可能性がある資料で、口唇部は屈曲している。61・62は、口唇部内面の段は明瞭であるが、外面は浅く不明瞭な沈線をめぐらせる程度で形状の変化は不明瞭であるが、62については外面の沈線はみられない。64～65は口唇部がわずかに外反する資料である。

66～68は口縁端に突起が付く一群である。66は突起下部に沈線がめぐっている。

69～86は深鉢と考えられる破片である。69は口縁部が壺状に内湾する形状で、黒川式よりも古くなる可能性がある。70は全体の形状が不明であるが、4条の沈線が確認できる。71～75は浅鉢と同じく、胴部と頸部が屈曲した一群である。71・72は形状・調整技法ともに浅鉢に類似する個体であり、浅鉢の可能性もある。72は口唇部の外面の一部がわずかに肥厚するほか、内面にはへ

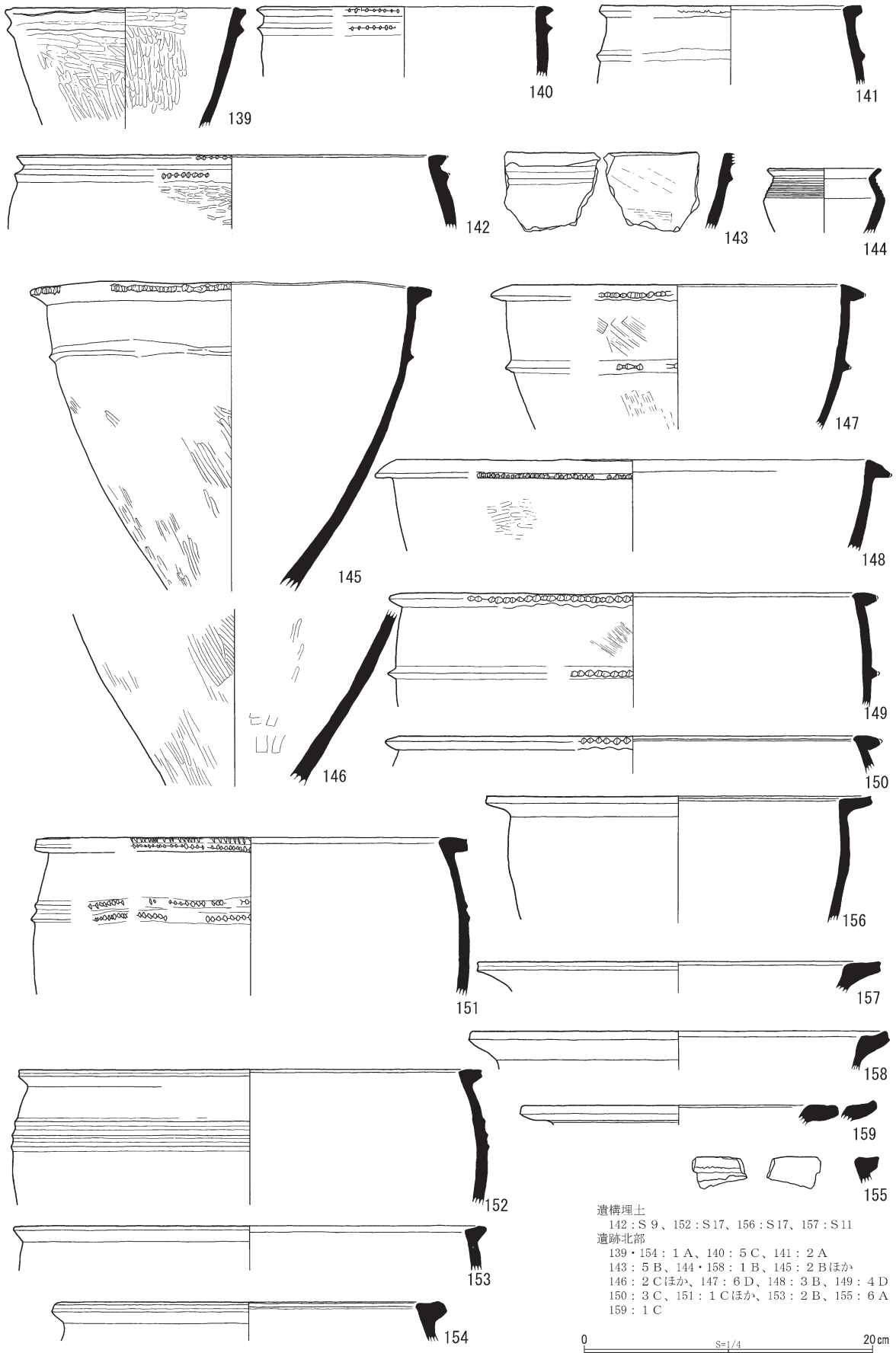


図 68 土器実測図 8 (弥生土器 2)

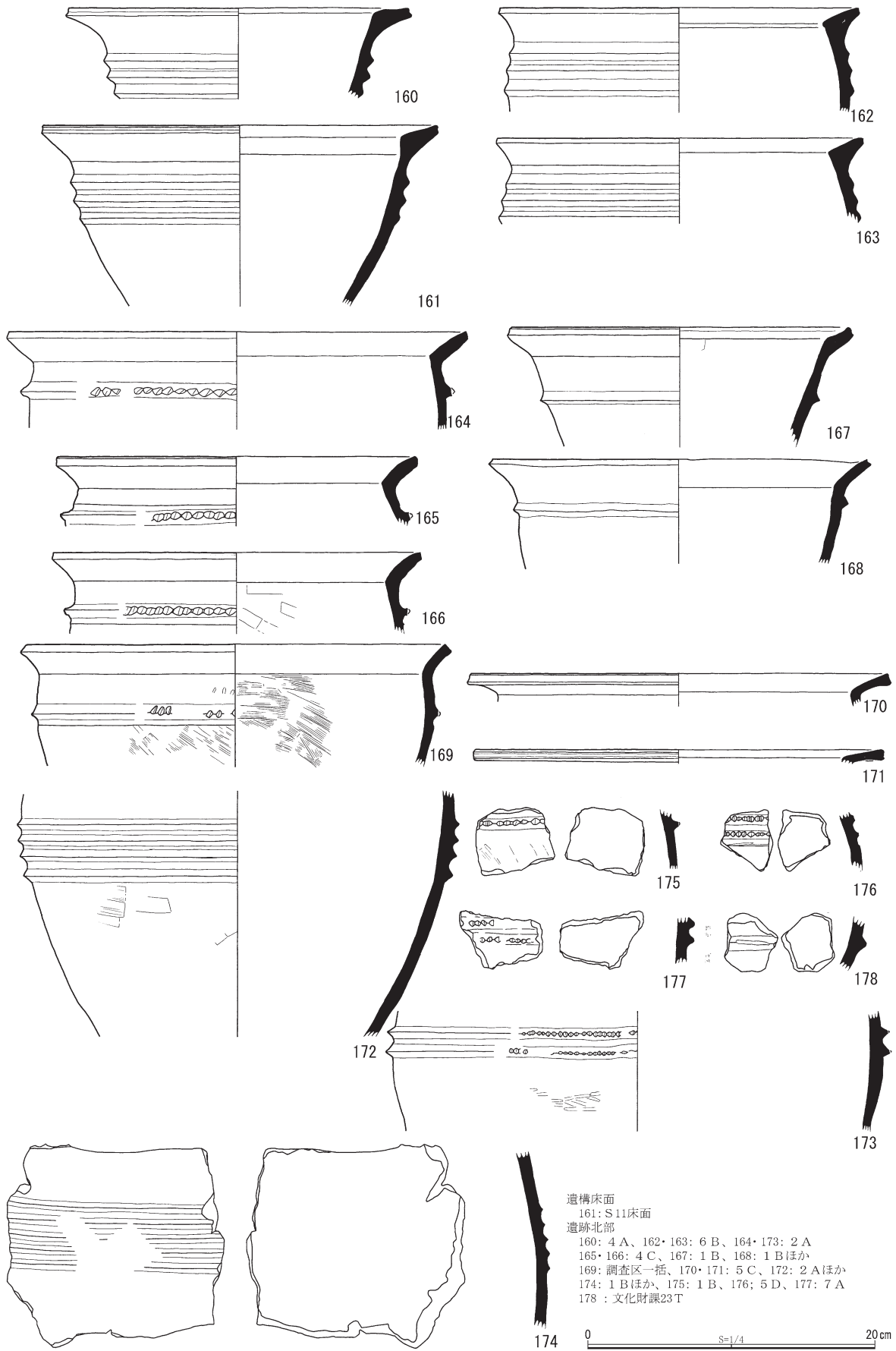


图 69 土器実測图 9 (弥生土器 3)

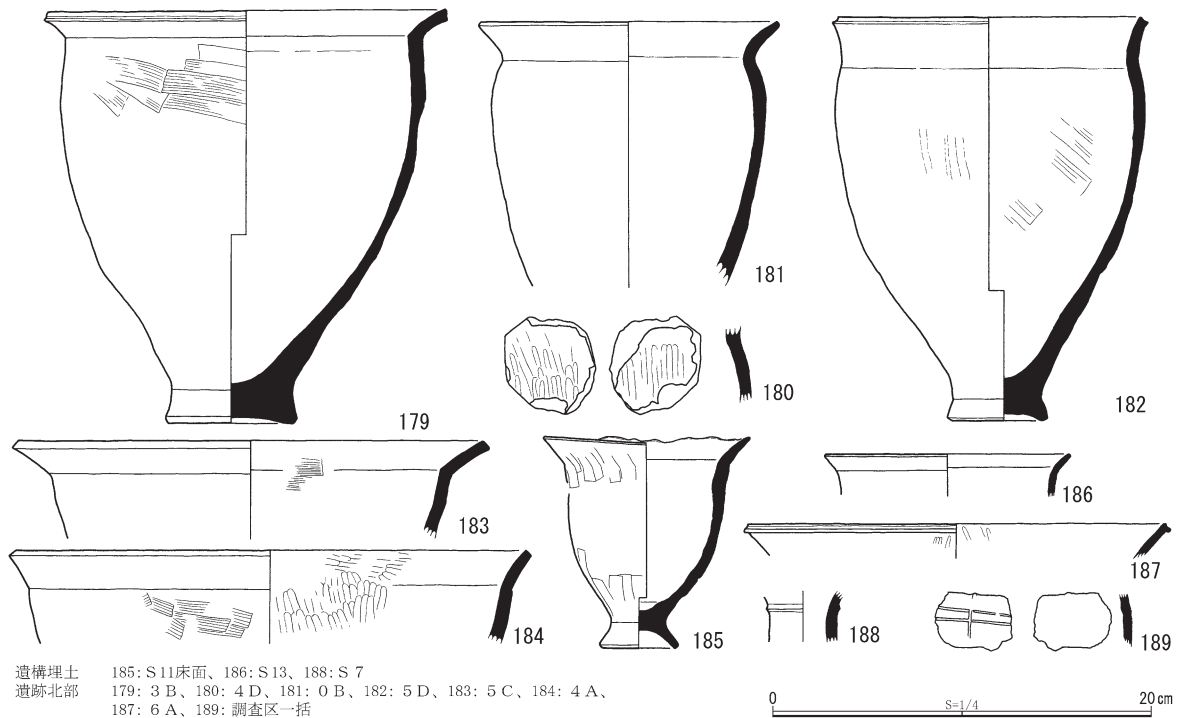


図 70 土器実測図 10 (弥生土器 4)

ラミガキによる段を作りだしている。73は小型、75は大型の個体である。

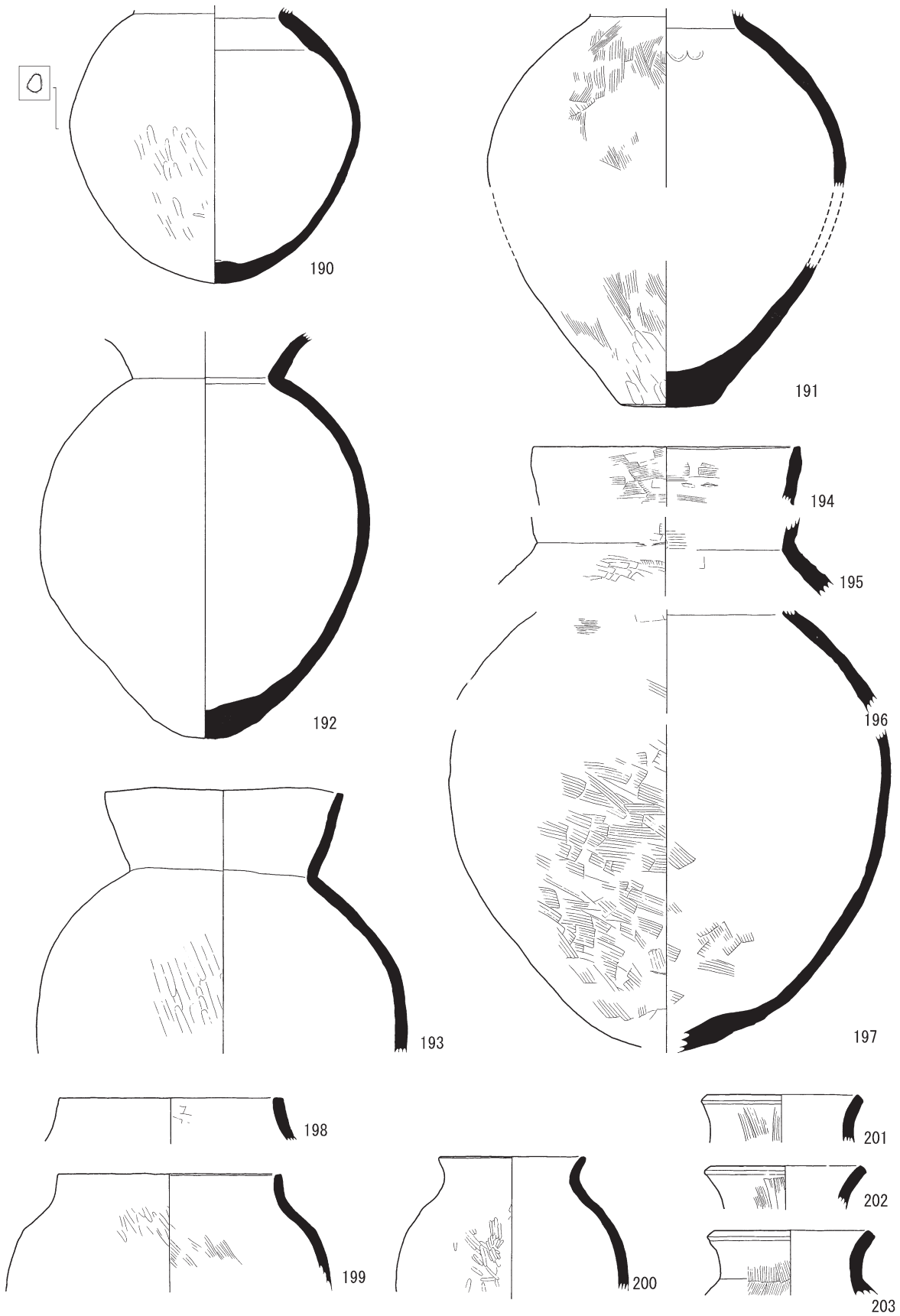
76～80は口縁部に上方への突起部を有する一群である。この中で79は後期・晩期には類例をほとんどみない、斜格子状の文様および5条程の沈線列を施した個体である。文様はへら描きによっている。原体の相違はあるが、文様の雰囲気は早期の塞ノ神式土器に似ている。今回の調査では他に出土していないが、中期末～後期初頭頃にさかのぼる可能性がある。81～85は口唇部を若干肥厚させたものであるが、不明瞭なものが多い。87～92は底部であるが、詳細な時期は不明である。

93～97は組織痕を有する破片であるが、図示した以外にも小片が出土している。

98～111は晩期末頃と考えられる土器である。98・99は壺形と考えられる土器片であるが、小片であり形状は明らかでないが、99は屈曲部の下に2条の沈線を廻らせているほか、赤色顔料が塗布してある。100～104は刻目を持たない突帯文土器と考えられる破片であるが、やはり小片のため詳細は不明である。102には耳状に孔を有する突起がついているほか、これらの土器片には赤色顔料が塗布されている。105～111は刻目を有する突帯文土器と考えられる破片である。105は小型であるが、形状を知ることができ、内面の突帯に対応する位置には、粘土紐の接合痕跡が確認できる。106は口唇部の突帯上面内外に刻目を入れている。107・109は突帯間にへら描きの沈線による山形の沈線文を施しているほか、小片のため細部は不明であるが、口唇部の刻みは数条毎に向きを変えているようである。110は幅広の刻みを施している。111の突帯は高さが低い。112・113は詳細な時期は不明であるが112は赤色顔料を塗布しており、他の時期ではそのような破片はみられなかったため、突帯文期のものと推定した。113は穿孔を施す。なお、今回の大年遺跡の調査では水田に関する遺物・遺構はみつかっていないため、弥生時代早期ではなく、縄文時代晩期として報告を行った。

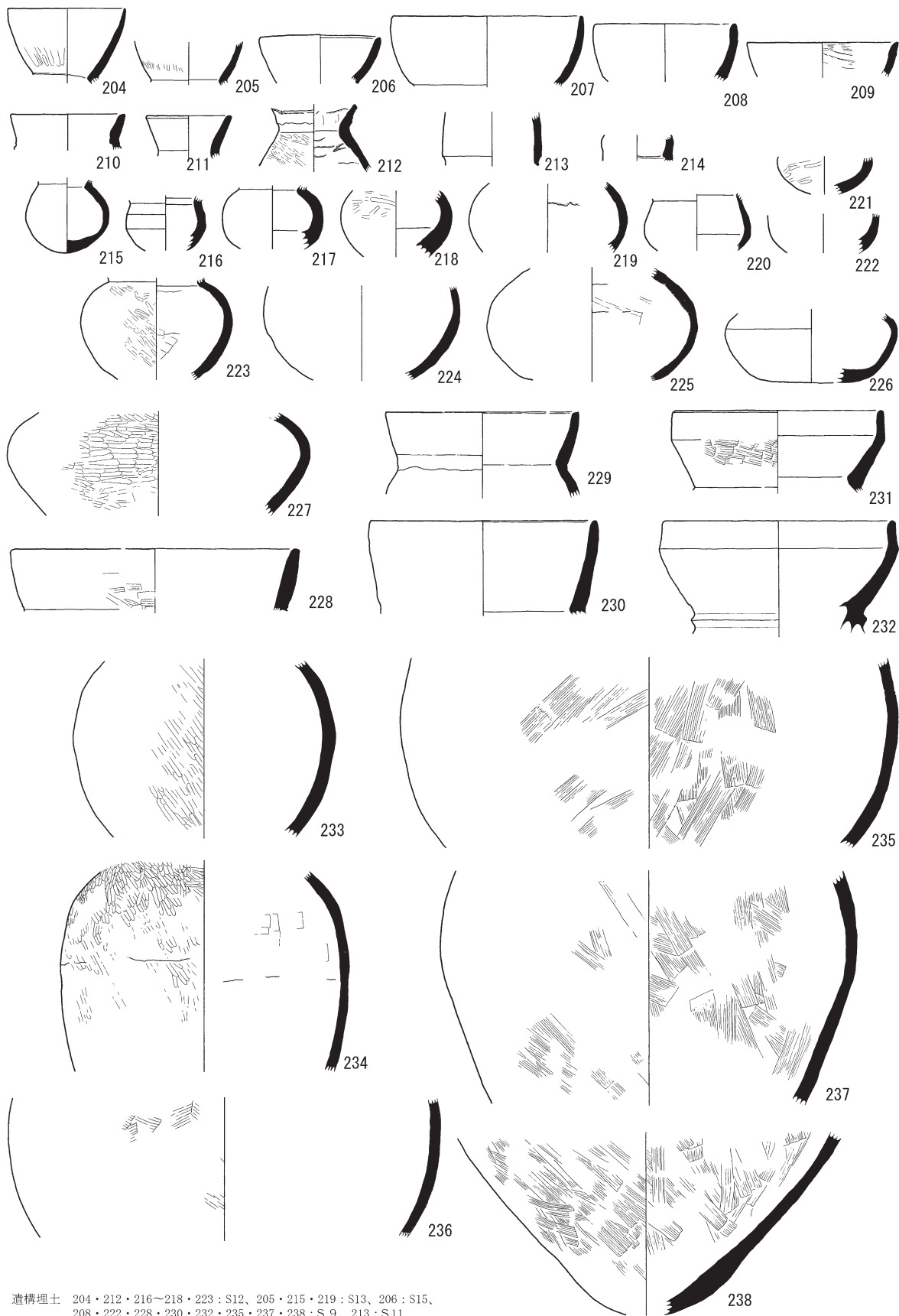
弥生土器・土師器

114～137は弥生土器の壺と考えられる破片であるが、後述する甕の破片に比べて数は少ない。



遺構埋土 190: S25、192・198・199: S 8、193: S13
遺跡北部 191・200: 4 D、194・195: 2 B、196・197: 1 B、201~203: 4 C

图 71 土器実測图 11 (土師器 1)



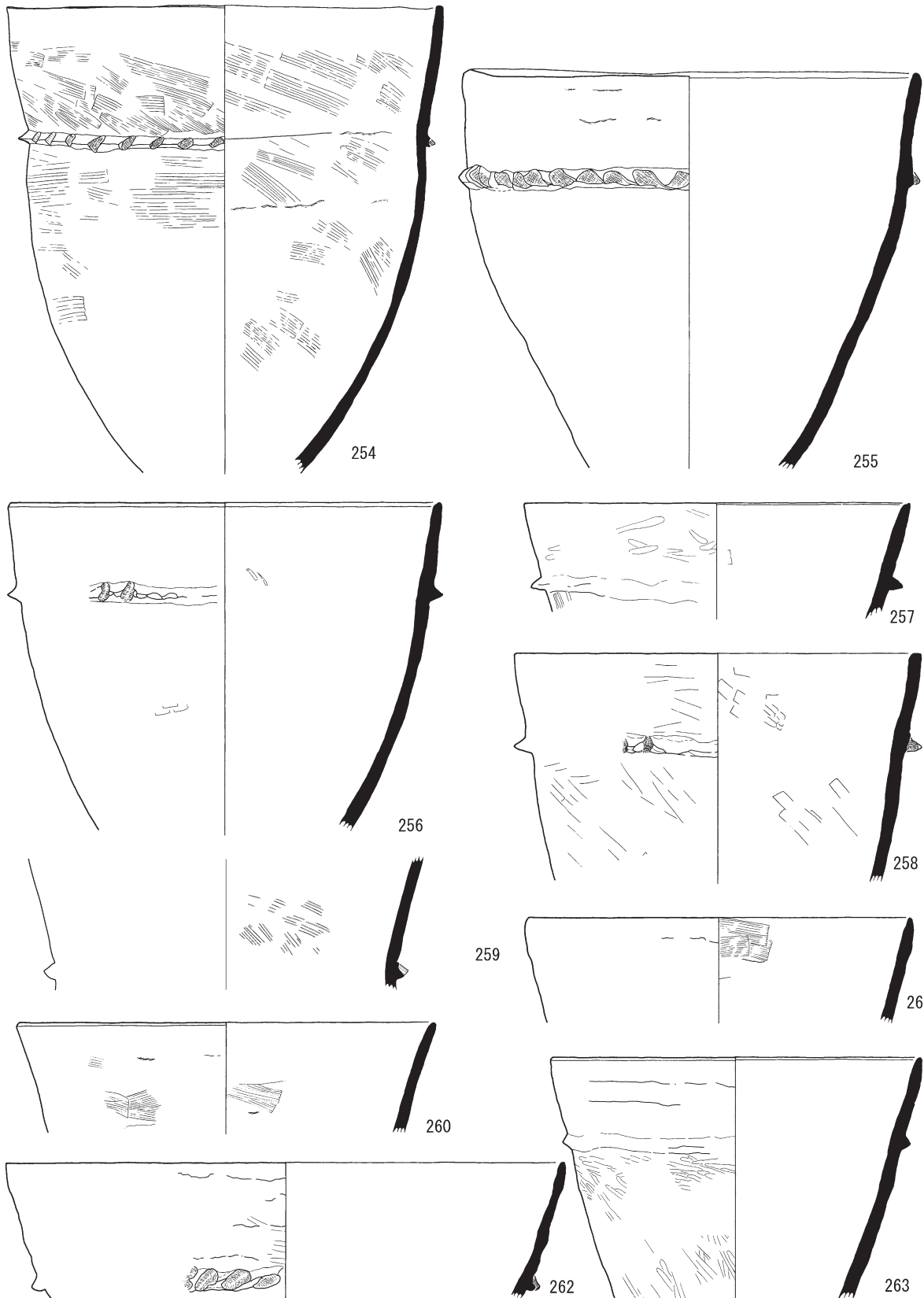
遺構埋土 204・212・216～218・223 : S12, 205・215・219 : S13, 206 : S15,
 208・222・228・230・232・235・237・238 : S 9, 213 : S11,
 214 : S10, 221・229 : S 8, 234 : S10 床面
 遺跡北部 207 : 1 B, 209・210・225 : 5 B, 211 : Tr13, 220 : 3 C, 224・226 : 6 B
 227 : 2 D, 231・233 : 2 B, 236 : 5 C

图 72 土器実測图 12 (土師器 2)



遺構埋土 248 : S 14、253 : S 10
 遺跡北部 239 : 4 B、240・241・245・246 : 3 A、242 : 1 A、243 : 2 C、244 : 8 C
 247 : 1 B、250・251 : 1 C、252 : 2 A
 遺跡南部 249 : 20 C

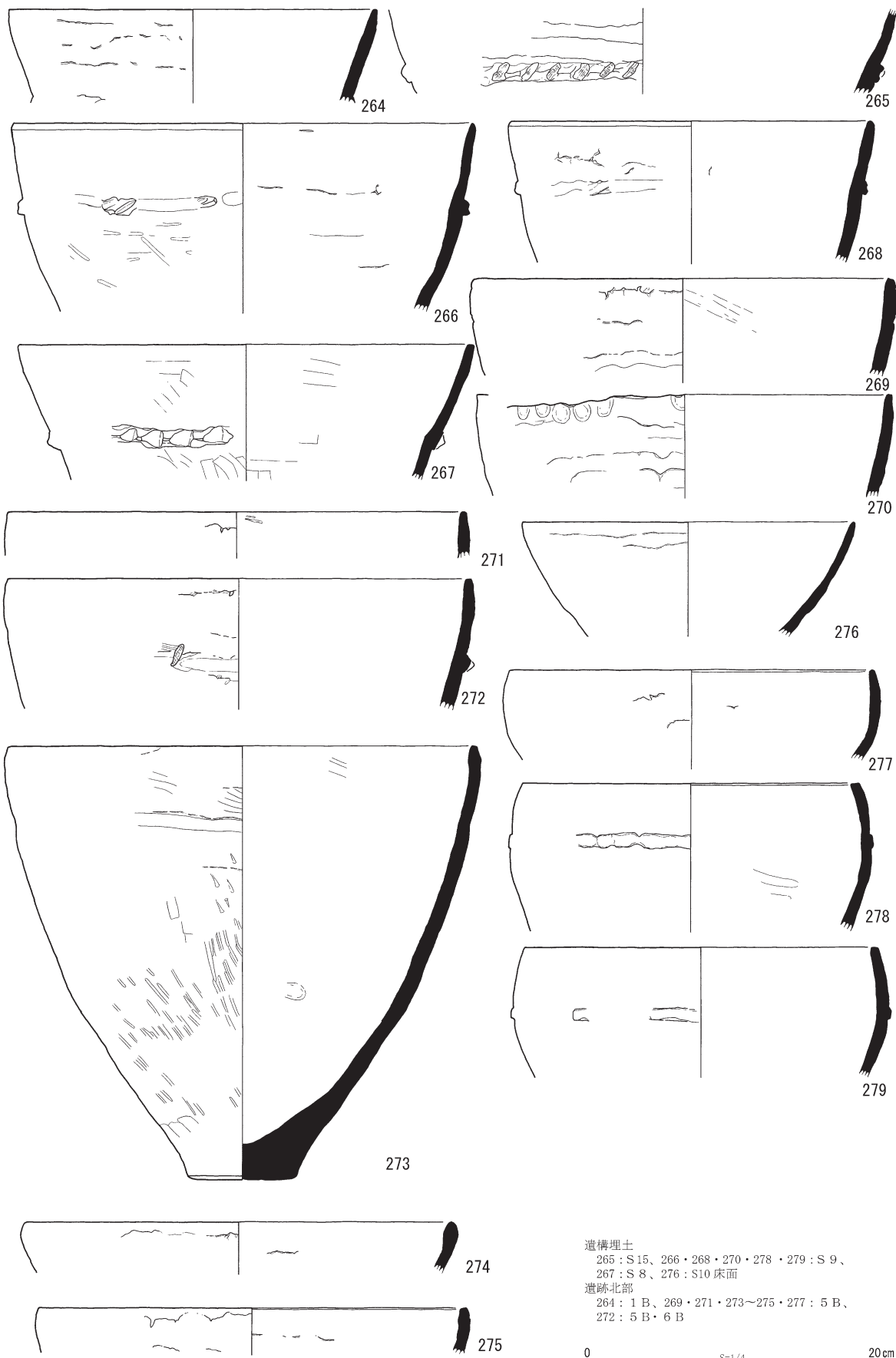
図 73 土器実測図 13 (土師器 3)



遺構埋土
 254・255：S13 床面、257：S15、260：S8、262：S14、263：S10 床面
 遺跡北部
 256・258：3B、259：7A、261：3D

0 S=1/4 20 cm

图 74 土器実測图 14 (土師器 4)



遺構埋土
 265 : S 15、266・268・270・278・279 : S 9、
 267 : S 8、276 : S10 床面
 遺跡北部
 264 : 1 B、269・271・273~275・277 : 5 B、
 272 : 5 B・6 B

0 S=1/4 20cm

图 75 土器実測图 15 (土師器 5)

114・115 は、外側へ大きく開く口縁部の内面に突帯をめぐらせたもので、前期末～中期初頭頃の外来系土器と考えられる。116・117 は無頸壺と考えられる破片であるが、細片のため明らかでない。118・119 は同一個体と考えられる資料で、多条のヘラ描沈線をめぐらせている。県内では沈線文が一般的ではなく、また櫛描化しないが、114・115 と同じ頃のものと考えられる。118 は、全形が明らかでないが、胴部刻みの形状等から弥生時代の壺と判断した。

121～128 は広口壺の口縁部と考えられるものである。128 は全形をうかがうことができる資料である。口縁部はやや直線的に開き、胴部の最大系は中程にあって、張り気味である。胴上部付近から口縁部にかけてやや傾いている。弥生時代後期後半頃のものと思われる。そのほかの個体については、詳細な時期は明らかでなく、121 のように口縁部の湾曲が強い古手の形状を含んでいるが、比較的まっすぐに開く形態から弥生時代後期を中心とする時期と思われる。129・130 も同様に広口壺の口縁部と考えられるが、大型で外側への開きが大きい。

131～137 は二重口縁壺の口縁部と考えられる破片で、櫛描きによる波状文を施している。出土位置は137を除くといずれも5B区の出土であり、同一個体の可能性が高いが、波状文の雰囲気は若干異なっているものもある。137 は波状文の描き方と形状から、他の二重口縁壺の破片と異なり、一次口縁から下側へ垂下した部分にあたると考えられるが、細片のため明らかでない。

138 は壺と考えられる器形であるが、管見では他に類例を知らない。底部は剥離しているためか、中央部は孔があいた形状になっている。風化による磨滅が著しく、粘土接合面で剥離しているのかどうかの判断が困難であるため、本来の底部形状は不明であるものの、平底と考えられる点や胎土の様子などから、弥生土器に含めている。また、風化により器表面の調整も明らかでない。ただし、出土場所が26Z区と、縄文土器以外の土器の出土が少ない南部調査区で出土していることなどから、縄文時代晩期末のものである可能性もある。

139～189 は、弥生土器の甕と考えられる破片である。139～143 口縁端部突帯の下にもう1条の突帯をめぐらせる下城式系の土器であるが、139・143 には突帯上に刻みを入れていない。突帯は141の口縁端部のものが隅丸の台形状であるが、ほかは三角形を呈する。これらの土器は、前期末～中期前葉頃のものであると考えられる。144 は頸部下にヘラ描き沈線をめぐらせたもので、小型の鉢状を呈する。多条沈線はヘラ描きであるため、上記の下城式系の土器と同じ頃を含んでいるが、形態的には後期に下がる可能性がある。

145～169 は逆「L」字～「く」字状の短い口縁をもつ甕で、145～150 は中期前半、151～155 は中期中頃、160～163 は中期後半、164～169 は中期末～後期初頭頃までと、中期の幅広い時期のものを含んでいる。172～174 はこれらの甕の胴部と考えられる資料である。145～149 は、底部から外側へ開き気味、上方へ真っ直ぐ気味にのびてきた胴部に断面三角形状の口縁を貼り付けたもので、145のみ口縁部台形状を呈する。また、145と148はほかの個体に比べると、刻みの幅が若干狭い。147・148 は口縁部がやや下がり気味である。口縁の貼付け方は、いずれも弱く、胴部との間にわずかな空隙が観察できる。なお、145 は外面の下辺をナデているが、その他は押しつけるように貼り付けており、指頭の凹凸がみられるなどの違いがみられる。一方、胴部の突帯については、上辺・下辺ともにナデているが、口縁部と同様に、下辺については部分的にわずかな空隙が観察できる。突帯の貼付方については、古墳時代よりもしっかりしているものの、接合意識が弱い点などは古墳時代と共通しており興味深い。145と146は胎土等から、同一個体と考えられる。149・150 も口縁部の貼付方や刻みの仕方、あるいは内面の口縁端部わずかに内側に突出する調整

の仕方がよく似ており、同一個体の可能性があるが、149は傾きがやや異なる。

151～155は胴部最大径から内側にのびてき胴部に台形状の口縁が貼り付けられたものである。口縁は153～155は太い。口縁および突帯上の刻目は151・155にみられるが、151の刻みは鋭利な工具によるようである。また、口縁端は、151・152はわずかに「M」字状に中央が凹んでおり、151はその上下に刻み入れるが、上下で別々に行っている。口縁および突帯の接合は、153・154は丁寧になでているが、その他の個体では、やはり下辺に空隙がみられるなど接合意識が弱い。このほか、153・154は調整の仕方により、内面口縁端部がわずかに内側に突出している。152の外面に

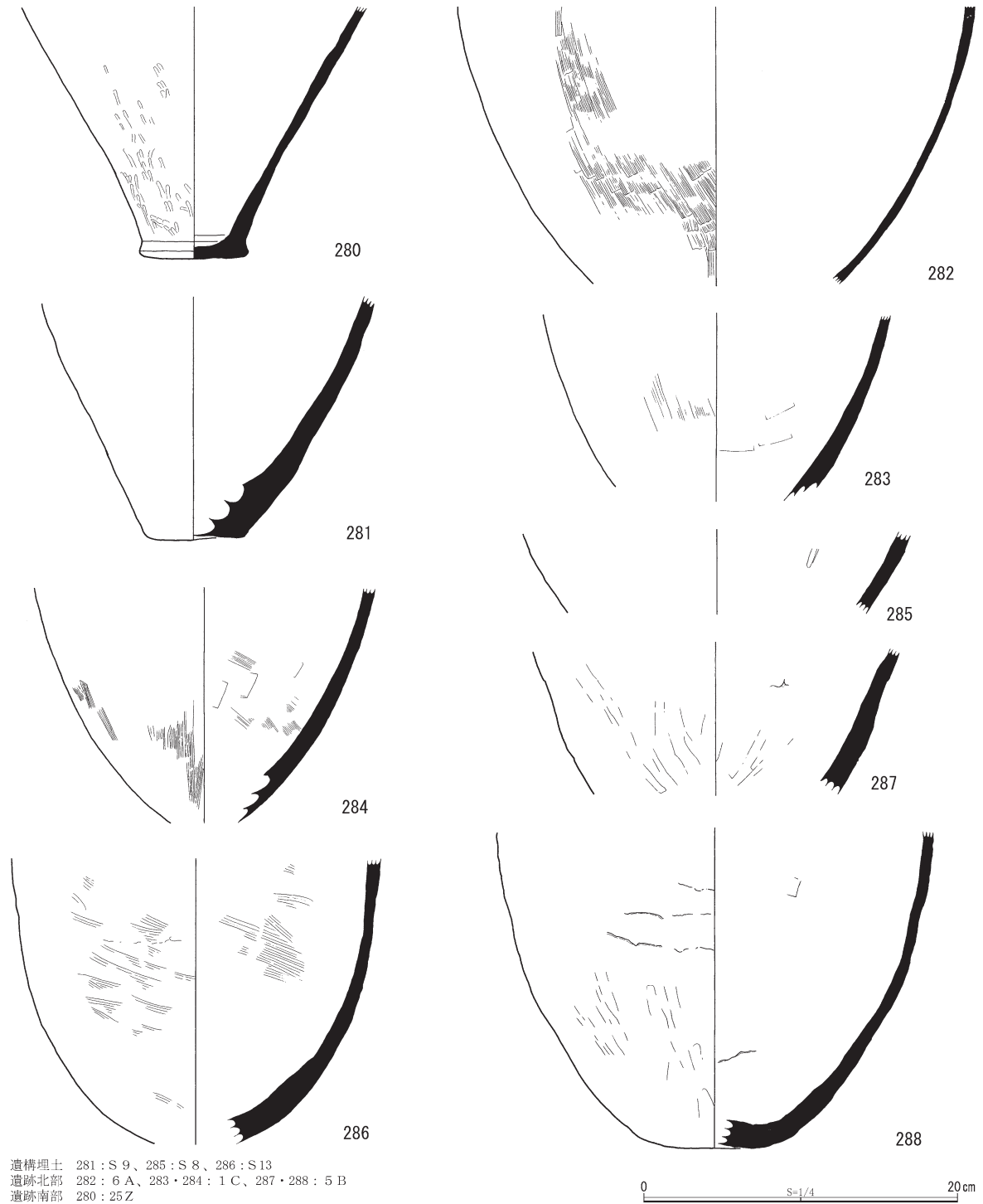


図 76 土器実測図 16 (弥生土器・土師器底部 1)

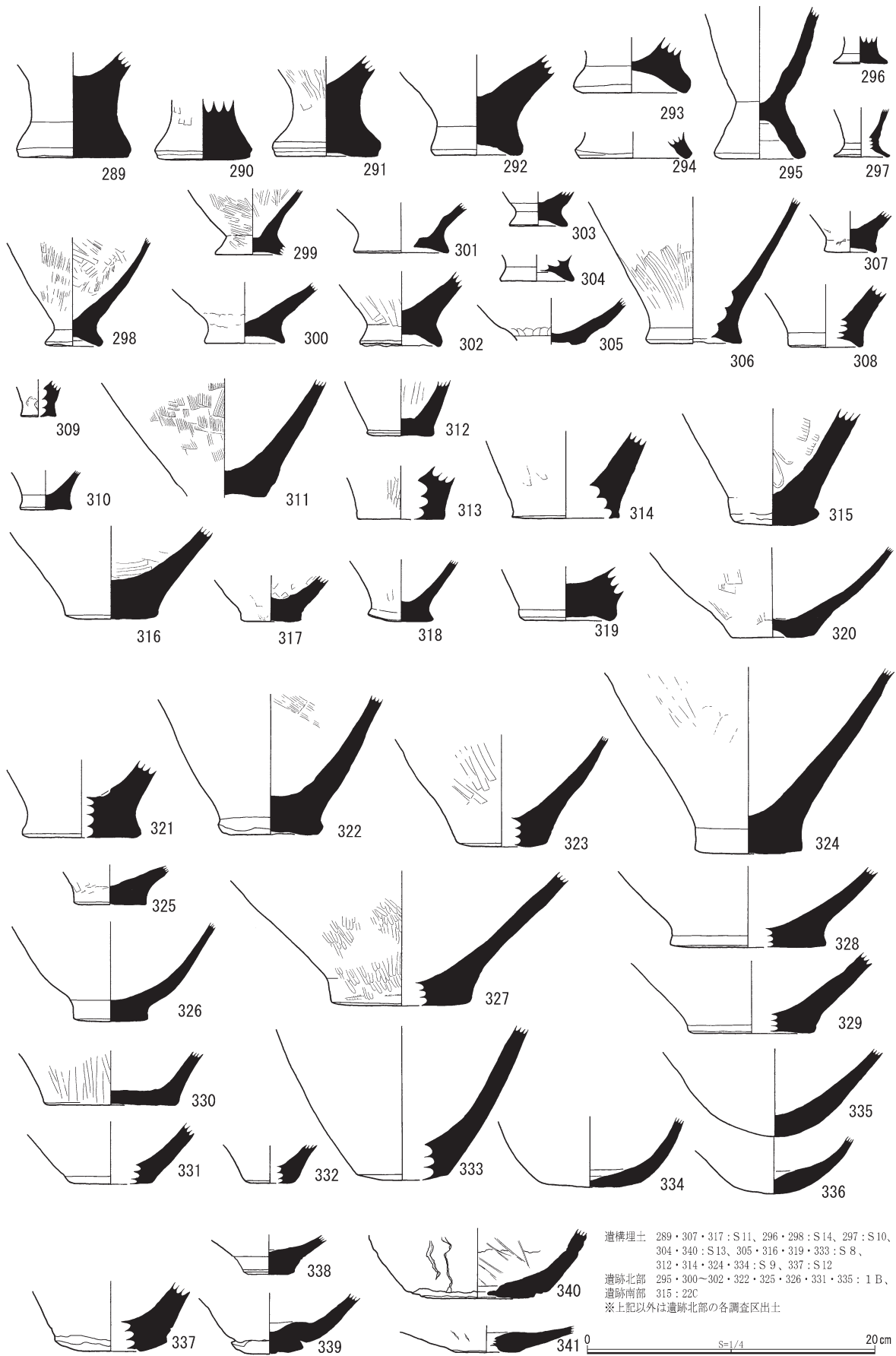


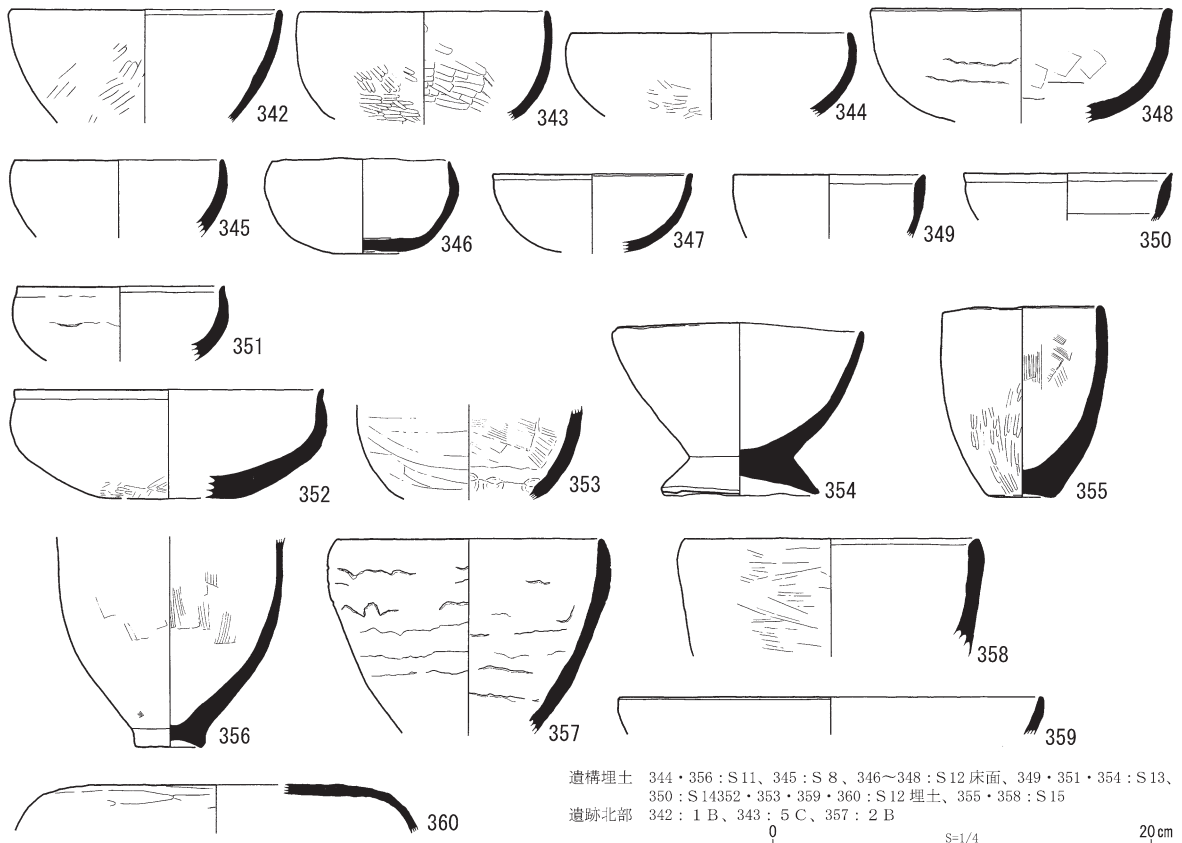
図 77 土器実測図 17 (弥生土器・土師器底部 2)

はススあるいはコゲ状の付着物が顕著である。156は胴部最大径付近から上方へのびてきた胴部にやや厚みの薄い口縁を貼り付けているが、下辺は丁寧にナデられている。口縁端部はわずかに凹む。

160～163は貼付口縁の下辺の稜が不明瞭になったもので、156～159も小片ながら類似する形態と思われる。160と161、162と163はそれぞれ同一個体である可能性がある。160・161の口縁端面は浅く凹むが、162・163は不明瞭である。口縁・突帯の貼付は上下辺ナデているが、162・163については、貼り付けた口縁の剥落が著しく、剥離面の色調も器表面とあまり変わらない程度の焼成具合である。

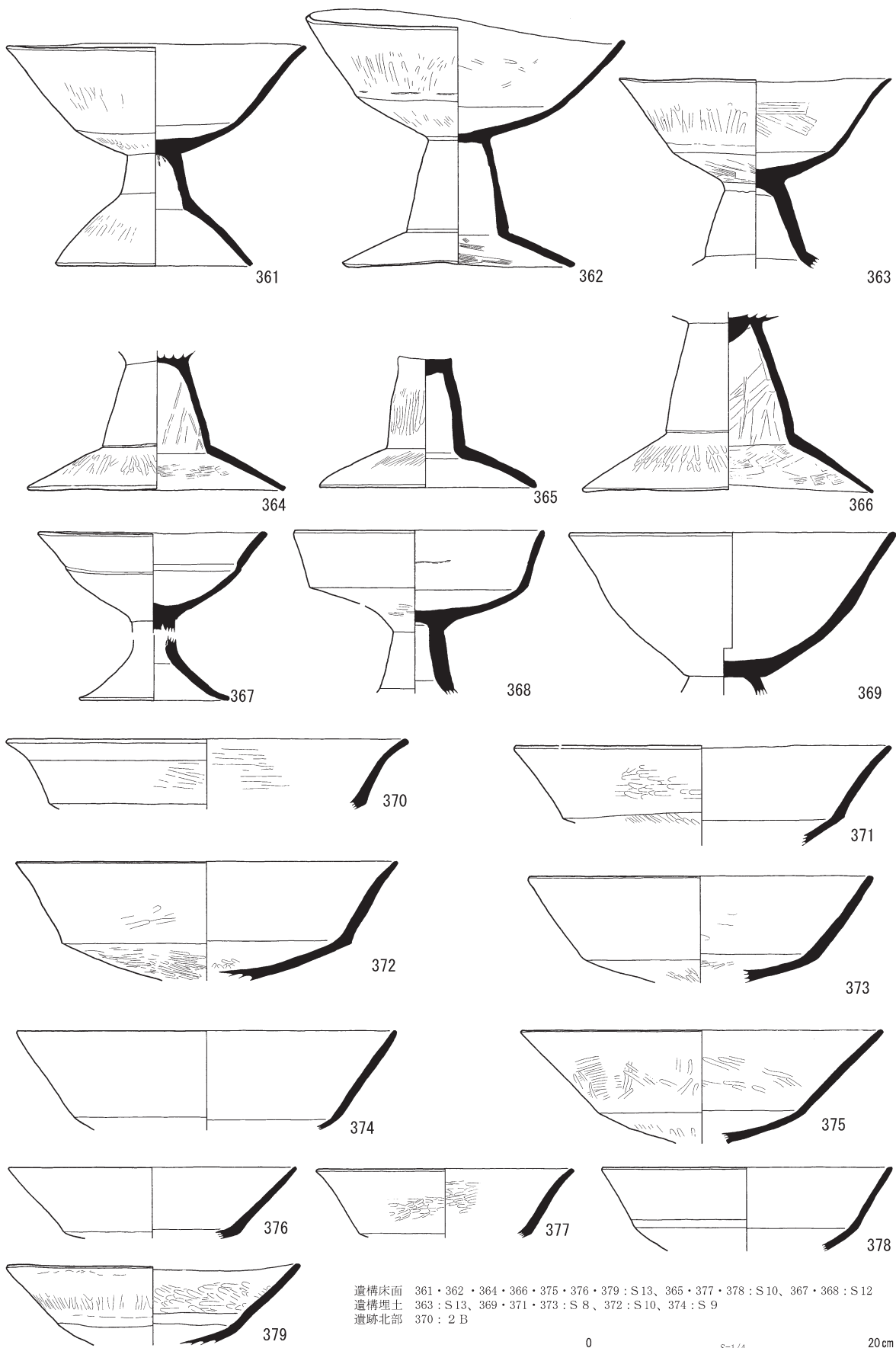
164～169は「く」字状に上方へ屈曲する口縁をもつもので、頸部下の突帯にはやや太めの刻みを施している。164～167は、胴部内面を斜方向のナデ、口縁部を横方向のナデで調整することによって明瞭な稜を作り出しているのに対して、168・169は横方向のナデが胴部まで及んでおり、その影響により内面の稜が不明瞭になりつつある。また、突帯の貼付も上下辺ともにナデているが、ナデが強いためか上辺あるいは下辺付近が若干凹むものもみられる。このほか、167は調整によって、口縁端部内面が上部へ突出している。166の突帯～口縁部にかけてススの付着が顕著である。170・171は他の土器に比べて薄手の作りで、口縁部端部付近が若干肥厚しており、端面はやや浅く凹むが、171は太めの沈線状を呈する。外来系土器の可能性はある。

179～185は、主に後期に属すると考えられる土器であるが、179は164～169と同じく中期末～後期初頃とやや古くなる。また、179は胴下部を一部欠失するが、ほぼ全形をうかがうことができる資料である。内面の稜は鋭いが、稜の下まで横方向のナデが及んでいる。口縁端部は浅く凹む。底部はわずかに上げ底気味である。このほか、使用による影響か、胴部最大径よりも下部では器表面の剥落が著しい。上でみた同じ時期の土器に突帯が付くのに対して、179は頸部下に突帯をもた



遺構埋土 344・356 : S11、345 : S 8、346～348 : S12 床面、349・351・354 : S13、
350 : S14352・353・359・360 : S12 埋土、355・358 : S15
遺跡北部 342 : 1 B、343 : 5 C、357 : 2 B

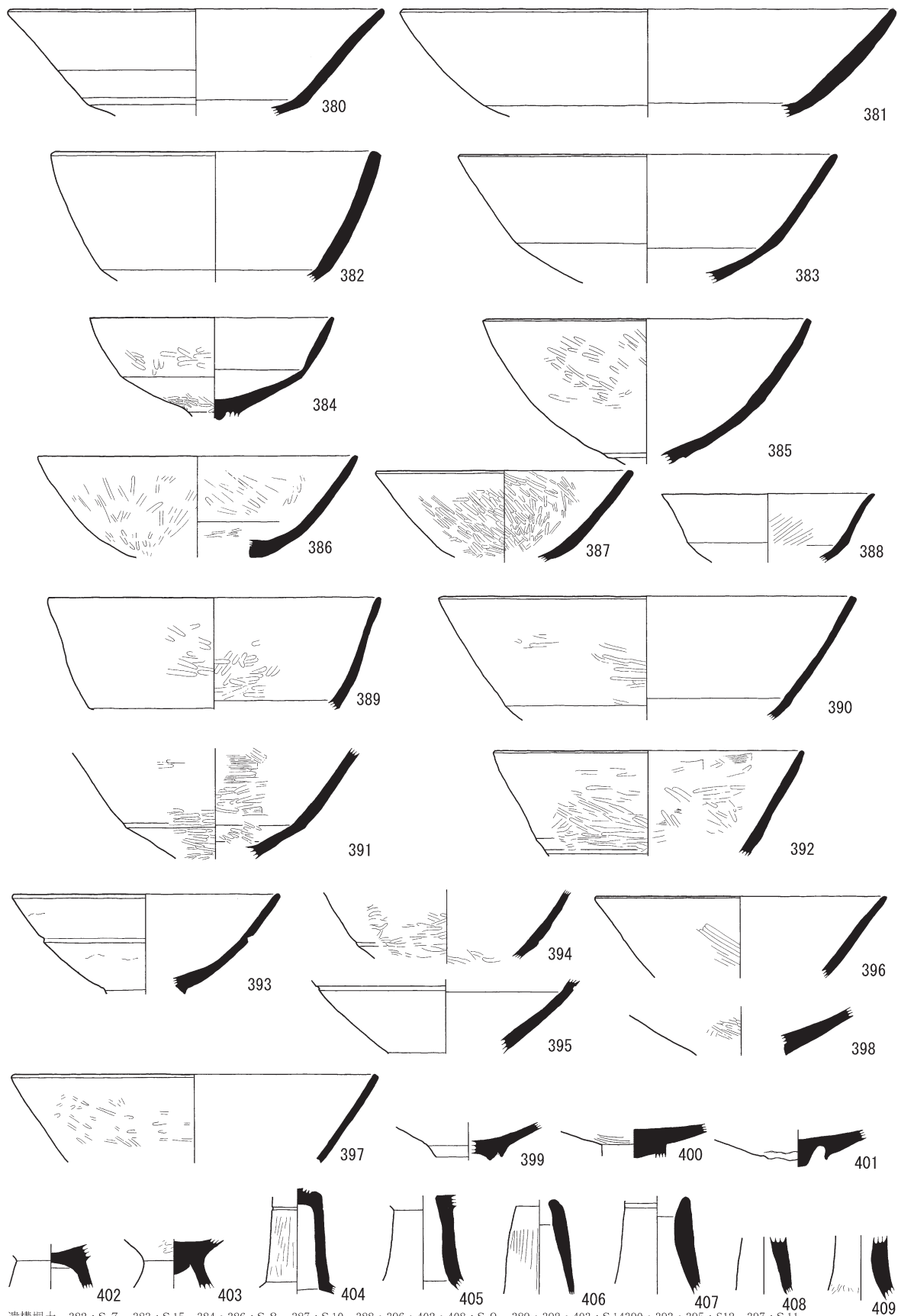
図 78 土器実測図 18 (土師器 6)



遺構床面 361・362・364・366・375・376・379 : S13, 365・377・378 : S10, 367・368 : S12
遺構埋土 363 : S13, 369・371・373 : S8, 372 : S10, 374 : S9
遺跡北部 370 : 2B

0 S=1/4 20 cm

图 79 土器実測图 19 (土師器 7)



遺構埋土 382 : S 7、383 : S 15、384・386 : S 8、387 : S 10、388・396・402・408 : S 9、389・392・403 : S 14390・393・395 : S 12、397 : S 11
 遺跡北部 380・398 : 2 B、381・394・406 : 1 B、385 : 5 C、391 文化財課 22 T、399 : 6 B、400 : 4 C、401 : 3 B・1 C、404 : 1 C、405 : 5 B・C、
 407 : 0 B、409 : 1 次調査区

図 80 土器実測図 20 (土師器 8)

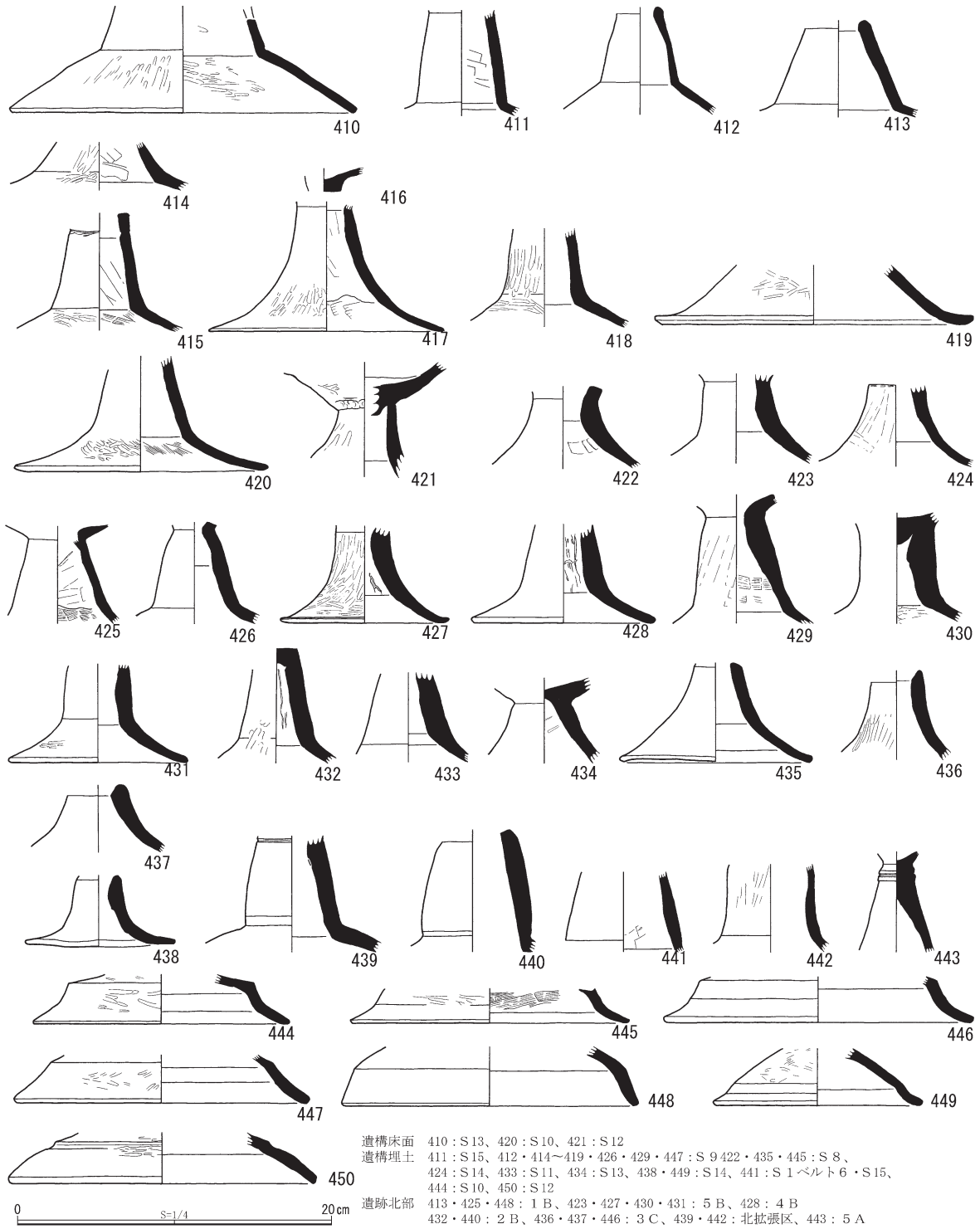


图 81 土器実測図 21 (土師器 9)

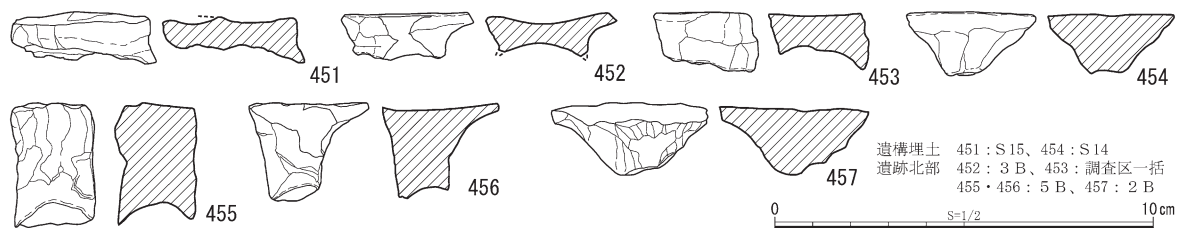
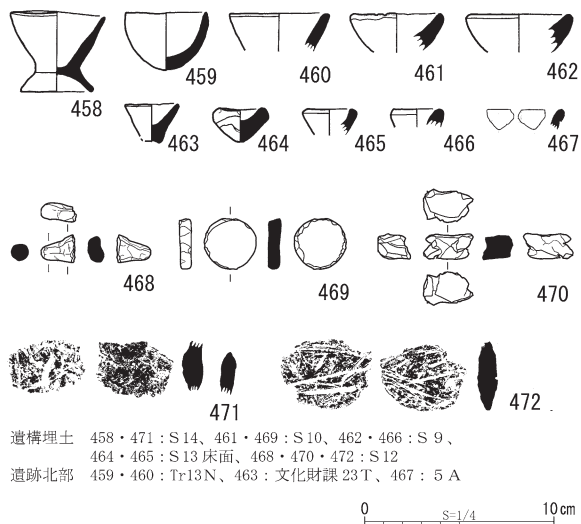


图 82 土器実測図 22 (土師器 10)



遺構埋土 458・471：S14、461・469：S10、462・466：S9、
464・465：S13床面、468・470・472：S12
遺跡北部 459・460：Tr13N、463：文化財課23T、467：5A

図83 土器ミニチュア品・土製品実測図

ない。180は胴部～頸部にかけての破片である。他のものがナデやハケメ調整が多いのに対して、内外面ともに縦方向のヘラミガキを施している。小片であり、全形は不明であるが、頸部の屈曲が弱いため、ここで図示している。181は頸部がしまった形態で、調整が不明瞭な部分が多いが、頸部～口縁部は横方向の調整を施している。胎土は他のものと異なり、礫を多く含む古墳時代的な胎土である。182は胴部の上半分ほどを欠失するが、全形をうかがうことができる資料である。頸部～口縁部にかけての屈曲が弱く口縁頸と胴部最大径はほぼ同じである。胴部は斜方向の調整であるが、頸部以上は横方向の調整を施している。底部は179と同様にわずかに上げ底気味である。また、胴部最大径付近に吹きこぼれと思われるススが薄くなった部位を確認することができる。

182～184は頸部の屈曲を縦方向のハケメによって作り出しているため、古墳時代に下る可能性があるが、形態やハケメを横方向のナデで消すなど弥生時代的な調整技法であるため、弥生時代に位置付けておく。185は口縁部付近の1/4程を欠失するがほぼ全形をうかがうことができる資料である。頸部～口縁部と底部付近を強いナデによって整形している点が特徴である。183・184とは逆に、口縁部や底部付近を強い縦方のイタナデで整形するなど、古墳時代の特徴がみられるが、形態的には弥生時代的である。底部は脚台状を呈する。

186～189は細片のため詳細な形態は不明であるが、弥生土器と思われる。186は緩く外側へ開いている。187は薄手の口縁部片で、口縁端部は若干肥厚し、端面は沈線状に浅く凹む。188は細片であるため、形状は不明であるが、突帯がついていることや胎土・色調などから弥生時代の土器と考えられる。ミニチュア品の可能性もある。189は胴部の細片で器種不明であるが、横方向の2条の沈線と縦方向の短い沈線が観察できる。胎土などから弥生土器と考えられる。

190～238は土師器壺と考えられる資料である。190～197は比較的残りが良くある程度全体をうかがうことができる資料である。190は口縁のみが欠損した資料で、胴部に穴が開いているが穿孔の可能性はある。198～200は短頸壺の破片で、外面はいずれミもガキが顕著である。201～203は広口壺の口縁部片で、外面は縦方向の調整が顕著である。

204～209は内湾する小型の壺口縁で、204・205は柑の可能性もある。このうち205は破片の中央付近にヘラミガキを残してその上下はスリップ状のナデを施してミガキを消している。210～214は小型の壺の口縁である。212は粘土帯の接合線を顕著に残す。213・214は壺と思われるが型式は不明である。213の下端部は粘土の接合面で剥離しているようである。215～227は、球胴から胴部が張りが大きい壺の胴部で小型のものが比較的大きい。口縁は204～211のような形状になると思われる。

229～232は大型の壺口縁で、228～230のような直口縁と、231・232のような二重口縁壺がある。小型の器種に比べると器壁が厚い点で区別される。223～238は中型～大型の壺胴部である。233・234のように外面にヘラミガキを施すものと、235～238のようにハケメを残すものがある。なお、



図 84 土製勾玉実測図

237・238 は同一個体の可能性がある。

239～279 は、土師器甕と考えられる破片である。239～253 は頸部で屈曲して口縁が外側へ開く形態のもので、胴部よりも口縁が広がる弥生時代的な形態を含むが、口縁部外面に縦方向のナデ・ハケメの調整によって頸部のくびれを強調しているものなどを土師器としている。248 は突帯の内面の形状から、249 のような形態を想定しているが、頸部はくびれない可能性もある。247 の底部は脚台状になるもの

と思われる。253 は形状や、内面の粘土帯の段などは壺に近い特徴であるが、頸部のくびれが弱いことから甕に分類した。

254～275 はいわゆる「成川式土器」で口縁部下に突帯をめぐらせているものが多いが、薩摩地域のように高台は付かず平底である。254・255 は突帯付近で若干くびれ、その後口縁が外側に開いており、この中では古手の形態である。調整等の作りも他のものに比べると丁寧で、県南内陸部の土師器甕に特徴的な粘土帯の接合線もみられない。また突帯も高くシャープで、刻みの間隔もそろっている。256～263 は胴部から直線的に口縁に達するもの、264～267 は突帯付近で一度くびれるもの、269～279 は口縁部が内側へ湾曲するものである。図示したような流れに対応するように、作りが雑になっているが、詳細な検討は次章で行っている。

280～341 は、弥生土器および土師器の胴部から底部の破片である。289 から 291 のように、弥生時代中期頃の甕底部とわかるものもあるが、「成川式土器」の甕は平底であり、胴部および底部片では弥生土器と土師器の区別が難しいものが多いことから、一緒に報告を行っている。多くが平底で、丸底は 235・236 と少ない。このほか、237～341 は底部が自重により若干潰れてような状態を呈している。340・341 は一見底部中央に孔があるように見えるものであるが、おそらく粘土接合面で剥落したものと考えられる。

342～359 は土師器鉢と考えられる破片で、348～351 は口縁端部が短く外反している。355 はコップ形を呈する。357 は内外面の粘土帯接合線を残している。360 は器種が不明であるが、ヘラミガキの施し方等、調整の技法的には須恵器の蓋を模倣しているようにもみえるため、模倣杯の可能性はある。

361～450 は高坏と考えられる破片である。堅穴建物跡 5 から出土した個体は全形を知ることができる。これらは坏部の稜はやや鈍いが、脚柱と裾部の境の稜は明瞭で内面の稜は鋭い。また、脚柱部はエンタシス状にわずかに中央が広がっている。その他の高坏では、坏部は稜が鋭いものから稜を持たないものまで幅広い形態のもので出土している。脚部は裾に向かって「八」字状に広がるものが中心であるが、439～441 のように筒状の脚柱部に裾を接合したものや、444～450 のように坏部を反転したような形態のものもある。これらの中で 443 は脚柱上部付近を肥厚させ、そこに沈線状の線を廻らせている点が特徴的である。坏部が接合面で剥落したと考えているが、上下が逆であることや、高坏以外の器種である可能性もある。大年遺跡で出土している高坏の特徴として、巻頭図版 8-1 にみるように、焼成後にスリップ状の粘土を部分的に塗布しているものがある点を挙げることができる。土器がまとまって出土した堅穴建物跡 5 の高坏に顕著である。このほか、426 は高坏脚部を轆の羽口に転用しており、脚柱上部付近が溶融している。

451～457 は、高坏脚柱部あるいは坏底部に充填した粘土が剥離したものである。時間的・空間的に近い時期の遺跡である平峰遺跡でもこの部分は多く出土しており、製作技法的にこの部分が剥

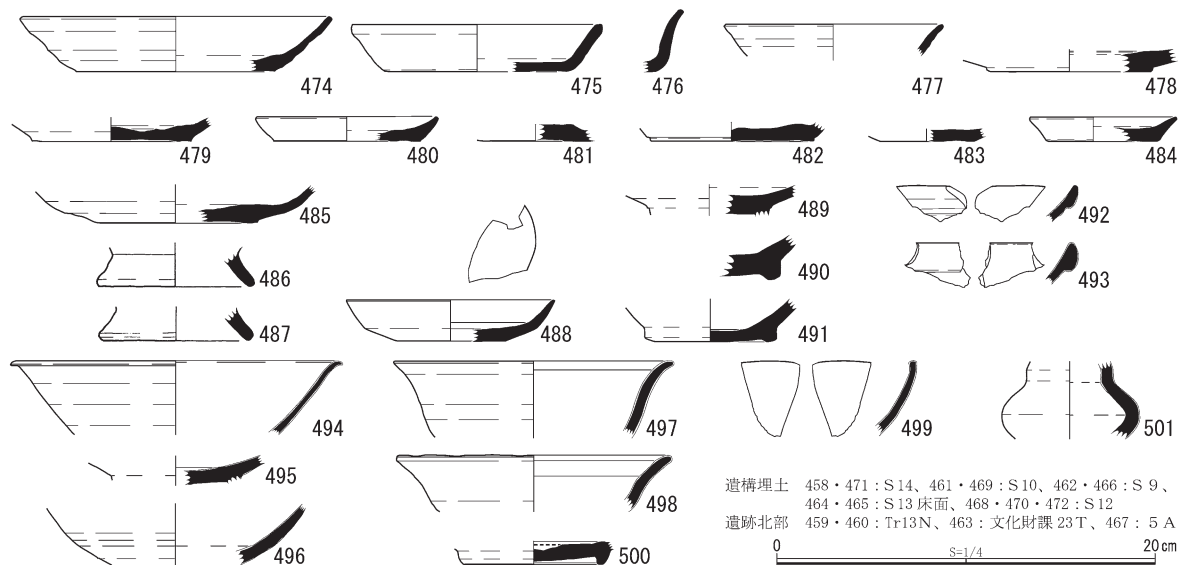


図 85 土師質土器・磁器実測図

落しやすいものであったと考えられる。ただし、平峰遺跡では、457 のように脚柱部内へ飛び出たものが多く、451 や 452 のようなものは少ないため、時期的な違いを表している可能性もある。

ところで、高坏の製作に関しては、脚柱部や裾部、坏底部と口縁部、そしてこの充填部など、結節点となる部位は、割れたというよりも粘土の接合面で剥離したと思われる状態のものが多々みられる。そのため、甕の製作にも通じる点であるが、土器の製作において、各部位の製作段階の間には粘土が乾燥する程度の時間的空隙が存在していると想定される。

458 ～ 468 はミニチュア品と考えられる小型の土器であるが、498 が甕の把手に類似しているほかは、何を模しているか不明である。469 は土器片を円板状に加工した土製品である。破面は研磨を行うことによって面取りを行っている。470 は土器片または土製品、あるいは焼成粘土塊と思われるが破片のため不明である。表面はナデられており土器の表面と類似した状態である。土器 471・472 は焼成粘土塊で、表面には混和剤と思われる植物の繊維痕がみとめられる。473 は土製勾玉で、堅穴建物跡 5 (S 13) 床面においてミニチュア土器 (464) の近くから出土している。

古代～中世の土器類

古代以降の土器・陶磁器は、近世にいたるものまで出土しているが、報告した遺構に伴うと考えられる遺物が少なく、また細片で図化に耐えないものが多いため、ここでは代表的なものについて図化を行った。474 ～ 487 は土師質土器で、485 ～ 486 が糸切り底であるほかはヘラ切底であると思われるが、小片のため明らかでないものが多い。488 ～ 493 は白磁で、489 ～ 493 の IV 類を中心として、II 類 (488)・V 類 (494)・VI 類 (495)・VIII 類 (496) と考えられるものがみられ、12 世紀頃が中心となるようである。比較的時期がまとまっているため、この時期に遺跡利用の一つのピークが存在することが考えられる。497 ～ 499 は龍泉窯系の青磁である。494 は無文あるいは口縁外面に輪花を施すが不明瞭である。498 は無文、499 は簡略化した連弁文が施されている。501 は青花の小瓶である。

(2) 石器

石器は包含層出土資料がほとんどであり、また、土器のように形状によって帰属時期を決定する

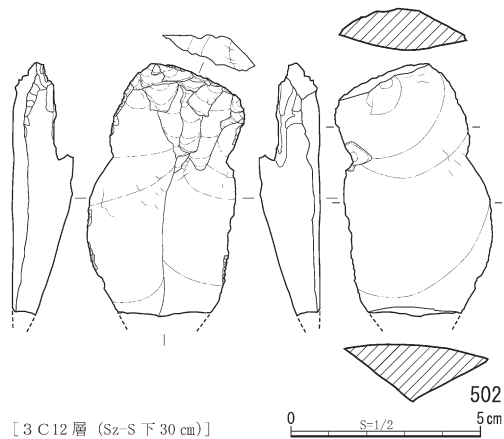


図 86 石器実測図 1 (旧石器)

部を折損している。図正面の基部付近は形状を整えるための剥離がみられるが、剥離は裏面には及んでいない。また、縁辺には部分的に細かな剥離がみられる。桜島薩摩火山灰 (Sz-S) を含む基本土層 11 層の下面から約 30 cm 下位、基本土層 12 層の中程から出土している。この他、図化していないが、黒曜石の剥片が基本土層 12 層から 1 点出土している。

縄文時代早期の石器としては、打製石鏃が 2 点 (図 87-509・538) 出土している。538 は桜島 11 テフラを含む基本土層 9 層下半、509 は桜島 11 テフラと桜島薩摩火山灰の間の基本土層 10 層から出土している。538 は姫島産黒曜石製である。この他、図化していないが、基本土層 10 層で黒曜石の剥片が 1 点出土している。

鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah) 層～霧島御池軽石 (Kr-M) 層間の石器

縄文時代前期から中期に該当する時期である。基本土層 8 層上面付近で石鏃 (図 87-503) が 1 点出土している。基本土層 8 層は鬼界アカホヤ火山灰層であるため、前期のものと思われる。

霧島御池軽石 (Kr-M) 層上位の石器

およそ縄文時代後期から中世までの幅広い時期を含む層である。石器の多くは 4 層と 5 層から出土しており、出土している土器の様相からすれば、縄文時代晩期のものが多いと思われる。なお、図化していないが、次章で検討をおこなっているように、黒曜石の剥片類が遺跡の南北調査区を合わせて約 1 kg 出土している。その他にもチャートの剥片などが出土している。

503～566 は石鏃であるが、既述のように 503 は前期、509・538 は早期のものであるが形態的に大きく変わらないようである。503～511 は、平面三角形の凹基式石鏃で、基部の挟りは深い物から浅いものまでである。この形態の石材はチャート製品がほとんどであり、黒曜石製のもののみ見られない。512～520 までは、平面形が整った五角形の凹基式石鏃で、脚部先端は台形状を呈する。516 は姫島産黒曜石製であるが、その他はチャート製である。521～529 は平面不整五角形の挟りが浅い凹基式で、特に 524～528 は形が崩れている。529 は先端が欠損したのを修正してしたものと考えられ、本来は整った五角形状であったと思われる。この形態では 524・527・529 が黒曜石製である。530～532 は破片で全形が不明であるが、凹基式あるいは平面五角形状を呈すると考えられるものである。533 は、未成品の可能性のある資料である。534 も全形は不明であるが、平面五角形状を呈すると考えられるものである。533・534 は黒曜石製である。535～547 は、平面三角形の平基式あるいは基部の挟りがごく浅いものである。543 の側辺は鋸歯状を意識したような凹凸が若干みられるほか、平面形態も五角形状に近いなどの特徴がみられる。これらの中では、535

ことが難しい。そのため、以下では鍵層となる火山灰を基準として区切り、その様相をみることにする。

鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah) 層下位の石器

厳密に言えば、入戸火砕流二次堆積物～鬼界アカホヤ火山灰の間の層であるが、入戸火砕流二次堆積物層下位の調査は不可能であるため、ここでは鬼界アカホヤ火山灰層下位と表記している。鬼界アカホヤ火山灰層下位は、旧石器時代から縄文時代早期に該当する層位であり、旧石器の可能性のある剥片 1 点、縄文時代早期と考えられる石器が 2 点と、数は非常に少ない。旧石器は剥片 1 点 (図 86-502) のみであるが、先端

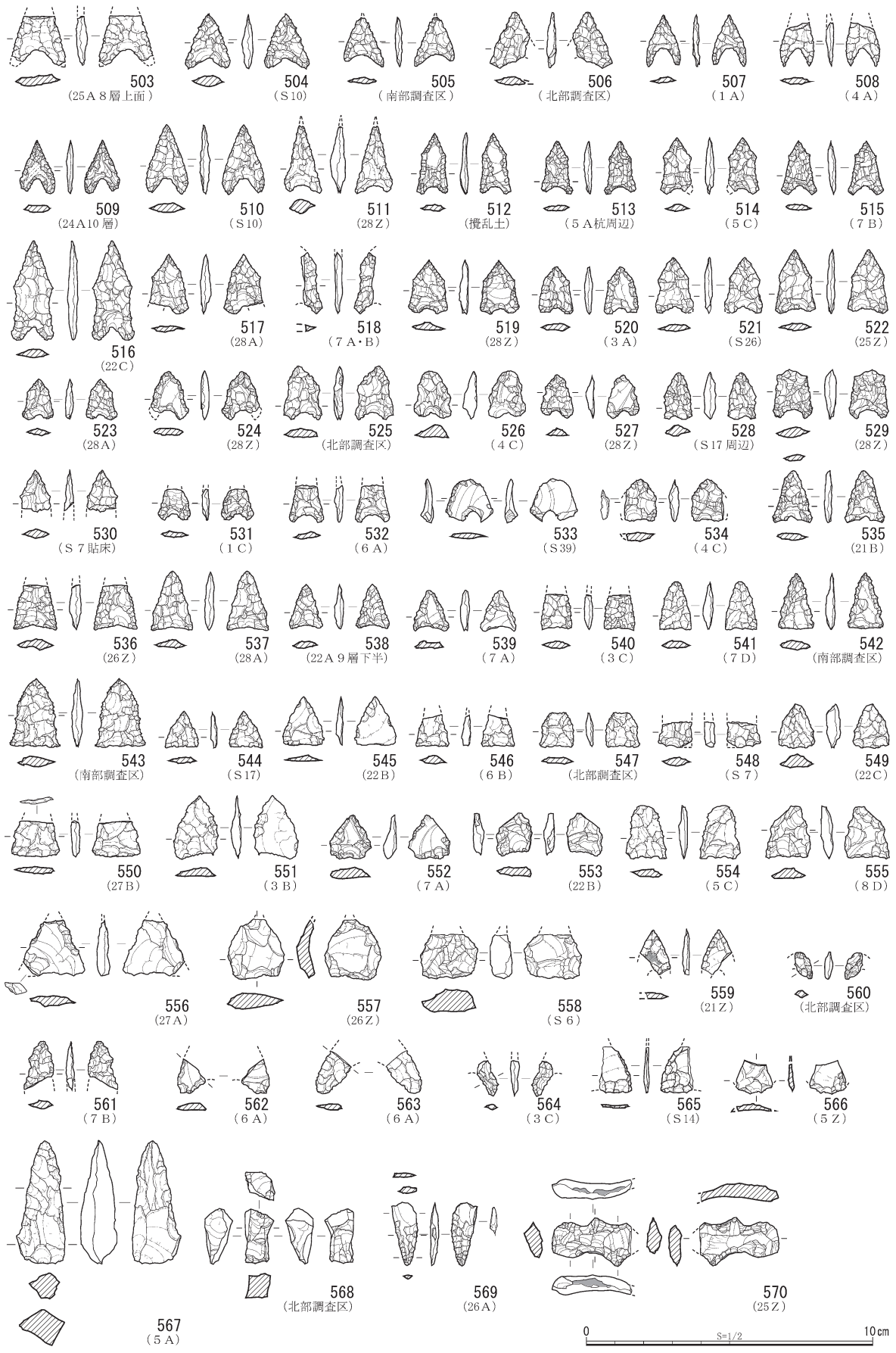
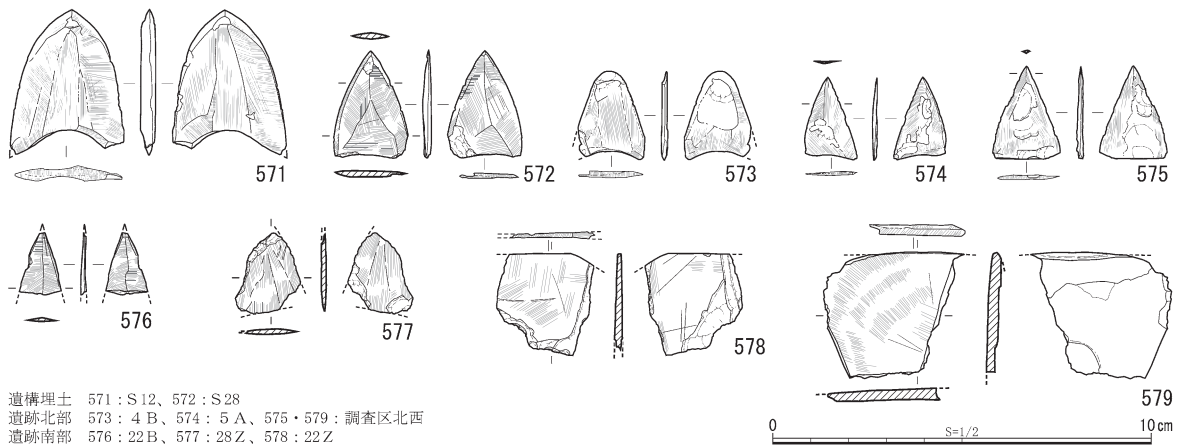


図 87 石器実測図 2 (打製石鏃・小型石器)



遺構埋土 571 : S12、572 : S28
 遺跡北部 573 : 4 B、574 : 5 A、575・579 : 調査区北西
 遺跡南部 576 : 22 B、577 : 28 Z、578 : 22 Z

図 88 石器実測図 3 (磨製石鏃・磨製石器破片)

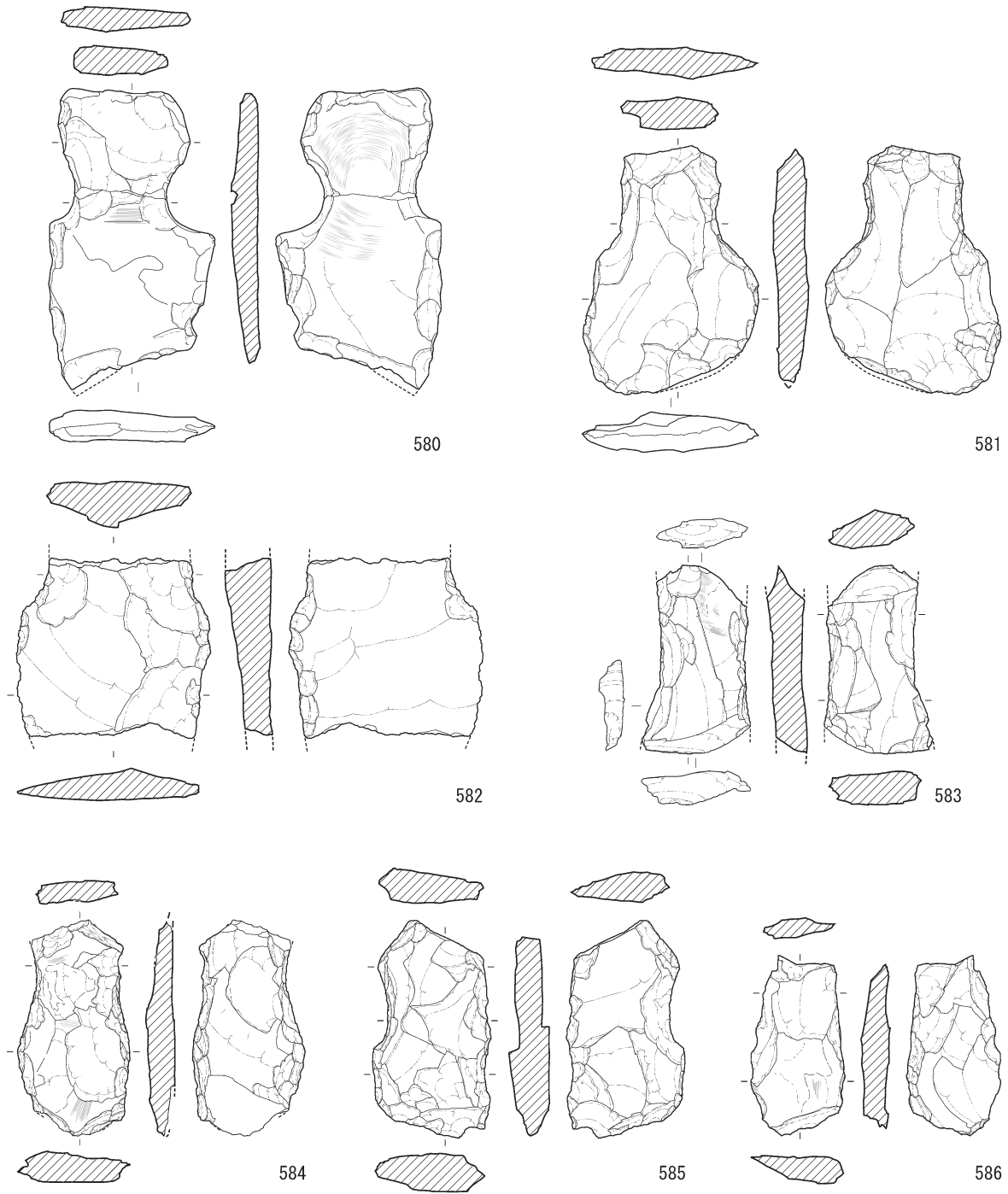
と早期の 538 が黒曜石製であるほか、安山岩系と思われる石材を使用が多い (541・543～546)。548～550 は基部が凸基気味を呈するものである。551～558 は未成品の可能性のあるものである。551・552 は正面の剥離に対して、裏面の剥離が著しく少ない。553～558 は平面形が不整形で、厚みが成品に比べると厚い。559～566 は石鏃の破片と考えられるものである。

567～570 は小型の打製石器で、567 は尖頭器状の石器、538 は楔形石器、569 は石錐、570 は異形石器である。569 の先端付近は使用によるためか摩耗した痕跡がみられる。570 は平面形において凹んだ部分 (図の網掛け部分) が、範囲は狭いものの摩耗が顕著である。このような位置やその摩耗の仕方から、この部分に紐などを掛けていたことが想定され、衣類の留め具やアクセサリとして日常的に使用されていた状況が想定できる。このような異形石器は鹿児島県内でもみられ、「単独で使われたとは考えにくく、(中略) 衣類やヘアバンドなど身に付けるものに縫いこんであったのではないかと考えられている (鹿児島県教育委員会 2006 : p. 267)。

571～577 は磨製石鏃、578・579 は磨製石器片である。571 は身部中央に凹みを作りだしたもので、銅鏃状の形態を呈する。厚さも他の磨製石鏃に比べると厚い。図正面右側の脚は端面に擦痕が確認できるため、意図的にこの形状を作り出していると考えられる。次章で簡単に検討しているが、弥生時代終わり頃のものであると思われる。572 も他の石鏃に比べるとやや厚い。576・577 は磨製石鏃と考えられるが、破片のため詳細は不明である。578・579 も破片のため器種などは明らかでないが、579 は石庖丁の破片の可能性はある。

580～586 は打製石斧であるが、582～586 は刃部と基部をともに欠損している。580～581 はある程度形状をうかがうことができるが、形態はそれぞれ異なる。580 は袈りを入れて肩部を作り出しているのに対して、581・582 は基部を細くして卓球のラケットのような形状となっている。肩の作りは左右対称ではなく、一方の肩の幅が大きくなっているが、その大きくなっている方の身部が短くなっている。この状況からすると、左右対称ではない形状と使用状況に関係性がある可能性もあるが、数が少ないため不明である。なお、580 は図示したように、袈り付近に同心円状の擦痕が認められる。587 も打製石斧であると思われるが、他のものとは異なり、縁辺を打ち欠いて簡略に整形しており、自然面と思われる面を残す。また、図下部だけでなく、上部も刃部状を呈する。

588～593 は磨製石斧で、588 を除くと磨滅が著しかったり、破片であったりと詳細がわかるものが少ない。583 は幅の狭い肩部を作り出した磨製石斧であるが、基部側の研磨は顕著ではない。肩部の剥離は節理面と思われる線よりも上にあり、この節理面を意識しているようにもみえる。



遺構埋土 580 : S 8 ・ 1 A、581 : S 33

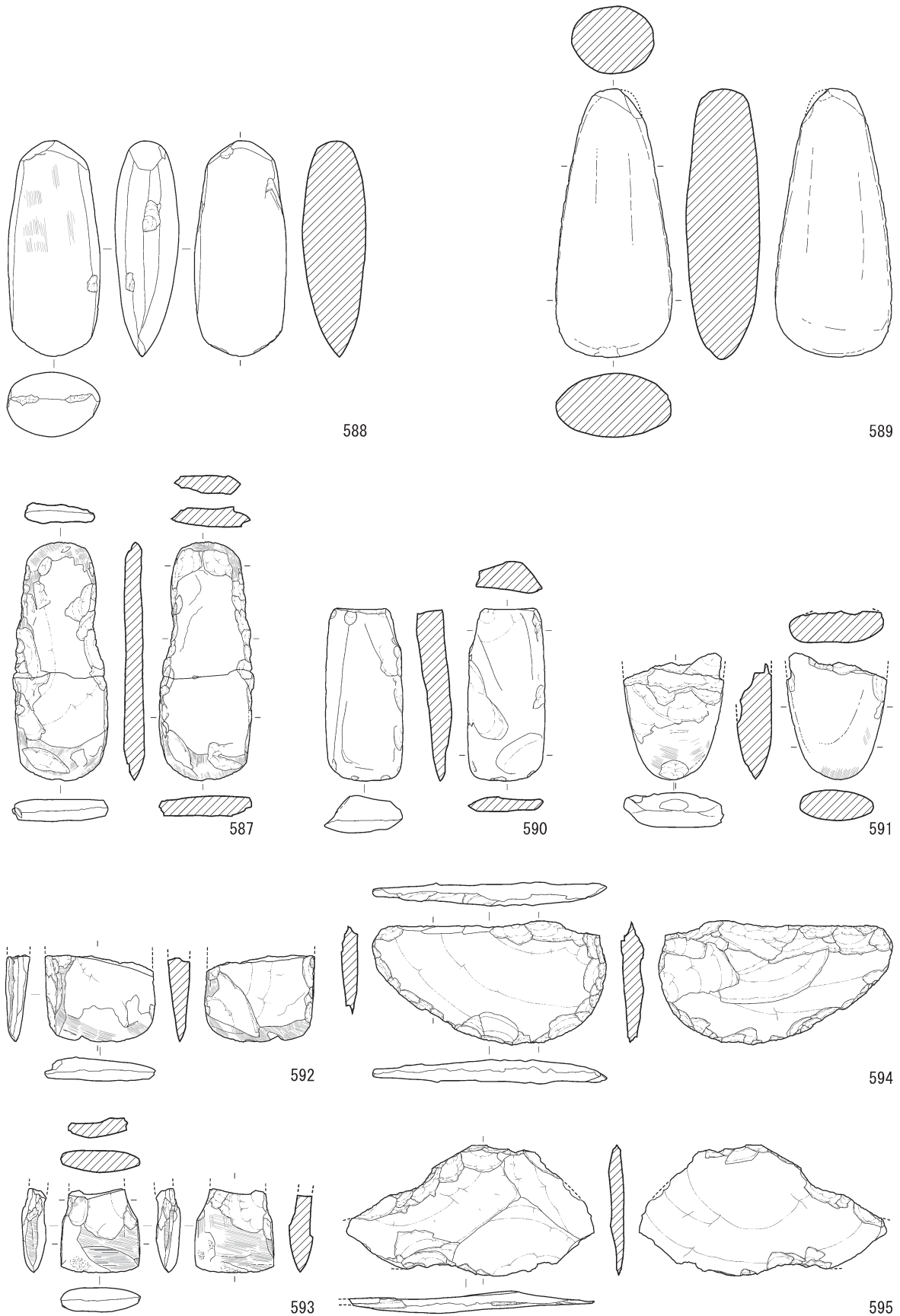
遺跡北部 584 : 6 B、586 : 7 B 遺跡南部 583 : 27 A、585 : 28 Z

0 S=1/3 20 cm

図 89 石器実測図 4 (打製石斧)

594・595 は横刃形石器で、横長剥片状の剥片を利用して石器である。図下辺は刃部状を呈するが使用によると思われる細かな剥離は顕著ではない。スクレイパーあるいは打製石庖丁などの用途が考えられる。

596～599 は小型の敲石である。596 は上下の平らな面を若干残して、それ以外はほぼ全面に敲打痕状の潰れがみられる。大人が手に持って使用するには小さくて不便であるように思われる。側面の中央付近には比較的明瞭な稜がみられる。597 は、側面全体に敲打痕状の潰れがみられるが、596・597 のような顕著なものではない。598 は側面全体に敲打痕状の潰れが認められるが、その範



遺跡北部 587: 1 A、588: 6 A、590: 3 B、591: 文化財課22 T、593: 6 D
 遺跡南部 589: 22 Z、592: 28 Z、594: 23 A、595: 25 Z

0 $S=1/3$ 20 cm

图 90 石器実測图 5 (磨製石斧・横刃形石器)

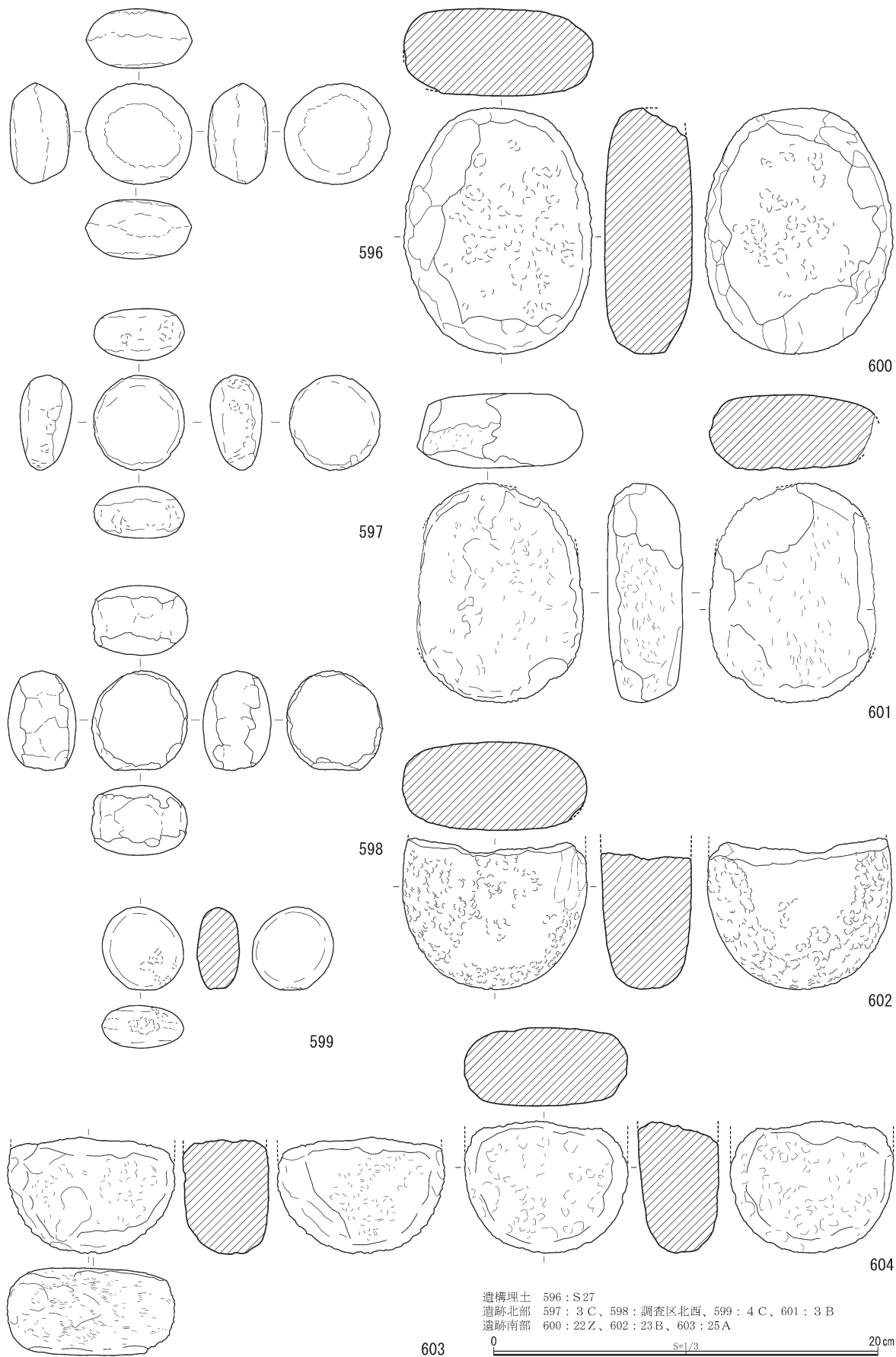


图 91 石器実測图 6 (磨石・敲石等 1)

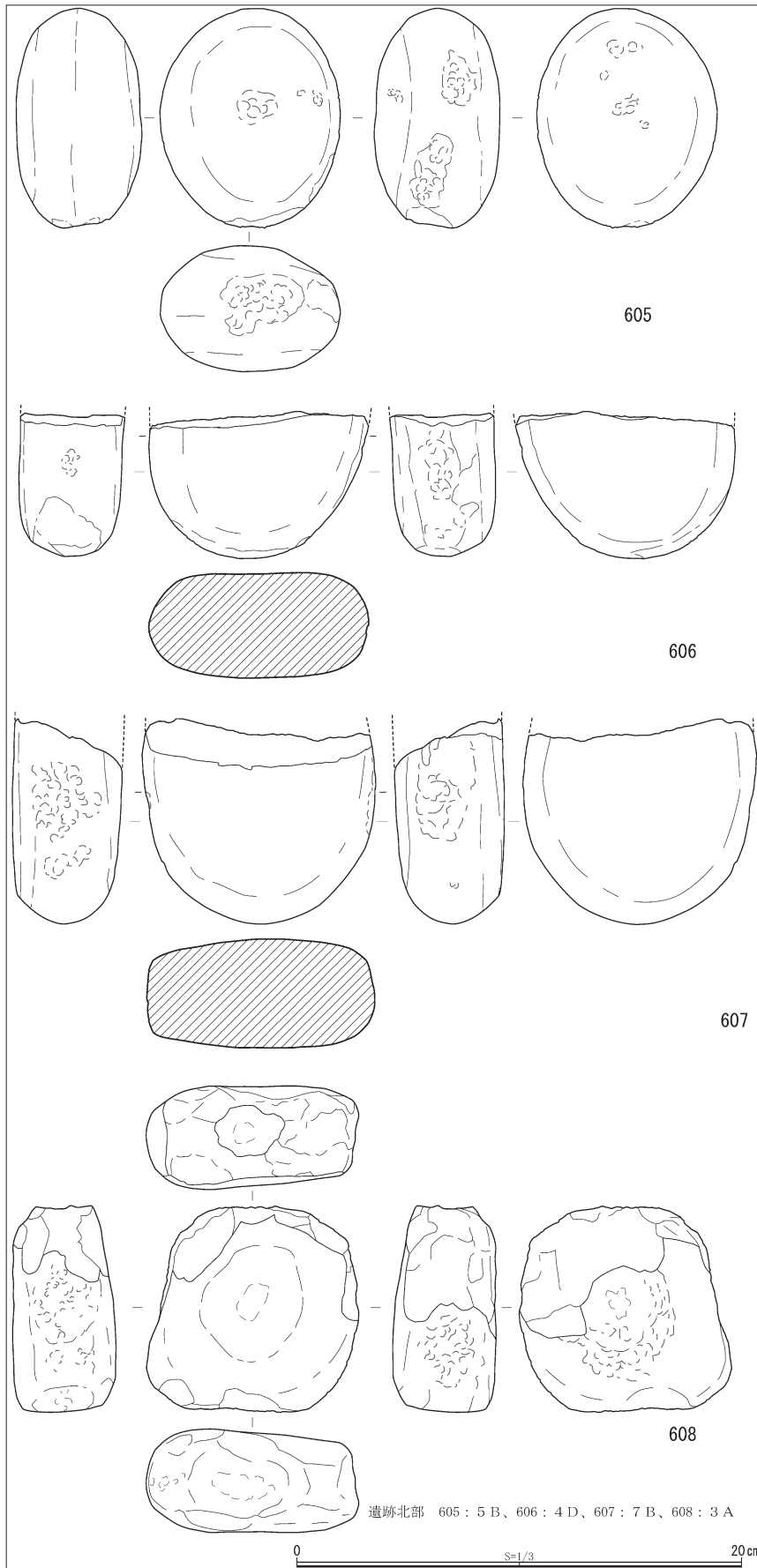


図92 石器実測図7（磨石・敲石等2）

圈は596のように上下面にまでは及んでいない。599は側面の一部に敲打痕状の潰れが集中している。

600～607は磨・敲石である。形態的には上下の面が扁平なものが多い。機能としては、使用により上下面が平滑になっているとともに、側面に敲打痕状の潰れもみられるものがあり、磨石・敲石として多機能的に使用していたと考えられる。この中で、601・603は日南層群で産出する大型有孔虫化石であるオパキュリナ・コンプラターナを含む特徴的な砂岩（宮崎地質研究会2013）であり、沿岸部からもたらされた可能性がある点で特筆できる。

608は凹石で、一部剥離して不明瞭な部分があるが、上下および各側面の6面全てを使用している点が特徴的である。これらの凹みは側面よりも上下面の方が深く凹んでいる。

609は敲石の可能性のある礫であるが、はっきりとした使用痕跡は認められない。また、全面が平滑で光沢があるものの、特に使用や

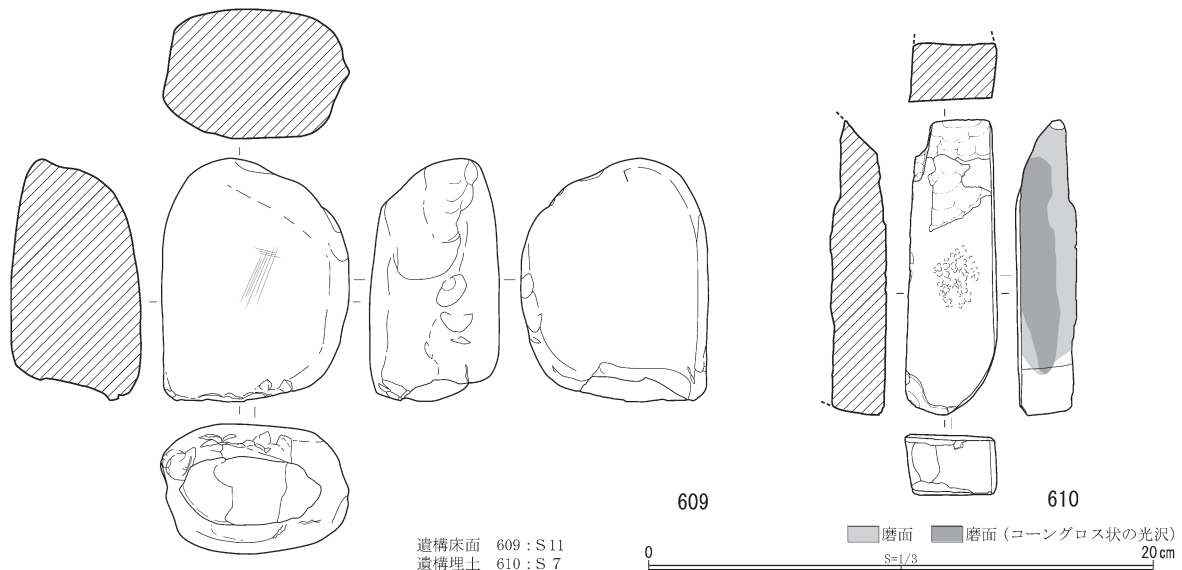


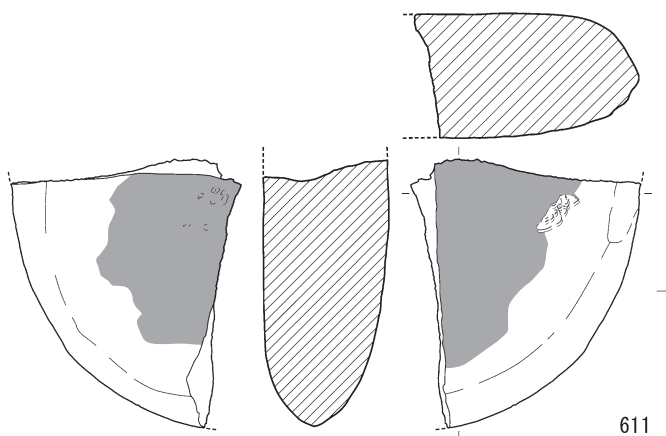
図 93 石器実測図 8 (磨石・敲石等 3)

加工によるものではないと思われる。

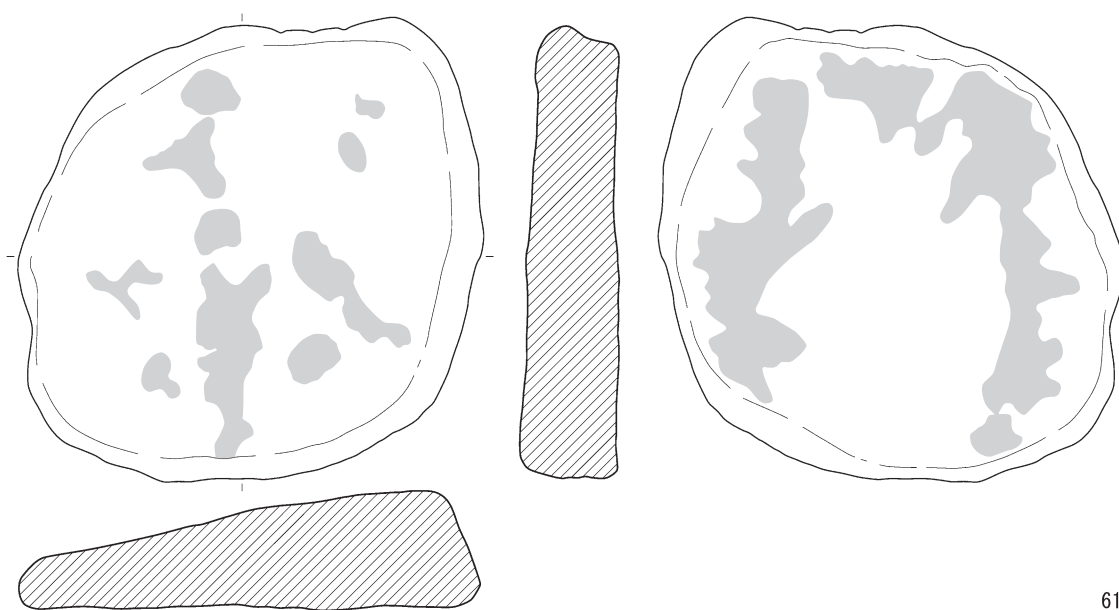
610 はコーングロス状の光沢のある磨面をもった石器の破片である。図正面には敲打痕状の潰れも認められる。砥石の可能性もあるが、砥石ではコーングロス状の磨面は形成しないと思われる点や潰れが認められることから、台石あるいは磨石などの機能が想定される。

611～621 は台石類である。磨面を形成しているものは台石として機能したことが考えられるが、中には特に加工が認められないものもみられる。これらの加工が認められない石器については、遺構内から出土しており、意図的に持ち込まれたと考えられるものについて図化を行った。また、被熱によるためか淡く赤化しているものも目立つ。611 側面が被熱によるためか淡く赤化している。612 は磨面や使用痕はみられないが、大型であり比較的平坦な面を有していることから、台石的な使用を目的として持ち込んだ可能性が考えられる。613 は磨面を形成しているほか、一部に「V」字状の凹みが認められるため、砥石として使用した可能性も考えられる。614 は一部磨面状の平滑な面を形成しているほか、被熱によるためか淡く赤化している。615 は図化した面に磨面を形成しているが、それ以外の部分は剥落が顕著である。616 は顕著な磨面を形成している。他の台石でみられたように被熱による淡い赤化が認められる他に、側面が黒く変色している。617 は、図化した面が緩く湾曲しており、磨面状を呈するが顕著ではない。それ以外の面は剥落が顕著であり、若干赤化しているため、熱が加えられることが多かったのかもしれない。618 は破片であるが、図示した二面に磨面を形成している。619 は正面・裏面に明確な磨面を形成している。また、図正面には敲打痕状の潰れがみられるとともに、被熱によるためか赤化とともに黒く変色している箇所がみられる。620 は図正面に二面の磨面を形成しているが、一面は被熱によると思われる赤化が顕著であるが、この赤化した面の方が古い使用面である。621 は鉄錆の付着が著しい石器で、鉄器の製作に関連した機能が想定される。磨面の上に錆が付着しているため、台石などを転用している可能性があり。錆は角部分に多く付着しているため、この部分を利用した金床石と考えられるが、被熱した痕跡は乏しい。

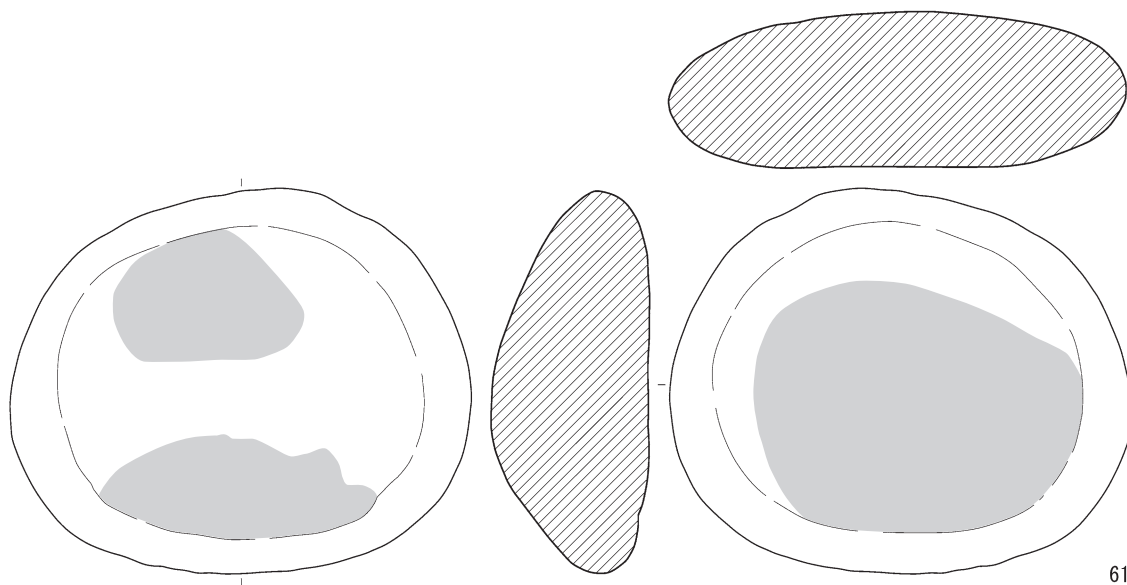
624～626 は軽石加工品および大型の軽石であるが、表面の風化が著しい。624 は上面の中央付近を浅く凹ませており、径 1 cm ほどの穿孔が施されている。用途は不明である。625・626 は特に



611



612



613

遺構床面付近 612:S7、613:S8 遺跡南部 611:18A
 ■ 磨面もしくは滑らかな面 ■ 磨面 (コーングロス状の光沢)

0 S=1/4 20cm

図94 石器実測図9 (台石・大型礫等1)

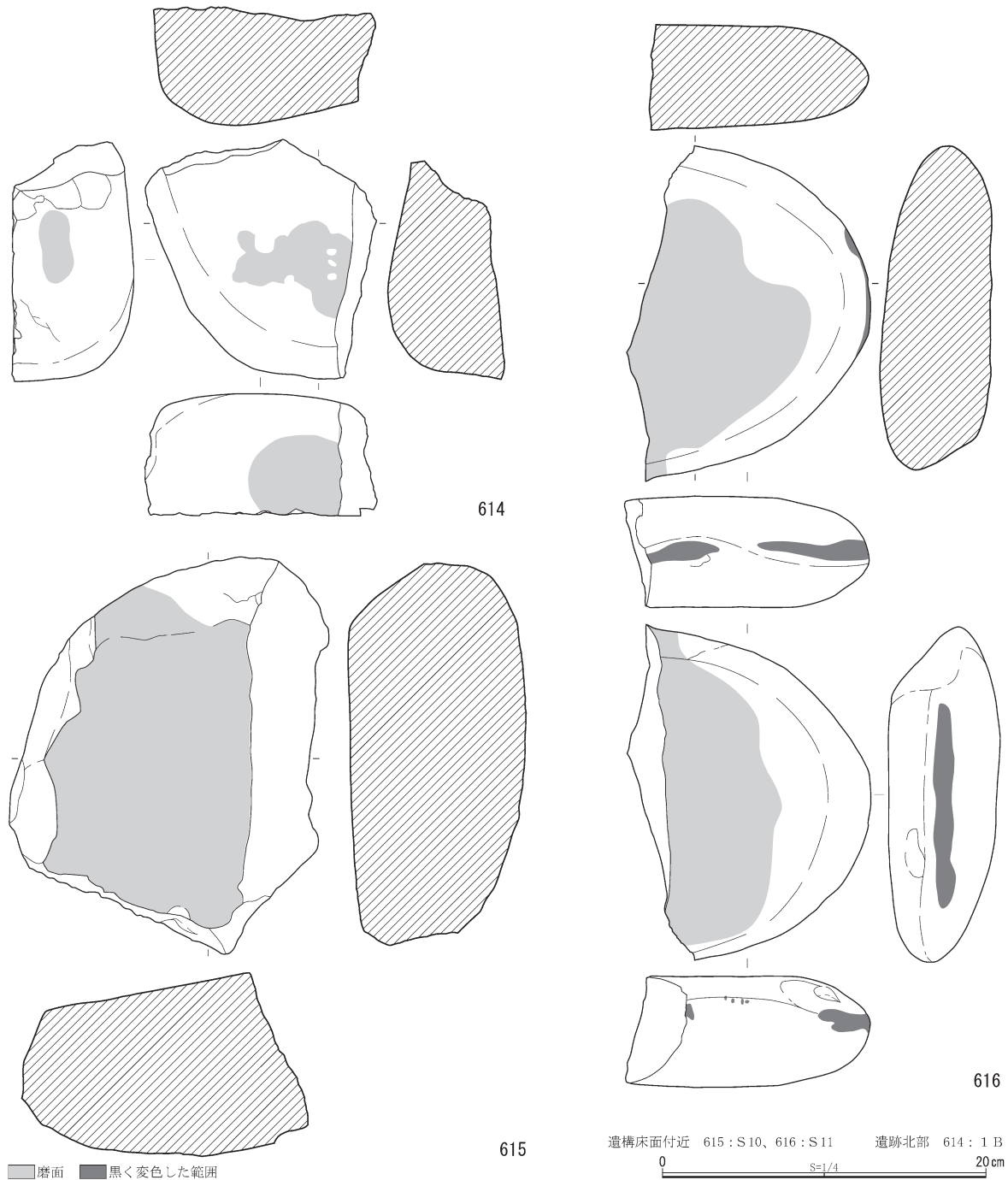
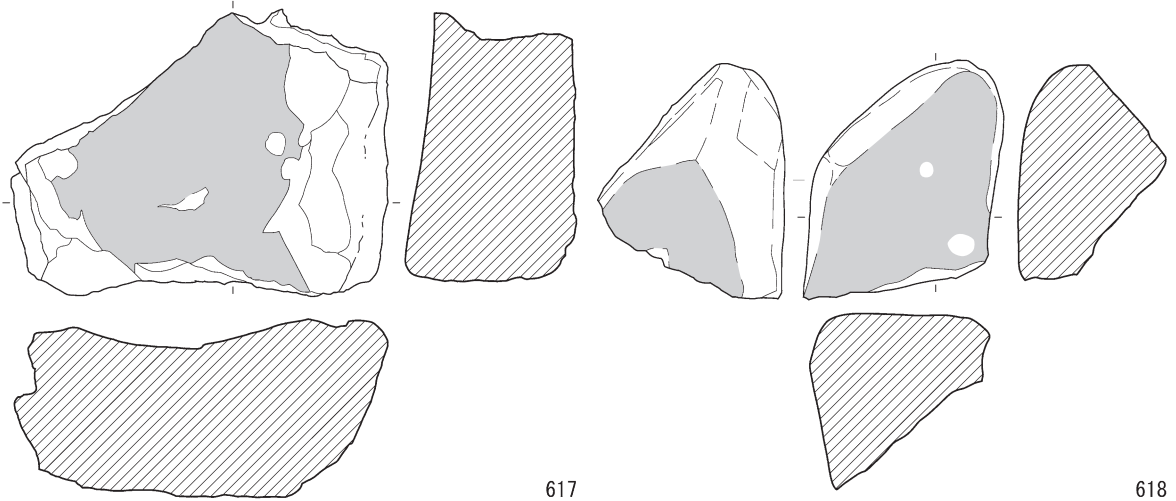


図 95 石器実測図 10 (台石・大型礫等 2)

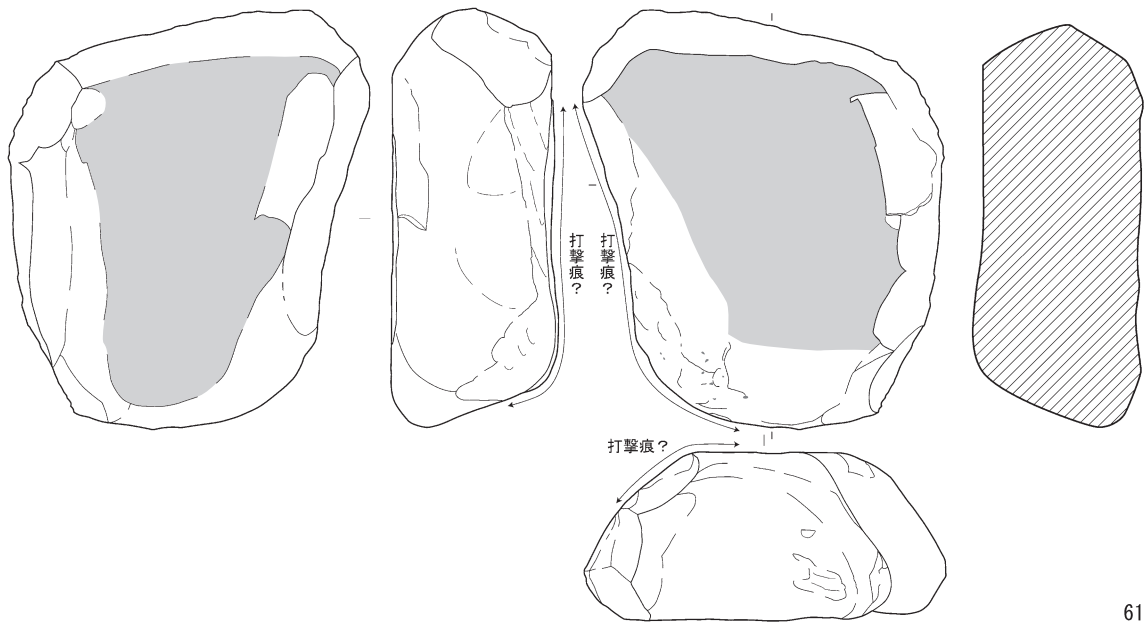
加工はみられない自然のものと思われる大型の軽石である。624～626の軽石はいずれも基本土層 5 a 層からの出土であり、霧島御池軽石層の基本土層 6 層にもこのサイズの軽石はみられないため、何らかの理由で人為的に持ち込まれたものと思われる。

627～632は砥石で、出土層位から、627・628が中世、そのほかは古墳時代以前のものと思われる。627は図正面には断面「V」字状の溝が中央にみられる。628は使用による研ぎ減りが著しい。629は図下側面にも擦痕が認められる。各面ともに擦痕が認められるため、石製品の可能性もある。630は節理面での剥離が著しい。631・632も原形は不明であるが、正面・裏面および側面を使用している。

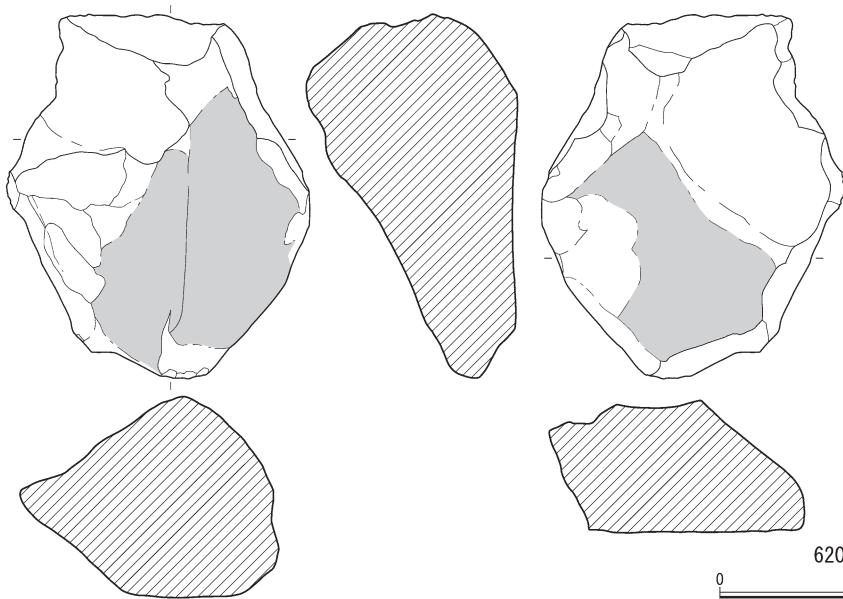


617

618



619



620

遺構関連 620 : S 7 ビット
遺跡北部 618 : 1 C、619 : 4 C
遺跡南部 617 : 25 A

磨面 鉄錆状付着物

0 S=1/4 20cm

図 96 石器実測図 11 (台石・大型礫等 3)

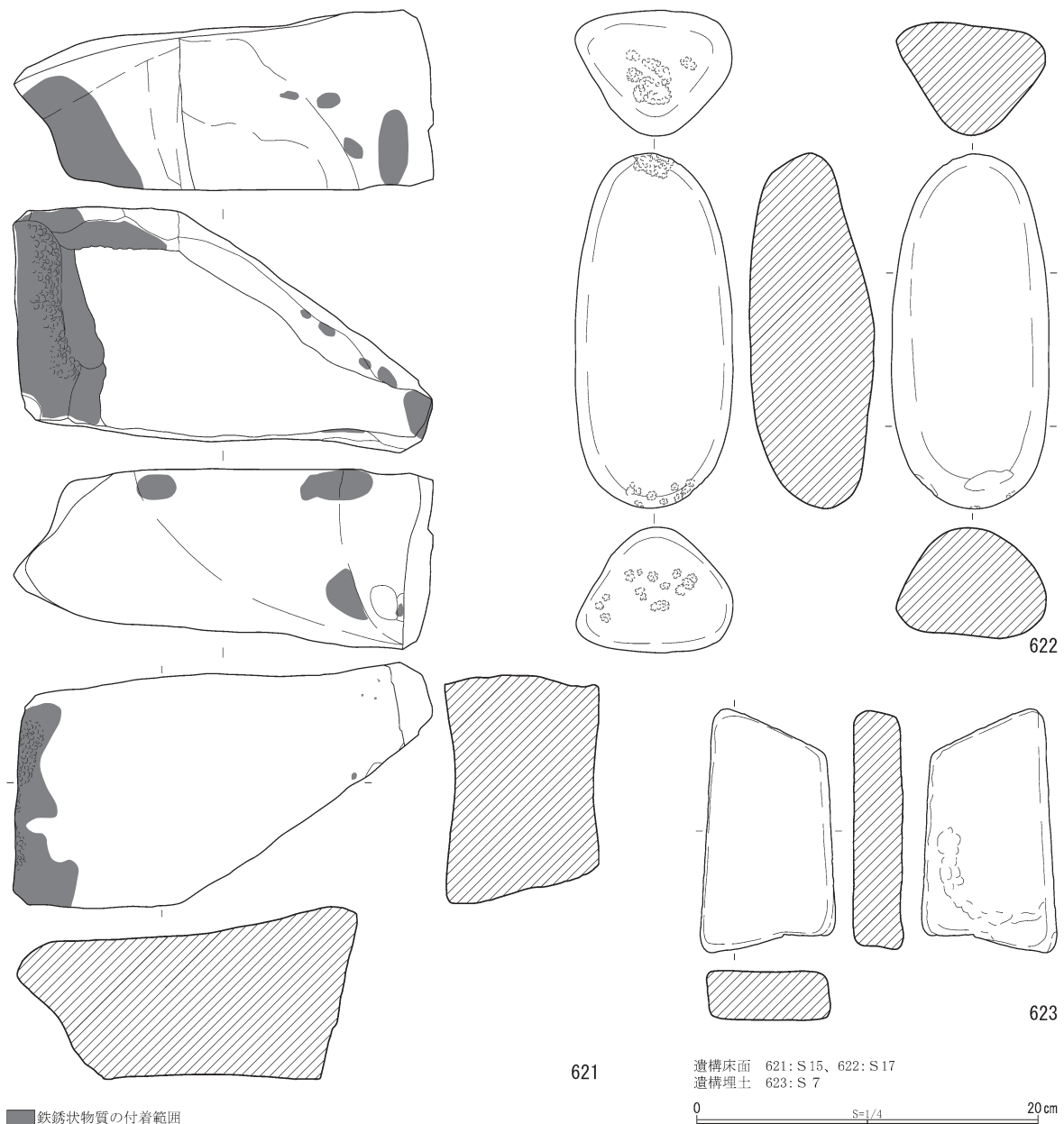


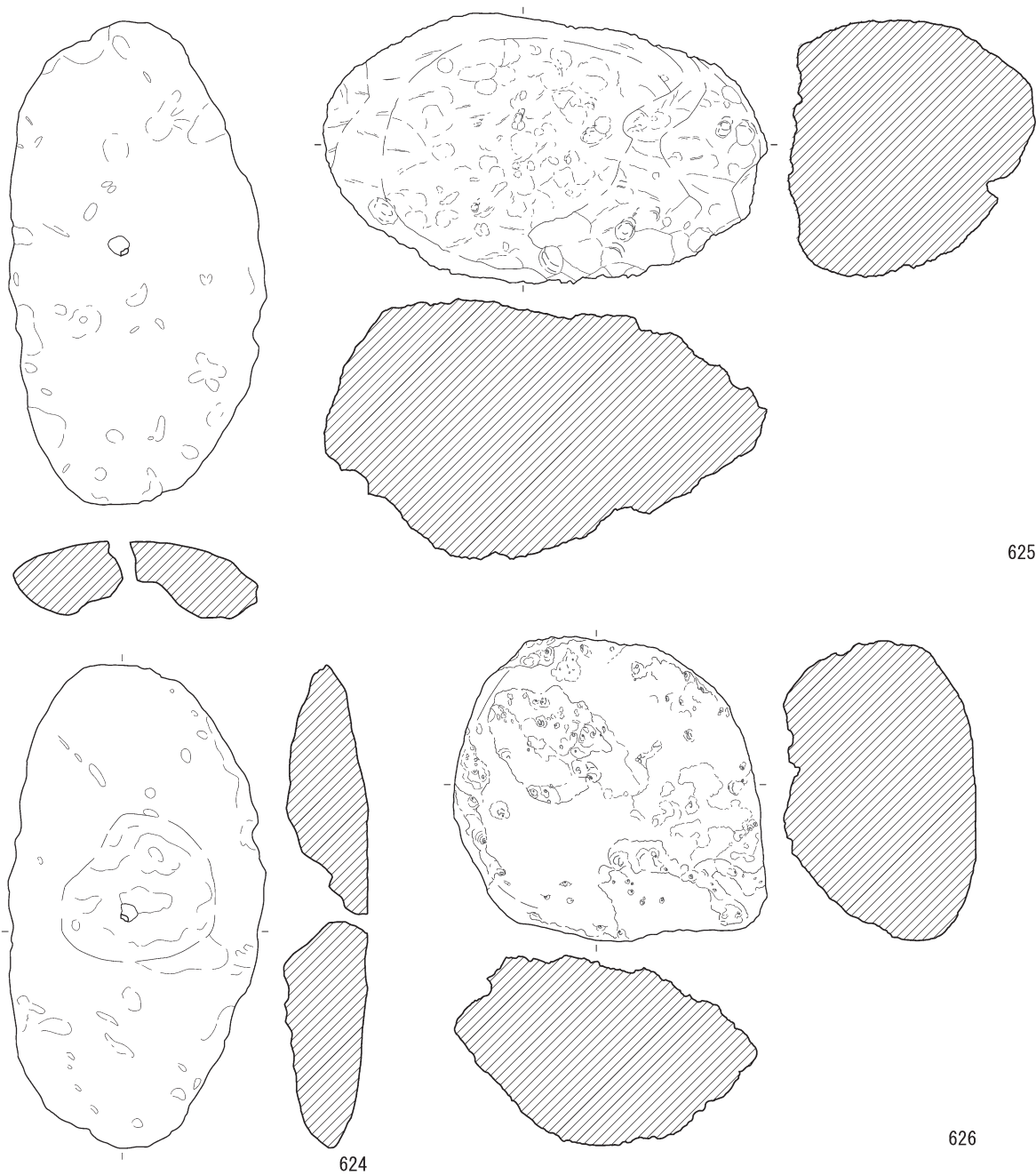
図 97 石器実測図 12 (台石・大型礫等 4)

633～636は石製品で、633・634は管玉、635～637が滑石製石鍋の再加工品と破片、638が石製の円板である。633は翡翠製と考えられる。また、切断しようとしたためか、浅い「V」字状の凹みが廻っている。635は杓子状に再加工が行われている。杓子状の石鍋再加工品は筆無遺跡でも出土している。636は石鍋の口縁部付近の破片で、口縁部下に断面台形状を呈すると思われる長めの鏝が付いており、木戸分類Ⅲ-a類（木戸2004）に該当し12世紀頃のものと考えられる。637は石鍋片で、図下部の破面の一部に加工が認められる。

(3) 青銅器・鉄器

鉄器

639～644は鉄鏃と考えられる破片であるが、全体の形状がわかるものは639のみである。642は身部の両面中央に木質が錆着している。646は刀子あるいは刀剣類の刃部と考えられる破片である



遺跡北部 624 : 2 C、625 : 2 Z、626 : 2 A

図 98 石器実測図 13 (軽石類)

が、小片のため詳細は不明である。

647 は刀子と考えられる破片であるが、棟側が関状を呈する。648 は鉈と考えられる鉄器で、全体を二つに折り曲げているほか、さらに中央付近で緩く屈曲している。刃部側は錆化により剥落しているが、刃部付近はわずかに残存している。刃部は、断面は浅い「U」字状を示すが、鋸状には広がらないようである。649～653 は明瞭な刃部を形成していない器種不明の鉄器である。649 は図右上隅を落ち曲げているように見えるが、錆化によるはっきりしない。651 は楔、652 は釘状を呈する。

654～655 は器種不明の鉄片で、655 は縁辺を折り曲げるとともに、鉄板部分には若干の凹みが

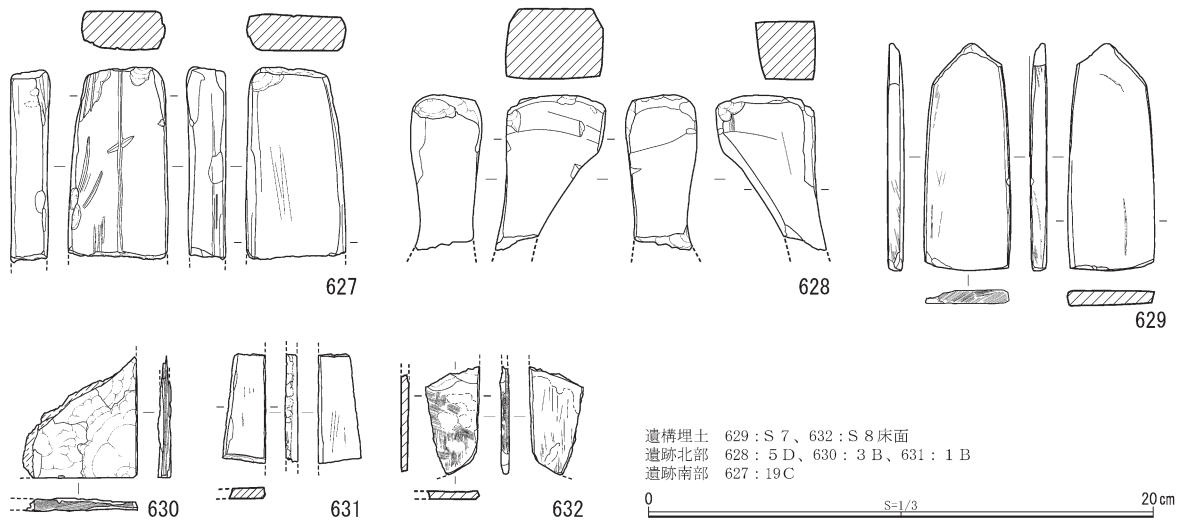


図 99 石器実測図 14 (砥石)

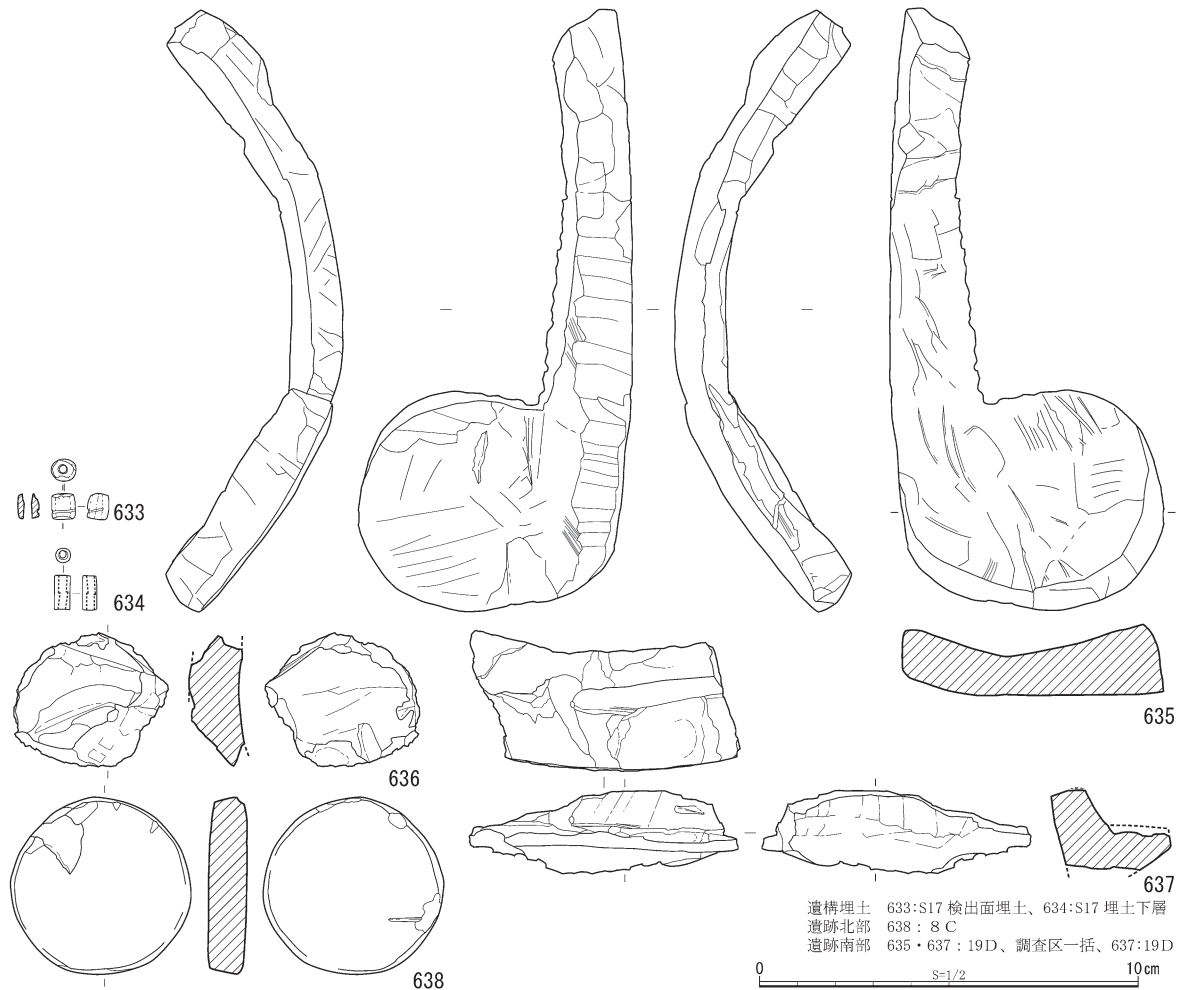


図 100 石器実測図 15 (石製品)

みられる。656～660は鉄片で、形態的に類似していることや、同一グリッド内から出土していることから同一個体である可能性が考えられるが、接合はできなかった。これらの鉄片は、縁辺を「L」字状に折り曲げている点に特徴がある。このような鉄片の縁を折り曲げたものは、古墳時代の祭祀遺跡などでみられるが、その関連性については不明である。

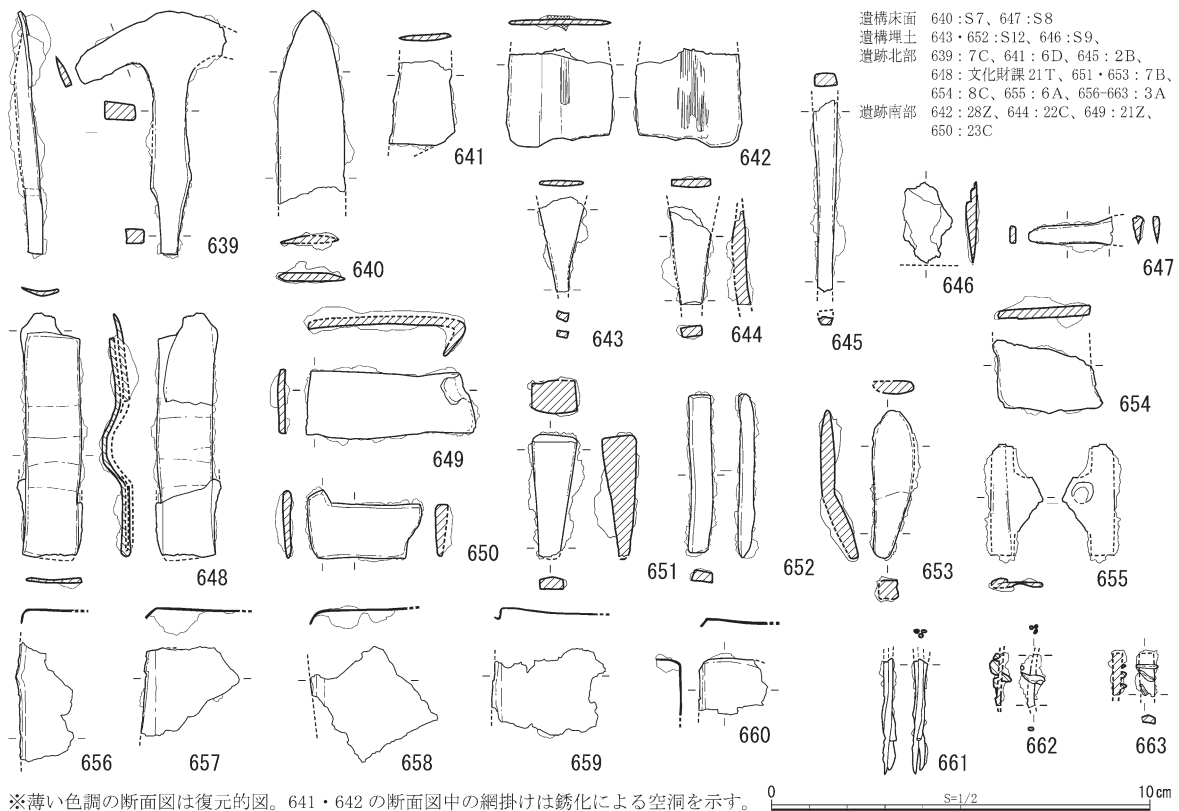


図 101 鉄器実測図

661 は径 1 mm 程度の針状の鉄器を 3 本束ねたものである。662・663 は軸となる鉄器に径 1 mm 程度針金状の鉄器が巻き付いたような状態を呈するものである。いずれも用途は不明である。

青銅器

青銅器としては、キセルの煙管部（写真図版 44- 3-664）が出土している。

註

(1) 遺構の平面形の確認は検出面よりも下位になってしまったため、土層断面図の掘方上端と平面形における上端は一致していない部分がある。

引用・参考文献

- 今塩屋毅行・松永幸寿 2002 「日向における古墳時代中～後期の土師器 - 宮崎平野部を中心として - 」『第 5 回九州前方後円墳研究会発表要旨資料 古墳時代中・後期の土師器 - その編年と地域性 - 』、pp. 145-173
- 鹿児島県教育委員会 2006 『先史・古代の鹿児島（通史編）』
- 木戸雅寿 2004 「13. 石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』（初版第六刷）、pp. 511-521。
- 栗畑光博 2000 「中溝式系土器の検討 - 宮崎県における弥生時代中期後半～後期前半にかけての土器編年にむけて - 」『古文化談叢』第 45 号、pp. 73-99
- 太宰府市教育委員会 2000 『太宰府条坊跡 XV』
- 中世土器研究会編 2004 『概説 中世の土器・陶磁器』（初版第六刷）
- 中園 聡 1997 「九集南部地域弥生土器編年」『人類史研究』第 9 号、pp. 104-119
- 中村直子 1987 「成川式土器再考」『鹿大考古』第 6 号、pp. 57-76
- 中村直子 2002 「薩摩・大隅」『第 5 回九州前方後円墳研究会発表要旨資料 古墳時代中・後期の土師器 - その編年と地域性 - 』、pp. 175-200
- 宮崎県地質研究会 2013 『宮崎県の地質フィールドガイド』、コロナ社
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008 『筆無遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 166 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012 『平峰遺跡（3 次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 219 集

第4章 遺構と遺物の検討

第1節 旧石器時代～縄文時代早期の遺物について

1 旧石器について

今回の調査では、およそ12,800年前に降下したとされる桜島薩摩火山灰(Sz-S)を含む層(基本土層11層)よりも下位の層において、剥片が1点出土している。都城市域では、旧石器時代の層に達するには現地表下数mの掘削が必要であり、試掘や確認調査、あるいは小規模な発掘調査の場合、安全面の問題から掘削深度がそこまで及ばないことも多かったが、近年では調査件数も徐々に増加している。都城志布志道路関連では、本遺跡をはじめ、中床丸遺跡・笹ヶ崎遺跡⁽¹⁾でも確認のための調査を行っている。都城盆地全体をみると、現在までのところ、旧石器が出土した遺跡としては、大年遺跡以外には、表1のように、大岩田上村遺跡(大岩田町)・雀ヶ野遺跡・軍人原遺跡(高城町)・平松遺跡(高崎町)・池増遺跡(山田町)・王子山遺跡(山之口町)などの遺跡が知られている⁽²⁾。これまでのところ、高城町や山之口町など主に都城盆地北部の地域で見つかっている遺跡が多くなっている。したがって、今回、都城盆地の南部で旧石器が出土したことによって、盆地内の広い範囲で人々が活動を行っていたということができるようになった。

旧石器が出土しているこれらの遺跡では、主に旧石器時代の終わり頃にみられる細石刃・細石核を中心とする遺物が出土している。その中で、大岩田上村遺跡では、細石器が出土した層の下の層からも石器が出土している。また、王子山遺跡では細石器と同じ層位であるが、剥片尖頭器も出土しており、より古い時期の遺物が存在する可能性を示している。その一方、王子原遺跡や雀ヶ野遺跡群では、旧石器時代末～縄文時代草創期までの資料が混在して出土しているような状況でもある。雀ヶ野遺跡群では、霧島小林軽石(Kr-Kb)(約1万4千年前)と霧島牛のすねテフラ(Kr-US)の間の層で出土しており、一部不明瞭な部分もあるが、旧石器が出土するのはおよそ桜島薩摩火山灰(約12,800年前)を包含する層の直下付近でほぼ共通しているようである。また、雀ヶ野遺跡群や王子山遺跡の例から、桜島薩摩火山灰の包含層直下頃が旧石器時代から縄文時代への移行期にあたることが想定できる。それに対して、今回の大年遺跡の調査で出土した剥片は、桜島薩摩火山灰を含む層(基本土層11層)の下面から30cm程掘り下げたレベル(写真図版1-1)であり、桜島薩摩火山灰を含む層との間には若干の時間的な開きが存在する。他の遺物が出土していないため、断言は難しいが、都城盆地内でも最も古い石器の一つということができる。

ところで、旧石器が出土した基本土層12層は、厚さが50～60cmの層で、色調が上下でやや異なる。下部は明褐色、上部でやや黒みを帯びるが、その境界のレベルは一定せず、場所によっては大きな起伏がみられる。この色調を除けば、土層中に含まれる碎屑物等には大きな差がみられないようである。この12層中の細分線に比べると、本層の上下に位置する層との境界となる層理面の起伏や傾斜は小さく、水平堆積に近い状態(巻頭図版2-2、同5-1を参照)である。したがって、基本土層12層内の色調の違いは、構成物の違いが生じるような堆積要因の違い(=異なる土層)というよりも堆積後の有機物等の影響といった環境的な要因が背景として考えられる。そのため、基本土層の項でも触れたが、今回の調査では12層の上下層を同一層として扱い、色調による区分は行っているが明確な分層を行っていない。また、第2章の地理的環境でも述べたが、土壌学的研究からは、基本土層12層に対応すると考えられる層は、湿潤な環境から次第に乾燥した環境へと次第

表 1 都城市内の旧石器時代～縄文時代早期の主な遺跡

遺跡名	所在地	立地	内容	出土層位							詳細	文献	
				P14 下	P14	間	P11 下	P11	牛	ア 下			
旧石器時代													
大岩田上村遺跡	大岩田町	台地上	細石刃・細石核	○								P14 下位層 3 層分	県埋文第 77 集
雀ヶ野遺跡群	高城町	尾根上	細石核、槍先型尖頭器			○						牛ノすねと小林軽石の間層	高城町第 18 集
王子山遺跡	高城町	台地上	剥片尖頭器、細石核			○						草創期包含層と同じ層	都城市第 107 集
平松遺跡（試掘）	高城町	台地縁辺？	詳細不明									-	都城市第 110 集
縄文時代草創期													
川原谷出水遺跡	梅北町	台地縁辺部	土器・石器	○								P14 直下	都城市第 112 集
雀ヶ野遺跡群	高城町	尾根上	有茎尖頭器			○						牛ノすねと小林軽石の間層	高城町第 18 集
王子山遺跡	山之口町	台地上	堅穴状遺構 4、土坑 10、炉穴 30、集石 6、配石 8			○						早期包含層下位層	都城市第 107 集
縄文時代早期													
屏風谷遺跡	上水流町	台地端部	円筒形・押型文				○					蒲牟田スコリア下位層	都城市第 17 集
白山原遺跡	早水町	沖積地微高地上	集石 28			○						P11 と P14 の間	都城市第 57 集
池島遺跡	早水町	沖積地微高地上	集石 11				○					P11 下位層	県埋文第 84 集
平田遺跡	南横市町		集石 1、土坑 8										都城市第 87 集
加治屋 B 遺跡	南横市町	低位段丘面	集石 19、土坑 2				○					P11 下位層	都城市第 81 集
田谷・尻枝遺跡	南横市町	台地端部	陥とし穴、ピット				○					蒲牟田スコリア下位層	都城市第 38 集
平峰遺跡	平塚町	台地上	土坑 2、集石 1				○	○				P11 ～ P14 の間	県埋文第 219 集
働女木遺跡	五十町	台地上	土坑 1、集石 1					○				P11 漸移層～濃集層	県埋文第 205 集
王子原遺跡	安久町	扇状地	集石 2			○	○	○				P11 包含層～3 層下まで	都城市第 106 集
天ヶ淵遺跡	安久町	低位段丘面	土坑、					○				P11 包含層	都城市第 32 集
王子原第 2 遺跡	安久町	丘陵上	遺物									上部削平	都城市第 66 集
下尾平野第 4 遺跡	安久町	台地上	土坑 1、ピット 1				○	○	○			牛ノ脛～P11 下位層	都城市第 115 集
安久中原遺跡	安久町	丘陵斜面テラス部	土坑 1、土器							○		アカホヤ直下～下位層	都城市第 6 集
梅北北原遺跡	梅北町	沖積地微高地上	集石 10					○				P11 下位層	都城市第 83 集
大年遺跡	梅北町	台地端部	土器片					○				P11 下位層	本報告書
大年遺跡（市試掘）	梅北町	台地端部	円筒形土器破片									造成土中	都城市第 93 集
梅北佐土原遺跡	梅北町	台地縁辺部	陥とし穴 1、集石 2、土器・石器					○				P11 下位層	都城市第 76 集
川原谷出水遺跡	梅北町	台地縁辺部	土坑 1、集石 3						○			P11 包含層	都城市第 112 集
平松遺跡	高城町	台地縁辺部	堅穴状遺構 2、土坑 5、集石 2						○	△		牛ノすね下位層～P11 包含層	都城市第 108 集
高八重遺跡	高城町	丘陵南斜面	集石 6、土坑 3									始良大隅軽石の上位層	都城市第 90 集
雀ヶ野遺跡群	高城町	丘陵上	集石遺構 48									牛ノすねと小林軽石の間層	高城町第 18 集
王子山遺跡	山之口町	台地上	堅穴状遺構 3、土坑 11、集石 8、炉穴 6						○			P11 下位層	都城市第 107 集
萩ヶ久保遺跡	山之口町	丘陵端部	集石 19、土坑 2						○			P11 下位層	都城市第 97 集

※「P14 下」= 桜島薩摩火山灰下位層、「P14」= 桜島薩摩火山灰包含層、「間」= 桜島薩摩火山灰と桜島 11 テフラの間層、「P11 下」= 桜島 11 テフラ下位層、「P11」= 桜島 11 テフラ・蒲牟田スコリア包含層、「牛」= 牛ノすね火山灰 (kr-US) 包含層、「ア下」= アカホヤ下位層

に変化したことが指摘されており、下部では湿地的状況であったことが想定されている（井上ほか 2001）。このように考えると、今回剥片が出土したレベルは、12 層の上部であり、乾燥化が進んだ段階の頃であるのかもしれない。

旧石器時代の遺物が出土した遺跡をみると、台地や丘陵上に立地しているものが多い。旧石器時代に属する遺跡の多くが台地や丘陵上にあるのは列島規模でみても共通していると思われるが、今後、このような立地の遺跡で、桜島薩摩火山灰下層までの調査が増えれば、旧石器時代の遺跡も徐々に増え、都城盆地内の旧石器時代の様相がより明らかになってくるものと思われる。

2 縄文時代早期について

今回の調査では、山形押型文と思われる押型文1点と、無文土器の小片が数点と少数であるが、縄文時代早期の遺物が出土した。残念ながら、それ以前の草創期の遺物・遺構については検出できなかった。また、今回の調査地から西へ100 mほど離れた場所で2008年に都城市教育委員会が行った試掘調査でも、早期の土器片が出土している。この試掘調査は農業関連事業に伴って行われたが、この調査の際に造成土中からであるものの、「縄文時代早期の円筒形土器が出土」している（都城市教育委員会2009:p.20）。そのため、今回の調査では集落を構成するような遺構・遺物は検出できなかったが、調査区外の西側には当該時期の集落が存在する可能性がある。

ところで、周辺の中床丸遺跡や笹ヶ崎遺跡においても、旧石器だけでなく縄文時代早期の遺構・遺物が見つかっており、比較的早い時期からこの周辺で人々が生活を営んでいた状況をうかがうことができる。また、都城市内ではまだわずかであるが、縄文時代の草創期の遺跡もみつかっており、旧石器時代から引き続き人々が生活していたようであり、王子山遺跡では住居跡の可能性のある竪穴状遺構が4基検出されている。これらの草創期の頃の遺構・遺物検出レベルは、旧石器時代の遺物が出されるレベルに近く、桜島薩摩火山の直下付近である。王子山遺跡では草創期の遺物包含層から旧石器も出土しており、それほど時間的な差がないのかもしれない。

旧石器時代、縄文時代草創期の遺跡は、都城市内に散在しているが、縄文時代早期では、表1のように、都城盆地の南部域に多いが、特に大年遺跡が位置する梅北町や、それに隣接する安久町に多く見つかっている。梅北町内の川原谷出水遺跡では、草創期の遺物も出土しており、今後の調査でも期待される。

これらの縄文時代早期の遺跡の立地についてみると、台地や丘陵上が多いが、中には白山原遺跡・王子原遺跡・梅北北原遺跡のように低地で遺跡が見つかる例もあり、当時の人々が広い範囲で生活を営んでいたことを示している。旧石器時代や縄文時代の多くは丘陵や台地縁辺部を中心とした生活を送ったイメージがあるが、それ以外の生活スタイルもあったのかもしれない。また、早期の遺物が出土した層位をみると、その多くが桜島11テフラ（Sz-11）あるいは霧島蒲牟田スコリア（Kr-Km）を包含する層の下位層から出土していることがわかる。王子原遺跡では桜島11テフラ包含層から下位の3層まで早期の遺物包含層とされているように、この時期は前後の時期と異なり、人々の活動が活発であったようである。

第2節 縄文時代後期～晩期の遺構・遺物について

1 土器について

縄文時代後期～晩期の土器の中で、後期の土器は少量で、その多くは晩期のものである。後期の土器は市来式系や西平式系の土器など、複数型式がみられるが、調整に貝殻条痕を施す市来式系の土器がやや目立っている。周辺遺跡では、大年遺跡と同時期に調査を行った中床丸遺跡において、多量の市来式系の土器が出土している。中床丸遺跡とは谷を挟んでいるため、大年遺跡とは同一の遺跡と考えにくく、中床丸遺跡で生活を営んでいた人々が大年遺跡周辺に来ていたのか、同時期に大年遺跡でも人々が生活を送っていたのかはあきらかでない。

一方、晩期の土器は多く出土している。特に黒川式と考えられる黒色磨研土器の浅鉢の出土量が多い。浅鉢の量に対して、深鉢と考えられる個体は少ないようである。浅鉢の口縁部には、直線的に長くのびるもの、屈曲して段を持つもの、段が沈線化したもの、屈曲部が退化したものなどバリ

エーションもみられる。浅鉢や深鉢にみられるリボン状突起もリボン状突起だけでなく、退化して単なる波状口縁状の突起になったようなものも存在する。このような複数の形態は、時間的な変遷過程を示していると考えられる。ところで、精製品を含む浅鉢にはコゲあるいはススが付着したものが認められ、煮炊きを使用したことをうかがうことができる。大年遺跡の調査と同時期に調査を行った、都城盆地北部の大窪第1遺跡で出土した浅鉢にもススが付着した個体があるほか、筆無遺跡においても外面にコゲ内面にススが付着した浅鉢の個体が出土しており（宮崎県埋蔵文化財センター 2008a）、浅鉢を煮炊き使用する習慣があったようである。このような状況から、大年遺跡の縄文時代後期において一定期間連続して、あるいは断続的に調査地周辺で生活が営まれていた状況をうかがうことができる。

このように黒川式系の浅鉢で見慣れた土器が多い中であって、特に目を引く土器がある。それは79の土器で、器表面にヘラ描きによる縦方向の格子目状の沈線や並んだ沈線文を施している。今回の調査では晩期の鱗状の突起を有する深鉢が出土しており、遺跡内で出土しているその他の土器との形態的な類似性から、晩期の土器の中に位置付けた。しかし、形状や文様から、中期末～後期初頭頃の大平式系の土器ではないか、という指摘を当センター内で受けた。層位的には、基本土層5b層で包含層の中では比較的下位のレベルにあたる。ただし、観察表等にもるように、4層～5b層付近まで複数時期の土器が出土している点と、中期末～後期初頭頃の土器が他に出土していないことから、晩期土器の中に位置付けたままとした。中期末から後期初頭に多い、凹線などを施した土器に供伴する文様に類似することから、この時期まで遡る可能性があり、霧島御池軽石（Kr-M）降下以降まもなくして人々が生活を行っていた可能性もある。

以上のほか、縄文時代晩期後半の刻目突帯文と考えられる土器も若干出土している。その中には、赤色顔料を塗布したとみられる個体が存在しており、主に壺においてそのような資料がみられるようである。同様な時期で、このような顔料を塗布した土器は、黒土遺跡でも出土している。この黒土遺跡は大年遺跡に比較的近い大岩田町に位置しており、弥生時代早期の水田が見つかった坂元A遺跡などが位置する横市川周辺と大年遺跡との中間付近に位置している。黒土遺跡の土器も弥生時代早期に位置付けられており、大年遺跡においても黒土遺跡と類似した特徴を持つ土器が出土していることから、この付近の地域内において一定の情報を共有していたものと考えられ、確認調査ではみつからなかったものの、遺跡周辺の低地部において縄文時代の晩期末には水田稲作を行っていた可能性がある。遺跡周辺の低地部は水はげが悪く、道路建設予定地では雨後には湿地状になっていることも多かった。また、確認調査時にはそれほど深くない掘削深度で水が湧いている。このような環境は、弥生初期の水田を行う環境には適していると思われる。しかし、今回の調査では、黒土遺跡などの弥生早期の遺跡でみられるような石庖丁や水田遺構など、水田稲作に関する痕跡を確認することはできなかった。そのため、ここでは縄文時代晩期として位置付けておくと、弥生時代早期に入っていた可能性も十分に考えられる。

2 黒曜石について

大年遺跡の発掘調査では、調査の初期段階から黒曜石の出土量の多さが目を引いていた。微細な剥片・砕片類（以下「剥片類」と省略）については、見逃したものもあると思われるが、今回の調査では遺跡北部を中心として、合計994.46gが出土している。成品についてはこれに含んでいないことと、見逃した微細な剥片類が存在することを考えれば、1kgを越える量の黒曜石が遺跡内で消

費されたと考えてよいであろう。これらの剥片類について、図 102 のように各グリッド別に出土量をみると、遺跡北部で約 500 グラム、遺跡南部で約 250g となっている。報告書中では記載していないが、それ以外のグリッドが確定できない約 250g についても、遺跡南部で約 30 g が出土しているほかは、遺跡北部で出土しているため、全体の 7 割近くが遺跡北部で出土していることになる。このように、剥片類が多量に出土している一方で、成品は少なく、石鏃 13 点(うち姫島産 3 点)、異形石器 1 点程度である。

つづいて、これら黒曜石の剥片類について、各グリッド別に出土量を比較してみると、遺跡の北部調査区では調査区内の広い範囲で合計 10g 以上の剥片類が出土している。その中でも北半部の中央(Bグリッド列)では、50g 以上出土しているグリッドが 3 箇所あるように、集中度が高い。これに対して、北部調査区の南半部では、集中度は低いが、20g 以上しているグリッドが 5 箇所あるように広い範囲で平均的に出土しており、そのあり方に差がみられる。一方の南部調査区では、遺跡北部とは異なり、24～28 Zグリッドなどの一部に集中しており、特に 27 Zグリッドでは合計およそ 40g の剥片類が出土している。それ以外のグリッドでは、周辺にあたる 25 Aグリッドでおよそ 25g が出土しているほかは、10g 未満となっている。おそらく西側の調査区外にも広がっているものと思われる。この 28 Zグリッド周辺は石器の出土数が比較的多いことから、石器製作と

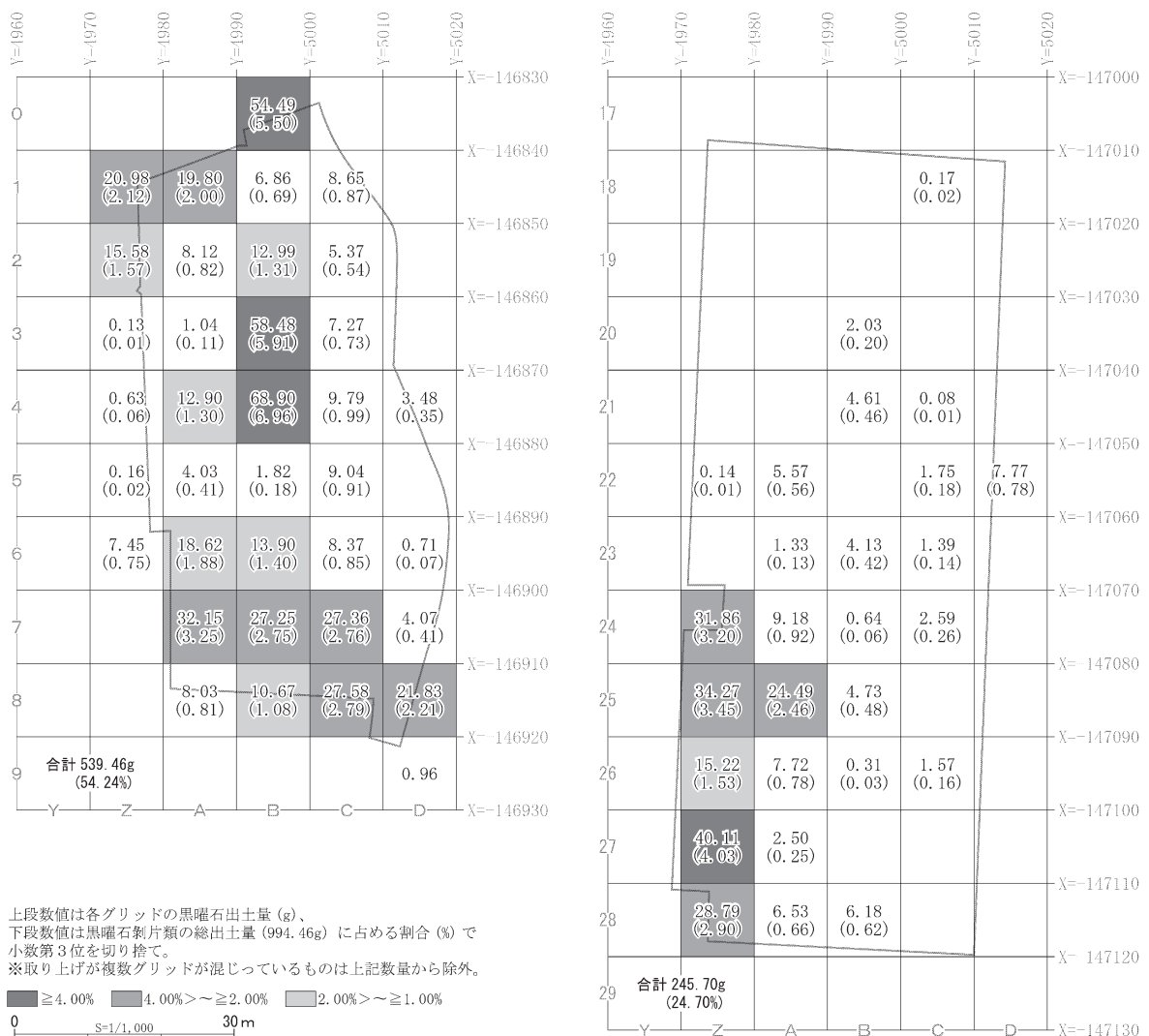


表2 小林市教育委員会による黒曜石原産地分析の結果

遺跡名	時期	分析点数	姫島	淀姫	腰岳群	白浜群	桑ノ木津留	日東群	上牛鼻群	竜ヶ水群	ほか	産地不明	文献
上箇・平瀬野・大平遺跡	縄文早期	20	2				18						小林市第14集
谷ノ木遺跡	縄文早期	8	1				3	1			3		小林市第20集
高津佐遺跡	縄文早期	8			1		5	1			1		小林市第20集
山中遺跡	縄文中・後期	19	1	2	1	1	1	5	1	1		6	小林市新第4集
永野遺跡	縄文後期	13	4				4	5					小林市第17集
栗巣野遺跡	縄文後期	33	4		14	1	5	3		3	3		小林市第15集
黒仁田遺跡	縄文後・晩期	15					10	3				2	小林市第18集

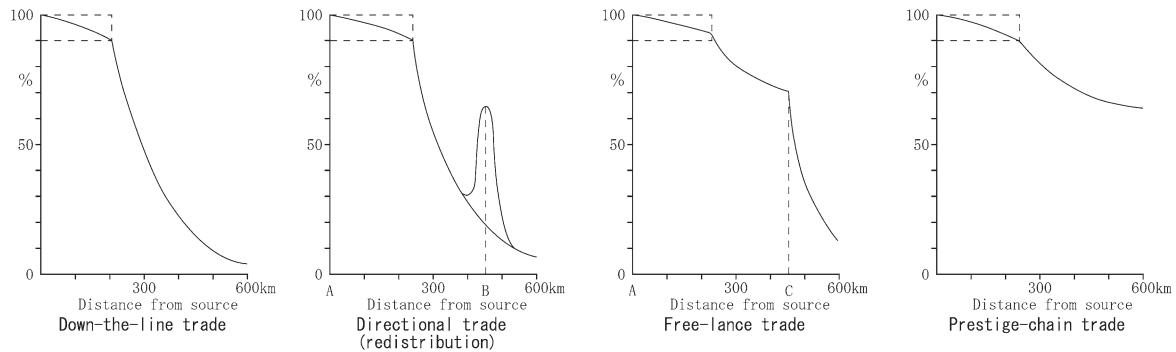


図103 Renfrewによる交易モデル (Renfrew 1984より改変再トレース)

関連したものである可能性が考えられる。

ところで、これらの剥片類について、肉眼観察で特徴が異なるものが見られたため、原産地を推定するために、それらを分類、選択し分析を行った。その結果、分析試料の全てが佐賀県腰岳周辺産（以下、「腰岳産」と省略）と考えられる結果が出ている（詳細については附編を参照）。出土している多くの剥片類は、分析に出した試料のいずれかに類似した特徴をもっているため、出土している黒曜石の大部分は腰岳産の可能性が高いと考えられる。気泡を多く含む特徴がみられる桑ノ木津留産と考えられるものも少数みられるが、全体としては腰岳産を意図的に選択していたものと考えられる状況である。なお、姫島産と考えられる乳白色の黒曜石の剥片類については、5Aグリッドと5Bグリッドで、合わせて1.13gを確認している。今回、報告書中で提示できなかったが、黒曜石以外の石材については、チャート製の剥片が一定量出土している。また、大型の剥片もみられることや、チャート製の石鏃が多く出土していることから、石鏃についてはチャートが中心的に使用されていたと考えられる。

このように、特定の地域の黒曜石が卓越している状況は非常に興味深い。縄文時代のように、首長制社会が発達する以前の社会では、通常、互酬的交換の割合が高く、交換を行う相手や集団はおおよそ固定している場合が多い。このような交換の場合、使い古されたRenfrewの図（図103）に示されるように、原産地から離ればその量は次第に減少していく。一方、大年遺跡のように原産地から離れた場所であって、数量が卓越している場合には、直接的な交易や再分配などの交換が考えられるが、縄文的な社会構造でこのような交換が恒常的に発生するのは今後大いに検討が必要である。今回の大年遺跡の調査の場合、可能性としては、大きな原石を1個入手して、それを分割して使用した可能性も無いことはない。しかし、自然面の状況などからすると、拳大程度の原石を複数使用していたと想定されるため、その可能性は考えにくい。

そこで、次に周辺の遺跡での状況と比較することによって、大年遺跡の状況が一般的であるのかどうか検討を行ってみる。しかし、管見の限りでは、都城市内の遺跡の調査報告書において、黒曜

石の原産地分析を行った例はほとんどないため、近隣の遺跡との比較は難しい。そのため、若干距離は離れるが、積極的に黒曜石の原産地分析を行っている小林市教育委員会が調査を行った遺跡との比較を行うこととする。小林市教育委員会が行った調査では、表2のように7遺跡の分析結果を確認することができた。小林市は都城から九州西岸部へ抜ける内陸部のルートにあたるので、これらの遺跡の分析によってある程度の傾向を推測できるのではないかと考えられる。この表をみる限り、縄文時代早期や後期といった时期的な違いはあるものの、比較的近い原産地である桑ノ木津留や日東周辺と推定される黒曜石が多くなっており、腰岳産は客体的で少ない。この中であって、縄文後期後半を中心とする栗巢野遺跡では、分析試料のおよそ半分が腰岳産という結果がでており、割的に突出している。このような状況からは2つの状況を推測することができる。一つは、前後する時期で腰岳産の黒曜石は少ないので、この縄文時代後期後半の時期だけに他地域産をしのぐほど、広く腰岳産の黒曜石が流通するようになった状況である。もう一つは、特定の遺跡のみで腰岳産黒曜石の比率が多くなっていることから、腰岳産黒曜石の流通ルートが決まっていた可能性であり、腰岳産黒曜石が特定の集団間でのみ交換が行われていた状況である。これ以上の推察は、より多くの分析結果を必要とするため、ここでは行うことは難しい。今後の課題としたい。

3 遺構について

これまでみてきたように、縄文時代の遺物は後期や晩期の土器のほか、黒曜石剥片類にみるように比較的多くの遺物が出土している。今回図示できなかつた土器の小片や底部片なども含めると、数はさらに多くなる。このような豊富な遺物量に対して、今回の調査では、当該時期の明確な遺構は検出できなかった。土坑1・2がこの時期の遺構である可能性があるが、これらの遺構についても、底面からの出土遺物がないため、時期の確証を得ることはできない。このように、縄文時代後期・晩期の遺物が出土する遺跡では、遺物は出土するものの、明確な遺構を検出できない事例が多い印象がある。遺物の出土状況からすれば、層位的には基本土層4層下部から基本土層5a層にかけてのレベルに縄文時代後期・晩期の生活面が存在すると想定される。遺構が検出されにくい要因の一つには、この4層下部から5a層の土、特に5a層の黒色シルトは遺構埋土との区別が非常に難しい土であることが考えられる。古墳時代や弥生時代の遺構についても同様で、5a層内では遺構埋土と自然堆積の5a層の区分は困難である。その検出が可能となるのは、これらの遺構が霧島御池軽石を多く含む5b層から、ほぼ霧島御池軽石単層の基本土層6層、あるいはその下の基本土層7層の黒色シルト層まで遺構が掘りこまれているからである。このような状況を考えると、縄文時代後期・晩期の竪穴建物跡などの遺構が実際には存在しているが、検出できていないとすれば、遺構が5a層内で完結している可能性がある。この場合、竪穴建物跡の深さは、他の時期に比べると、非常に浅いものであったと解釈できる。逆に、遺構が存在していないとすれば、前後の時期とは異なり、遺物の分布と遺構の分布が重複しない生活スタイルであった可能性が考えられる。

南部九州地域において、縄文時代後期の中頃までは平面形が方形をした住居跡がみられるが、それ以降は円形のもの基本となり、晩期も平面が円形となる住居が中心となる点は変わらないようである(水ノ江2009)。県内においても、同様な傾向が指摘されている(宮崎県編1997)。都城市内においても、数は少ないものの、表3のような竪穴建物跡が検出されている。この中で、大岩田上村遺跡C区1号住居跡では、土層の堆積状況やピットの配列状況などから、平面楕円形を呈する住居跡が想定されている(図104)。報告書中では「第V a・b層での検出を試みたが、黒色土で

表3 都城市内の縄文時代後期・晩期の竪穴建物跡の諸例

遺跡名	所在地	立地	時期	検出面層位	遺構名	平面形状	検出面～床面 までの深さ (cm)	文献
上牧 第2遺跡	横市町	丘陵上	後期初頭	基本土層 5 b層対応層	SA1	不定円形	65	県埋文第18集
					SA2	不定円形	65	
大岩田上村 遺跡	大岩多町	台地上	後期後葉 ～ 晩期前葉	基本土層 5 b層対応層 霧島御池軽石層上面	A区1号竪穴住居跡	楕円形	4～16	県埋文第77集
					A区2号竪穴住居後	隅丸方形	4～12	
					C区1号住居跡	楕円形	12～30	
野添遺跡	安久町	台地上	後期後葉 ～ 晩期前半	霧島御池 軽石層上面	1号竪穴住居跡	円形	12	県埋文第83集
					2号竪穴住居跡	円形	15～35	
					3号竪穴住居跡	円形	15～18	
					4号竪穴住居跡	円形	25～28	
					5号竪穴住居跡	円形	87	
					6号竪穴住居跡	円形	45	
					7号竪穴住居跡	円形	6～15	
横市中原 遺跡	横市町	台地上	後期 ～ 晩期	霧島御池 軽石層上面	1号竪穴住居跡	方形	8	県埋文85集
					2号竪穴住居跡	隅丸方形	20	
					3号竪穴住居跡	方形	18	
肱穴 遺跡	横市町	低位 段丘面	晩期末 ～ 弥生前期	霧島御池 軽石層上面	J-SA01	円形	10	都城市第50集
					J-SA02	円形	10～25	
					J-SA03	円形	20前後	
					J-SA04	円形	12	
					J-SA05	円形	10～30	
					J-SA06	円形	5～20	

※大岩田上村遺跡・肱穴遺跡の深さは柱穴の深さ

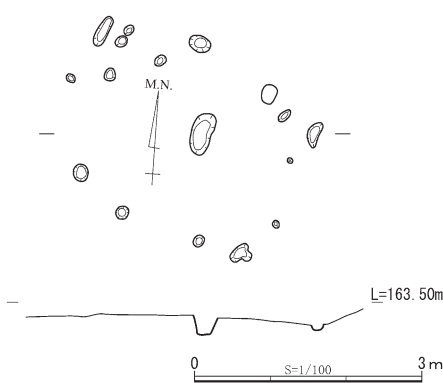


図104 大岩田上村遺跡の竪穴建物跡

の遺構検出は難しく、検出面は第VI層の御池軽石層まで下がってしまった。そのため、壁の立ち上がり等は確認できなかった」とされている。同様に柱穴のみの検出例は、肱穴遺跡でもみられる。また、同じ遺跡の中にある大岩田上村遺跡A区の2軒の住居跡も検出面からの深さは深くて15cm程度である。

これら縄文時代後期～晩期の住居跡について検出面から床面までの深さをみると、表3のように、霧島御池軽石層上面から深くて30cm程度で、10～20cmのもの多いようである。この中にあって、後期初頭の上牧第2遺跡の住居跡

は、検出面が高いためか、検出面から床面までの深さが60cmと飛び抜けて深い。しかし、筆者が担当した平峰遺跡や大年遺跡の古墳時代の住居は霧島御池軽石層の下の黒色シルト層まで掘削しているものが多いのに比べると、全体的に住居の掘削深度は浅いようである。このようにしてみると、当時の人々は住居跡を残していたものの、構築する際の掘削深度が浅かったために残っている遺構が少ないということが考えられる。とすれば、建物の上屋構造も異なっていた可能性があるが、これも今後の課題である。今回も精査を行ったつもりであるが、縄文時代後期～晩期の遺物が多く出土する際には、十分な注意が必要であることを改めて認識することができた。

第3節 弥生時代～古墳時代の遺構・遺物について

1 土器について

弥生時代の遺物は、前期末～後期まで幅広い時期の土器が出土しており、古墳時代では、前期後半～中期前半頃と考えられる土器が出土している。このように、非常に幅広い時期の土器が出土し

ている。一方、器種については、全体的に壺は少なく、甕の出土が多くなっている。また、高坏については、弥生時代に属すると思われるものはみられない。編年については、後期前半頃までの編年については先行研究（中園 1997、栗畑 2000 など）があるため、編年的な位置付けは比較的行きやすい。問題となるのは後期後半～古墳時代にかけての土器である。今回、つたない知識を元に、弥生土器と土師器を便宜的に分けたが、形態的な特徴とともに、調整技法のあり方や胎土にも注意を払った。現状の編年は主に形態によるものであるが、古墳時代前期の資料がほとんどないのが大きな問題である。都城市域を含む、いわゆる成川式土器が分布する九州南部地域では、形態的な個体差が大きく住居内の供伴品でも形態的にやや異なる場合がある。例えば、竪穴建物跡 5（S13）の床面出土資料は一括資料といってよい出土状況であるが、甕・高坏にしてもやや形態差が存在する。古墳時代にはいり、時間が経つにつれて、土器に対する規範が弱くなっていったのではないかと考えられる。加えて、以前調査と整理を担当した平峰遺跡における土器の状況から、成川式土器の分布圏としてくられる薩摩地域の土器とも形態や変化の流れに若干の差異が存在する可能性が想定された。形態差の大きな点としては、都城盆地やえびの盆地で出土する成川式土器には脚台がつかない点や壺の胴部に文様を施さない点をあげることができる。一方、変化の差異は、甕と高坏の様式的な関係においてみられた。平峰遺跡では、甕は口縁が直線的にのびるものからやや内湾する形態であるが、高坏は坏部の稜が比較的明瞭で、口縁部が外反するなどやや古い形態のものが伴っていた。したがって、県南内陸部地域のように脚台がつかない地域の中での編年も必要であると感じる。その中で、時期が近接している場合には、不安定な形態だけでなく、調整やその他の特徴を探る必要性があると考える。

詳細な変化を調べる能力は担当者にはないので、大きな時間軸で変化を追っていくと次のような変化があるといえる。甕は、口縁部の屈曲が弱くなるとともに、突帯の位置が屈曲部に徐々に移動していつている。また、突帯も弥生時代は断面三角形の小型で比較的シャープな形状であったものが、古墳時代では大型化して、そこに施される刻みの幅も太くなっており、刻みに布目痕がみられるようになる。突帯を付加する際の調整も、突帯上下を丁寧にナデていたものが、古墳時代では上部のみをナデるようになり、さらに時代が下ると、上部のナデも行わないようになる。そのため、新しくなると甕本体と突帯の接合が弱いため、突帯が剥離している個体が多々みられ、中には焼成前にすでに剥がれ落ちてしまっていたと考えられるものもある。また、突帯の形状もナデにより断面三角形であったものが、押しつけるためか、断面が扁平な形状へと変化しているようである。

県南内陸部地域の土師器の特徴として、外面に粘土帯の接合線を明瞭に残す点をあげることができるが、竪穴建物跡 5（S 13）から出土した土器にはその接合線はほとんどみられない。他の資料では、突帯の高さが高くシャープなものは接合ラインをナデ消している傾向にあり、突帯が低くにぶいものでは接合線を残すものが多いようである。しかし、接合線をナデ消している個体でも突帯部分には接合線を残しているようである。突帯が剥落した極わずかな部位の観察に止まるが、土器 255 は突帯接合部の中央付近に粘土の接合線と思われる空隙を認めることができる。このような観察から、突帯の接合位置の目安として、粘土帯の接合線が用いられていた可能性が考えられる。そこで両者の関係をみてみると、257・258・262・263 は接合面の中央に、265～268 が接合面の下辺に、270・274・275 は接合面の上辺に粘土の接合線が来ている、あるいはその可能性がある。同一個体と思われる資料もあるので、断定はできないが、粘土帯の接合線と突帯貼付位置には相関性があることを期待させるもので、時期的な目安になる可能性がある。ただし、大年遺跡の数少ない

資料でしか確認していないので、今後他の遺跡の資料を確認する必要がある。

このほか、古墳時代には、「カキアゲ」と呼ばれるハケメによって口縁部の屈曲を強調する技法がみられるようになる。東原式（中村 1987）や中村編年（中村 2002）の甕 A1 に該当すると考えられる調整技法で、古墳時代前期に特徴的な技法といえることができる。今回出土した土器の中にも、この「カキアゲ」状の調整を行ったものがみられるが、頸部から口縁部へのハケメを施した後に横方向のナデを行いハケメが部分的に消失している個体もみられた。他遺跡の資料と比較する必要があるが、古墳時代の土器ではハケメ後の横方向のナデはみられないようである。一方、弥生時代の中期や後期前半の土器は逆「L」字状や「く」字状に屈曲するには横方向のナデがみられる。このような前後の関係をみると、「カキアゲ」を施した後のナデを施す部位が次第に狭くなって、最終的に消失したのではないかと推測される。このような特徴から、「カキアゲ」後に横ナデを施さないものは土師器としている。この中で、弥生土器とした小型の甕 185 は、ハケメの後にナデを行っていないため古墳時代まで下がる可能性もあるが、例外的に形態的な特徴を優先して弥生時代に位置付けている。

次に、古墳時代にはいって、急激に出土量が増える高坏も調整技法などに特徴がみられる。今回の調査で出土した資料の中で、最も特徴的なのは高坏の形態的な区切りとなる部分、すなわち坏の口唇部、坏と脚の接合部、脚と脚柱の境界、脚裾の端部にスリップと呼べるような化粧土を土器の焼成後に塗布している点である。土器の焼成後にスリップを施していることは、巻頭図版 8-1 にも示したように、焼成時についた黒斑がスリップ部分では薄くなっていることによってうかがうことができる。仮に、焼成前にスリップをかけていれば、スリップ部にも同じ濃さの黒斑が生じるはずである。焼成後に塗布した状態でそのまま遺存するかは非常に疑問であり、土器の洗浄中に剥がれていないため、塗布後になんらかの熱処理を加えている可能性は考えられる。このスリップは、水で溶いた粘土を横方向のナデによって薄く塗布しているため、黒半がなければ、焼成後のものかどうかはわからない。このようなスリップを施したもの、あるいはスリップではなく単にナデ消したものは平峰遺跡でも出土している。平峰遺跡の高坏を改めて検討した際には、器表面全体にミガキがはいるものと、端部にミガキがおよばないものが減少し、スリップを施したものあるいはミガキをナデ消したものが増加するという时期的な変化の傾向を指摘した（加藤 2016 予定）。これを参考に、古墳時代の住居跡跡と考えられる竪穴建物跡 5・6・7 から出土した高坏の調整技法について比較を行った。その結果、竪穴建物跡 5 では全個体に、竪穴建物跡 6 では半数にスリップもしくはスリップ状のナデを施していたが、竪穴建物跡 7 では確実にスリップ施したものはみられず、前 2 軒と時間的な差があることをうかがうことができる。甕は出土していないため明らかでないが、高坏の形態や、鉢が多く出ている器種構成から新しい時期と考えられる。また、床面付近から出土している鉢の中には、口縁端部がわずかに外反するような形態をとるものがあることから、今塩谷・松永編年（今塩谷・松永 2002）の 6 期後半から 7 期にかかる頃の時期が想定されるため、年代としては 6 世紀中葉頃の時期が考えられる。床面から出土した炭の放射性炭素年代測定を行った結果の年代 [cal AD422-543(95.4%)] にも近い。竪穴建物跡 5・6 出土の高坏は、脚柱部中程が若干膨らみ、脚柱と裾部の屈曲が明瞭で、裾部は大きく開く形態から、今塩谷・松永編年の Ba1 類に近い形態であることから、今塩谷・松永編年の 2 期、すなわち 4 世紀後半頃のものと考えられる。このような形態の高坏と、甕 255・256 が供伴している点から、甕の突帯部の屈曲の消失は、4 世紀の終わりから 5 世紀初め頃に進んだのではないかと考えられる。

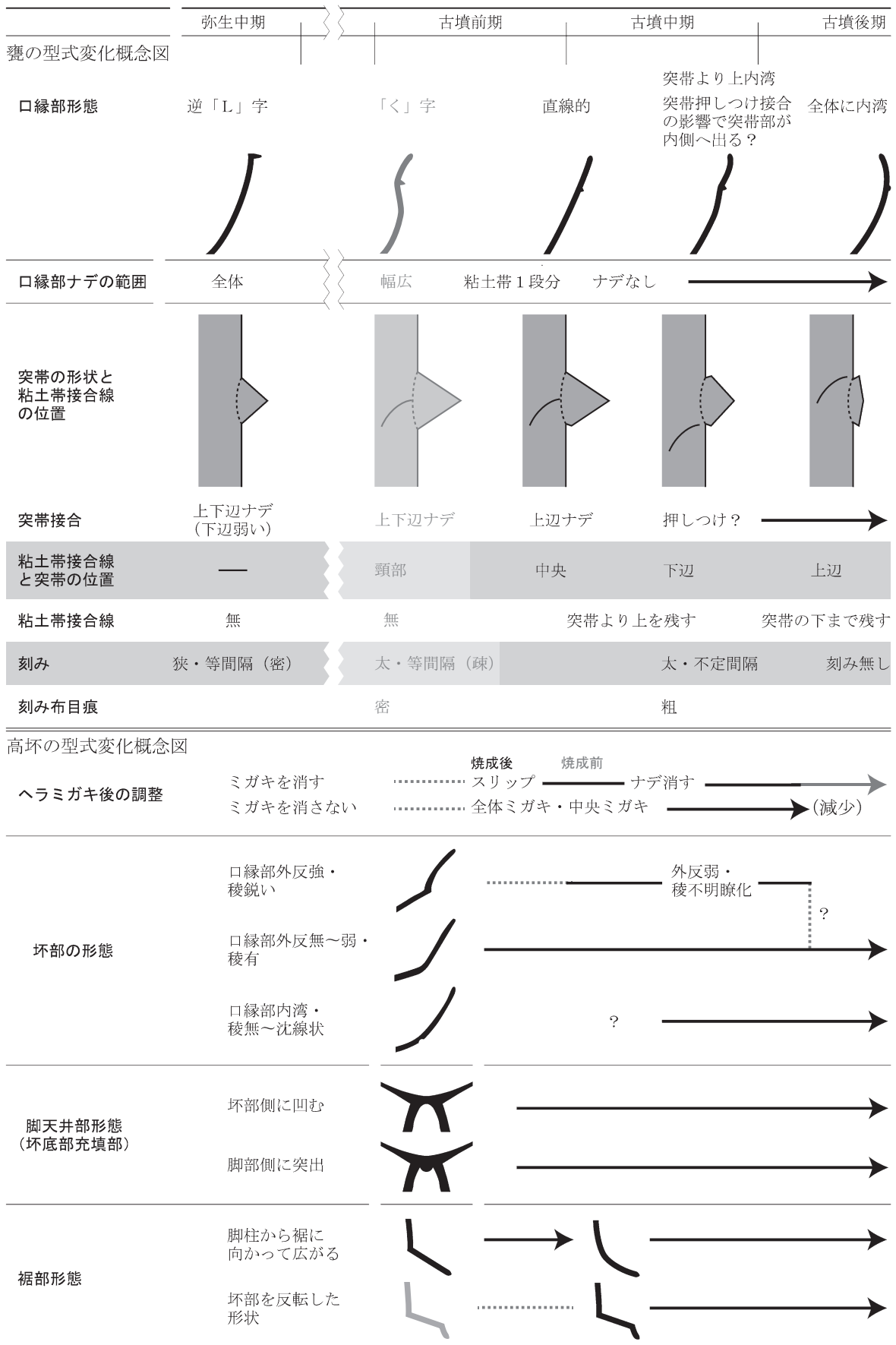


図 105 平峰遺跡・大年遺跡の土器からみた土師器諸要素の変遷想定図

以上、土師器の形態や調整技法から時間軸への位置付けを試みたが、平峰遺跡との比較から課題も残る。主に高坏に関してであるが、坏口縁部の外反の仕方、坏部外面の稜、脚部形態、脚柱内面天井部の形態、そして調整技法である。坏口縁部の外反の仕方および外面の稜については、平峰遺跡で出土している高坏の中には372のように、外反度が大きく、稜もシャープなものが比較的多くみられる。形態的には古く位置付けたくなる形態である。次に、坏部形態については、444～450のように坏部を反転させたような型式との関係である。平峰遺跡では、この形態とともに、通常の「八」字状に裾部も出土している例があるが、今回の調査では坏部を逆転させた脚部をもつ高坏はわずかである。脚柱部内面の天井部の形態は、坏部側に凹むものが多いが、その中に混じって365・366のように脚部側に突出するものがある。平峰遺跡の調査でも、凹むもの（平峰遺跡での分類a類）が91点出土しているのに対して、突出するもの（b類）は15点に止まる。大年遺跡では、竪穴建物跡5の一括遺物で両者が出土していることから、同時期に存在したことは間違いない。調整の仕方や形態は両者でほとんど変わらないため、同一集団内の異なる製作者や製作後の経路を考える必要がある。図83に示すように、高坏の製作において、脚柱天井部（坏底部）の充填部にもいくつかの形態が存在する。ところで、脚部の製作や坏部の製作には時間的な間隔を置いていたようである。そのことは、出土する充填部の形態は様々であるが、坏部や脚部との剥離面が割れておらず、擬口縁状を呈して、器表面のような状態となっていることから推測される。他にも各種細かな製作技法の違いがみられるが、大年遺跡の資料からは言及が難しいので省略したい。

以上のように、大年遺跡出土の土師器を中心とした土器の特徴からその時期や特徴などを考えてきた。大年遺跡出土の土師器は、高坏は宮崎平野部に類似し、甕は薩摩半島の成川式土器に類似するなど、両地域の土器が混在した独特の器種構成をしている。特に竪穴建物跡5の一括出土資料は、時間軸における定点として両地域における古墳時代社会の関係を考える上で貴重な資料といえることができる。

2 竪穴建物跡について

今回の調査では、一般的にみられる平面方形の竪穴建物跡とともに、南部九州地域に特徴的な間仕切付建物跡⁽³⁾、いわゆる「花卉状住居」を3基検出した。先行研究（石川1991、北郷1989・2011など）を参考とすると、間仕切付建物跡は、南部九州地域では弥生時代中期後半から古墳時代初頭頃までみられる。形態的には円形を基調としたものが先行し、それほど遅れることなく方形を基調としたものが出てくるが、およそ中期後半に定型化し、後期に定着普及することが指摘されている。ただし、円形基調の建物跡と方形基調の建物は排他的ではなく、同時期に併存しているようである。また、長津氏や北郷氏が行ったような細かな型式分類（長津1985、北郷1989）に対応するような編年は現状では難しいようである。その中⁽⁴⁾にあって、大まかには時間的な変化は柱穴関係にみられるようであり、当初は建物の壁の径や柱穴と相関関係があった突出壁であるが、次第にその関係がくずれてくることが指摘されている。この点からすれば、形態によってのみ時期を形態することは難しく、間仕切付建物の編年は現状ではまだ検討する余地があることをうかがうことができる。

大年遺跡で検出した間仕切付建物跡は、平面形が円形を基調とするものが2軒〔竪穴建物跡1・2（S7・9）〕、方形を基調とするものが1軒〔竪穴建物跡4（S16）〕である。竪穴建物跡1は中央から北側に4箇所、竪穴建物2は東側のものが不明瞭であるが全体に7箇所、竪穴建物跡4は南東部に3箇所の突出壁を有する。柱穴は3軒の建物ともに主柱穴は4本と考えられ、竪穴建物

跡1・2は、中央の一段凹んだ場所のおよそ四隅に位置している点で共通している。柱穴と突出壁の関係では、突出壁が多い堅穴建物跡2は全ての柱穴が突出壁の前面に位置し、堅穴建物跡1・4は突出壁がある箇所はその全面に位置しているが、堅穴建物跡4の南西部の柱穴は突出壁との距離が短い。石川氏によれば、堅穴建物跡全体の傾向として、円形基調の堅穴建物跡では後期前半の主柱は5本以上で、後期後半になって主柱が2本、4本のもので出現し、方形基調の堅穴建物跡では、後期前半は2本が主流で、後期後半以降に4本柱が増加するとされる（石川1991）。したがって、大年遺跡の間仕切付建物跡は、4本柱であることから、後期後半以降の時期が考えられる。

このほか、間仕切付建物跡がみつかった遺跡の各報告書にあたることはできなかったが、先行研究をみた範囲では、類似した形態として、熊野原遺跡（宮崎県教育委員会1988）の間仕切付建物跡（図106）をあげることができる。図示した熊野原遺跡の2軒の建物跡は、間仕切りや柱穴の位置などが大年遺跡の建物跡と類似している。主軸と間仕切りがつく位置は異なるが、方形基調のSA2の中央の突出壁に柱穴に近い点も類似している。大年遺跡の調査ではこれらの間仕切付建物跡に伴う土器がないため、確実な時期の位置付けが難しいが、上記のように柱の数や熊野原遺跡との類似点から、弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃の時期に位置付けておく。なお、堅穴建物跡4（S16）の貼床中で多くの炭がみられたため、放射性炭素年代測定を行ったが、その結果は確率2σの範囲でcal AD76-215（95.4%）、1σの範囲でcal AD 80-138（65.3%）の値が出ており、想定した時期よりも若干古くなっている。

ところで、先行研究で既に指摘されている点ではあるが、間仕切部には屋内を区切る何らかの構造物が存在したことが想定される。今回の調査では、偶然の産物であるが、建物の構築面よりも上位で遺構を検出しており、建物が予想される範囲の掘削には壁面の検出を含めてかなり注意を払って行ったものの、霧島御池軽石を含む間仕切部の上部には、少なくとも土で構築された構造物は検出できなかった。また、堅穴建物跡1・2の間仕切部については、霧島御池軽石を多く含む土であるが、自然堆積層とは異なる雰囲気であったため、部分的に断ち割って堆積状況の確認を行った。その結果、掘方掘削後に構築している可能性が高い土の堆積の状況であった。間仕切部は霧島御池軽石を多く含むため、ピットや溝などの痕跡があればわかりやすいと思われるが、そのような痕跡も確認することはできなかった。このように、今回の調査では、間仕切り部にピットや溝などを掘

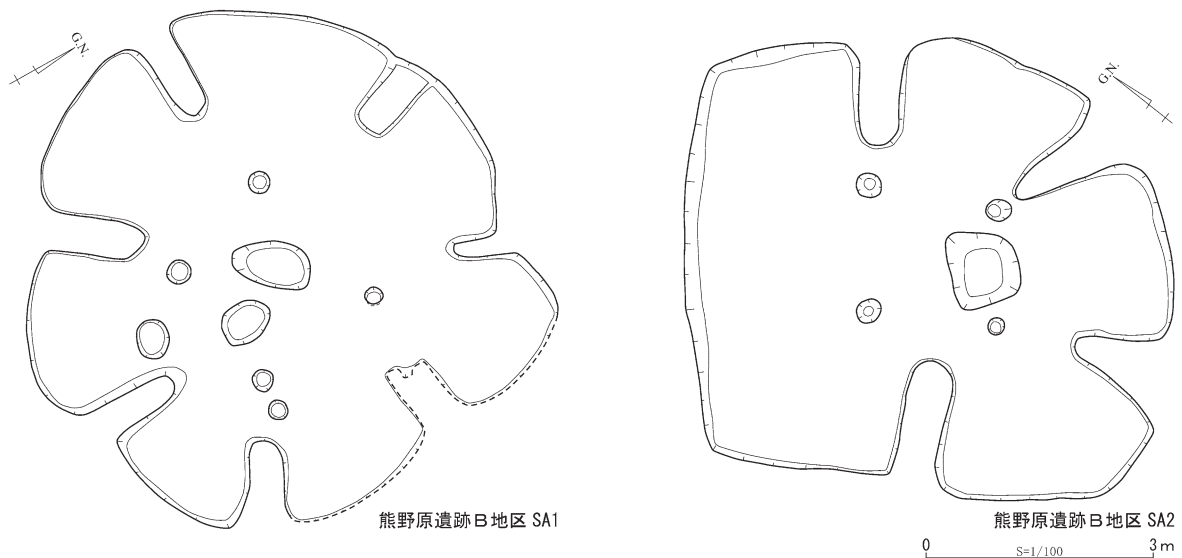


図106 熊野原遺跡の間仕切付建物跡（報告書より改変再トレース）

って構築するような建造物の類いはなかったものと考えられ、あったとしても間仕切を掘りこまない痕跡を残さない構造ものであったのだろう。

ところで、床面から土器が出土している建物跡については、その帰属時期を決めることは難しくないが、土器が出土していない堅穴建物跡 8・9・10 (S 14・15・8) については、その時期を決めることが難しい。この中で、構造的にみると、堅穴建物跡 9・10 はともに柱穴と思われるピットをもつが、他の建物のように定型的な位置にはない。一方、堅穴建物跡 8 は小型で、柱穴と思われるピットを検出することはできていない。また、床面の構造をみても、堅穴建物跡 9・10 は全体的に貼床をもつが、堅穴建物跡 8 は部分的にのみ貼床を貼っているという違いも存在する。このような違いをみると、堅穴建物跡 9・10 が比較的近い時期で、堅穴建物跡 8 はこれらと離れた時期のものである可能性が考えられる。

そこで次に埋土の堆積の仕方を見ると、堅穴建物跡 8・9 は 4 層が埋土の上面全体を覆っており、堅穴建物跡 5・6 (S 13・10)、あるいはそれ以前の古い建物の埋土のあり方により近い。特に堅穴建物跡 8 は、他の建物跡ではみられない、基本土層 5 a 層が埋土に流れ込んでいる状況から、最も古い建物跡となる可能性も考えられる。それに対して、堅穴建物跡 10 は 4 層が中央に向かって流れ込むような状況であり、堅穴建物跡 7 (S 12) に近い。さらに掘方をみると、堅穴建物跡 9 は掘削の際に住居縁辺部は基本土層 6 層の霧島御池軽石層を掘り残しているという特徴がみられる。このような掘削の仕方は、大年遺跡内では堅穴建物跡 1・2 のみ、すなわち間仕切付建物跡にのみ確認できた掘方である。また、基本土層 6 層の掘り込みも浅く、形状の把握が難しかった点も堅穴建物 2 に似ている。堅穴建物跡 9 は西側に不明瞭であるが突出壁状の部分があり、調査時に間仕切付建物跡の可能性を考えたが形状が不明瞭であったため、判断がつかなかった。このような状況を考えると、堅穴建物跡 9 は間仕切付建物の形が崩れた形態であるも解釈できる。

このように考えると、平面形などでは堅穴建物跡 9・10 と堅穴建物跡 8 という違いに見えるが、実際には堅穴建物跡 8・9 が近い時期で古く、堅穴建物跡 10 が新しいということになる。土器が出土していないため、判然としないが、堅穴建物跡 8 は弥生時代後期頃、堅穴建物跡 9 は古墳時代前期前半頃、堅穴建物跡 10 は古墳時代後期の 6 世紀頃の年代が推定される。

ところで、堅穴建物跡 9 の床面からは、台石などを転用した金床石と思われる鉄錆の付着が顕著な石器が出土しており、本建物跡が鍛冶に関連した建物跡であった可能性がある。遺跡内からは、高坏脚部を転用した羽口が 1 点のみであるが、遺物が多く出土した堅穴建物跡 2 の埋土上層 (基本土層 3 層対応層) から出土している。このことを考えると、堅穴建物跡 9 は、5 世紀代に県南内陸部でよくみられる高坏を転用した羽口を用いた鍛冶作業との関連性も考えられる。平峰遺跡でも転用羽口は多く出土しており、また、鍛造剥片が出土するものの、被熱が著しい鍛冶炉と思われる炉はほとんどみつからない建物も存在するため、堅穴建物跡 9 において炉が検出されていないことは問題ないと思われる。判断が難しいところであるが、埋土の堆積状況や、形は崩れているが、間仕切付建物跡と同様な構築方法を行っていることから、古墳時代前期前半頃の可能性を選択しておく。このように解釈すると堅穴建物跡 9 は、間仕切付建物の最終段階

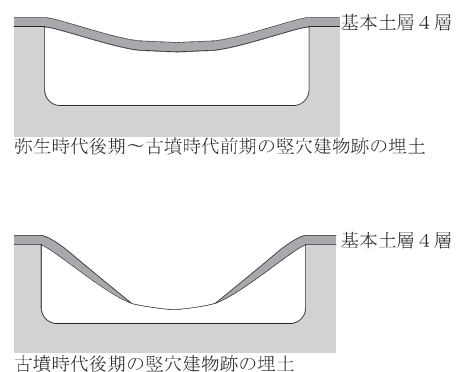


図 107 大年遺跡の堅穴建物跡における埋土堆積状況模式図

とともに、古墳時代の前期前半の鍛冶に関連した建物として貴重な資料であると考えられる。

3 炭化種実の集中と層位について

今回の調査では、遺跡北部において、弥生時代から古墳時代の生活面と考えられる基本土層4層中から、炭化したイチイガシが集中した状態で出土している(図31・32)。北側の1B～2Cグリッド付近において70点以上、中央付近の4C～5Cグリッドにおいて190点以上が出土している。出土層位から弥生時代あるいは古墳時代のものである可能性と、生活面としての時期を推定するために放射性炭素年代測定を行ったところ、cal AD69～174(91.1%)の結果が出ており、年代としては、弥生時代の中期後半から後期にかけてのものと考えられ、出土している遺物などとも矛盾しない。

このような炭化種実の集中部は、都城市内の平田遺跡(宮崎県埋蔵文化財センター2002)でも2箇所で見つかっており、炭化種実集中部1は「約8.4m×約6.7mの範囲で出土し、中でも中央約3.2m×約1.7mの範囲が特に集中」している。もう一つの炭化種実集中部2は「約3.2mの範囲で出土し、中でも西側約1.5mの範囲に集中」しており、両者ともにほとんどがイチイガシとされている。これらの炭化種子についても放射性炭素年代測定が行われており、cal AD70の結果がでていいる。若干散布の仕方は異なるが、狭い範囲に密集するものと、広範囲で出土している出土の仕方、年代、イチイガシという内容ともに類似している。なお、大年遺跡では、北側の集中部からカキの炭化種実も出土している。大年遺跡と平田遺跡の炭化したイチイガシの集中は、単なる空位の可能性もあるが、近い時期に同じような遺物を残すような行動規範が存在した可能性も考えられる点で興味深い。

4 竪穴建物跡7(S12)出土の磨製石鏃について

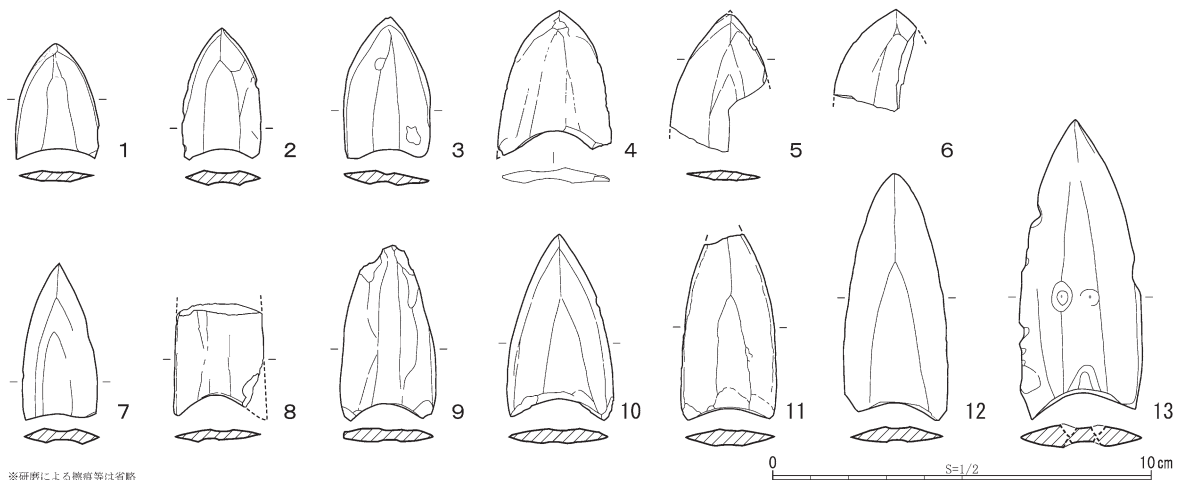
竪穴建物跡7では、流れ込みであるものの、特徴的な形態の磨製石鏃(571)が出土している。出土状況だけでなく、竪穴建物跡は既述のように6世紀代の建物跡と考えられるため、本建物跡に伴うものではない。しかし、特徴的な形態からは、今後の調査においてある程度時期を決定できる要素となりえるため、ここではその類例について若干の検討を行ってみる。

大年遺跡から出土した磨製石鏃には、図89-572～575のように通常みられる平面三角形で厚さ2mm程度の石鏃が出土しているが、今回取りあげる石鏃はこれらの石鏃よりも一回り大きく、そして形態的には一見銅鏃を連想される形態を呈している。加えて、身の厚さが4mmと他の磨製石鏃の2倍程度厚いのも特徴である。そして、最も特徴的なのは、身の中央には根挟み装着用と考えられる浅い凹みを意図的に作り出している点である。一般的な磨製石鏃の身部は全体的に横や斜め方向の研磨により平坦に作られているのに対して、本石鏃の凹み部分は縦方向に研磨することにより製作されており、さらに平坦部の研磨方向を横あるいは斜方向に行い平坦部を作り出している。このように身部に凹みがあるものは断面図などで判別できるため、都城市内での類例を探したところ、表4および図108にみるように、いくつかの類例をみつけることができた。また、偶然みつけた範囲内であるが、宮崎平野部(宮崎市下那珂遺跡)や鹿児島県側(志布志市稲荷迫遺跡、指宿市南摺ヶ浜遺跡)でも同様に身部に凹みをもつ形態の磨製石鏃を確認することができた。これらの石鏃を比較すると、身部に凹みを有する磨製石鏃には二つのタイプがあることがわかる。一つは長幅比が1:1に近い幅広のもの(図108-1、4～6、以下便宜的に「大年タイプ」とする)で、大年遺跡出土例はこれにあたる。もう一方は、幅に対して長さが長いもの(図108-11～13、以下便宜的

表 4 身部に凹みを有する磨製石鏃の諸例

No.	遺跡名	所在地	出土位置	大きさ (cm)			重量 (g)	文献
				長	幅	厚		
1	下那珂遺跡	宮崎市佐土原町	95号竪穴建物跡	3.1	2.2	0.3	2.5	県埋文第90集
2	祝吉遺跡	祝吉町	Y-2号住居跡	3.6	2.2	0.4	-	都城市第1集
3	箕原遺跡	箕原町	包含層	3.7	2.2	0.4	3.4	県埋文第42集
3	大年遺跡	梅北町	住居埋土上層	3.8	3.0	0.4	-	本報告書
4	楠畑遺跡	梅北町	分布調査採集	-	-	-	-	都城市第6集
5	坂元B遺跡	南横市	竪穴住居跡 SA1	-	-	-	-	都城市第71集
6	祝吉遺跡	祝吉町	Y-3号住居跡	4.1	2.0	0.4	-	都城市第1集
7	肱穴遺跡	横市町	包含層	-	-	-	-	都城市第50集
8	平田遺跡	南横市町	SA27	4.7	2.6	0.4	-	都城市第87集
9	加治屋B遺跡	南横市町	包含層	4.9	2.9	0.3	5.9	都城市第81集
10	稲荷迫遺跡	鹿児島県志布志市	包含層	4.8	2.5	0.5	6.5	鹿児島県埋文169
11	南摺ヶ浜遺跡	鹿児島県指宿市	35号土壌墓周辺	6.8	2.8	0.4	9.3	鹿児島県埋文144
12	中尾山・馬渡遺跡	箕原町	包含層	-	-	-	-	都城市第5集

※「No.」は図108の番号に対応。「-」は破片あるいは報告書に計測値の記載がないことを示す。



※研磨による磨痕等は省略

図 108 身部に凹みを持つ磨製石鏃の諸例 (各報告書から改変再トレース)

に「南摺ヶ浜タイプ」とする)で、こちらのタイプは長さ5cmを越える大型のものが多い形態である。詳細な検討が必要であるが、鹿児島県側南摺ヶ浜遺跡で図108-11や12のタイプのもが複数出土している点からすると、鹿児島県側では南摺ヶ浜タイプ、宮崎県側では大年タイプが主流になる可能性がある。都城市は両者が混在しているのは、両方の文化が交わる地域であったことを示しているのかもしれない。

ところで、南摺ヶ浜遺跡は古墳時代の遺物が多いが、図示した石鏃も35号土壌墓周辺の遺物として南摺ヶ浜遺跡「IV期」の遺物と報告されている。そして、南摺ヶ浜遺跡では大年タイプは少なく、南摺ヶ浜タイプが多いことから、上で考察したような空間的差異ではなく、時期的差異によるものである可能性も排除できない。そこでこれらの磨製石鏃が出土した時期についてみてみたいが、残念ながら13点中7点が包含層など時期決定の難しい場所で見ついている。特に南摺ヶ浜タイプは包含層からの出土が多い。表中には記していないが、それ以外の住居跡から出土しているものは、弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃の時期に集まっている。石鏃を確認した報告書が少ないが、今のところ、これを遡る例は管見ではみつけない。鉄器の普及が遅れる宮崎県でも、後期後半頃は平野部では鉄鏃が急速に普及してきている時期であるが、都城市内ではこの時期の出土例はそれほど多くない(加藤2017予定)。とはいえ、次第に鉄鏃が普及していくことは間違いないと思われるため、その時期に新しい形態の石鏃が作られている点は興味深い。

この形態変化の要因については、一つは対人武器的性格、もう一つは儀器的性格としての変化を挙げることができる。対人武器としては、佐原眞氏が弥生時代の中期後半における凸基式打製石鏃の大型化や重量の増加の原因を対人武器としての機能の変化を指摘している（佐原 2005）。旧石器時代から縄文時代への変化において、尖頭器が石鏃へと変化しように、対象が変化すればそれに応じて変化するし、縄文時代や弥生時代を通して変化がなければ、石鏃にも大きな変化はみられない。そこで、どの程度重量に差があるかをみってみる。大年遺跡の中で比較すると、身部に凹みを有する 571 が 5.61g で、他の磨製石鏃は 572 が 1.66g、573 が 0.97g、574 が 0.51g、575 が 0.90g である。最も重い 572 と比較して約 3.3 倍、最も軽い 574 と比較して約 10.7 倍の重さがある。形態的にはそれほど大型化したとはいいいくいため、厚さが増加したことが最大の原因と考えられる。一方、図 108 の諸例で比較すると、最も小型の部類に入る下那珂遺跡を基準とすると、大年遺跡・加治屋 B 遺跡例はそれぞれ約 2.2 倍、2.3 倍、南摺ヶ浜遺跡例では 3.7 倍になる。南摺ヶ浜遺跡例は、大年遺跡の磨製石鏃 572 を基準とすれば、5.7 倍の重量となる。ただし、この場合、対象が変化したと考えると、対人用として問題となるのは数であり、それなりの数が必要になってくると思われるが、各遺跡の出土数は少ない。その点からすると、対人的な要素は低いということができる。

一方、儀器的性格では、弥生時代の武器形青銅器や銅鐸に端的にみるように、大型化・非実用化として考えられる。武器形青銅器が非実用的な形態へ変化するのに対して、身部に凹みをもつ石鏃には明確な非実用的な形態への変化はみられない。ただし、磨製石鏃が多く出土している下那珂遺跡では、石鏃の中に刃部を形成していないものが数例みられるし、実見していないものの図 109 の平田遺跡例でも図左側辺は刃部が形成されていないようである。今後の検討が必要であるが、ここでは儀器的性格を考えておきたい。

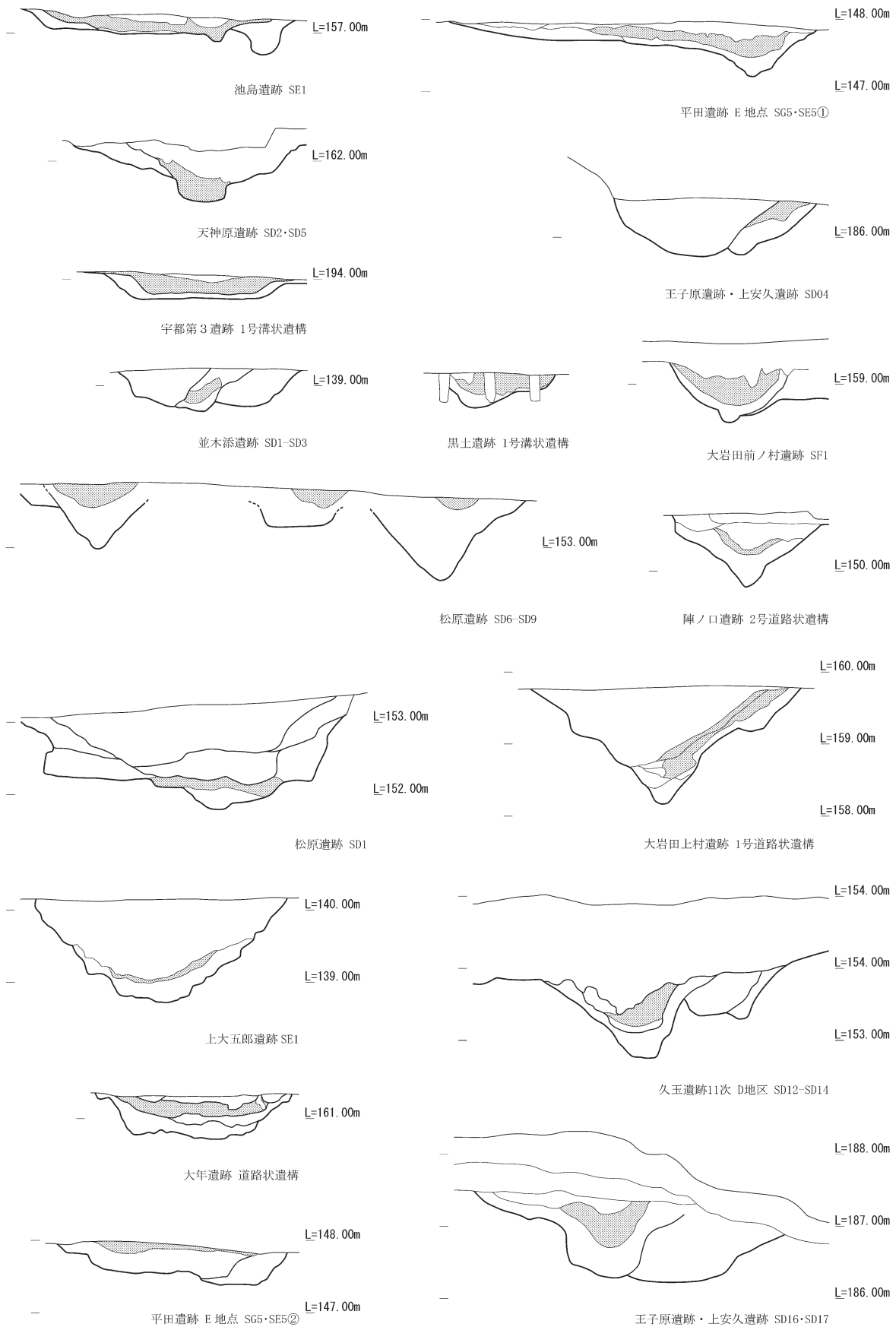
第 4 節 古代～中世の遺構について

1 道路状遺構について

今回の調査において、桜島 3 テフラ (Sz-3) (基本土層 2 層) の下において、掘立柱建物跡、畦状遺構や道路状遺構、そして溝状遺構などの遺構を検出した。これらの遺構に対して、溝や道路、畑といった遺構の性格上、遺物は多く出土しておらず、また、破片や細片が多い。

この中で、道路状遺構については、桜島 3 テフラ降下以前に利用されていただけでなく、桜島 3 テフラ上に硬化面が形成されていることから、降下後も引き続き道路として利用されていたと考えられる。また、この道路状遺構の西側には、近世あるいは近代のものと思われる、新しい道路状遺構が平行的な位置に存在している（巻頭図版 4・附図 2）。さらに、地元の方の話によれば、昭和初期までは同様な道が存在したようであり、桜島 3 テフラ降下以降だけでもおよそ 500 年という長い間、ほぼ同じ位置に道路があったということが明らかとなった。

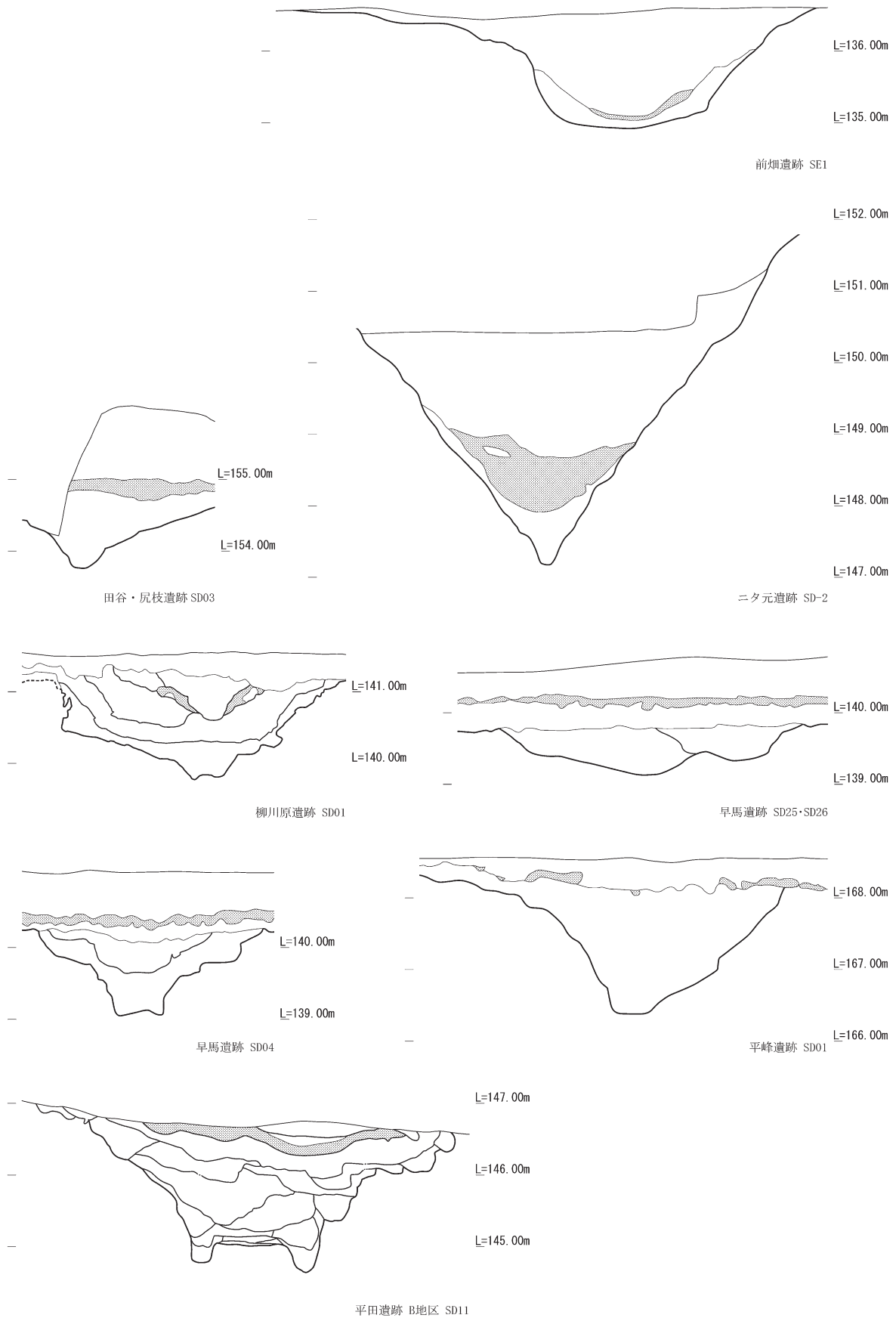
この道路状遺構については、前章で詳しく触れているため、ここでは簡単にまとめておく。遺構の埋土は大きく上下 2 層に分けることができ、土層断面で見ると、同じ黒色シルト層であるが、下層が霧島御池軽石を多く含むのに対して、上層は霧島御池軽石をほとんど含まない層として区別できる。この上層の埋土は、基本土層 3 層に類似しており、下層の埋土は竪穴建物跡などの埋土に類似している。土層断面では明瞭に区別できることから、下層の埋土堆積時期と上層の埋土堆積時期には時間的な開きが大きいと考えられる。また、上層埋土底面には硬化面が形成されており、土層の観察から、この時点で一度掘り直されている可能性が高い。南部調査区で検出している複数の溝



※桜島3テフラの堆積状況に関する分層線以外の細かい分層線は消去している。

■ 桜島3テフラ 0 3m S=1/80

図 109 桜島3テフラが堆積する溝状遺構等の諸例1 (各報告書より改変再トレース)



※桜島3テフラの堆積状況に関する分層線以外の細かい分層線は消去している。

図 110 桜島3テフラが堆積する溝状遺構等の諸例2 (各報告書より改変再トレース)

表5 桜島3テフラが堆積した溝状遺構等の諸例

遺跡名	所在地	立地	遺構名	時期	遺物 (桜島3テフラ降下前)	文献
宇都第3遺跡	北諸県郡 三股町	丘陵裾	1号溝状遺構	不明	なし	県埋文第85集
上大五郎遺跡	丸谷町	低位段丘上	SE1	14世紀～15世紀	青磁?、青磁、土師質 土器、東播系須恵器	都城市第31集
前畑遺跡	丸谷町	低位段丘上	SE1	15世紀後半	青磁、青花、土師質土 器、備前焼	都城市第34集
陣ノ口遺跡	上水流町	台地上	2号道路状遺構	不明	なし	県埋文第222集
並木添遺跡	高木町	扇状地	SD1～3	SD1:13世紀代、 SD2:(15世紀半ば) SD3:(16世紀代)	SD1:白磁・青磁・土 師質土器 SD2:白磁・青磁・陶器	都城市第24集
久玉遺跡11次	郡元町	段丘面上	D地区 SD13・SD14	(記載無)	SD14:土師質土器、 SD13:青磁・東播系須 恵器	都城市第51集
松原遺跡第IV遺跡	郡元町	段丘面上	SD6～9	中世前期	青磁、東播系須恵器、 常滑焼	都城市第51集
			SD1	15世紀後半前後以降	上層:白磁・青磁・国 産陶器	
池島遺跡	早水町	沖積地 微高地上	SE1	不明	なし	県埋文第84集
天神原遺跡 第1調査区南半部	早水町	扇状地	SD2・SD5	14世紀後半～15世紀前半	なし	都城市第23集
早馬遺跡	南横市町	低位段丘上	SD04	12世紀中頃～13世紀前半	白磁、土師質土器、東 播系須恵器	都城市第84集
			SD25・SD26	(13世紀後半)	龍泉窯系、土師質土器、 東播系須恵器	
田谷・枝尻遺跡	南横市町	台地上	B地区東側 SD03	14世紀代	なし	都城市第38集
			B地点 SD11	(記載なし) (10回以上掘り直し)	青磁、東播系須恵器、 備前焼、瓦質土器	都城市代87集
平田遺跡	南横市町	段丘面上	E地点 SE5・SG5①	SE5:古代? SG5:14世紀中頃～15世紀?	SE5:なし? SG群:白磁、青磁、備 前	県埋文第160集
			E地点 SE5・SG5②			
ニタ元遺跡	志比田町	台地上	SD-2	14世紀後半～15世紀前半	白磁、青磁、褐釉陶器、 備前焼、薩摩焼	都城市第29集
柳川原遺跡2次調査	天神町	扇状地	B地区 SD01	不明	土師質土器(ヘラ切り 底)	都城市第43集
大岩田上村遺跡	大岩田町	台地上	1号道路状遺構	不明	なし?	県埋文第77集
大岩田前ノ村遺跡	大岩田町	台地上	SF1	不明	磁器、土師質土器、須 恵器(古代)、東播系 須恵器	都城市第14集
黒土遺跡	大岩田町	扇状地	1号溝状以降	不明	青磁、土師質土器	都城市第28集
平峰遺跡	平塚町	台地上	SD01	14世紀代	青磁、土師質土器、東 播系須恵器、備前焼	都城市第36集
大年遺跡	梅北町	台地上	道路状以降(S27)	8世紀後半?	白磁	本報告書
王子原遺跡	安久町	丘陵裾部	SD03・04	SD3:13～15世紀代 SD4:15世紀末～16世紀代	SD03:青磁、土師質土 器、瀬戸系天目 椀、瓦質土器	都城市第103集
			SD16・SD17	SD17:不明(S16より古い) SD16:14世紀前半代	SD17:(青磁椀、土師 質土器)東播系 須恵器 SD16:土師質土器	

※時期は各報告書による。また、遺構名は図中で切り合っている遺構を含んでいる。

※早馬遺跡 SD25・SD26 の時期は埋没しきった時期である。

も、埋土の様相からおそらくこの時期に掘削されたと考えられる。上層埋土底面以外に埋土中では明瞭な硬化面は検出していないが、土層の観察からすると、複数回掘り直されていることが想定される。この硬化面上付近で、白磁Ⅳ類（図 85-491）が出土しており、これよりも新しい時期に掘削が行われているということが出来る。道路状遺構の埋土では、その他に目立った遺物がないことや、基本土層 3 層に対応すると思われる上層埋土から、この白磁Ⅳ類が上層埋土底面の硬化面が形成した時期、つまり掘削の時期に近い時期を示しているのではないかとと思われる。したがって、下層上部の掘削時期は 12 世紀前後の頃と考えておきたい。

一方、道路状遺構の最初の掘削に関する情報は非常に少ない。その中であって、唯一手がかりとなるのが、道路状遺構の底面にわずかながら堆積していた砂状の堆積物である。火山灰を含む可能性が高いため、サンプルを採取して当たセンターの赤崎主幹に観察をお願いしたところ、その中の一つで霧島御鉢高原スコリア（Kr-Th）あるいは霧島御鉢延暦スコリア（Kr-OhE）に類似する暗褐色スコリアと、桜島 4 テフラ（Sz-4）の可能性のある白色多孔質な軽石が確認されている（結果は附編を参照）。霧島御鉢延暦スコリアと桜島 4 テフラは比較的近い時期なので、この時期を採用すれば 8 世紀後半頃の可能性がある。上層の掘削時期が 12 世紀頃とすれば、約 400 年程度の時期差がある。下層埋土の厚さはそれほど厚くない点で不安もあるが、上層埋土と下層埋土の違いが明瞭である点を考えると納得する面もあり、上層掘削の段階で道路状遺構は埋没が進んでいたと解釈したい。

ところで、河川を挟んで北側台地上に位置する笹ヶ崎遺跡では、桜島 3 テフラ降下前に大規模に造成された状況が確認されている。詳細は報告書に譲るが、笹ヶ崎遺跡では桜島 3 テフラの下にあまり間層をおかず霧島御池軽石が堆積しており、大年遺跡でみられたような黒色土等（基本土層 3～5 層）の堆積はほとんどみられない。周辺遺跡の基本土層をみても、桜島 3 テフラの直下に霧島御池軽石層が堆積していることはほぼないので、中世のある時期に厚さにして 50～60 cm の層が、造成により削られたのではないかと考えられる。また、笹ヶ崎遺跡の 3 次調査の際には、石帯が出土している。中世の造成で削平されているが、古代にもそれなりの施設が存在していた可能性を想定させる。このように考えると、河川を挟んで向かい合った位置にある大年遺跡においても、上で想定したような古代の道路状遺構が存在してもよいのではないかと考える。

次に、都城市内を中心とした他の遺跡の状況と比較を行ってみる。溝あるいは道路状遺構（以下ではまとめて、「溝」と表記）の断面図について、桜島 3 テフラを手がかりにその埋没状況（図 109・110）をみると、桜島 3 テフラの位置によって、大きくは 3 つのタイプに分けることができるようである。1 つは池島遺跡のように、溝のほぼ底付近に桜島 3 テフラが堆積しているもの。2 つ目は、大年遺跡のように、埋土の中層付近に桜島 3 テフラが堆積しているもの。3 つ目は早馬遺跡のように溝の埋没後に堆積しているものである。また、溝の多くで、同じ場所あるいは若干ずれた場所に掘削し直しているものが多い。時期については、桜島 3 テフラを基準に埋没段階は決定できるものの、掘削時期については、遺物が少なかったり、小片が多いことから、時期決定が困難なことが多いようである。その中で、柳川原遺跡 SD01 や平田遺跡 B 地区 SD11 の用に複数回の掘削が繰り返されている状況では、掘削時期はかなり古いように思われる。ただし、立地が影響している可能性もあり、洪水などが頻発する場所に立地する場合には埋没も早く、その度の掘削も必要になるものと思われる。そのため、安易な比較は難しい。時期的には、平田遺跡 E 地点 SE5 は桜島 3 テフラ下の埋土が少ないため、報告書で言及されているように SG 5 に伴う可能性もあり判断が難しい

が、その他の遺跡では、完全に埋没している早馬遺跡で12世紀中頃の時期が最も古く位置づけられる。多くは13世紀～15世紀頃と考えられており、上で推定した大年遺跡の道路状遺構よりもかなり新しい。

以上のように、都城市内等における桜島3テフラが堆積した溝状遺構や道路状遺構は、13～15世紀頃と想定されるものが多いが、掘削時期は不明なものが多い。再び図110で示した大年遺跡道路状遺構の断面（図54-断面8）をみると、桜島3テフラから掘方底面までの厚さは薄いため、他の溝と同様に新しいように思われる。しかし、図55の断面12・13・15をみると、桜島3テフラ降下前に埋没しきっている。さらに断面15をみると、道路状遺構が埋没した後に掘削されている溝5も桜島3テフラ軽石降下前に埋没しているため、道路状遺構の最初の掘削から桜島3テフラ堆積までの時間的な空隙は、他の土層断面で観察されるものよりも実際にはかなり大きいといえる。このことを考えると、当初想定したように、道路状遺構の掘削は8世紀代で、埋土下層を掘り込む次の大規模な掘削を12世紀頃と考えておく。また、埋土上層の厚さもそれほど厚くないことから、桜島3テフラ降下前にさらに掘り直しが行われているのではないかと想定される。その背景には、北側の笹ヶ崎遺跡における人々の活動と連動した動きがあったのではないかとと思われる。

以上のように古代から中世にかけて埋没と掘り直しを繰り返しており、古代から中世においてはこの付近の幹線道路として機能していた可能性もある。しかし、18世紀末～19世紀前半にかけて編さんされた『庄内地理志』に掲載されている「益貫村絵図」（『都城市史』史料編：pp.260-261）には、若干ルートが現在とは異なるものの県道109号線に相当すると思われる道路の線はみられるが、今回の調査で検出した道路に該当する線はみられない。『庄内地理志』が編さんされる頃には幹線道路としての機能は現在の県道に相当する位置に移っていたのかもしれない。

註

- (1) 両遺跡ともに今年度（平成27年度）中に報告書刊行の予定である。
- (2) このほかにも該当する時代の遺跡があるが、報告書等で詳細が確認できたもののみ掲載している。
- (3) 名称は「花卉状住居」をはじめさまざまな呼び名があるが、ここでは「間仕切付建物跡」としておく。北郷氏の「間仕切土壁住居」（北郷1989：p30）が表現上妥当であると思われるが、溝や柱穴によって区切られていることが想定できるものよりも、建物の平面形において直接的に建物内部の空間を区画する意識が明確に確認できるため、および独断的であるが語感的な面から「土壁」を取り除いても良いと思われる。また、「土壁」をつけた北郷泰道氏も現在は「花卉状間仕切り住居」と呼称している（北郷2011：p.277）ことから問題ないと思われる。ただ、現在使用されている「花卉状間仕切り住居」を採用しないのは、必ずしも形態が「花卉状」とはならず、その対象範囲を狭くしてしまうからである。なお、拡張を行ったものとは住居を建てた人間の意識が全くことなるので当然区別される。
- (4) このことは、北郷泰道氏の「各型式の構造上の差異や理論的展開は必ずしも、出現の年代順と編年を示すものではなく、「地域性・地域差」の問題を整理しつつ、「各型式の個々の住居について年代を決定」する必要がある」（北郷1989：P.39、北郷2011：p.280）という言葉によく表れているように思われる。
- (5) 本文中でも述べているが、下層埋土は堆積後に掘削されているため、本来の下層埋土上面は削平されており存在していない。したがって、本来の下層埋土上面が不明であることから、ここでは上層埋土底面と表現している。

引用・参考文献

- 石川悦雄 1991「宮崎における弥生時代竪穴式住居の展開」『宮崎県史研究』第5号、pp.11-46。
井上 弦・米山忠克・杉山真二・岡田英樹・長友由隆 2002「都城盆地の累積性黒ボク土における炭素・窒素安定同位体自然存在比の変遷 - 植物珪酸体による植生変遷との対応 -」『第四紀研究』第40巻第4号、pp.307-308
今塩屋毅行・松永幸寿 2002「日向における古墳時代中～後期の土師器 - 宮崎平野部を中心として -」『第

- 5 回九州前方後円墳研究会発表要旨資料 古墳時代中・後期の土師器 - その編年と地域性 - 』、pp. 145-173。
- 奥野 充 2002 「南九州に分布する最近約 3 万年間のテフラの年代学的研究」『第四紀研究』第 41 巻第 4 層、pp. 225-236
- 加藤 徹 2016 (予定) 「都城市平峰遺跡出土高坏の検討試論」『広島大学考古学研究室解説 50 周年記念論集 (仮称)』、広島大学考古学研究室。
- 加藤 徹 2017 年度 (予定) 「宮崎県における弥生時代の鉄器文化」『たたら研究会創立 60 周年記念論集 (仮称)』、たたら研究会。
- 栗畑光弘 2000 「中溝式系土器の検討 - 宮崎県における弥生時代中期後半から後期前半にかけての土器編年にむけて - 」『古文化談叢』第 45 号、pp. 73-99。
- 佐原 真 2005 「1 石製武器の発達」『佐原真の仕事 4 戦争の考古学』、岩波書店、pp. 14-35 (初出は、香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会 1964 『紫雲出』)。
- 中園 聡 1997 「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』第 9 号、pp. 104-119。
- 中村直子 1987 「成川式土器再考」『鹿大考古』第 6 号、pp. 57-76。
- 中村直子 2002 「薩摩・大隅」『第 5 回九州前方後円墳研究会発表要旨資料 古墳時代中・後期の土師器 - その編年と地域性 - 』、pp. 175-200。
- 北郷泰道 1989 「南九州における間仕切土壁住居の成立と終焉」『宮崎県史研究』第 3 号、pp. 29-52。
- 北郷泰道 2011 「「花卉状間仕切り住居」調査研究の現状と課題」『西寒水四本柳遺跡 2 - 5 区 西寒水四本柳遺跡 6 区』みやき町文化財調査報告書第 5 集・みやき町文化財調査報告書第 6 集、みやき町教育委員会、pp. 277-284。
- 水ノ江和同 2009 「VII 九州地方の縄文集落と「縄文文化」」『縄文集落の多様性 I 集落の変遷と地域性』、雄山閣、pp. 259-293。
- 都城市史編さん室編 2002 『都城市史』資料編考古
- 都城市史編さん室編 2004 『都城市史』史料編 近世 4
- 宮崎県編 1997 『宮崎県史 通史編 原始・古代 1』
- 吉本正典 2012 「黒川式土器の歴史的位置」『九州考古学』第 87 号、pp. 1-22

引用・参考報告書

- 小林市教育委員会 2004 『黒仁田遺跡』小林市文化財調査報告書第 18 集
- 小林市教育委員会 2010 『山中遺跡』小林市文化財調査報告書第 4 集
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2009 『南摺ヶ浜遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (144)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012 『稲荷迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (169)
- 小林市教育委員会 2002 『上菌・平瀬野・大平遺跡』小林市文化財調査報告書第 14 集
- 小林市教育委員会 2003 『栗巣野遺跡』小林市文化財調査報告書第 15 集
- 小林市教育委員会 2004 『永野遺跡』小林市文化財調査報告書第 17 集
- 小林市教育委員会 2004 『黒仁田遺跡』小林市文化財調査報告書第 18 集
- 小林市教育委員会 2005 『満永原遺跡 谷ノ木原遺跡 高津佐遺跡』小林市文化財調査報告書第 20 集
- 小林市教育委員会 2010 『山中遺跡』小林市文化財調査報告書第 4 集
- 高城町教育委員会 2005 『雀ヶ野遺跡群』高城町文化財調査報告書第 18 集
- 都城市教育委員会 1982 『祝吉遺跡』都城市文化財調査報告書第 1 集
- 都城市教育委員会 1987 『都城市遺跡詳細分布調査報告書 (市内南部)』都城市文化財調査報告書第 6 集
- 都城市教育委員会 1992 『屏風谷第 1 遺跡』都城市文化財調査報告書第 17 集
- 都城市教育委員会 1992 『瀬戸ノ上遺跡』都城市文化財調査報告書第 18 集
- 都城市教育委員会 1993 『天神原遺跡』都城市文化財調査報告書第 23 集
- 都城市教育委員会 1993 『並木添遺跡』都城市文化財調査報告書第 24 集
- 都城市教育委員会 1994 『黒土遺跡』都城市文化財調査報告書第 28 集
- 都城市教育委員会 1994 『ニタ元遺跡』都城市文化財調査報告書第 29 集
- 都城市教育委員会 1995 『丸谷地区遺跡群 上大五郎遺跡』都城市文化財調査報告書第 31 集
- 都城市教育委員会 1996 『天ヶ淵遺跡』都城市文化財調査報告書第 33 集
- 都城市教育委員会 1996 『丸谷地区遺跡群 (2)』都城市文化財調査報告書第 34 集
- 都城市教育委員会 1995 『平峰遺跡』都城市文化財調査報告書第 36 集
- 都城市教育委員会 1997 『田谷・尻枝遺跡』都城市文化財調査報告書第 38 集

- 都城市教育委員会 1998 『中央東部地区遺跡群』 都城市文化財調査報告書第 43 集
- 都城市教育委員会 2000 『郡元地区遺跡群』 都城市文化財調査報告書第 51 集
- 都城市教育委員会 2002 『白山原遺跡』 都城市文化財調査報告書第 57 集
- 都城市教育委員会 2004 『王子原第 2 遺跡』 都城市文化財調査報告書第 66 集
- 都城市教育委員会 2007 『梅北佐土原遺跡』 都城市文化財調査報告書第 76 集
- 都城市教育委員会 2007 『加治屋 B 遺跡 (縄文時代・弥生時代編)』 都城市文化財調査報告書第 81 集
- 都城市教育委員会 2007 『梅北北原遺跡』 都城市文化財調査報告書第 83 集
- 都城市教育委員会 2008 『早馬遺跡』 都城市文化財調査報告書第 84 集
- 都城市教育委員会 2008 『平田遺跡 A 地点・B 地点・C 地点』 都城市文化財調査報告書第 87 集
- 都城市教育委員会 2009 『高八重遺跡』 都城市文化財調査報告書第 90 集
- 都城市教育委員会 2009 『市内遺跡 2』 都城市文化財調査報告書第 93 集
- 都城市教育委員会 2010 『萩ヶ久保第 1 遺跡』 都城市文化財調査報告書第 97 集
- 都城市教育委員会 2012 『王子原遺跡 (第 4 次調査)』 都城市文化財調査報告書第 106 集
- 都城市教育委員会 2012 『王子山遺跡』 都城市文化財調査報告書第 107 集
- 都城市教育委員会 2013 『都城市内遺跡 6』 都城市文化財調査報告書第 110 集
- 都城市教育委員会 2014 『川原谷出水遺跡』 都城市文化財調査報告書第 112 集
- 都城市教育委員会 2015 『下尾平野第 4 遺跡』 都城市文化財調査報告書第 115 集
- 宮崎県教育委員会 1988 『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』 第 4 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2004 『豊満大谷遺跡 野添遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 83 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2004 『宇都第 3 遺跡 横市中原遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 85 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2004 『下那珂遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 90 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2002 『平田遺跡 D 地点・E 地点』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 160 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008a 『筆無遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 166 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008b 『尾立第 2 遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 169 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012 『平峰遺跡 (3 次調査)』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 219 集
- Renfrew, Colin 1984 *Approaches to Social Archaeology*. Edinburgh University Press.

第5章 総括

1 旧石器時代～縄文時代早期について

今回の調査で、桜島薩摩火山灰 (Sz-S) を含む基本土層 11 層よりも 30 cm 下位のレベルから、剥片が 1 点出土した。1 点のみの出土であるが、層位的な位置から、細石刃文化期よりも古い可能性があることが考えられる。また、土壌学的な研究の成果を参考にすれば、湿地的な環境が乾燥化してそれほど時期を待たずに、人々が既に活動を行っていたのではないかと想定できる。そのため、基本土層 12 層下部に対応する層では難しいと思われるが、上層ではより古い時期の石器が出土する可能性がある。

次に、縄文時代草創期の遺物・遺構は確認できなかったが、桜島 11 テフラ (Sz-11) を含む基本土層 9 層下位の 10 層において、山形押型文土器が出土した。図示できなかったが、ほかにも無文土器の細片も出土している。都城市教育委員会が付近で行った試掘調査では円筒形土器の破片が出土しており、周辺に縄文時代早期の集落等があることが予想される。前章でみたように、大年遺跡が位置する梅北町や隣接する安久町では桜島 11 テフラ下位層から早期の遺物・遺構が検出される例が多く、この時期に盆地北部地域において活発な人の活動があり、大年遺跡もそれと連動して形成されたものと考えられる。

このほか、鬼界アカホヤ火山灰下層の確認トレンチでは、黒曜石の剥片も数点程度であるが出土しており、集落を形成するほどではないにしても、断続的ながら人々の生活の痕跡を確認することができた。

2 縄文時代後期・晩期について

縄文時代晩期の土器を中心として、後期の土器が若干出土しているほか、中期末～後期初頭頃の可能性がある土器も 1 点出土している。また、黒曜石の剥片・碎片類については、遺跡全体で 1 kg 程度出土するなど量が多い点が特徴である。さらに、分析試料 10 点のうち 10 点が腰岳産と推定されるなど、腰岳産の割合が非常に高い。小林市内の遺跡における黒曜石の原産地推定結果と合わせると、腰岳産の黒曜石が縄文時代後期頃に多く流通した可能性と、腰岳産黒曜石が流通する特定のルートが存在した可能性が考えられる。

このほか、縄文時代晩期後半の刻目突帯文も少数であるが出土している。中には表面に赤色顔料を塗布した壺と思われる破片も含まれている。このような器種構成は、弥生時代早期の遺物が出土している黒土遺跡と内容が近いものがある。弥生時代早期の特徴を示す遺物・遺構はみつからないが、大年遺跡周辺でも水田稲作の情報が伝わっていた可能性がある。

一方、残念ながら当該時期の確実な遺構は検出できなかったが、石器の製作は行っていたようであるため、集落は付近に存在していたと考えられる。遺構が検出できなかった背景には、遺構の掘削面が浅いことも要因として考えられる。

3 弥生時代～古墳時代について

大年遺跡の中心となる時期であり、弥生時代前期末～古墳時代を通して多くの土器が出土している。その中で、弥生時代中期以前の確実な遺構は検出できなかったが、竪穴状遺構 1 が弥生時代中

期中葉頃の可能性がある。そのほかの遺構については、出土している土器や間仕切付建物跡といった形態から、弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃、古墳時代前期後半～中期前半、古墳時代後期前半頃の3つの時期に分かれている。弥生時代後期後半～古墳時代初頭に堅穴建物跡1・2・3・4（S7・9・11・16）、古墳時代前期後半～中期前半に堅穴建物跡5・6（S13・10）、古墳時代後期前半頃に堅穴建物跡7（S12）が建てられている。このほかの堅穴建物跡では遺構に伴う遺物がないため、時期の決定が難しいものの、埋土の堆積状況から、堅穴建物跡8（S14）が弥生時代後期、堅穴建物跡9（S15）が弥生時代後期後半～古墳時代前期前半頃、堅穴建物跡10（S8）が古墳時代後期前半頃のものと考えられる。今回の調査範囲では、弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃が中心となるが、弥生時代中期や古墳時代の中期以降と思われる土器も多いため、周辺に当該時期の集落が広がっている可能性がある。

これらの堅穴建物跡の中で、特筆すべき点は、堅穴建物跡9（S15）でみつまっている金床石と考えられる石器である。鉄錆が厚く付着している部分があり、鍛冶作業に使用されたと考えられる。上で述べたように、堅穴建物跡9の時期は明らかでないが、遺構の特徴から古墳時代前期前半頃の遺構と推定しており、平峰遺跡にみるような転用羽口による鍛冶作業が活発に行われる段階よりも古い時期にあたり、この時期から鍛冶作業が発展していった可能性がある。また、堅穴建物跡4（S16）も一軒のみ離れて位置しており、遺物は出土していないが、鍛冶作業を行っていた可能性もある。想像の域をでないが、弥生時代には金属器に対する忌避意識的な様相がみられた社会構造が、古墳時代に入る頃に積極的に鉄器を導入する構造へと変化していったのかもしれない。

4 古代～中世について

大年遺跡が形成された中心となる時期の一つで、道路状遺構や溝状遺構、畦状遺構など多くの遺構がみつまっている。畦状遺構については、桜島3テフラ（Sz-3）の直下で検出しているため、15世紀後半の年代をあたえることができる。また、今回検出した畦状遺構は、畠の端と考えられる部分を検出することができたほか、付属する小道や、道路に隣接している状況など、構造的に把握することができる良い資料といえる。

また、道路状遺構は掘削時期が古代にさかのぼる可能性がある。今回の報告書では調査対象となる時期の遺構ではないため詳細には述べていないが、この道路状遺構とほぼ平行に走る道路状の遺構も検出しており、1,000年以上もほぼ同じ場所に道路があったことが明らかとなった。18世紀末から19世紀前半にかけて編さんされた『庄内地理志』には、残念ながら今回検出した道路に対応する線は描かれていない。しかし、古代から桜島3テフラ降下前まで何度か掘り直しながら使用されているところをみると、古代～中世前半期においては幹線道路の一つとしての役割があったのではないかと推定される。

5 結語

前節までみてきたように、今回の調査ではおよそ1万5千年以上前から、この地域で人々が生活を営んできた痕跡を確認することができた。その後、弥生時代～古墳時代、中世を中心として断続的ながらも生活やさまざまな活動が行われてきたことを明らかにすることができた。梅北地区では、これまで調査が少なかったため、歴史的に明らかでない部分もあった。今回の調査ではそれぞれ一部分ではあるものの、その様相を明らかにすることができたといえる。

附編 自然科学分析結果

第1節 自然科学分析について

大年遺跡の発掘調査に伴って、平成25年度の第2次調査に植物珪酸体および花粉分析、平成26年度の整理作業に炭化種実同定、放射性炭素年代測定、蛍光X線分析（黒曜石産地推定）に関する科学分析の業務委託を行った。目的と経緯については、第1章の調査の経緯にて述べた通りである。また、業務委託以外に、溝状遺構底面において砂状の堆積物がみられたため、年代を考える手がかりとなる火山灰である可能性を考えて、当センターの赤崎広志主幹に観察をしていただいた。なお、放射性炭素年代測定については、委託する際に出土遺構や層位、遺構から出土した土器や、遺跡の時期など時期や年代に関する情報の提供を行わないようにした。

なお、文化庁監修の『発掘調査のてびき』では、「自然科学分析の成果」は、ほかの考古学的な成果とともに、遺跡の総理解に寄与する。そのため、これらは報告書の最後に「付編」や「自然科学分析編」として別扱いするのではなく、本文で記述すべき項目である」とされている（文化庁文化財部記念物課2010:p180）。分析結果の解釈と意味については、本文中で随時述べているため、ここではあくまで分析の科学的根拠を第三者に示す意味で附編として扱っていることを断っておく。

第2節 植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山1984）。

2. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重）をかけて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的に与えることができる（杉山，2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

3. 分析結果

(1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表 6 および図 111 に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

表 6 植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: × 100 個/g)		学名	分類群	和名	地点・試料	21C グリッド				S27(道路遺構)	
						1	2	3	4	1	2
Gramineae				イネ科							
		Oryza sativa		イネ		19				6	
		Oryza sativa (husk Phytolith)		イネ籾殻 (穎の表皮細胞)						6	
		Triticum-Hordeum (husk Phytolith)		ムギ類 (穎の表皮細胞)		6					
		Phragmites		ヨシ属							7
		Zoysia type		シバ属型		6					
		Paniceae type		キビ族型		13	13	18	13	18	20
		Miscanthus type		ススキ属型		58	32	31	33	31	14
		Andropogoneae A type		ウシクサ族A		160	90	80	47	110	68
		Andropogoneae B type		ウシクサ族B			6		7	6	14
Bambusoideae				タケ亜科							
		Pleioblastus sect. Nipponocalamus		メダケ節型		90	109	98	127	134	88
		Pleioblastus sect. Nezasa		ネザサ節型		757	539	558	528	648	510
		Sasa sect. Sasa etc.		チマキザサ節型		19	19	37	40	43	27
		Sasa sect. Crassinodi		ミヤコザサ節型					27	12	
		Others		未分類等		250	327	300	387	464	469
Others				その他のイネ科							
		Husk hair origin		表皮毛起源		26	13	12	7	24	7
		Rodshaped		棒状珪酸体		205	218	196	227	202	272
		Stem origin		茎部起源		6					
		Others		未分類等		186	135	104	87	55	75
Arboreal				樹木起源							
		Lauraceae		クスノキ科		13			7		7
		Others		その他		13	6	6	7	6	14
Total				植物珪酸体総数		1829	1508	1441	1543	1766	1591

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg / m² · cm) : 試料の仮比重を 1.0 と仮定して算出

Oryza sativa	イネ	0.57					0.18	
Phragmites	ヨシ属							0.43
Miscanthus type	ススキ属型	0.72	0.40	0.38	0.41	0.38	0.17	
Pleioblastus sect. Nipponocalamus	メダケ節型	1.04	1.27	1.14	1.47	1.56	1.03	
Pleioblastus sect. Nezasa	ネザサ節型	3.64	2.59	2.68	2.53	3.11	2.45	
Sasa sect. Sasa etc.	チマキザサ節型	0.14	0.14	0.28	0.30	0.32	0.20	
Sasa sect. Crassinodi	ミヤコザサ節型				0.08	0.04		

タケ亜科の比率 (%)

Pleioblastus sect. Nipponocalamus	メダケ節型	22	32	28	34	31	28
Pleioblastus sect. Nezasa	ネザサ節型	75	65	65	58	62	67
Sasa sect. Sasa etc.	チマキザサ節型	3	4	7	7	6	6
Sasa sect. Crassinodi	ミヤコザサ節型				2	1	
Medake ratio	メダケ率	97	96	93	91	93	94

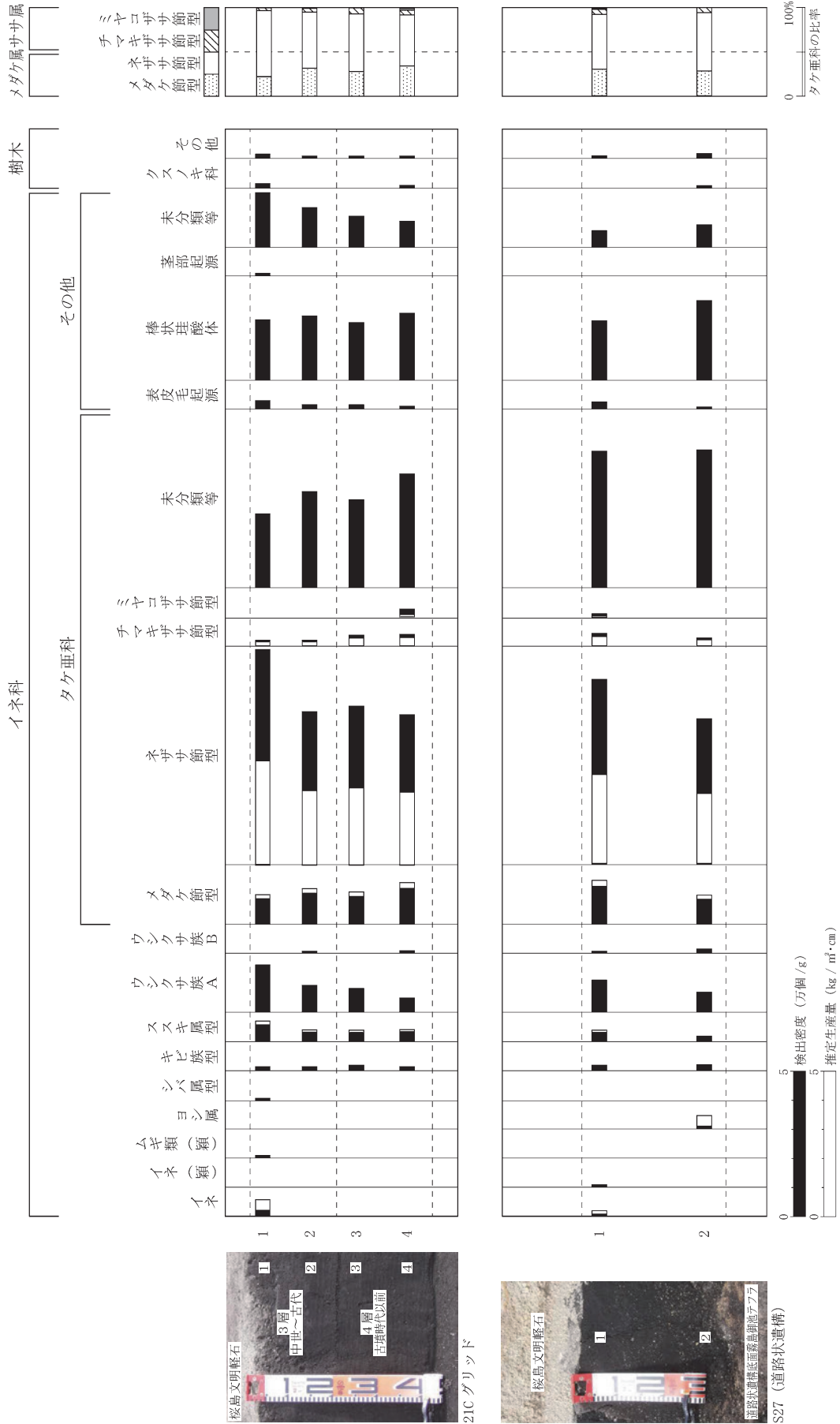


図 111 植物珪酸体ダイアグラム

[イネ科]

イネ、イネ（穎の表皮細胞由来）、ムギ類（穎の表皮細胞）、ヨシ属、シバ属型、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

[樹木]

クスノキ科、その他

(2) 植物珪酸体の検出状況

21 Cグリッド

下位の4層（試料3、4）では、ネザサ節型が多量に検出され、メダケ節型も比較的多く検出された。また、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A、ウシクサ族B、チマキザサ節型、および樹木起源のクスノキ科なども認められた。3層（試料1、2）でも、おおむね同様の結果であるが、桜島文明軽石直下の試料1ではネザサ節型が増加し、イネ、ムギ類（穎の表皮細胞）、シバ属型が出現している。イネの密度は1,900個/gと比較的低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/g（状況により3,000個/gとする場合もある）を下回っている。ムギ類（穎の表皮細胞）の密度は600個/gと低い値であるが、穎（粃殻）が栽培地に残される確率は低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。おもな分類群の推定生産量によると、各層準ともネザサ節型が卓越しており、メダケ節型も多くなっている。

道路状遺構1（S27）

埋土下部（試料2）では、ネザサ節型が多量に検出され、メダケ節型も比較的多く検出された。また、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A、ウシクサ族B、チマキザサ節型、および樹木起源のクスノキ科なども認められた。桜島文明軽石直下（試料1）では、ネザサ節型が増加し、イネ、イネの粃殻（穎の表皮細胞）が出現している。イネの密度は600個/gと低い値である。おもな分類群の推定生産量によると、各層準ともネザサ節型が卓越しており、メダケ節型も多くなっている。

4. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

21 Cグリッド

4層（古墳時代以前）から3層（中世～古代）にかけては、メダケ属（メダケ節やネザサ節）を主体としてススキ属やウシクサ族（チガヤ属など）、キビ族なども生育する草原的な環境であったと考えられ、遺跡周辺にはクスノキ科などの樹木が生育していたと推定される。

これらのイネ科植物は陽当たりの悪い林床では生育が困難であり、ススキ属やチガヤ属の草原が維持されるためには定期的な刈り取りや火入れ（焼き払い）が必要である（堀田，1991，近藤，1995）。このことから、当時は火入れなど人間による植生干渉が行われていた可能性が考えられる。また、このような植生環境下で土壤中に多量の有機物が供給され、炭素含量の高い黒色土壌（黒ボク土）が形成されたと推定される（杉山ほか，2002）。

桜島文明軽石 (Sz-3, 1471 年) 直下の 3 層上部では、少量ながらイネやムギ類 (穎の表皮細胞) が検出され、調査地点もしくはその周辺でイネやムギ類の栽培が行われていた可能性が認められた。遺跡の立地や周辺の植生などから、ここで行われた稲作は畑作の系統 (陸稲) であった可能性が考えられる。

道路状遺構 1 (S 27)

道路遺構の埋土では、21C グリッドの 3 層 (中世～古代) とおおむね同様の結果であり、メダケ属 (メダケ節やネザサ節) を主体としてススキ属やウシクサ族 (チガヤ属など)、キビ族なども生育する草原的な環境で、遺跡周辺にはクスノキ科などの樹木が生育していたと推定される。

桜島 3 テフラ (Sz-3, 1471 年) 直下では、少量ながらイネやイネの籾殻 (穎の表皮細胞) に由来する植物珪酸体が検出され、調査地点もしくはその周辺でイネの栽培が行われていた可能性が認められた。なお、道路遺構の埋土であることから、ここで検出されたイネについては、何らかの形で利用された稲藁に由来する可能性も考えられる。稲藁の利用としては、建物の屋根材や壁材、敷物、履物、俵、縄など多様な用途が想定される。

第 3 節 花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの有機質遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 方法

花粉の分離抽出は、中村 (1967) の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から 1 cm³ を秤量
- 2) 0.5% リン酸三ナトリウム (12 水) 溶液を加えて 15 分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25% フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理 (無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎) を施す
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300～1000 倍で行った。花粉の同定は、島倉 (1973) および中村 (1980) をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン (-) で結んで示した。

3. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 23、樹木花粉と草本花粉を含むもの 6、草本花粉 16、シダ植物胞

表7 花粉分析結果

学名	分類群 和名	21C グリッド				S27(道路遺構)	
		1	2	3	4	1	2
Arboreal pollen	樹木花粉						
Podocarpus	マキ属	1					
Abies	モミ属	2	1	1			
Tsuga	ツガ属	1	2		1		1
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複雑管束亜属	4	5	5		2	4
Cryptomeria japonica	スギ			1	1	1	2
Sciadopitys verticillata	コウヤマキ						1
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ			1	1		
Alnus	ハンノキ属	1	1	1			
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ	1					1
Castanea crenata	クリ	2	3	5	3	9	9
Castanopsis-Pasania	シイ属-マテバシイ属	13	7	27	4	14	17
Fagus	ブナ属	1		1			
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	5	5	8	12	7	5
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	51	43	116	40	31	61
Illicium	シキミ属						1
Zanthoxylum	サンショウ属	2		23	68	1	2
Ilex	モチノキ属			1			
Acer	カエデ属		1	1		1	1
Vitis	ブドウ属	1				1	
Ampelopsis brevipedunculata	ノブドウ				5		3
Parthenocissus tricuspidata	ツタ				2		
Symplocos	ハイノキ属			1	1		1
Distylium	イスノキ属						1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉						
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	2		2		3	4
Saxifragaceae	ユキノシタ科	1				1	
Rosaceae	バラ科	1		2	2		1
Leguminosae	マメ科	3	4	23	1		8
Araliaceae	ウコギ科	1	1	22	78	2	1
Scrophulariaceae	ゴマノハグサ科			1	1		
Nonarboreal pollen	草本花粉						
Gramineae	イネ科	265	171	170	68	130	185
Oryza type	イネ属型	2	1				
Cyperaceae	カヤツリグサ科	3		3		7	3
Polygonum	タデ属						1
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節			1			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科					1	
Ranunculus	キンポウゲ属	1	7	6	3	3	9
Cruciferae	アブラナ科	2		1	3		
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属-フサモ属	8	2			2	2
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	14	2			2	1
Apioideae	セリ亜科	4	1	7	5	3	3
Solanaceae	ナス科			1			
Valerianaceae	オミナエシ科	3		4			1
Lactucoideae	タンポポ亜科	19	16	14	61	29	39
Asteroidaeae	キク亜科	7	6	3	1	4	13
Artemisia	ヨモギ属	121	98	22	4	140	168
Fern spore	シダ植物孢子						
Monolate type spore	単条溝孢子	11	5	23	24	48	53
Trilate type spore	三条溝孢子	15	6	10	11	10	7
Arboreal pollen	樹木花粉	85	68	192	138	67	110
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	8	5	50	82	6	14
Nonarboreal pollen	草本花粉	449	304	232	145	321	425
Total pollen	花粉総数	542	377	474	365	394	549
Pollen frequencies of 1cm ³	試料 1cm ³ 中の花粉密度	2.4 × 10 ⁴	1.5 × 10 ⁴	2.9 × 10 ⁴	1.0 × 10 ⁴	7.6 × 10 ³	1.9 × 10 ⁴
Unknown pollen	未同定花粉	9	7	16	12	12	11
Fern spore	シダ植物孢子	26	11	33	35	58	60
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal・woods fragments	微細炭化物・微細木片	(++)	(++)	(++)	(++)	(++)	(++)

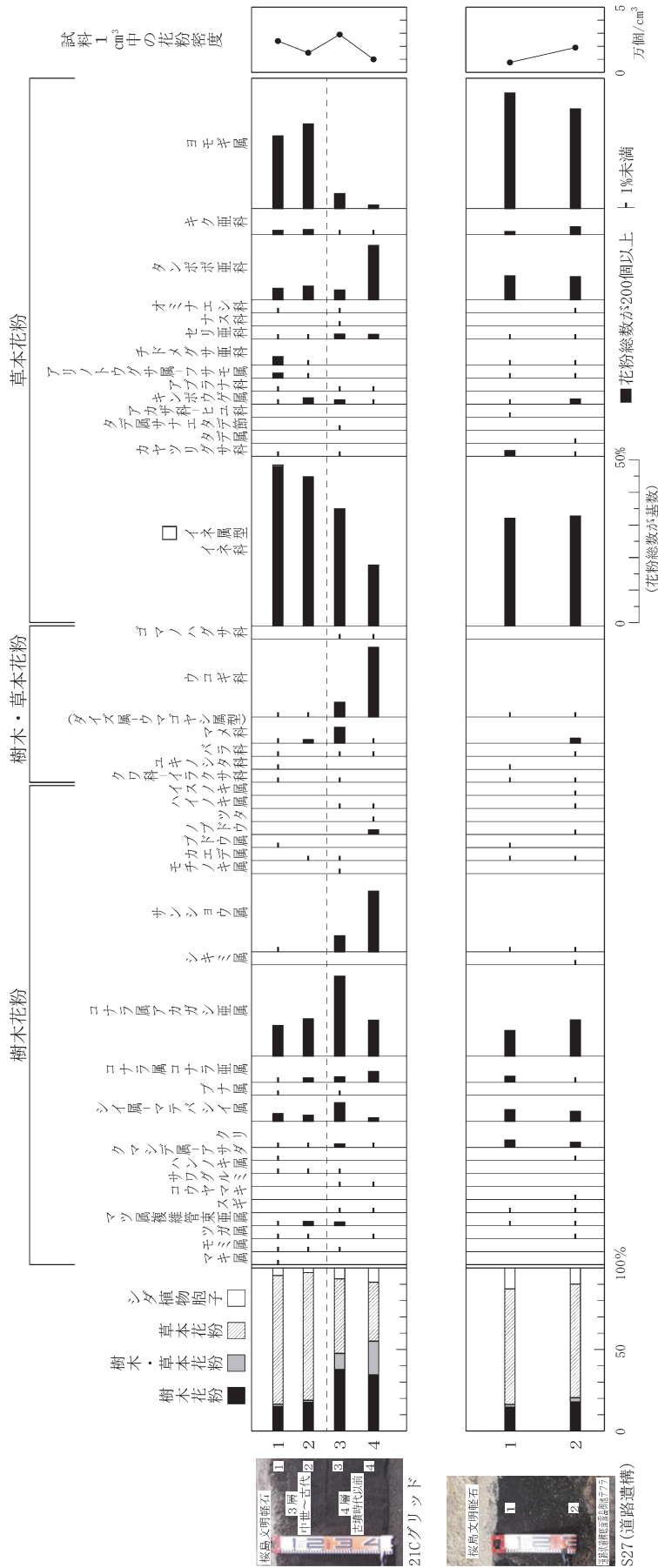


図 112 花粉ダイアグラム

子 2 形態の計 47 である。分析結果を表 7 に示し、花粉数が 100 個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

[樹木花粉]

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、コウヤマキ、サワグルミ、ハンノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属-マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、シキミ属、サンショウ属、モチノキ属、カエデ属、ブドウ属、ノブドウ、ツタ、ハイノキ属、イスノキ属

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科-イラクサ科、ユキノシタ科、バラ科、マメ科 (ダイズ属-ウマゴヤシ属型)、ウコギ科、ゴマノハグサ科

[草本花粉]

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属、タデ属サナエタデ節、アカザ科-ヒユ科、キンポウゲ属、アブラナ科、アリノトウグサ属-フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、ナス科、オミナエシ科、タンポポ科、キク亜科、ヨモギ属

[シダ植物孢子]

単条溝孢子、三条溝孢子
(2) 花粉群集の特徴

21 Cグリッド

4層下部（試料4）では、樹木花粉と草本花粉の占める割合が同様に、樹木・草本花粉が約20%となっている。樹木花粉では、サンショウ属、コナラ属アカガシ亜属が優勢で、コナラ属コナラ亜属、ノブドウ、シイ属-マテバシイ属、クリなどが伴われる。草本花粉では、イネ科、タンポポ亜科が優勢で、セリ亜科、ヨモギ属などが伴われる。また、樹木・草本花粉のウコギ科が特徴的に多く検出された。4層上部（試料3）では、草本花粉ではイネ科が増加し、タンポポ亜科は減少している。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属が増加し、サンショウ属は減少している。また、樹木・草本花粉のウコギ科が減少し、マメ科（ダイズ属-ウマゴヤシ属型）が増加している。3層（試料1、2）では、草本花粉が約80%を占める。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属が優勢で、タンポポ亜科、キク亜科などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属が優勢で、シイ属-マテバシイ属、クリ、マツ属複雑管束亜属などが伴われる。樹木・草本花粉のマメ科（ダイズ属-ウマゴヤシ属型）は減少している。

道路状遺構1（S27）

遺構埋土（試料1、2）では、草本花粉の占める割合が約70%と高い。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属が優勢で、タンポポ亜科、キク亜科などが伴われる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属が優勢で、シイ属-マテバシイ属、クリなどが伴われる。

4. 花粉分析から推定される植生と環境

21 Cグリッド

4層（古墳時代以前）の堆積当時は、イネ科、タンポポ亜科、ヨモギ属などの草本類が生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であり、周辺の林縁付近などにはサンショウ属、ウコギ科、マメ科（ダイズ属-ウマゴヤシ属型）、ノブドウなどの人為の影響のある植生が分布していたと考えられる。サンショウ属には食用や香料になるものがあり、ウコギ科には食用になるウド、タラノキ、ウコギなど、マメ科（ダイズ属-ウマゴヤシ属型）には食用のダイズなどが含まれる。また、遺跡周辺にはカシ類（コナラ属アカガシ亜属）やシイ類（シイ属-マテバシイ属）などの照葉樹林をはじめ、二次林とみられるナラ類（コナラ属コナラ亜属）やクリなどが分布していたと推定される。

3層（中世～古代）では、イネ科、ヨモギ属の草本類が増加し、何らかの原因でサンショウ属、ウコギ科、マメ科（ダイズ属-ウマゴヤシ属型）はあまり見られなくなったと考えられる。イネ科には少量ながらイネ属型が含まれることから、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

なお、花粉分析では植物珪酸体分析で多く検出されたメダケ属（メダケ節やネザサ節）などのタケ亜科が把握されていないが、これは竹笹類が数十年に一度しか開花しないことや、花粉ではイネ科の細分が困難なことに起因している。

道路状遺構1（S27）

道路遺構の埋土の堆積当時は、イネ科、ヨモギ属、タンポポ亜科などの草本類が生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であり、遺跡周辺にはカシ類やシイ類などの照葉樹林をはじめ、二次林とみられるナラ類やクリなどが分布していたと推定される。

表8 種実同定結果

出土位置・遺構名			分類群		部位	個数	備考
			学名	和名			
1C Gr	4層	No.1844	Diospyros	カキノキ属	種子	1	
2C Gr	4層		Quercus gilva Blume	イチイガシ	子葉	3	
			Quercus	コナラ属	子葉(破片)	10	
			Fagaceae	ブナ科	子葉	1	
2C Gr	5a層		Quercus gilva Blume	イチイガシ	子葉	11	
			Quercus	コナラ属	子葉(破片)	3	
4C・5C Gr	4層		Castanea crenata S. et Z.	クリ	子葉(破片)	3	炭化材片2
			Quercus	コナラ属	子葉(破片)	1	
5C Gr	4層		Quercus gilva Blume	イチイガシ	子葉	13	芽1
					(破片)	7	炭化材片1
S14	SE先行Tr		Quercus sect. Aegilops	コナラ属クヌギ節	子葉(破片)	3	

第4節 炭化種実同定

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内などに残存している場合がある。堆積物や遺構埋土などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や植物利用の実態を明らかにすることができる。

2. 試料

試料は、大年遺跡から採取された選別済みの炭化種実類である。

3. 方法

種実類について肉眼および双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4. 結果

(1) 分類群

分析結果を表8に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載し、主要な分類群について写真を示す。

[樹木]

クリ *Castanea crenata* S. et Z. 子葉(破片) ブナ科

種子は黒褐色で広楕円形を呈し、下端に広い付き部がある。断面は楕円～半円形である。

コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* 子葉(破片) ブナ科

基部は明灰褐色、上部は濃褐色で表面には縦線条が密に並ぶ。花柱基部の伏毛は淡褐色。光沢は弱い。

イチイガシ *Quercus gilva* Blume 子葉(完形・破片) ブナ科

炭化して黒色で、楕円形を呈する。表面はなめらかで、縦方向に一条の凹線が入る。長さ×幅：
13.13 mm × 10.10 mm、13.13 mm × 8.56 mm、11.31 mm × 9.17 mm、12.93 mm × 8.85 mm、11.23 mm × 9.41 mm

コナラ属 *Quercus* 子葉(破片) ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。殻斗が欠落しているため、属

レベルの同定である。

ブナ科 Fagaceae 子葉

黒褐色で楕円形を呈し、表面は平滑である。つき部、殻斗が欠落し破片のため、科レベルの同定である。

カキノキ Diospyros kaki Thunb. 種子 カキノキ科

黒褐色で非対称的広倒卵形を呈し偏平である。直線状の腹面は稜をなす。長さ×幅：14.06 mm×8.64 mm

(2) 種実群集の特徴

1) 1 C グリッド 4 層 (No. 1844)

樹木種実のカキノキ属 1 が認められた。

2) 2 C グリッド 4 層

樹木種実のイチイガシ 3、コナラ属片 10、ブナ科 1 が認められた。

3) 2 C グリッド 5 a 層

樹木種実のイチイガシ 11、コナラ属片 3 が認められた。

4) 4 C・5 C グリッド 4 層

樹木種実のクリ片 3、コナラ属片 1 が認められた。

5) 5 C グリッド 4 層

樹木種実のイチイガシ 13、破片 7 が認められた。

6) 竪穴建物跡 8 (S 14) 南東先行トレンチ

樹木種実のコナラ属クヌギ節片 3 が認められた。

5. 所見

種実同定の結果、樹木種実のクリ、コナラ属クヌギ節、イチイガシ、コナラ属、ブナ科、カキノキ属が認められた。最も多いのはイチイガシであり、2 C グリッド 4 層、2 C グリッド 5 a 層、5 C グリッド 4 層で認められた。イチイガシの果実は、アクがなく食用として有用である。竪穴建物跡 8 (S 14) 南東先行トレンチで認められたコナラ属クヌギ節は、二次林に多い種類である。1 C グリッド 4 層 (No. 1844) で認められたカキノキ属は、果実が食用となる。いずれも食用になるものや二次林に多く人為性の高い種実である。

第 5 節 放射性炭素年代測定

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (14 C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約 5 万年前までの年代測定が可能である (中村, 2003)。

2. 試料と方法

次表に、測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示す。

3. 測定結果

加速器質量分析法 (AMS : Accelerator Mass Spectrometry) によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代および暦年代 (較正年代) を算出した。次表にこれらの結果を示し、図 113 に暦年較正結果 (較正曲線) を示す。

(1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に標準化することで同位体分別効果を補正している。

(2) 放射性炭素 (^{14}C) 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在 (AD1950 年基点) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は 5730 年であるが、国際的慣例により Libby の 5568 年を用いている。なお、No. 1 については 1950 年の大気中の ^{14}C 濃度を 1.0 として計算した試料の ^{14}C 濃度を表す pMC 値 (%) を示した。統計誤差 (\pm) は 1σ (68.2% 確率) である。 ^{14}C 年代値は下 1 桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下 1 桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。なお、No. 1 については pMC 値が 100% 以上であり、AD1950 年以降の試料であることを示している。

表 9 放射性炭素年代測定試料一覧

資料 No.	採取箇所	種類	前処理・調整法	測定法
No. 1	1号掘立柱建物跡 (S18) 炉跡	炭化物 (タケ壺科)	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No. 2	竪穴建物跡 3 (S11) 床面	炭化材 (環孔材)	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No. 3	竪穴建物跡 7 (S12) 床面付近	炭化材 (散孔材)	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No. 4	竪穴建物跡 4 (S16) 床面・貼床	炭化材 (環孔材)	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No. 5	1C Gr 4層 (包含層)	炭化種実	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS

表 10 放射性炭素年代測定結果

試料 No.	測定 No.	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	14C 年代 : BP (暦年較正用) pMC 値 (%)	暦年代 (較正年代) : cal-	
				1 σ (68.2% 確率)	2 σ (95.4% 確率)
No. 1	27878	-29.41 ± 0.24	-1150 ± 15	AD 1990 - 1991 (61.2%)	AD 1958 - 1958 (9.7%)
			(-1149 ± 16)	AD 1991 - 1991 (7.0%)	AD 1989 - 1991 (85.7%)
			115.39 ± 0.24	(Post-bomb NH2 2013)	(Post-bomb NH2 2013)
No. 2	27879	-30.97 ± 0.21	1930 ± 20	AD 53 - 87 (55.4%)	AD 27 - 40 (8.0%)
			(1929 ± 19)	AD 106 - 120 (12.8%)	AD 48 - 125 (87.4%)
			78.65 ± 0.19		
No. 3	27880	-26.90 ± 0.32	1570 ± 25	AD 429 - 475 (39.6%)	
			(1572 ± 23)	AD 484 - 495 (8.9%)	AD 422 - 543 (95.4%)
			82.22 ± 0.24	AD 508 - 522 (11.9%)	
				AD 527 - 536 (7.7%)	
No. 4	27881	-24.36 ± 0.21	1875 ± 20	AD 80 - 138 (65.3%)	AD 76 - 215 (95.4%)
			(1875 ± 20)	AD 200 - 205 (2.9%)	
			79.17 ± 0.20		
No. 5	27882	-23.73 ± 0.25	1885 ± 20	AD 84 - 130 (68.2%)	AD 69 - 174 (91.1%)
			(1884 ± 19)		AD 192 - 211 (4.3%)
			79.09 ± 0.19		

pMC : percentage of Modern Carbon, BP : Before Physics (Present)、cal : calibrated , AD : 西暦

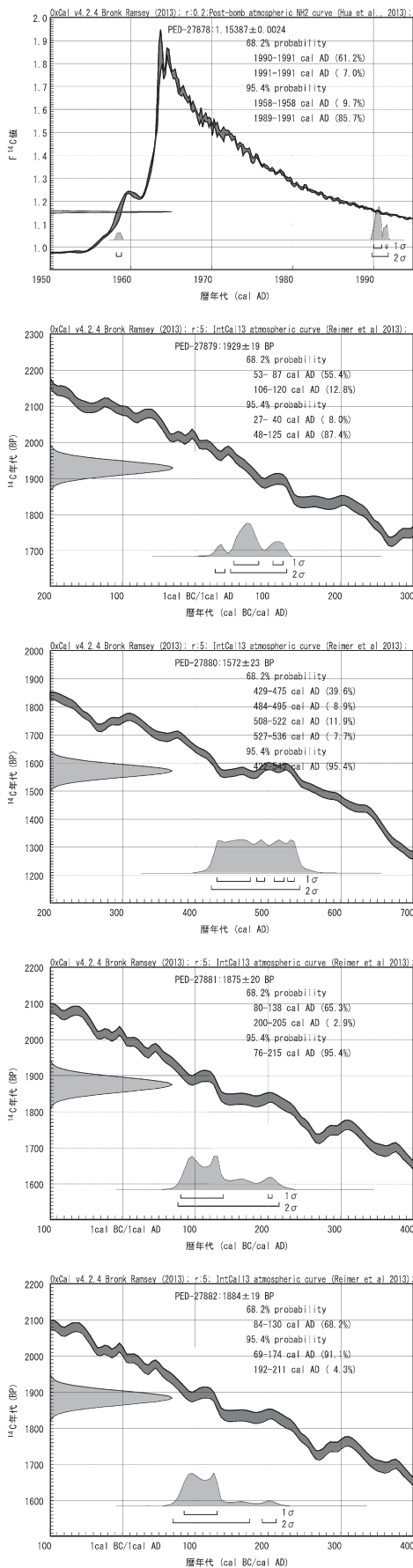


図 113 暦年較正結果

(3) 暦年代 (Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正することで、放射性炭素 (^{14}C) 年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴの U/Th (ウラン/トリウム) 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータは IntCal 13、較正プログラムは OxCal 4.2 である。なお、1950 年以降の試料については Post-bomb atmospheric NH2 (核実験後の北半球における較正曲線データ) を使用した。暦年代 (較正年代) は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCal の確率法により 1 (68.2% 確率) と 2σ (95.4% 確率) で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。() 内の % 表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 所見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、No. 1 では -1150 ± 15 年 BP (pMC 値は $115.39 \pm 0.24\%$), 2σ の暦年代で AD 1958, 1989 ~ 1991 年)、No. 2 では 1930 ± 20 年 BP (AD 27 ~ 40, 48 ~ 125 年)、No. 3 では 1570 ± 25 年 BP (AD 422 ~ 543 年)、No. 4 では 1875 ± 20 年 BP (AD 76 ~ 215 年)、No. 5 では 1885 ± 20 年 BP (AD 69 ~ 174, 192 ~ 211 年) の年代値が得られた。No. 1 は、AD1950 年以降の試料と考えられる。

第 6 節 蛍光 X 線分析 (黒曜石の産地推定)

1. はじめに

物質に X 線を照射すると、その物質を構成している元素に固有のエネルギー (蛍光 X 線) が放出され、この蛍光 X 線を分光して波長と強度を測定することで、物質に含まれる元素の種類と量を調べることができる。この方法を用いて、指標となる特定の元素の検出パターンの比較から石器 (黒曜石など) の産地推定や土器 (須恵器など) の生産地推定が行われている。この方法は、石器や土器などの貴重な考古遺物を非破壊で分析する

表 11 黒曜石蛍光 X 線分析結果

No.	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn×100 Fe	Sr分率	log $\frac{Fe}{K}$	判別群	エリア
1	304.5	86.7	2009.2	967.7	284.4	377.2	634.1	42.75	4.31	12.57	0.82	腰岳	伊万里
2	239.3	66.8	1578.2	780.9	232.6	305.0	506.2	42.80	4.23	12.75	0.82	腰岳	伊万里
3	292.1	86.6	1867.0	971.9	288.5	392.9	660.0	42.01	4.64	12.47	0.81	腰岳	伊万里
4	244.6	67.9	1578.8	807.6	231.7	319.4	528.2	42.80	4.30	12.28	0.81	腰岳	伊万里
5	337.0	93.8	2028.1	1017.9	302.8	402.5	677.8	42.40	4.62	12.61	0.78	腰岳	伊万里
6	311.7	91.0	1952.7	1001.2	298.9	400.9	675.4	42.13	4.66	12.58	0.80	腰岳	伊万里
7	286.8	89.5	1980.3	999.9	300.3	400.8	675.8	42.07	4.52	12.63	0.84	腰岳	伊万里
8	317.1	65.6	1484.8	863.6	245.1	337.0	558.4	43.09	4.42	12.23	0.67	腰岳?	伊万里?
9	302.0	90.5	1913.3	984.9	298.4	395.2	672.5	41.89	4.73	12.69	0.80	腰岳	伊万里
10	322.9	94.4	2078.9	992.1	297.7	391.9	661.7	42.33	4.54	12.71	0.81	腰岳	伊万里

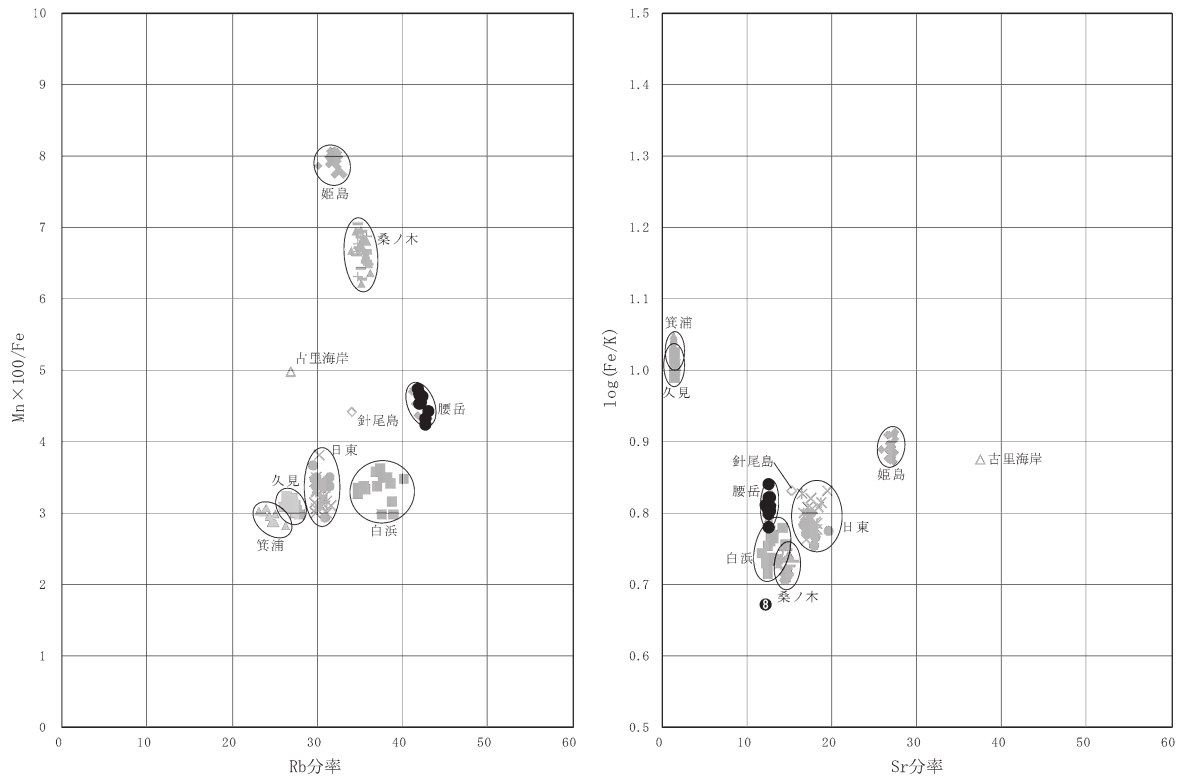


図 114 黒曜石産地推定判別図

ことができるが、表面が汚れたものや風化したものは正確な測定ができない。

2. 試料

試料は、大年遺跡から出土した黒曜石 10 点 (No. 1 ~ No. 10) である。

3. 分析方法

試料を超音波洗浄器で洗浄した後、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 (SII ナノテクノロジー社製, SEA1200VX) を用いて測定を行った。測定の条件は、測定時間 100 秒、照射径 8 mm、管電圧 50kV、電流 1000 μ A、試料室内真空である。

産地推定には、蛍光 X 線分析による X 線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法 (望月, 2004 など) を用いた。蛍光 X 線分析結果のうち、カリウム (K)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、ルビジ

ウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) の7元素のX線強度 (cps; count per second) について、以下に示す指標値を計算した。

- 1) Rb 分率 = Rb 強度 × 100 / (Rb 強度 + Sr 強度 + Y 強度 + Zr 強度)
- 2) Sr 分率 = Sr 強度 × 100 / (Rb 強度 + Sr 強度 + Y 強度 + Zr 強度)
- 3) Mn 強度 × 100 / Fe 強度
- 4) log (Fe 強度 / K 強度)

図 114 の左図は横軸に Rb 分率、縦軸に Mn 強度 × 100 / Fe 強度、右図は横軸に Sr 分率、縦軸に log (Fe 強度 / K 強度) をプロットしたものである。なお、視覚的にわかりやすくするため各判別群を楕円で取り囲んである。西日本の原石データと石器のデータを照合して産地推定を行った。

4. 結果および考察

大年遺跡から出土した黒曜石 10 点 (No. 1 ~ No. 10) について、蛍光 X 線分析による産地推定を行った。その結果、図 2 の左図ではすべての試料、右図では No. 8 を除く 9 試料が伊万里エリア腰岳群の範囲にプロットされた。No. 8 は、右図では腰岳群の範囲の下方にプロットされたが、これは遺物の風化による影響と考えられ (望月 1999)、No. 8 についても腰岳群に属する可能性がある。したがって、No. 1 ~ No. 10 の黒曜石はいずれも腰岳産と推定される。

第 7 節 溝状遺構底面に堆積した鉱物粒についての観察

遺構埋土に含まれる鉱物粒を観察し、その量比を概観した。定量表示ではなく観察者の主観による量比表示である。すべてのサンプルが複数の起源を持つ鉱物粒を多く含み、混在の著しいものであるが、肉眼観察でもその色調の違いを区別することができるものもあり、優勢な鉱物粒に相違が見られる。これは、サンプリング地点へ流入する雨水の流路や堆積硬化する時期の周辺の表土露出状況に左右されるものだと考えられる。

観察結果と聞き取りの結果を総合して、推察しうる鉱物粒の起源を考察してみた。

聞き取りによれば、現在の発掘調査区周辺には鬼界アカホヤ火山灰以前のテフラの露出がなく、霧島御池軽石は掘削面より下位に分布、桜島 3 (Sz-3) 文明軽石は周辺の露出がないという状況である。遺構の推定時期は中世とのことであり、1700 年代のテフラは考慮していない。

都城地方の遺跡土層において有効な指標テフラは霧島系、桜島系、始良カルデラ系が考えられる

表 12 溝状遺構底面堆積物の顕微鏡観察結果

		S27 底面 分岐点付近	S27 底面 分岐点付近 No. 3219	S27 (21B?) 底面砂質土 No. 2841	比較資料 No. 2408	鉱物粒の 推定起源
白色軽石	多孔質	+++	+++	+	+++++	Sz 系
橙色軽石	多孔質	+	+	+	++	Kr-M
暗灰色軽石	多孔質黒色結晶含	++	+++	-	+++	Kr-Th・OhE
暗褐色スコリア	発泡不良	+++++	+++	+	+	Kr-Th・OhE
輝石	長柱状結晶	+	+++	+++	+	Kr 系共通
透明石英	結晶面あり	+	+	++	+	Kr・AT 共通
透明火山ガラス	BW 型	+	++	-	-	AT
暗色火山ガラス	BW 型	-	+	-	-	K-Ah
黒色岩片	片状	+++	+	++	++	頁岩系
黒色岩片	塊状	++	++	+++++	+	堆積岩系
白色石英		++	++	+++	+	堆積岩系
赤色岩片		+	+	+	+	安山岩系

が、立地から考えて霧島系の卓越は当然であるし、指標テフラとならない小規模噴火は頻繁に起こっていたと考えるべきであろう。つまり霧島系の鉱物組み合わせを含む土壌であるからといってすぐに Kr-Th・OhE などの霧島系の指標テフラと直結させることは短絡的であることを断っておきたい。

表 13 テフラ略号一覧

桜島 3 (文明)	Sz-3	543 年前	AD1471
霧島御鉢高原	Kr-Th	779 年前	AD1235
霧島御鉢延暦	Kr-OhE	1226 年前	AD788
桜島 4 (天平)	Sz-4	1250 年前	AD764
霧島御池	Kr-M	4600 年前	
鬼界アカホヤ	K-Ah	7300 年前	
始良 T n	AT	28000 年前	

1) 道路状遺構 1 (S 27) 底面分岐点付近サンプル

発泡不良の暗褐色スコリアが優勢で、これは俗にフィールドで高原スコリアとしているものに似ている。これが、Kr-Th 由来か Kr-OhE 由来かは推察できない。次に多いのが桜島系の軽石を思わせる白色多孔質なものである。これは、約 8000 年前の桜島 11 (Sz-11) でも似たような軽石が見られるが、鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah) がほとんど混入しないことを考えると、桜島 4 (Sz-4) 由来と考える方ことも可能かもしれない。

2) 道路状遺構 1 (S 27) 底面分岐点付近 No. 3219 サンプル

複雑に混在し、優勢といえる鉱物粒が特定しにくい、前述の鉱物粒に加え、輝石、火山ガラス、堆積岩起源の砂粒などもあり、2 mm を越える白色軽石が他の粒子より際だって大きい。これは水簸 (すいひ=水による比重選鉱のこと) による混入の可能性を少なくする情報であり、人為的なコンタミネーションが著しい堆積物と考えられる。

3) 道路状遺構 1 [S27(21 B グリッド)] 底面砂質土 No. 2841 サンプル

軽石粒がほとんど存在せず、堆積岩系の岩片や火山放出物の中でも輝石などの重鉱物だけが濃集している。水簸によって多孔質な密度の低い鉱物粒が除去された水成堆積物であり、淘汰の良さから現地で水簸され堆積した砂層と考えられる。

4) 比較資料壺 (190) 内堆積土

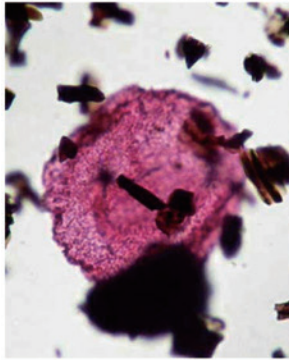
目視でも白色粒が多く、桜島系を思わせる混じりけのない白色軽石優勢の構成である。

桜島 3 (Sz-3) 文明軽石の噴出年代が遺跡の性格上、適合しにくいという消極的な理由で桜島 4 (Sz-4) 由来の軽石ではないかと考えられる。他の鉱物粒も多数混入していることから、この土壌が Sz-4 の堆積時期に形成されたわけではなく、Sz-4 降灰後に混入したと考える方が自然である。

参考文献

- 笠原安夫 1985 『日本雑草図説』養賢堂、494 頁
 金原正明 1993 「花粉分析法による古環境復原」『新版 古代の日本』第 10 巻古代資料研究の方法、角川書店、248～262 頁
 近藤鍊三 1995 「日本における植物珪酸体研究とその応用」『近堂祐弘教授退官記念論文集刊行会』、31～56 頁
 島倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第 5 集、60 頁
 杉山真二・藤原宏志 1986 「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定-古環境推定の基礎資料として-」『考古学と自然科学』19、69～84 頁
 杉山真二 1999 「植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史」『第四紀研究』第 38 巻第 2 号、pp. 109-123
 杉山真二 2000 「植物珪酸体 (プラント・オパール)」『考古学と植物学』、同成社、pp. 189-213
 杉山真二・渡邊眞紀子・山元希里 2002 「最終氷期以降の九州南部における黒ボク土発達史」『第四紀研究』第 41 巻第 5 号、pp. 361-373
 中村 純 1967 『花粉分析』、古今書院、pp. 82-110

- 中村 純 1980 「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集、p. 91
- 中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の14C年代』、日本第四紀学会、pp. 3-20
- 中村俊夫 2003 「放射性炭素年代測定法と暦年代較正」『環境考古学マニュアル』、同成社、pp. 301-322
- 南木睦彦 1993 「葉・果実・種子」『第四紀試料分析法』、東京大学出版会、pp. 276-283
- 文化庁文化財部記念物課監修 『発掘調査のてびき - 整理・報告書編 - 』、同成社
- 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) - 数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法 - 』『考古学と自然科学』9、pp. 15-29
- 藤原宏志・杉山真二 1984 「プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) - プラント・オパール分析による水田址の探査 - 』『考古学と自然科学』17、pp. 73-85
- 堀田満 1991 『日本列島の植物．カラー自然ガイドⅡ』、保育社、pp. 68-69
- 町田洋・新井房夫 2003 『新編 火山灰アトラス-日本列島とその周辺-』、東京大学出版会、p. 336
- 望月明彦 1999 「上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定」『埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書 2-上和田城山遺跡篇-』、pp. 172-179
- 望月明彦 2002 「黒曜石分析科学の現状と展望」『黒曜石文化研究』創刊号、明治大学人文科学研究所、pp. 95-102
- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), pp. 337-360.
- Hua, Q., Barbetti, M. Rakowski, A.Z. 2013 Atmospheric Radiocarbon for the Period 1950-2010. *Radiocarbon*, 55(4), pp. 1-14.
- Paula J Reimer et al., 2013 IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55, 1869-1887.



1 ツガ属 (21C-1)



2 コナラ属コナラ亜属 (21C-1)



3 コナラ属アカガシ亜属 (21C-3)



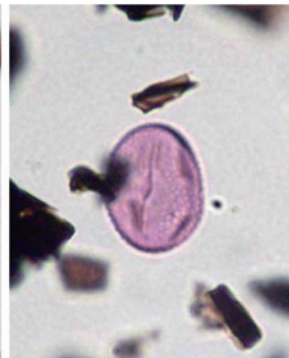
4 サンショウ属 (21C-3)



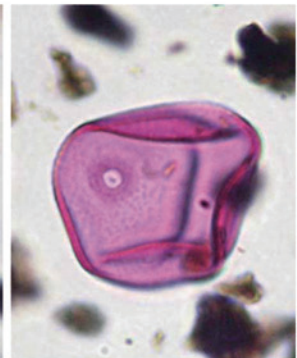
5 クワ科-イラクサ科 (21C-1)



6 ウコギ科 (21C-4)



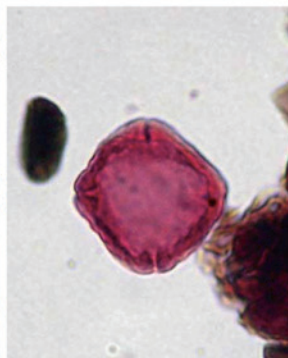
7 マメ科(ダイズ属-ウマゴヤシ属型) (S27-2)



8 イネ科 (21C-4)



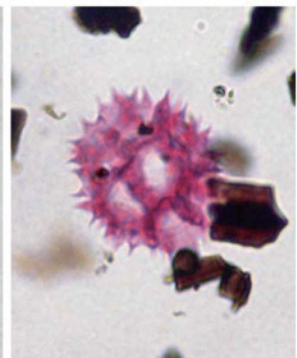
9 カヤツリグサ科 (S27-1)



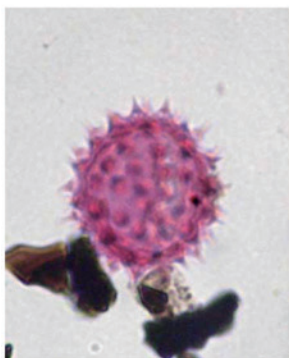
10 アリノトウグサ属-フサモ属 (21C-1)



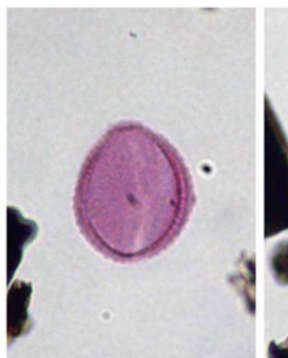
11 チドメグサ亜科 (21C-1)



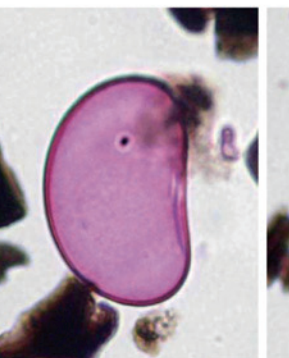
12 タンポポ亜科 (21C-4)



13 キク亜科 (21C-1)



14 ヨモギ属 (21C-3)



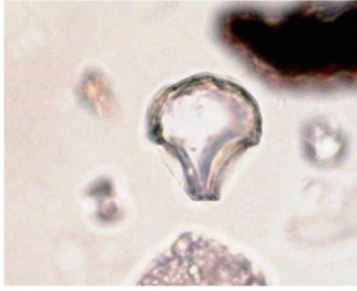
15 シダ植物単条溝胞子 (21C-1)



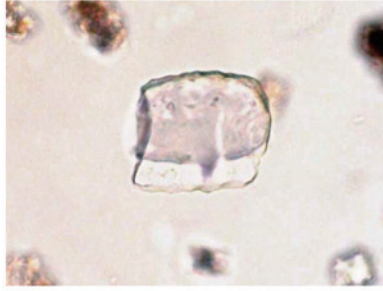
16 シダ植物三条溝胞子 (21C-4)

1 — 10 μm, 2-16 — 10 μm

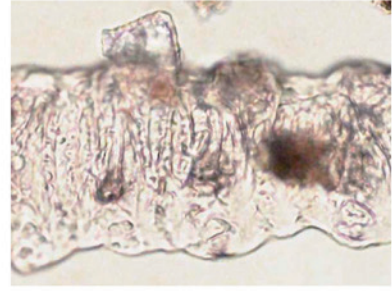
写真2 植物珪酸体写真



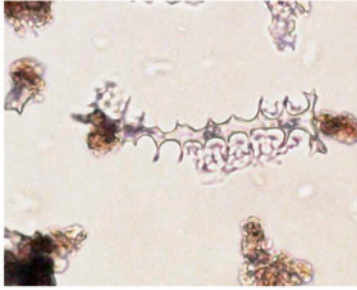
イネ
21C Gr 1



イネ (側面)
21C Gr 1



イネの籾殻 (籾の表皮細胞)
S27 1



ムギ類 (籾の表皮細胞)
21C Gr 1



キビ族型
21C Gr 4



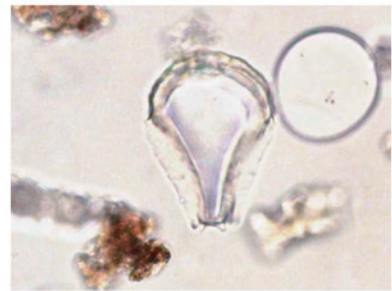
キビ族型
21C Gr 4



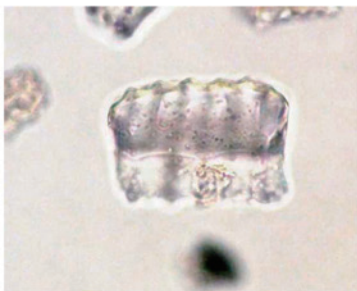
ススキ属型
21C Gr 4



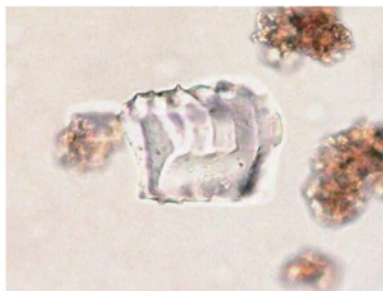
ウシクサ属 B
21C Gr 4



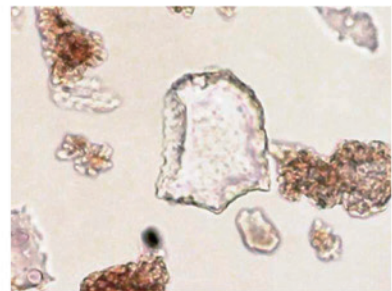
メダケ節型
S27 1



ネザサ節型
21C Gr 4



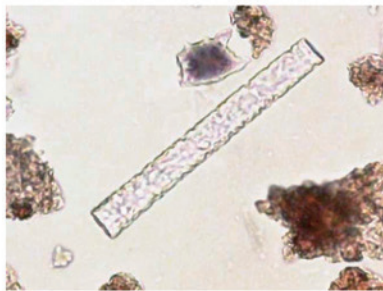
ネザタ節型
S27 1



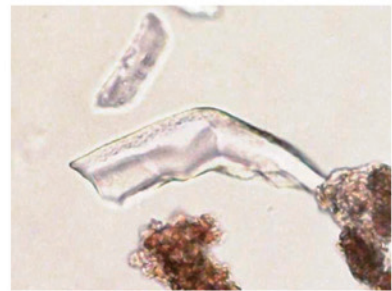
チマキザサ節型
21C Gr 4



表皮毛起源
21C Gr 4



棒状珪酸体
21C Gr 4



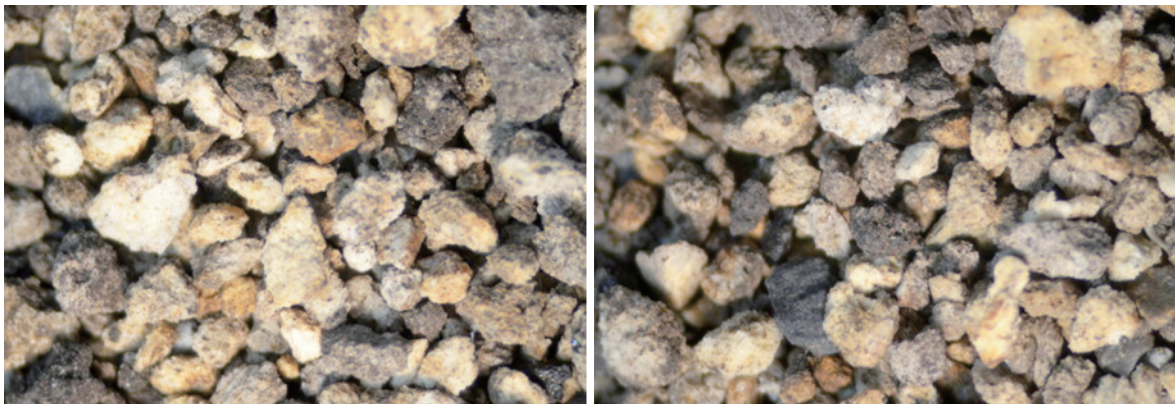
クスノキ科
21C Gr 1

50 μm

写真3 花粉写真



写真4 炭化種実同定試料写真



1 道路状遺構底面分岐点付近サンプル写真

2 道路状遺構底面分岐点付近 No. 3219 サンプル写真



3 道路状遺構底面砂質土 No. 2841 サンプル写真

4 比較資料壺 (109) 内堆積土サンプル写真

写真5 道路状遺構底面堆積物サンプル写真

附表1 報告名称と注記等の対応表

遺構対応表

報告書遺構名	調査時・注記略号
竪穴建物跡1	→ S 7
竪穴建物跡2	→ S 9
竪穴建物跡3	→ S 11
竪穴建物跡4	→ S 16
竪穴建物跡5	→ S 13
竪穴建物跡6	→ S 10
竪穴建物跡7	→ S 12
竪穴建物跡8	→ S 14
竪穴建物跡9	→ S 15
竪穴建物跡10	→ S 8
竪穴状遺構1	→ S 17
竪穴状遺構2	→ S 21
土坑1	→ S 43
土坑2	→ S 25
土坑3	→ S 6
土坑4	→ S 24
炭集中土坑	→ S 20
帆立柱建物跡1	→ S 18
掘立柱建物跡2	→ S 19
1層下面桜島3テフラ残存部	→ S 1
桜島3テフラ下部硬化部	→ S 5
小溝列	→ S 2
畦状遺構1	→ S 3
畦状遺構2	→ S 29
畦状遺構3	→ S 30
道路状遺構	→ S 27
溝状遺構1	→ S 41
溝状遺構2	→ S 37
溝状遺構3	→ S 36
溝状遺構4	→ S 33・S 40
溝状遺構5	→ S 38
溝状遺構6	→ S 34
溝状遺構7	→ S 35・S 39
3層中の小穴	→ S 4
樹痕(欠番)	→ S 26
近世・近代以降の道?	→ S 28
近世以降溝	→ S 42
欠番	→ S 22・S 23

注記対応表

注記略号	意味	注記略号	意味
u1	上層	なし	埋土
l1	下層	nw	壁際
up	上部	P	ピット
lp	下部	べ	ベルト
sr	上面	ar	周辺
us	下面	ec	確認調査(試掘)
fl	床面直上	Tr	トレンチ
fl+○	床上○cm	ex	拡張区(部)
fl-	貼床中、床下	dd	深堀り
bt	底面	cl	清掃土
bt+○	底面上○cm	ft	倒木痕
d1	検出面	dt	攪乱

土層番号対応表

報告書土層番号	調査時・注記土層番号	報告書土層番号	調査時・注記土層番号	報告書土層番号	調査時・注記土層番号
基本土層		14層	→ 123層	4層	→ 94層
1層	→ 1層	竪穴建物跡5(S13)		5層	→ 95層
2層	→ 2層	1層	→ 67層	6層	→ 96層
3層	→ 3層	2層	→ 68層	7層	→ 97層
4層	→ 4層	3層	→ 69層	竪穴建物跡10(S8)	
5層	→ 5層	4層	→ 70層	1層	→ 76層
6層	→ 6層	5層	→ 73層	2層	→ 77層
7層	→ 7層	6層	→ 71層	3層	→ 79層
8層	→ 8層	7層	→ 72層	4層	→ 4・78層
9層	→ 9層	8層	→ 74層	5層	→ 53層
10層	→ 10層	竪穴建物跡6(S10)・		6層	→ 85層
11層	→ 11層	竪穴状遺構2(S25)		7層	→ 86層
12層	→ 12層	1層	→ 126層	8層	→ 80層
13層	→ 13層	2層	→ 127層	9層	→ 81層
14層	→ 14層	3層	→ 3・128層	10層	→ 82層
15層	→ 15層	4層	→ 129層	11層	→ 84層
竪穴建物跡1(S7)		5層	→ 130層	12層	→ 87層
1層	→ 31層	6層	→ 26層	13層	→ 88層
2層	→ 32層	7層	→ 27層	14層	→ 89層
3層	→ 33層	8層	→ 132層	15層	→ 90層
4層	→ 34層	9層	→ 135層	竪穴状遺構1(S17)	
5層	→ 35層	10層	→ 136層	1層	→ 1層
6層	→ 37層	11層	→ 137層	2層	→ 4層
7層	→ 36層	12層	→ 133層	3層	→ 138層
竪穴建物跡2(S9)		13層	→ 134層	4層	→ 139層
1層	→ 38層	14層	→ 5層	5層	→ 149層
2層	→ 39層	15層	→ 6層	6層	→ 147層
3層	→ 40層	竪穴建物跡7(S12)		7層	→ 140層
4層	→ 41層	1層	→ 44層	8層	→ 141層
竪穴建物跡3(S11)		2層	→ 45層	9層	→ 153層
1層	→ 57層	3層	→ 46層	10層	→ 152層
2層	→ 58層	4層	→ 50層	11層	→ 142層
3層	→ 59層	5層	→ 47層	12層	→ 143層
4層	→ 60層	6層	→ 48層	13層	→ 144層
5層	→ 61層	7層	→ 49層	14層	→ 145層
6層	→ 63層	8層	→ 51層	15層	→ 146層
7層	→ 62層	9層	→ 52層	16層	→ 148層
8層	→ 64層	10層	→ 53層	17層	→ 150層
9層	→ 65層	11層	→ 55層	18層	→ 151層
竪穴建物跡4(S16)		12層	→ 54層		
1層	→ 111層	13層	→ 56層		
2層	→ 112層	竪穴建物跡8(S14)			
3層	→ 113層	1層	→ 104層		
4層	→ 115層	2層	→ 105層		
5層	→ 125層	3層	→ 106層		
6層	→ 116層	4層	→ 107層		
7層	→ 114層	5層	→ 5層		
8層	→ 117層	6層	→ 109層		
9層	→ 118層	7層	→ 110層		
10層	→ 119層	竪穴建物跡9(S15)			
11層	→ 120層	1層	→ 91層		
12層	→ 121層	2層	→ 92層		
13層	→ 124層	3層	→ 93層		

道路状遺構(S27)土層注記対応表

152: 基本土層2層相当	165: 7.5YR2/1(黒)、粘性弱・しまり有、白色軽石(1mm)7-10%
153: 7.5YR3/2(黒褐)、粘性無・しまり弱、白色軽石(3mm程度)+黒色土、後世の耕作土か	166: 粘性無・しまり無、白色軽石(2-3mm)50%以上+黒色土
	167: 白色軽石(1mm以下)層
154: 10YR4/1(褐灰)、粘性無・しまり無、白色軽石(3mm以下)・火山灰+黒色土少量	168: 粘性無・しまりとても強、白色軽石(1mm以下)50%以上+黒色土、軽石部分は硬化および鉄分にも赤化層あり
155: 白色軽石(1mm以下)・火山灰層、やや黒みを帯びる	169: 白色軽石(1-2mm)層
156: 粘性弱・しまり弱、白色軽石(3mm)+黒色土、153に対応か	170: 7.5YR2/1(黒)、粘性弱・しまり弱、軽石をほとんど含まない
157: 白色軽石(1mm以下)層、やや黒みを帯びる、155に対応か	171: 10YR4/1(黄灰)、粘性弱・しまり有、白色軽石(1-2mm)20-25%、153・156に対応か
158: 7.5YR3/2(黒褐)	
159: 粘性無・しまり無、白色軽石(5mm程度)層、152・基本土層2層に対応か	172: 粘性無・しまり有-強、白色軽石(1mm以下)50%以上+黒色土
160: 粘性弱・しまり弱、白色軽石(2-3mm)+黒色土、153・156に対応か	173: 10YR4/2(灰黄褐)、粘性無・しまり強、白色軽石(1-3mm)50%以上+黒色土
161: 粘性無・しまり無、白色軽石(2-3mm)50%以上+黒色土	174: 10YR6/1(褐灰)、粘性無・しまり有、白色軽石(1mm以下)層
162: 粘性弱・しまり無、白色軽石(1-2mm)50%+黒色土	
163: 粘性無・しまり無、白色軽石(1-3mm)50%以上+黒色土	175: 粘性無・しまりとても強、白色軽石(1mm以下)・火山灰層、168に対応か
164: 粘性無・しまり無、白色軽石(3mm程度)50%+黒色土	aは粘性無・しまりとても強、硬化および鉄分により赤化層あり、bは粘性無・しまり弱、非硬化

176: 7.5YR2/1(黒)、粘性弱・しまり無-弱、白色軽石(3mm)40-50%	254: 10YR3/1(黒褐)、粘性弱・しまり弱-有、橙色軽石(1mm以下)10-15%
177: 10YR4/1(黄灰)、粘性弱・しまり有、白色軽石(1mm)20%、153・156・171に対応か	255: 10YR2/1(黒)、粘性弱・しまり有、橙色軽石(1mm未満)5-7%
178: 10YR4/2(灰黄褐)、粘性無・しまり有、白色軽石(3mm以下)・火山灰50%以上、173に対応か	256: 10YR3/1(黒褐)、粘性弱・しまり弱、橙色軽石(2mm以下)15-20%
179: 粘性無・しまり有-強、白色軽石(1-2mm)50%以上、	257: 10YR2/1(黒)、粘性弱・しまり有-強、橙色軽石(3mm以下)30-40%
180: 白色軽石(1mm以下)・火山灰層168・175に対応か、aは粘性無・しまりとても強、明褐色(7.5Y5/6)土と灰色(10Y4/)が互層状、bはaに比べ還元色を呈し非硬化	258: 10YR2/1(黒)、粘性弱・しまり弱、橙色軽石(2mm以下)20-25%
181: 7.5YR2/1(黒)、粘性弱・しまり弱、白色軽石(1-2mm)5-7%	259: 10YR3/1(黒褐)、粘性弱・しまり弱、橙色軽石(1mm以下)25-30%
182: 10YR5/1(褐灰)、粘性無・しまり有、白色軽石(1-3mm)50%以上	260: 10YR3/2(黒褐)、粘性無・しまり有、白色軽石(2mm以下)20-40%
183: 粘性無・しまり有、白色軽石(1mm以下)・火山灰層	261: 10YR8/4(浅黄橙)、粘性無・しまり弱、白色軽石(1-3mm)40-50%
184: 基本土層2層に対応	262: 10YR3/1(黒褐)、粘性無・しまり弱-有、白色軽石(5-10mm)20-30%
185: 7.5YR2/1(黒)、粘性弱・しまり弱、白色軽石(3mm)7-10%	263: 10YR8/4(浅黄橙)、粘性無・しまり無、白色軽石(3-7mm)40-50%、鉄分による赤化層あり
186: 7.5YR2/1(黒)、粘性弱・しまり弱、白色軽石(1-3mm)5-7%(部分的に20%)、185に対応か	264: 10YR4/2(灰黄褐)、粘性無・しまり無-弱、白色軽石(3-5mm)7-10%、
187: 10YR3/1(黒褐)、粘性無・しまり有、白色軽石(1,3-5mm)15-20%、後世の耕作土か	265: 10YR7/4(にぶい黄橙)、粘性無・しまり無、白色軽石(2-3mm)5-7%
188: 10YR6/6(明褐色)、粘性無・しまり無、白色軽石(1mm以下)・火山灰層	266: 10YR2/1(黒)、粘性弱・しまり有、橙色軽石(1mm未満)3-7%
189: 2.5YR7/4(浅黄)、粘性無・しまり弱、白色軽石(1mm以下)・火山灰層	267: 10YR2/1(黒)、粘性弱・しまり有、橙色軽石(1mm以下)15-20%
190: 粘性無・しまりとても強、火山灰層、下部に鉄分沈着層(7.5YR6/6)	268: 10YR3/1(黒褐)、粘性弱・しまり弱-有、橙色軽石(1mm未満)5-10%
191: 粘性無・しまり無、白色軽石(10mm以下)層、基本土層2層に対応	269: 10YR2/1(黒)、粘性弱・しまり強、橙色軽石(1mm以下)20-25%、一部硬化、鉄分により一部赤化
192: 7.5YR2/1(黒)、粘性無・しまり無-弱、白色軽石(3mm)25-30%	270: 10YR3/1(黒褐)、粘性弱・しまり強-とても強、橙色軽石(1mm以下)10-15%、鉄分による赤化層含
193: 10YR4/2(灰黄褐)、粘性無・しまり弱、白色軽石(2-5mm)25%	271: 10YR3/1(黒褐)、粘性弱・しまり有、橙色軽石(2mm以下)10-15%、鉄分による赤化層含
194: 10YR3/1(黒褐)、粘性無・しまり弱、白色軽石(5-7mm)40%	272: 10YR3/1(黒褐)、粘性弱・しまり有-強、橙色軽石(3mm以下)20-25%、全体に硬化、鉄分による赤化層含
195: 10YR3/1(黒褐)、粘性無・しまり弱、白色軽石(2-5mm)30-40%	273: 10YR2/1(黒)、粘性弱・しまり弱-有、橙色軽石(1mm以下)7-10%、鉄分による赤化層含
196: 10YR8/4(浅黄橙)、粘性無・しまり弱、白色軽石(3-5mm)20-25%	274: 10YR2/1(黒)、粘性弱・しまり弱-有、橙色軽石(1mm未満)10-15%
197: 10YR6/6(=)、粘性無・しまりとても強、白色軽石(3mm)3-7%、硬化面	275: 10YR2/1(黒)、粘性弱・しまり有、橙色軽石(2mm以下)10-15%
198: 10YR2/1(黒)、粘性弱・しまり弱-有、白色軽石(5-7mm)10-30%	276: 10YR3/1(黒褐)、粘性弱・しまり有、橙色軽石(2mm以下)20-25%
199: 10YR2/1(黒)、粘性弱・しまり弱-有、橙色軽石(1mm)3-5%	277: 10YR3/1(黒褐)、粘性弱・しまり有-強、橙色軽石(4mm以下)30%
200: 10YR2/1(黒)、粘性弱・しまり有、橙色軽石(1mm以下)7-10%	278: 10YR3/1(黒褐)、粘性弱・しまり有-強、橙色軽石(2mm以下)25-30%、やや硬化、鉄分による赤化層含
201: 10YR3/1(黒褐)、粘性弱・しまり有、橙色軽石(1mm以下)10-15%	279: 10YR2/1(黒)、粘性弱・しまり有-強、橙色軽石(1mm)25-30%、部分的に鉄分により赤
202: 10YR2/1(黒)、粘性弱・しまり有、橙色軽石(1mm以下)2-3%	
203: 10YR3/1(黒褐)、粘性弱・しまり強、橙色軽石(2mm以下)7-10%	

附表2 観察表凡例

共通	
出土位置	接合した各土器片の注記内容を示す。通常出土場所の記載は1つであるが、接合関係を提示することによって、第三者が廃棄・遺棄後の土器の動きを追うことを可能にすると考える。 同じ遺構内のもは、遺構略号の跡に括弧にしてまとめて表記している。 なお、誤記防止のため、注記略号で記載している。
取上番号	トータルステーションで3次元位置情報を記録した際の番号。附表7に対応するが、実測図のみのものは附表7には記載していない。
弥生土器・土師器	
径	口縁あるいは底部の径。多くは復元による推定値。
残存率	口縁や底部の残存状況で、復元した全周に対する割合を「○/8」で示す。 なお「1/8」は1/8未満を示す。 方向はそれぞれ、「横」=横方向、「縦」=縦方向、「斜」=斜方向、「多」=多方向を示す。 「→」は調整の前後関係を示し、「古→新」を意味する。 ()の調整は風化・剥離等により調整が不明瞭なことを示す。
調整技法の名称と内容	
調整	「ケズリ」 器壁の厚さを調整する目的で粘土を削り取った痕跡をもつもの。砂粒の動きを伴うものが多い。括弧内の数値はケズリの単位幅 (cm) を示す。
	「ウメ」 器壁の厚さを調整、あるいは器表面を平滑にする目的で、なでつけたような痕跡をもつもの。器面に明瞭な条線が残るものが多い。括弧内の数値は単位幅 (「条線数/単位幅」) と条線数を示す。なお、単位幅が「cm」のみのものは単位不明瞭なもので、1cm当たりの条線数を示す。
	「テ」 器表面を平滑にする目的で、なでつけたような痕跡をもつもの。器面の条線は不明瞭なものが多い。木口痕が観察されたものは「イテ」棒状工具によるものを「棒テ」、指によるものを「エテ」と表記。テの単位がみられない丁寧なものを「丁寧テ」と表記。「ウメ」と区別が難しいものがあるが、調整の段階を考慮して判断している。括弧内の数値は単位幅 (cm) を示す。なお、単位幅0.3cm程度の単位幅のものの中には、ミガキを意識したのがあると思われる。
	「シカキ」 器表面に光沢を持たせる目的で、磨いた痕跡をもつもの。0.3cm前後のものが多い。括弧内の数値は単位幅 (cm) を示す。
	「指痕」 指頭圧痕を示す。 ※調整名の後に数値がないものは、単位が不明瞭でわからないものである。
備考	上記の項目では表現できない事項を記載。「胎土マーブル状」は胎土に異なる色調のものがマーブル状に混じったものを示す。また、「スリップ」あるいは「スリップ状」は、高坏などにみられる化粧土を塗布したような横ナデがみられることを示す。
石器・鉄器	
状態	「完形」 完全な形状を保っているもの。
	「折損」 調査以前の段階で折れていたと思われる、剥離面に風化等がみられるもの。実測図では外形と同じ太さの線で表現しているもの。
	「欠損」 調査時に欠損したと思われる剥離面に風化がみられないもの。実測図では外形より1段階細い線で表現しているもの。
	「未成」 製作途中の未成品と考えらるもの。
石材	「ch」=チャート、「obj」=黒曜石、「an」=安山岩、「sh」=頁岩、「ry」=流紋岩、「hf」=ホルンフェルス、「ss」=砂岩、「ms」=泥岩、「gr」=花崗岩 ※石材の判断は担当者の肉眼観察による。赤崎主幹の助言を受けて行ったが、誤りがあれば担当者の誤認および不学によるものである。

附表3 縄文土器出土位置および接合関係一覧

掲載番号	出土位置 (接合関係)	取上番号	備考	掲載番号	出土位置 (接合関係)	取上番号	備考
1	3A10 層	2592		58	4Z4 層+5Z	2160	
2	23B5b 層	2951		59	S9(北西埋土, 北西3層)+2C4層	-	
3	1次調査北拡張区4層	-		60	2C4-5a層+S1_2Tr+4A4層+S8南 西埋土	-	
4	23C5a層+21C5a層	2964, 3007		61	6B4層+6C4-5a層	-	
5	23B5a層+22B	-		62	26Z4層	3112	
6	1Z5a層	-		63	6C4-5a層	-	
7	2A4層	-		64	1層	-	
8	4A4層	-		65	7B4-5a層	-	
9	26A	-		66	6A5a層	-	
10	S13Tr	-		67	2次調査27T+2次調査29T	-	
11	1A4層+1Z4層	-		68	25B4層+27Z4層	284	
12	2A5b層	-		69	1Z4層+S7(北東埋土上層, 北西 0-10cm, 床面付近)	1646, 2301	
13	1A4層+1B4層	-		70	23B4層	-	
14	2A1層下面+2A4層+S7(北東4層 +南東検出面)	113		71	25A4層下部+25A4層;26A4層	3142, 3222, 3223	
15	2A4層	2313, 2315		72	6A4-5a層+6C4層+6B4層+6D5a 層+7D4-5層	2266	
16	1Z5b層+1Z4層+1Z5a層+5Z1層	2613		73	3B4-5a層+3B4層	2374	
17	6B5a-5b層	2542		74	7A-5a層	1375	
18	20B5a層	-		75	1C4層	2077, 2616, 2617	
19	22B4層	-		76	5A4層	-	
20	25A4素	-		77	25Z4層	2732	
21	27A4層	-		78	25Z4層	2768	
22	18A4-5層	-		79	3Z5b層	2475	
23	20C3層	-		80	25A4層	-	
24	21Z4層	-		81	25A4層	3131	
25	20A4層	-		82	26Z4層	2750	
26	調査区一括?	-		83	25Z4層	2717	
27	4B4-5a層	2388		84	26Y4層	2680	
28	21B	-		85	26Z4層+27A4層+27Z5a層	3092	
29	3B4-5a層+2B4層+3B4-5a層+3B4 層	1937, 2357, 2360		86	7D5a層	-	
30	7A1層下面	153		87	1A1層下面+1Z4層+1A4層	71, 1747, 2016	
31	7B4-5a層	-		88	S7[(2Z)西仕切り壁中, 10-20cm, 北西埋土上層, ベルト,	1643, 2586	
32	7B5a層	-		89	8D	2635	
33	8D5a層	2637		90	4D-4~5a層	2449	
34	7B4層	2237		91	8A-1層下面	5	
35	7B4層	866, 2240		92	2Z5層+2Z4層+2Z5b層+S13Tr+S7 南西検出面	2319, 2610	
36	3C4層+3C4-5a層+4C4層	2100, 2437		93	25A4層+25A2-4層+25Z4層+26A4 層	-	
37	4C4層	2398		94	4B4層	-	
38	2B4層	-		95	25Z4層+S33(25A)ベルト	2676, 2715, 2765, 2771, 2785	
39	4B4-5a層+4B5a層+4B4層+4C4 層	2392, 2393		96	25Z4層	2712	
40	4Z4層	-		97	23B4層	2795	
41	S8(南西3層, 南西拡張4層, 南 西埋土)+2B4-5a層+2B4層+2C5a 層	1197, 2335, 2342, 2479, 3239	42と同一か	98	7C4層	-	
42	2C4-5a層+2B4層+4C4-5a層	2478	41と同一か	99	22B4層	3011	
43	7B4層+7B4-5a層+7B1層下面	6, 860, 2229, 2232, 2234		100	5C5a層	2500	
44	7B4層	2230, 2233		101	5C4-5a層	-	
45	1C4層	1781		102	調査区一括	-	
46	2B4層+2B4-5a層	2298, 2350		103	18B・C3層	-	
47	4C4層	2399		104	S17一括	-	
48	2B4層	2328		105	5Z_S17埋土+5Z4層	2580, 2581	
49	2B4-5a層+2A4層+2B4層	2038, 2309, 2334		106	5A4層	682	
50	1A4層	2306, 2307		107	1次調査区1層下面	-	
51	4B4-5a層+4B4層	2376		108	4A4層	-	
52	4B4-5a層+4A4層	2389		109	4A4層+S11ベルト埋土下層	-	
53	4A4層+4B4層+4C4層	-		110	23C4層	2958	
54	4A4層	-		111	28C5a層	3216	
55	6Z1層S17南+6Z5a層	2606		112	7A3層	-	
56	6A1層下面+S1_4付近	2		113	26Z4層	-	
57	8B4層+8C4層	1734					
土製品							
468	S12南西埋土	-		471	S14北西	-	
469	S10西ベルト	-	土製円板	472	S12南東53層	1607	
470	S12南ベルト	-	焼成粘土塊?	473	S13南東床面	1964	
土師質土器・磁器							
474	S1ベルト7西Tr+5C3層	-		479	S29(20D)3-4層	-	
475	S37(23A)埋土上層(底面上10cm)	3021		480	19D4層	-	
476	S37(23A)埋土上層(底面上10cm)	3021		481	S30南東	-	
477	S37(24A)底面上10cm	3020		482	21D3層	-	
478	20D4層	-		483	7C4層	871	

484	S29+S29 南東	-		494	S29 南東	-	青磁
485	6C3 層 (S3 上面)	-		495	調査区一括	-	青磁
488	20D4 層	-	白磁	496	21C3 層	-	青磁
489	S28 下層	-	白磁	497	20D3 層	-	青磁
490	2 次調査 24T	-	白磁	498	21B 清掃土	-	青磁
491	S27 (21B) 上層	2993, 2995, 2996	白磁	499	S5_4 層	-	青磁
492	S29 (18D)	-	白磁	500	20A3 層	-	青磁
493	18-20-B-D	-	白磁	501	S28	-	青花

附表 4 弥生土器・土師器観察表

掲載 番号	出土位置 (接合関係)	取上番号	大きさ		調整 (外面/内面)	備考
			口径	残存率		
114	4D4-5a 層+4D4 層+4C4 層	2258, 2451	26.8	4/8	横テ (0.6-0.7 cm) → ヘリミカキ (0.2 cm) / 横テ → ヘリミカキ	
115	2B1 層下面	108	-	1/8	横テ → ヘリミカキ (0.2-0.3 cm) / 横テ	
116	7C5b 層	-	19.4	1/8	横テ or ヘリミカキ (0.2 cm) ・ 丁テ / 横ヘリミカキ (0.15 cm)	
117	8B4 層	-	23.3	1/8	横ヘリミカキ (0.15-0.2 cm) / 横ヘリミカキ (0.15 cm)	
118	3C4 層	-	10.6	1/8	(多条沈線で不明) / 多テ	多条ヘラ描沈線
119	S10 南東検出面+3C4 層	-	-	-	横ハメ (5 本 / cm) → 横テ (0.7 cm) / 縦テ (0.5-0.6 cm) ・ 指痕	多条ヘラ描沈線
120	2B1 層下面+2B4 層+1B4 層	115	-	-	丁テ ・ 横テ / 斜 - 横テ	
121	2A4 層	-	18.7	1/8	横テ (0.7-0.8 cm) / 斜 - 横丁テ	
122	1B4 層	1787, 2047	15.2	3/8	横テ / 横テ (0.7 cm) ・ (ハメ (幅 0.8 cm) →) 横テ (0.7 cm)	
123	2A1 層下面	99	14.4	1/8	横テ / 横テ	
124	1A-4 層	-	13.5	2/8	横テ / (横ヘリミカキ →) テ (0.8 cm)	
125	S10 埋土	-	12.2	2/8	横テ ・ ヘリミカキ (0.7 cm ・ 0.3 cm) / 丁テ	
126	S8 (床近)	-	11.4	1/8	横テ / 多テ	
127	S14	-	11.2	1/8	横テ / 横テ	
128	2B-4 層 (+2B-5b 層)	1561, 1788-1791, 2032, 2054	10.2 / 5.3	5/8 (8/8)	縦テ → 横テ ・ ハメ (6 本 / 0.9 cm) / 多テ (0.7-0.8 cm)	
129	2A4 層	-	23.5	1/8	(不明) / (不明)	
130	2B4 層	-	26.9	1/8	ハメ → 丁テ / テ	
131	5B3 層	-	-	1/8	横テ / 横テ	
132	5B3 層	-	-	1/8	風化顕著	
133	5B3 層	-	-	1/8	横テ / 横テ	
134	5B3 層	-	-	1/8	(横テ) / 横テ	
135	5B3 層	-	-	1/8	横テ / 横テ	
136	5B4 層	-	-	1/8	(横テ) / 横テ	
137	S1-2Tr	-	-	1/8	横テ / 横テ	内面二次被熱
138	26Z4 層	3114	6.6/6.8	1/8 (5/8)	(ハメ → テ) / (テ)	風化顕著
139	1A-4 層	2014	15.4	2/8	横ヘリミカキ (0.4 cm) ・ 多ヘリミカキ (0.25-0.3 cm) / テ ・ 横ヘリミカキ (0.4 cm) ・ 縦ヘリミカキ (0.3 cm)	
140	5C4 層	-	20.7	1/8	横テ / 横テ	
141	2A4 層	2036	18.0	1/8	横テ / 横テ	
142	S9 北西 3 層	1002	31.0	1/8	横テ ・ 横ヘリミカキ (0.2 cm) / (ヘリミカキ →) 横テ (0.6 cm)	
143	5B4 層	-	-	-	縦テ (0.6 cm) ・ 横テ (0.6 cm) / 斜ハメ (9 本 / cm) → 横テ	
144	1B4 層	-	7.9	1/8	横テ / 丁テ ・ 横テ (0.5 cm)	多条ヘラ描沈線
145	2B4 層+3B4-5a 層+3A4 層+3C4 層+2A4 層+2B1 層下面+5D3 層+2A5b 層+4C4 層+4D4 層	92, 1564, 2031, 2032, 2034, 2057, 2058, 2096, 2139, 2326, 2356	28.0	4/8	横テ ・ 斜テ (7 本 / 1.0 cm) ・ 斜 - 縦ヘリミカキ (0.2-0.3 cm) / 横テ ・ 斜テ (1.2 cm) → 丁テ	
146	2C4 層+2B4 層+3B4 層+4B4 層+4C5a 層	2063, 2089	-	-	斜ハメ (6 本 1.5 cm) → 縦ヘリミカキ (0.2-0.3 cm) / 縦テ (0.8 cm) → 縦ヘリミカキ (0.2-0.3)	i
147	6D4 層	2503, 2504	26.0	1/8	斜ハメ (4 本 0.8 cm) → 横テ / テ	
148	3B4 層+2A4 層+S12Tr	2102	35.9	1/8	横テ (0.5 cm ・ 0.4-0.5 cm) → 横ヘリミカキ (0.3 cm) / 横テ (0.5 cm) ・ 丁テ	
149	4D4 層	584, 2256	32.0	1/8	縦ハメ (7-8 本 / cm) → 横テ ・ 斜ハメ → 横テ / 横テ	
150	3C4 層	2098	34.6	1/8	横テ (0.6-0.7 cm) ・ 丁テ / 横テ (0.6 cm) ・ 斜テ	
151	1C4 層+2B4 層+2B3 層+3B4 層	1779, 2056, 2075	29.8	-	横テ / テ	
152	S17 床上 15 cm	2600	32.0	1/8	横テ ・ 斜テ (0.8 cm) / 横テ ・ 斜ハメ (? 本 / 1.1 cm) → 丁テ	
153	2B4 層+2A4 層+S9 ベルト	-	32.5	1/8	横テ / 横テ	
154	1A4 層	-	26.6	1/8	横テ / 斜ハメ (6 本 / cm) → 横テ (0.5-0.6)	
155	6A3 層	-	-	1/8	横テ / 横テ	
156	S17 埋土上層	1331, 1332	26.5	3/8	横テ (0.6 cm) ・ 横テ → 縦テ (0.5 cm) / 横テ	
157	S11Tr	-	27.7	1/8	横テ (0.6-0.7 cm) / 横テ (0.6-0.7 cm)	
158	1B4 層+Tr21_3 層	487	28.8	2/8	縦ハメ (? 本 / 0.9-1.0 cm) → 横テ ・ 横粗テ (0.9 cm) / 横テ (0.6-0.7 cm)	
159	1C4 層	1784	22.1	1/8	横テ / 横テ (0.5 cm)	
160	4A1 層下面+S11 ベルト埋土下層	12	23.7	1/8	横テ (0.5-0.6 cm) / 横テ (0.5-0.6 cm) ・ (横 - 斜ハメ →) 横テ	
161	S11 (床上 10 cm, 床上 3 cm, 南西床上)	1805, 1811	27.3	1/8	横テ ・ (斜ハメ →) 縦 - 斜テ (0.6 cm) / 横テ ・ ハメ → テ	
162	6B-4 層 (+6B-1 層下面+5B-3 層+5B-4 層)	413, 446, 763, 765	25.2	2/8	横テ / 多テ	
163	6B4 層+5B3 層	-	25.5	1/8	横テ / テ	

164	2A4層+1A4層+2A1層下面+1A1層下面	93,116,1756,2029	31.9	2/8	横テ° (0.8-0.9 cm)、縦ウメ (6本/cm) →横テ° / 横テ°・斜テ°	
165	4C4層+4B4層	-	25.2	3/8	横テ° (0.7 cm) / 横テ° (0.8 cm)	
166	4C4層	2114	25.8	1/8	横テ° (0.8 cm) / 横テ° (1.1 cm)・横-斜テ° (0.9 cm)	
167	1B4層	2046,2057	24.1	1/8	(縦ウメ→) 横テ° (0.7 cm) / 横ウメ° (1.1 cm)	
168	1B4層+1A4層+0B3層+1B3層	197,1747,2042,2631	26.65	4/8	縦ウメ (5本/cm) →縦テ° (0.7-0.8 cm) / 横テ° (1.0 cm)・縦テ° (1.0 cm)	
169	1層	-	29.1	1/8>	横テ°、斜ウメ (7本/1.1 cm) →横テ° / (ウメ→) 横テ°、横-斜ウメ (7本0.8 cm)	
170	5C4層+6B4層	1531	28.9	1/8	横テ° (0.6-0.7 cm) / 横テ° (0.6 cm)	
171	5C4層+5C3層+5B4層	-	28.2	1/8>	横テ° (0.7 cm) / 横テ° (0.7 cm)	口縁端部沈線状
172	2A4層+1B4層+2B4層	1550,1792,2035,2044,2070,2071	-	2/8	横粗テ°、横-斜ウメ (6本/1.1 cm) →丁テ° / 横ウメ (6本/1.0 cm)・丁寧テ°	
173	2A4層	2025,2037	-	1/8	横テ° →横ウメ° (0.2-0.3 cm) / 丁寧テ°	
174	1B4層+1A4層+1B3層+2B4層	1764,2041	-	-	横テ° (0.6 cm)、(斜-横ウメ→) 横テ° / (横-斜ウメ) (?本/1.2 cm) → 丁寧テ°	
175	1B4層	2291	-	1/8>	斜ウメ→横テ° / (テ°)	
176	5D4層	-	-	-	-	
177	7A3層+7A5a層	-	-	-	横テ° / 丁寧テ°	
178	2次調査23T	-	-	1/8>	横テ° / 横-斜テ°	
179	3B-4層 (+2B-4層)	1797,1799,1933-1935,1938,1941-1944,1979,1985-1990,1992,1994,1995、	20.9	3/8	多テ°、横-斜ウメ (8本/1.3 cm) / 斜ウメ (8本/1.3 cm) →縦テ°、横テ° (0.8 cm)	
180	4D-4層	-	-	-	縦ウメ° (0.2 cm・0.4 cm) / 縦ウメ° (0.3 cm)	
181	0B-4層	2640	16.0	2/8	(ウメ→) テ° / ウメ (4-5本/cm) →丁寧テ°	
182	5D-4層 (+4D-4層+S15南東埋土+S15南東3層)	2135-2137	16.7 / 5.4	3/8	横テ°・斜テ° (1.0 cm) / 斜ウメ (6本/1.0 cm) →丁寧テ° (1.1 cm)	
183	5C-4層	614,615	25.2	1/8	テ° / 横ウメ (9本/cm) →丁寧テ°	
184	4A-4層	-	27.0	1/8>	横テ°、斜ウメ (5本/0.7 cm) / 多ウメ° (0.4 cm)	
185	S11床上	1806	11.0	5/8	(ウメ→) 丁寧テ°・縦ウメ° (0.8 cm) / テ°	
186	S13南ベルト	-	13.1	1/8	横テ° (0.5 cm) / 横テ° (0.5-0.6 cm)	
187	6A4-5a層	-	22.6	4/8	縦ウメ° (0.2-0.3 cm) / 縦ウメ° (0.2-0.3 cm)	
188	S7(西ベルト,南西検出面)	-	-	(2/8)	横テ°・丁寧テ° / (不明)	
189	1次調査区一括	-	-	-	横テ° (0.3 cm) / (不明)	沈線による文様か
190	S25	2408	-	8/8	ウメ° (0.4 cm) / テ°	
191	4C4層 (+5C4層+S15)	2126,2127,2129	(24.8)	4/8	多ウメ (6本/1.65 cm) / 多テ° (0.8-1.0 cm)・指痕	
191	4D4層 (+4C4層+5C4層+S15)	572,1524,1526,1301	6.5	8/8	縦ウメ (7本/cm)・斜粗テ° (0.65 cm) / 縦テ° (1.0 cm)	
192	S8(3層) (+2B-4層)	924,926,930,933,936,945,946,955,959,964,973,977,979,987,991,994,997,1571、	3.8	6/8	テ° / テ°	
193	S13(68層+3層+埋土)	1629,1631,1634,1635	15.7	-	多テ°、(ウメ°) ウメ° (0.5 cm) / 多テ° (1.2 cm)	
194	2B-4層+2B-1層下面	89	18.4	1/8	横ウメ (8本/1.0 cm) / 横ウメ (8本/1.0 cm)	
195	2B-4層	1772	-	1/8>	横ウメ、縦ウメ→横ウメ° (0.5 cm?) / 横ウメ (?本/1.5 cm)、横テ° (0.5 cm?)	頭部径
196	1B-4層	307,310,311	-	2/8	横テ° (0.7 cm) / (横ウメ→) 横テ°	頭部径
197	1B-4層	496-500,502-506,511,514,520,521,523-530	-	8/8	多ウメ (7本1.4 cm) / 縦ウメ (7本1.4 cm) →横テ° (1.0 cm)	
198	S8(埋土,3層)	-	15.5	1/8>	縦ウメ° (6本/cm) →丁寧テ°? / 縦テ°・ウメ° (0.45 cm)	
199	S8(SW埋土)	-	15.4	1/8>	斜ウメ° (0.4 cm)・丁寧テ° / 縦ウメ→横テ°、斜ウメ (6本/cm)	
200	4D4層 (+5C-D3層)	-	9.9	1/8>	横ウメ→多テ° (0.4 cm) →ウメ° (0.3 cm) / エビテ°・テ° (0.4 cm)	
201	4C4層	590	10.3	1/8	縦ウメ (6本/cm) / 多丁寧テ°	
202	4C4層	2124	10.4	1/8>	斜テ°・縦ウメ (6本/cm) / 斜テ°	
203	4C4層 (+4C3層下面)	587,2124	10.6	2/8	縦ウメ (7本/cm)・横テ° / 斜テ°	
204	S12(北東51層,北東20-30 cm,西ベルト,ベルト10-20 cm)	1595	8.05	6/8	横テ° →縦ウメ° (0.2-0.3 cm) →横テ° (0.6-0.7 cm)	
205	S13Tr	-	-	-	縦-斜ウメ° (0.3 cm) →横テ° / 横テ° (0.5 cm)	スリップ状
206	S15埋土	1323,1324	8.3	8/8	テ° / 丁寧テ°・横テ°	
207	1B-4層	2043	13.0	1/8	横テ° / 縦ウメ→粗テ°	
208	S9(3層)	-	9.6	1/8>	多テ°、横ウメ→横テ° / ウメ→テ°、ウメ°調整テ°)	
209	5B1層下面	469	10.5	1/8>	多ウメ→丁寧テ° / 多ウメ° →多テ°	
210	5B4層	-	7.9	1/8>	横丁寧テ° / テ°	
211	Tr13N+Tr13S	-	5.8	3/8	丁寧テ° / 横テ°	
212	S12(床上5 cm,一括)	1931	-	(3/8)	横-斜ウメ° (0.3 cm) →斜ウメ° (0.2 cm) / 横-斜ウメ° (0.7 cm)・丁寧テ°	壺?
213	S11(3層+埋土)	-	-	2/8	多テ° / (横テ°)	
214	S10(床中,南東10-20 cm)	-	-	-	テ° / テ°	胎土マーブル状
215	S13(南西床上3 cm,南西床上5 cm,床上,西ベルト3層)	2169,2170	-	(8/8)	丁寧テ° / 丁寧テ°・多テ° (0.7 cm)	
216	S12(北西10-20,床上5 cm)	1879	-	-	丁寧テ° / 横テ°	
217	S12(床上5 cm,北西10-20 cm)	1879	-	(3/8)	横テ° (0.5 cm) →丁寧テ° / 横テ° (0.6 cm)	
218	S12北ベルト	-	-	(2/8)	斜ウメ° (0.2-0.3 cm) / 横テ° (0.6 cm)	
219	S13(ベルト,ベルト3層)	-	-	(1/8)	横テ° / 斜テ° (0.6 cm)	
220	3C4層	-	-	-	横テ° (0.6 cm) / 横テ° →斜テ°	
221	S8北西埋土	-	-	-	(斜テ° →) 横ウメ° (0.2 cm) / 横-斜テ° (0.6 cm)・縦テ° (0.6 cm)	
222	S9(南西3層,南東3層)	1099	-	-	丁寧テ° / 横-斜テ° (0.5 cm)	

223	S12(北東54層,北東10-20cm,南東20-30cm)	1594	-	(2/8)	横-斜へりカキ(0.2cm)→横桁/横桁・横イ桁(0.7cm)	
224	6B1層下面	470	-	1/8	(横ナデ)/磨減	胎土精良
225	5B1層下面	420,469	-	4/8	磨減/(横へりカキ)桁	
226	6B1層下面(+5C3層)	463	5.2	2/8	丁桁/多桁	風化顕著
227	2D4層	2274,2275	21.1	2/8	多へりカキ(0.3cm)/丁桁	
228	S9-3層	1231	19.2	2/8	横へりカキ(9本/cm?)/横丁桁	
229	S8(3層,埋土)	989	13.3	8/8	横桁/(横へりカキ)多イ桁(0.9cm)	
230	S9(3層+埋土)	1026,1045	15.6	3/8	横桁、丁桁/横桁	
231	2B1層下面+S9埋土	57	14.3	3/8	横桁、横へりカキ(8本/cm)→横桁/横丁桁、横へりカキ(5本/cm)→桁・丁桁	
232	S9(3層,埋土)(+3D)	1251,1272	15.8	3/8	横桁/横・斜桁	
233	2B4層(+調査区北西1層下面)	2051,2055	-	1/8	縦へりカキ(0.3-0.35cm)/縦桁(0.9cm)	
234	S10(床-床上5cm)	1434,1496-1498,1500,1505,1507,1509	-	-		
235	S9(3層+埋土)	1009,1113,1118	-	-	斜へりカキ(12本/1.6cm)、桁/縦へりカキ(12本/1.6cm)	
236	5C4層(+5C4・5a層+S15-3層)	2128,2129,2254,2255	30.0	1/8	斜へりカキ(6-7本/cm)/縦桁/縦桁	内面調整は複数の工具を使用か?
237	S9(3層+埋土)	1083,1085,1102,1110,1299	-	-	斜方へりカキ(8本/0.9cm)→桁(0.9cm)/多へりカキ(9本1.2cm・14本1.7cm)→桁	
238	S9(3層)	1091,1094,1103,1104,1115,1171,1282	-	3/8	斜へりカキ(6本/0.8cm・5本/0.4cm)→桁/多へりカキ(9本/1.1cm・6本/0.8cm)→桁	
239	4B-1層下面	33	23.6	1/8>	縦へりカキ(4本/1.0cm)→多桁/多桁	
240	3A-4層	2111	19.0	2/8	縦桁(1.1cm)/多へりカキ(4本/1.1cm)	
241	3A-4層	1534	22.0	1/8	桁(2.0cm)/多へりカキ(4-5本/cm)→桁(0.9cm)	
242	1A-4層(+2B-4層)	1754	25.8	1/8	縦へりカキ(4本/cm)・多桁/横桁(0.7cm)、へりカキ(5本/1.2cm)→桁	
243	2C-4層	2083	25.0	1/8>	イ桁(0.9cm)・丁桁/イ桁(0.9cm)	
244	8C-4層(+2C-4層)	2083,2084	20.9	1/8	横桁(1.0cm)/横桁(0.9cm)・丁桁	
245	3A-3層	895,898	20.9	2/8	斜へりカキ(9本/1.0cm)・丁桁/磨減	
246	3A-4層	-	19.6	1/8>	縦へりカキ(4.0本/1.0cm)→縦桁(0.7cm)、縦へりカキ/横桁(0.5cm)・縦桁(0.35cm)	
247	1B-4層(+1C-4層+1B-3層)	302,304,305,308,315,317,318,488,489,490,491,1778	13.7	8/8	斜へりカキ(6本/cm)→桁/横桁(0.8cm)	
248	S14(Tr+西ベルト)	-	28.1	1/8	横桁(0.8cm)/横桁(0.7cm)	
249	20C-3層下部(+20C-3層+20C-4層+21C-3・4層)	2842-2845,2849-2854,2856,2999	25.0	2/8	斜へりカキ(9-10本/1.7cm)・横へりカキ(4本/cm)/斜へりカキ(6本/cm)→桁(0.9cm)	
250	1C-4層(+1C-1b層+2C-4層)	-	28.4	2/8	粗桁(0.4cm)→へりカキ(0.3cm)/横桁(へりカキ?)	
251	1C-4層	2079,2080	-	2/8	斜粗桁→へりカキ(0.3cm)/横桁	
252	2A-4層	903	15.6	1/8>	(縦へりカキ)横桁/横桁	
253	S10(南西床上5cm+南西床上+北西床上5cm+南西10-20cm+北西埋土+北東埋土)	1414,1416,1417,1418,1421,1423,1426,1429-1431,1438,1440,1444,1446,1672-1676,1678-1680,1682-1688,1690,1691	14.35/6.85	8/8	横桁(0.9cm)・棒桁(0.2cm)・多粗桁(0.6cm)・縦桁(0.6cm)・丁桁/横桁(0.9cm)、斜桁→縦桁(0.8-0.9cm)	
254	S13(南東埋土,東床上,東床上10cm,南東,南東床上2cm,南東床上)	1845-1848,1967,1970,1971,2164,2197-2199	29.4	8/8	横-斜へりカキ(7本/1.3cm・6本1.6cm)→桁(0.7cm)/斜へりカキ(7本/1.3cm)	
255	S13(北東床上3cm,北東床上,北東床上5cm,床上)	1945,1946,1948-1956,1958-1960,1966,1975,2165,2166,2170,2173,2181-2184,2186,2187,2189-2195,2519,2566,2567,2569-2572,2574-2578	30.9	8/8	横桁(0.5cm・1.0cm)・多桁(0.5cm)・斜桁(0.5cm・0.8cm)/横桁(0.6cm)	
256	3B(+3B-4層+S10北東検出面+3C-3層下面+3C-4層)	561,2530	29.2	1/8	桁(0.8cm・1.0cm)/横桁(0.9cm)・丁桁	
257	S15-3層(+S15-3・4層)	-	26.0	2/8	多桁→棒桁(0.5cm)/横桁・丁桁	
258	3B-4層(+3C-4層+S9-3層+3B-4層+S10埋土+S15-3層)	1011,1537,1562,1800	27.3	1/8	桁(0.9cm)/丁桁(0.9cm)(へりカキ)	
259	S13(北東68層,Tr)	1628	-	1/8>	横へりカキ(5本/cm)→横桁	
260	S8北西-3層	928	28.2	1/8	横桁・横へりカキ(6本/cm→9本/cm)・棒桁(0.2cm)/横桁(0.9cm)、横へりカキ(6本/cm)→桁	
261	3D-4層(1Tr)	168	25.6	1/8>	横へりカキ(8本/cm)→横桁、縦桁(0.5cm)/横へりカキ(11+α本/1.4cm)	
262	S14(埋土)(+5A-4層)	-	37.6	1/8	横桁(→へりカキ)/横桁→縦桁	
263	S10(南西床中+南東床上+南西床上南西床上5cm+南東3層)	1447,1499,1502,1504,1667,1668,2533	25.0	8/8	横桁/多桁(1.0cm・0.8cm)	外面に断面「V」字状の細い工具痕あり
264	1B-3層	221,226	25.4	1/8	斜へりカキ→横桁/横桁(1.6cm)	
265	S15-92層+S15-3層	1480	-	1/8	丁桁/丁桁	
266	S9-3層(+S9埋土)	1249,1269	31.7	1/8	丁桁(0.8cm)・棒桁(0.3cm)/丁桁	
267	S8北西-3層	950,951	31.4	1/8	多桁(0.9cm)/横桁(0.9cm)	
268	S9南西-3層(+南ベルト3層)	1088,1095,1278	25.2	1/8>	斜め桁(0.9cm)・丁桁/斜イ桁→丁桁(0.8cm)	
269	5B-3層(+5B-4層)	702	28.9	1/8>	横桁/丁桁	
270	S9(西ベルト3層+南西3層)	1032,1270	28.6	2/8	横桁/横桁(0.7cm)	
271	5B-1層下面(+5B-3層)	434	31.6	1/8>	横桁(0.6cm)/横桁(0.6cm)	
272	5B-1層下面+6B-1層下面	437,447,449	32.0	1/8>	(横へりカキ(10本/cm)→)横桁/横桁、丁桁	
273	5B-1層下面(+5B-3層+6B-1層下面)	407,417,437,440,441,448	7.6	3/8	縦-斜へりカキ(1.3cm)→桁→へりカキ(0.2cm)/丁桁	
273	5B-1層下面+6B-1層下面(+5B-3層+5B-4層)	435,436,439,464,466	32.4	1/8	へりカキ(1.0cm)?→桁/横桁・丁桁	

274	5B-3層	-	29.3	1/8	丁字 / 横ノメ→横字
275	5B-3層	-	29.5	1/8	字 / 横字
276	S10(北西床上+北西10-20cm+北西+5cm+北東+床上)	1415,1445	22.9	1/8	粗字 (0.5cm) / 横-斜字 (0.8cm・0.6cm)
277	5B-3層下面	-	25.2	1/8	丁字 / 丁字
278	S9-3層(+S9埋土)	1004,1030,1116,1118,1121,	23.2	4/8	丁字・多字 / 丁字 (0.9cm)・棒字 (0.5cm)
279	S9(西ベルト3層+北西埋土)	1275	24.4	1/8	丁字・斜字 / 横-斜字 (0.6cm)
280	25Z-4層	3066,3069,3070	6.9	2/8	斜粗い字 (0.7cm)→縦ハカキ (0.2cm)、横ハカキ (0.8cm) / 斜字 (1.2cm)
281	S9(北西3層,北西埋土,ベルト3層)	1017-1020,1022,1024,1203,1239,	6.25		多字 (0.4cm)・丁字 / 横字・多字
282	6A-4層(+1B-4層)	1767,2039			縦ノメ (9本0.9cm) / 丁字 全体に磨滅
283	1C-4層(+1C-3層下部)	1782,1783	-	1/8	縦ノメ (8本/1.4cm)→字 (0.4cm) / 縦字 (2.3cm?)
284	1C-4層(+1C-3層下部)	1782	-	2/8	縦ノメ (9本/1.1cm)→字 (0.7cm) / 斜ノメ (?本/1.8cm)→字 (1.1cm)
285	S8-3層	1579,1580	-	4/8	縦粗字 (0.4cm) / (縦ハカキ)→多字 (1.2cm)・棒字 (0.3cm)
286	S13(床上+68層)	1624,1625,1947,2172-2177,		2/8	多ノメ・字 / 斜めノメ・字
287	5B-4層	705,718	-	2/8	縦字・強字 (0.8cm) / (イ字→) 丁字
288	5B-4層(+5B-2層+5B-3層+5B-3層下)	703,704,706,707,712,715-718	-	2/8	丁字→粗字 (0.9cm) / イ字 (1.1cm)
289	S11(Tr+床上10cm+床上+ベルト埋土下層)	1812	8.0	8/8	(不明) / (不明)
290	5Z1層下面	18	6.8	8/8	横字→縦イ字 (0.7cm)→横字 / (不明)
291	2A4層	2026	7.2	2/8	横字 (0.6-0.7cm)→縦字・縦イ字 (0.9cm)→縦字 / 縦字
292	1A4層	2004	6.4	5/8	横字 (0.6cm) / (字)
293	4C3層下面+3C4層	-	8.2	5/8	(横字) / (横ノメ)
294	3C4層+3C3層	-	8.2	8/8	横字 / 字
295	1B-4層	303	6.4	5/8	磨滅 / 縦字
296	S14Tr	-	3.8	4/8	斜字 (0.4cm) / (不明)
297	S10北西3層	-	3.9	1/8	縦丁字 / 縦字・横-斜字
298	S14(Tr,北東埋土,ベルト)(+S11一括)	-	4.0	(7/8)	縦ノメ (5本/0.8cm)→丁字 (0.5cm)、多字 (0.7cm) / 斜ノメ (7本/0.4cm)→縦-斜字 (0.4cm)
299	4A-4層	649	5.0	7/8	横ハカキ (0.15-0.2cm)・字 / 縦ハカキ (0.2cm)
300	1B4層	338	5.6	3/8	丁字・イ字 / (字)
301	1B-4層	319	6.8	2/8	縦-斜イ字 (8本/0.6cm) / 不明
302	1B4層	325	5.75	8/8	多イ字 (1.3cm) / 縦イ字 (1.1cm)→丁字
303	4B4層	630	4.1	2/8	縦字 (0.45cm) / エ字→縦字 (0.4cm)
304	S13北ベルト3層	-	5.1	4/8	丁字・横字 / (ノメ→) 丁字
305	S8(北西3層,北西埋土)	-	-		(粗字→) 丁字 / (字)
306	5D-4層(+S3+6D-4層+S15(Tr+南東3層+南西埋土+南西3層))	1329,2262,2263,	6.7	4/8	斜字 (0.7cm)→斜ノメ (4本/1.0cm)→横字 (0.7cm) / 多字 (0.7cm)
307	S11北東埋土	-	3.7	8/8	エ字 / 丁字・横イ字 (0.7cm)
308	OB-3層	2625	5.2	5/8	字 / 横-斜字
309	1次調査区北西1層下面	-	2.5	2/8	縦字 / (不明)
310	1次調査区北西1層下面	-	3.6	4/8	横-縦字 / (不明)
311	1A-4層	1753,2010	-	8/8	縦ノメ (6-7本/cm)→縦字 / 横ノメ (?本/1.5cm)→丁字
312	S9南西床上	1300	4.7	8/8	丁字 / 横字 (2.0cm)
313	4B-4層	-	5.9	2/8	縦ノメ→多字 / (字)
314	S9(北東3層+北東埋土)	1070	7.3	3/8	縦字 (0.6cm)→丁字
315	22C-3層(+21C-5a層+21C-3~4層+22C-5a層+22C4層)	-	5.8	4/8	斜丁字 / 横ノメ (7本/1.7cm)・縦エ字 (1.2cm)
316	S8(一括+北西3層+南西3層+西ベルト3層+北西埋土+南西3層)	960,1102,1120,1567	6.5	4/8	丁字 / 横ハカキ (0.7cm)→縦-斜め字 (1.1cm)
317	S11南東埋土	-	4.20	4/8	縦字 / 横イ字 (1.3cm) / 横イ字 (1.3cm)
318	2B-1層下面+1層	54	4.55	6/8	(縦ノメ→) 丁字 / 多字
319	S8(一括+西ベルト3層)	1575,1641	6.7	6/8	多字 / 多字
320	2B4層+2B1層下面	106	5.8	5/8	(縦ノメ (6本/1.2cm)) / 多字 (1.0cm→0.4cm) 底部外面中央付近凹む
321	4D-4層	2259	8.3	4/8	字 / 字
322	1B-4層	494,496		8/8	
323	2A-4層(+2A-1層下面)	111	6.1	3/8	丁字→縦字 (0.6cm) / 縦字 (0.7cm)・丁字
324	S9(北西3層+南東埋土+南東3層+ベルト3層)	1006,1007,1052,1062,1139,1143,1147,1152,1208,1220,1227,1292	7.4	5/8	縦粗字→丁字 (0.6cm) / 横字 (1.5cm)
325	1B4層	375	5.1	7/8	縦イ字 (0.6cm) / 丁字
326	1B-4層	2020	5.2	8/8	(縦字) / (縦字)
327	2C4層(+1C4層+3A4層+4C4層)	541,2078,2081,2105,2108	9.7	4/8	縦ノメ (12本/1.5cm)→縦ハカキ (0.2cm) / (丁字) 内面に繊維状物の圧痕有
328	1A-4層	2000,2010,2011	10.9	4/8	多字 (1.0cm) / (字)
329	7B-5a層		8.8	3/8	磨滅
330	4Z-1層下面	25	9.3	2/8	縦粗字 (0.5) / 横字
331	1B-4層+1B-3層	179,1751	5.8	2/8	斜ノメ (9-10本/cm)→丁字 / 縦字・丁字
333	S8(ベルト3層,北西3層)(+3B1層下面+1C4層)	136,383,1574,1578	6.4	4/8	縦字 (0.4cm) / 縦字
334	S9(一括+南東3層+ベルト)	1067,1161	7.2	6/8	字 / 縦字 (0.5cm)→丁字 外面に布目痕?

335	1B-3層+1B-4層	241,348,353,354、	-	7/8	(丁桁)/(縦桁)	
336	6B-1層下面	452	-	8/8	丁桁/横桁(1.1cm)	
337	S12床上	1863,1864	7.8	4/8	斜桁→丁桁/(縦桁(1.2cm)→)丁桁	
338	5A-1層下面	139	3.6	3/8	斜桁(0.9cm)/縦桁(0.7cm)→丁桁	
339	5A-4層(+S14Tr)	693	4.65	5/8	縦丁桁/多桁(0.7cm)	
341	5A-1層下面	8	5.1	2/8	横丁桁/多桁(0.6cm)	
342	1B4層	321,322	14.2	2/8	斜桁(0.5cm)/(桁)	
343	5C3層(S3)	-	13.0	1/8	多桁(0.3cm)/横桁(0.4cm)→多桁(0.4cm)	
344	S11南東3層	1449,1450	14.8	1/8>	横桁(0.6cm)・横-斜桁(0.2cm)/横桁(0.3cm)・丁桁(0.5cm)	胎土精良
345	S8(西ベルト,北西埋土,一括)	-	11.0	1/8>	横桁・斜桁(0.2cm)/横桁(0.8cm)	胎土精良
346	S12床上	1890	9.4	8/8	横桁(0.6-0.7cm)・多桁/横桁(1.1cm)	
347	S12床上	1924	10.5	1/8	横桁(0.6cm)/横桁・丁桁	
348	S12(床上3cm,床上,ベルト)	1918-1920,1926,1932	16.0	1/8	多桁(0.9cm)/横桁(0.8-0.9cm)・多桁(1.3cm)	胎土精良
349	S13-3層(+1次調査区北東1層下面)	-	9.7	2/8	桁・桁(0.3cm)/斜桁	内面に断面「V」字状の細い工具痕あり
349	S14Tr	-	6.1	1/8	横桁(0.8cm)(斜桁)/横桁(0.7cm)	胎土精良
350	S14北西埋土	-	11.1	1/8>	(不明)/(不明)	
351	S13Tr	-	11.0	1/8	横桁/横桁(0.7-0.8cm)	胎土精良
352	S12床上10cm	1858,1860	16.4	1/8>	横桁(0.5cm)・桁(0.2-0.3cm)/横-斜桁(0.5-0.6cm)→丁桁	
353	S12南西54層	1612,1613	-	1/8>	横桁(桁?) (0.9-1.0cm)/斜桁(8本/0.9-1.0cm)→桁、桁	胎土精良
354	S13(西床上,南埋土,床上,南ベルト3層)	1853	13.4	8/8	横桁(0.8cm・0.9-1.0cm)/横桁	
355	S15(床上20cm,床上5cm,南東埋土)+6C3層)	2138,2556	8.55	2/8(6/8)	縦桁→縦桁(0.2cm)/多桁(3-4本/cm)→縦桁(1.0cm)	
356	S11(床上3cm,北東床上,北東埋土)	1807-1809	3.6	8/8	縦桁(0.6cm)・多桁/縦桁(10+α本/1.2cm)→桁(0.7cm)	
357	2B-5a層(+2B-4層)	2404_2,2405	13.9	2/8	横桁(0.8-0.9cm)・丁桁/横桁(0.8cm)・丁桁	
358	S15-3層	1316	15.4	2/8	斜桁(5本/cm)/斜桁	
359	S12(北東,北東20-30cm)	-	22.6	1/8>	横桁(0.6cm)/横桁(0.6cm)	
360	S12(南西51層,南西埋土,南西床近く,北東10-20cm)	1618	-	2/8	丁桁→横桁(0.4cm→0.6cm,0.9cm)/横桁(0.5cm)→横桁(0.5cm)	蓋?
361	S13(北西床上3cm,南床上10cm,北東床上5cm,床上)+S12(床上)	1856,1972-1974,1965,2178,2179,2180	20.5/13.3	8/8	縦桁(0.3-0.4)→横桁(0.7cm,0.8-0.9cm)/横桁(0.8-0.9cm)・桁	スリップ有り、脚柱内面天井部に工具痕、胎土精良
362	S13(西床上,北西床上)	1849,1976,1977,2170,2173,2196	22.2/16.2	8/8	横桁→桁(0.2-0.3cm)→横桁、丁桁、斜桁(5本/1cm)→丁桁/粗桁(0.8-0.9cm)→粗桁(0.2-0.3cm)・丁桁、横-斜桁、横桁(6本/0.7cm)	スリップ状ただし、脚柱端は弱くナデ状
363	S13(南床上+20cm,床上,南3層)	1854,1855	18.9	7/8	横桁→縦-斜桁(0.4cm)→横桁(0.9cm)、斜桁(5本/cm)、丁桁/横-斜桁(3本/cm)→横桁(0.9-1.0cm)、横桁(1.3cm)、横桁→横桁	スリップ
364	S13西床上	1852	17.95	(8/8)	丁桁→横桁(0.6cm)、(粗桁)→縦桁(0.3cm)→(焼成後)→横桁(0.5-0.6cm)/斜桁(桁)→桁、横桁(5本/cm)→桁(0.9cm)	スリップ
365	S10(南東床上,南東床中)	1494,1495	15.1	(4/8)	(粗桁)→縦桁(0.3cm)・斜桁(0.4cm)→横桁・丁桁/(横桁)→多桁(0.7-0.8cm)→横桁	
366	S13西床上	1851	20.2	(8/8)	横桁(6本/cm)→丁桁→横桁、縦桁(0.3-0.35cm)→横桁(0.7-0.8cm)/斜-縦桁(桁)・横桁(1.1cm)→桁	脚柱内面天井部に工具痕、スリップ状
367	S12床上5cm	1891	15.9	8/8	横桁→横桁(0.3cm)、桁(桁)/(不明)	
367	S12(床上3cm,床上5cm,北ベルト)	1892,1894	10.4	3/8	多桁(0.3cm)/粗桁(桁?)・桁(0.3cm)	
368	S9(南ベルト3層,南西3層,南西埋土)	1135,1234	17.2	4/8	横桁(0.3cm)・横桁(0.7cm)/横桁(0.6cm)	
369	S8(北西3層,北東3層)	932,938,939,941-944	22.8	2/8	横-斜桁・縦桁(0.3cm,0.5cm)、丁桁/横桁(0.2-0.3cm・0.8cm)・桁(0.2-0.3cm)	スリップ?
370	2B4層	-	28.0	-	横桁→横桁(0.4cm)/横桁→横桁(0.4cm)	
371	S8(西ベルト3層,南西3層,北西3層)+2B3層+2B4層)	923,928,949,993,1000,1573、	26.25	4/8	横桁(0.3cm)・縦-斜桁(0.3cm)→横桁(0.5-0.6cm・0.5cm)/桁→横桁(0.5-0.6)・丁桁	
372	S10(北西床上,南西埋土)	1424,1425,1437	26.3	4/8	横桁、斜桁(0.3cm)・多桁(0.3cm)→横桁/横桁→横桁(0.9cm)・横-斜桁(0.9cm)→多桁(0.3cm)	スリップ
373	S8ベルト3層	1581,1583,1584	24.0	1/8	横桁・丁桁・縦桁(0.3cm)/横桁(0.4cm)・斜桁(0.4cm)→横桁	
374	S9(南東3層,ベルト,一括)	1149,1170,1219	26.4	1/8	(不明)/(不明)	風化顕著
375	S13(北西床上2cm,北西床上)	1978-1983,2172	25.2	4/8	横桁(5本/1.0cm)→縦桁(0.3-0.4cm)→横桁/横桁→斜-横桁(0.3-0.4cm)	スリップ状
376	S13(南西床上2cm,一括)	2168	20.0	3/8	縦桁(0.3cm)→横桁(0.8cm)/横桁	スリップ状
377	S10南東床中	2527	18.0	1/8	横桁→横桁(0.2-0.3cm)/横桁→(0.2-0.3cm)	
378	S10南東床中	2532	20.2	1/8	(不明)/横桁→横-斜桁・縦桁	
379	S13西床上	1850	20.4	8/8	横桁→縦桁(0.2-0.3cm)→横桁(0.7-0.8cm)/横桁(0.8cm)→横-斜桁(0.3cm)→横桁(0.6cm・1.0cm)	スリップ状
380	2B4層	2066,2067,2068	26.2	2/8	横桁(0.7cm)(斜桁(0.3cm)/横桁(1.0cm))	
381	1B4層	1761	34.4	1/8	(不明)/(不明)	

382	S7(北東4層,南西3層)	887	22.9	1/8>	(横桁)/(横桁・ハミガキ)	
383	S15北西3層下部	1311-1314	26.4	2/8	横桁(0.6-0.7cm)→丁桁/横桁(0.6-0.7cm)→斜ハミガキ	
384	S8北西3層	934,935	16.5	1/8	横桁(0.6cm・0.9-1.0cm)→斜-横ハミガキ(0.2-0.3cm)→丁桁/横桁(1.0cm)・丁寧桁	
385	5C1層下面+5C4層(+5C3層+5B3層)	127,609	22.8	4/8	横ハミガキ(0.2-0.3cm)・横桁→丁寧	
386	S8西ベルト3層	1568,1569	22.2	1/8	横桁→縦-斜ハミガキ(0.2-0.3cm)/横桁→横ハミガキ(0.2-0.3cm)	
387	S10(北西床上,北西床上5cm,な北西10-20cm,北西埋土)	1407-1409,1669	18.0	8/8	横桁→横ハミガキ(0.2-0.3cm)/横桁→多ハミガキ(0.3cm)	胎土精良
388	S9(北西3層,南西3層,一括)	1041,1083	14.8	4/8	横ハミガキ or ハミガキ/横-斜ハミガキ(8本/cm)→横桁→斜粗ハミガキ(0.3cm)	
389	S14(Tr+北東埋土)	-	22.9	1/8	横桁→横ハミガキ(0.3cm)→横桁(0.8cm)/(横桁→)横-斜ハミガキ(0.2-0.3cm)(→横桁)	
390	S12(床上,床上5cm,床上10cm)	1896-1898,2434	29.0	2/8	斜-横粗桁→粗ハミガキ(0.2cm)→横桁(0.7-0.8cm)	
391	2次調査22T	-	-	1/8>	(桁→ハミガキ)/横ハミガキ(4本/0.8cm)→桁→ハミガキ(0.2cm・0.3cm)	内面に溶融したガラス状物付着
392	S14(北東埋土,Tr)	-	21.6	-	斜ハミガキ→横桁→横-斜ハミガキ(0.3)(→桁)/横ハミガキ→横-斜ハミガキ(0.3cm)・横桁	
393	S12(南西54層,床上10cm,南東10-20cm,南東3層,南東埋土)	1617,1619,1927	18.4	2/8	(横桁→横ハミガキ)/(横桁(0.8cm))	磨滅
394	1B4層(+1次調査区北西1層下面)	1551	-	-	横ハミガキ(0.2-0.3cm)→桁/横-斜ハミガキ(0.2-0.3cm)	
395	S12(床上,床中)	1874,1875	-	-	(横桁・横ハミガキ(0.2-0.3cm))/(横桁)	
396	S9(南西埋土,南西3層,南西埋土,東ベルト)	1132	20.0	1/8>	横-斜ハミガキ(0.3-0.4cm)→横桁(0.7cm)/(斜桁→)横桁(0.7-0.8cm)→丁寧	
397	S11南東3層	1448	25.5	1/8	横桁(0.7cm)→横-斜ハミガキ(0.2cm)→横桁(0.5cm)/横桁	
398	2B4層	551	-	2/8	斜ハミガキ(0.3cm)/横桁→丁寧	
399	6B1層下面	461	-	4/8	横-斜桁/(不明)	
400	4C4層+4B4層	585	-	-	横桁→斜ハミガキ(0.5cm)/丁寧	
401	3B4層+1C3層	-	-	4/8	(ユビ押エ)横桁(0.7cm)→横ハミガキ(0.2-0.3cm)/縦ハミガキ→横桁	
402	S9南西3層	1081	-	(8/8)	(不明)/桁(0.6-0.7cm)	
403	S14Tr	-	-	(6/8)	(横桁→)斜ハミガキ(0.3cm)、多桁/ハミガキ(0.4cm)・丁寧	
404	1C4層	1780	-	(7/8)	(横桁→)縦ハミガキ(0.2-0.3cm)→横桁(0.3cm)/(縦-斜ハミガキ)→横桁(0.3cm)	
405	5B1層下面+5C4層	409,781	-	(4/8)	(横桁→)丁寧(0.7cm)/縦粗桁(0.5-0.6cm)	
406	1B4層	2288	-	-	横桁・縦ハミガキ(0.3cm)/(斜ハミガキ(0.9cm)→)横桁	
407	0E3層	2628	-	(4/8)	(桁)/丁寧	
408	S9北ベルト	-	-	1/8	横桁/横-斜桁	
409	1次調査区北西1層下面+1次調査区北東1層下面	-	-	(4/8)	横桁・縦ハミガキ(0.4cm)/縦桁・横桁	
410	S13(北東床上2cm,東ベルト)	1962,2188	22.2	(3/8)	丁寧桁、(粗桁→)縦ハミガキ→横桁/横ハミガキ(0.6cm)、横粗桁→粗ハミガキ	スリップ状
411	S15(南東ベルト93層,南東埋土)	1483,1484	-	(8/8)	丁寧桁・横桁/横ハミガキ(0.8-0.9cm)(→桁)・横桁	
412	S9(東ベルト3層,北東3層,北東埋土)	1046,1218	-	(1/8)	(桁・ハミガキ)/(横ハミガキ)→縦桁・丁寧	
413	1B4層+1B3層	379,486	-	(4/8)	横桁/縦桁	風化顕著
414	S9(北東3層,東ベルト)	1058	-	1/8	縦-斜ハミガキ(0.3cm)/斜ハミガキ(0.8cm)・横桁	
415	S9(南東3層,北西埋土,南西3層)(+4D3層+4D4層)	1140	-	(6/8)	横桁・丁寧、桁→ハミガキ(0.2cm)/ハミガキ(0.8cm)→桁、ハミガキ(4本/1.0cm)→横桁	脚部上部に沈線(坏接合の目印か)
416	S9一括	-	-	-	-	
417	S9(北東3層,南ベルト3層,南東埋土,北東埋土)(+S8一括)	1048,1069,1259、	15.05	(3/8)	縦ハミガキ→横桁(0.4-0.5cm)/多板桁(0.5-0.6cm)、横ハミガキ(6本/1.2cm)→横桁(0.6cm)	
418	S9(北東3層,南東3層)	1072,1076,1173	-	-	縦ハミガキ(0.2-0.3cm・0.3cm)、縦ハミガキ(0.3cm)→横-斜ハミガキ(0.2-0.3cm)	
419	S9(北東3層,北東埋土,北ベルト)	1046,1068	26.4	1/8	横桁→縦桁(0.8cm)→横-斜ハミガキ(0.3cm)・横桁/横桁(0.8cm)	
420	S10(南東床中,南東床上,南東床上20cm)(+S9(北西埋土,ベルト3層))	1487,1263,1506,2518、2517,2522	16.2	(6/8)	(ハミガキ→)横桁(0.6cm)、横ハミガキ(0.2cm)→横桁(0.5cm)	スリップ状
421	S12(床上,床上8cm,床上3cm)	1857,1876,1887	-	-	横桁→縦ハミガキ(0.3cm・0.3-0.4cm)/横桁(0.8cm)	
422	S8北西3層	980	-	(4/8)	(縦ハミガキ)/(横ハミガキ(0.8cm)、横-斜ハミガキ(?本/1.0cm)→粗桁(0.6-0.7cm))	脚柱内面全体黒色を呈する
423	5B1層下面+5B2層	415	-	(8/8)	(桁→)ハミガキ(0.3cm)/(縦ハミガキ→桁、)横桁	
424	S14南西3層	1620	-	-	縦ハミガキ(0.4cm)→丁寧、横ハミガキ/(ハミガキ)→多板桁→横板桁(0.5cm)	
425	1B4層	2049	-	(8/8)	横桁(0.6cm)、縦ハミガキ(0.2cm)→横桁/横-斜ハミガキ(8本/cm)→横-斜ハミガキ(0.9cm)(→桁)	
426	S9北東3層	1043,1056,1066	-	(8/8)	(ハミガキ→)横桁/(桁)	転用羽口
427	5B1層下面	403	10.8	(7/8)	桁→縦ハミガキ(0.2-0.3cm)→横ハミガキ(0.2-0.3cm)	
428	4B4層	629	11.8	(2/8)	(横ハミガキ)/縦ハミガキ(0.6cm)、桁→ハミガキ(0.3cm)	

429	S9(南西3層,北ベルト3層,南東3層,北東埋土)	1086,1206	-	-	縦へりかき(0.6cm)→丁テ°(、へりかき→横テ°)/横へりかき(5本/0.7cm)→テ°	脚上端は円筒部を外側へ広げて環に接合
430	5B3層	-	-	(4/8)	縦へりかき→横テ°、(縦へりかき)横へりかき/(へりかきり→)テ°、横へりかき→横テ°	
431	5B4層+5B2層+5B3層下面	721	11.45	(2/8)	縦-斜テ°、横へりかき(0.2cm)→横テ°/縦8粗テ°・丁テ°	
432	2B4層+S9南西3層	1119	-	(6/8)	横丁テ°、斜-縦へりかき(0.3-0.4cm)→丁テ°、縦へりかき(0.3-0.4)/縦テ°(0.4cm)・丁テ°	
433	S11北西3-4層	1454	-	(1/8)	縦へりかき(0.4cm)→横・丁テ°/横テ°	
434	S13(北西68層,北ベルト3層)	1632	-	8/8	丁テ°/横テ°、(へりかきり→)イテ°(1.0cm)	
435	S8ベルト中央3層	1642	6.4	(4/8)	(へりかき→横テ°)/(テ°)	
436	3C4層+3C3層+3C3層下面	-	-	(4/8)	横テ°→縦へりかき(0.3cm)/(縦へりかきり→)丁テ°	
437	3C4層+3C3層	-	-	(4/8)	(不明)/(不明)	
438	S14(北東,東ベルト,Tr)	-	9.6	(4/8)	(不明)/(不明)	
439	1次調査区北拉張区3層	-	-	(4/8)	丁テ°・横テ°/縦テ°・横テ°	
440	2B4層+1B4層	1760	-	(4/8)	(横-斜粗テ°→)丁テ°/(へりかきり→)横テ°	
441	S1ベルト6北Tr+S15(北西3層下部,北西3層)	1319	-	(4/8)	縦へりかき→横テ°(0.5cm)/縦-斜へりかき(0.6cm)→テ°、(へりかき)	
442	1次北拉張区4層+1次北拉張区1-2層	-	-	(4/8)	縦へりかき(0.3cm)/縦-斜テ°	
443	5A1層下面	140	-	(8/8)	(丁テ°)/多テ°(0.7cm)	
444	S10南西4層	-	16.4	1/8>	斜へりかき(0.3cm)→横テ°→斜へりかき→横テ°/横テ°(0.6cm)→横へりかき(6本/0.5cm)→横テ°	
445	S8(南東3層,一括)	-	17.8	2/8	(縦へりかき)横テ°→へりかき(0.2cm)/横へりかき(6本/0.7cm)→横テ°	胎土精良
446	3C4層	558	19.0	1/8	横テ°→へりかき/(へりかきり→)横テ°(0.5cm)	
447	S9(北東3層,北東埋土,北ベルト)	1044	18.9	1/8	横-斜へりかき(0.2cm)→横テ°(0.45cm)/(へりかきり→)横テ°	スリップ状
448	1B4層	-	19.0	1/8	横テ°(0.8cm)→丁テ°/横テ°(0.8cm)	
449	S14(北東埋土,南ベルト,東ベルト)	-	13.4	1/8	(横テ°→)横-斜へりかき、横テ°(0.6cm)/横テ°→丁テ°	
450	S12床上7cm	1859	19.7	-	斜テ°→へりかき(0.2cm)/横テ°(→へりかきり→横へりかき(0.2-0.3cm))	
451	S15北東3層	-	-	-		
452	3B3層	-	-	-		
453	1次調査区1層下面	-	-	-		
454	S14東ベルト3層	1622	-	-		
455	5B3層	-	-	-		
456	5B4層	-	-	-		
457	2B4層	-	-	-		
458	S14Tr	-	5.05	8/8	丁テ°/丁テ°	
459	Tr13N	-	4.5	8/8	(丁テ°)/テ°(1.1cm)	
460	Tr13N	-	5.3	1/8	丁テ°/横テ°	
461	S10(南東Tr,南東10-20cm)	-	4.6	3/8	丁テ°/丁テ°	
462	S9北東埋土	-	5.7	1/8	テ°/テ°	
463	2次調査23T	-	2.9	8/8	丁テ°/丁テ°	
464	S13北東床上5cm	1965	3.0	8/8	テ°/丁テ°	
465	S12南東床上5cm	2215	2.9	1/8	丁テ°/テ°	
466	S9北東埋土	-	2.4	3/8	テ°/テ°	
467	5A4層	-	-	1/8>	テ°/粗テ°	

附表5 石器・石製品観察表

掲載番号	器種	出土位置	状態	大きさ (cm)			重量 (g)	石材	取上番号	備考
				長	幅	厚				
502	剥片	3C12層	折損	6.67	3.83	1.69	35.72	ry	2591	
503	打製石鏃	25A8層上面	折損	1.67	1.88	0.37	1.15	an	3226	ガラス質安山岩か
504	打製石鏃	S10一括	完形	1.94	1.56	0.39	0.82	ch	-	
505	打製石鏃	南調査区一括	折損	1.76	1.41	0.25	0.47	ch	-	
506	打製石鏃	北調査区一括	折損	1.95	1.35	0.32	0.69	ch	-	失敗品か
507	打製石鏃	1A4層	完形	1.82	1.19	0.21	0.33	ch	1554	
508	打製石鏃	4A4-5a層	折損	1.55	1.21	0.28	0.45	sh	2373	珪質頁岩か
509	打製石鏃	24A10層	完形	1.86	1.23	0.24	0.47	ch	3230	
510	打製石鏃	S10一括	完形	2.43	1.46	0.34	0.94	ch	-	
511	打製石鏃	28Z4層	折損	2.38	1.30	0.60	1.23	an	-	
512	打製石鏃	攪乱土	完形	2.15	1.10	0.29	0.58	ch	-	
513	打製石鏃	5A杭周辺	完形	1.86	1.18	0.31	0.55	ch	-	極微細な褐色付着物あり
514	打製石鏃	5C5a層	欠損	2.00	1.14	0.32	0.65	ch	2497	
515	打製石鏃	7B4層	完形	1.89	1.24	0.27	0.60	ch	868	
516	打製石鏃	22C4層	完形	3.47	1.46	0.39	1.59	ob	-	姫島産黒曜石
517	打製石鏃	28A4層	折損	2.10	1.38	0.36	0.93	ch	-	
518	打製石鏃	7A・B清掃土	折損	2.13	0.77	0.29	0.37	ch	-	
519	打製石鏃	28Z清掃土	完形	1.91	1.37	0.31	0.78	ch	-	
520	打製石鏃	3A4層	完形	1.66	1.21	0.27	0.61	ch	2325	
521	打製石鏃	S26埋土	欠損	1.94	1.33	0.30	0.70	ch	2644	
522	打製石鏃	25Z清掃土	完形	2.23	1.42	0.39	0.95	ch	-	
523	打製石鏃	28A4層	完形	1.44	1.10	0.30	0.44	ch	-	
524	打製石鏃	28Z2-4層	欠損	1.72	1.31	0.29	0.67	ob	-	
525	打製石鏃	北調査区一括	折損	1.88	1.35	0.37	1.04	ch	-	折損を修正か
526	打製石鏃	4C4層	完形	1.63	1.31	0.46	0.98	ch	-	
527	打製石鏃	28Z4層	完形	1.55	1.15	0.32	0.47	ob	-	
528	打製石鏃	S17周辺一括	完形	1.65	0.99	0.43	0.75	ch	-	
529	打製石鏃	28Z4層	完形	1.72	1.38	0.42	0.93	ob	-	折れを修正か
530	打製石鏃	S7北西貼床	折損	1.98	1.06	0.36	0.44	ch	-	
531	打製石鏃	1C4層	折損	1.09	1.15	0.24	0.33	ob	2163	使用による折れか
532	打製石鏃	6A4層	折損	1.31	1.20	0.29	0.46	ch	-	
533	打製石鏃	S39(27Z)埋土	完形	1.49	1.66	0.42	0.72	ob	-	未成品か
534	打製石鏃	4C5b層	折損	1.47	1.11	0.35	0.58	ob	-	
535	打製石鏃	21B5a下面	完形	1.82	1.38	0.29	0.69	ob	3218	
536	打製石鏃	26Z一括	折損	1.55	1.51	0.42	1.01	ch	-	
537	打製石鏃	28A4層	完形	2.07	1.46	0.37	0.98	ch	-	
538	打製石鏃	22A9層下半	完形	1.53	1.17	0.32	0.43	ob	-	姫島産黒曜石
539	打製石鏃	7A3層	未成?	1.42	1.24	0.33	0.52	ch	-	
540	打製石鏃	3C4層	折損	1.23	1.09	0.32	0.58	ch	-	
541	打製石鏃	7D5a層下部	完存	1.70	1.12	0.39	0.64	an	2645	
542	打製石鏃	南調査区一括	完形	1.97	1.25	0.36	0.81	ch	-	
543	打製石鏃	南調査区壁面清掃土	完形	2.40	1.77	0.39	1.45	an	-	側縁は鋸歯状を意識か
544	打製石鏃	S17ベルト	完存	1.28	1.19	0.25	0.32	an	-	
545	打製石鏃	22B4層	完形	1.73	1.45	0.23	0.49	an	-	
546	打製石鏃	6B4層	折損	1.11	1.15	0.32	0.39	an	-	
547	打製石鏃	調査区一括	折損	1.21	1.20	0.30	0.48	an	-	
548	打製石鏃	S7北東検出面	折損	0.91	1.19	0.38	0.48	ch	-	
549	打製石鏃	22C4層	完形	1.56	1.27	0.48	0.92	sh?	-	
550	打製石鏃	27B4層	折損	1.25	1.71	0.30	0.82	an	-	
551	打製石鏃	3B4層	未成	2.21	1.55	0.35	0.94	an	-	
552	打製石鏃	7A1層下面	未成	1.53	1.47	0.39	0.78	ob	-	
553	打製石鏃	22B5a層	完形	1.51	1.25	0.35	0.69	ob	-	
554	打製石鏃	5C5a層	未成	1.86	1.42	0.34	0.90	an	2491	
555	打製石鏃	8D4-5層	未成	1.84	1.54	0.43	1.15	ch	-	
556	打製石鏃	27A4層	欠損	1.96	2.18	0.43	1.69	ch	-	未成品か
557	打製石鏃	26Z清掃土	欠損?	2.13	1.99	0.56	2.76	ch	-	未成品か
558	打製石鏃	S6	未成	1.54	1.97	0.77	3.13	ch	-	
559	打製石鏃	21Z5a層	折損	1.72	-	0.26	0.45	an?	2899	磨製石器転用品か
560	打製石鏃	北調査区一括	折損	0.93	0.62	0.30	0.19	ch	-	
561	打製石鏃	7B4層		1.66	-	0.31	0.35	ob	-	
562	打製石鏃	6A4層	折損	1.21	-	0.25	0.34	ch	-	
563	打製石鏃	6A4層	欠損	1.51	-	0.23	0.33	an	-	
564	打製石鏃	3C4層	折損	1.27	-	0.36	0.20	ob	-	姫島産黒曜石
565	打製石鏃	S14南東埋土	欠損	1.62	1.14	0.19	0.44	sh?	-	珪質頁岩か
566	打製石鏃	5Z4層	折損	1.17	1.30	0.28	0.45	ch	-	失敗品か
567	尖頭器状石器	5A4層	完存	4.28	1.71	1.05	7.29	an	677	折れは調査時のものか
568	楔形石器	調査区一括	完存	1.89	1.05	0.85	1.85	ch	-	
569	石錐?	26A4層	折損?	2.24	0.87	0.32	0.68	ch	-	鋒付近一部摩耗
570	異形石器	25Z4層	欠損	2.80	1.70	0.55	2.91	ob	-	中央付近の稜摩耗
571	磨製石鏃	S12北東埋土 床上51cm	折損	3.84	3.02	0.42	5.61	sh	1586	
572	磨製石鏃	S28東埋土	完形	2.86	1.99	0.25	1.66	sh	-	

573	磨製石鏃	4B4層	折損	2.34	1.78	0.20	0.97	sh	-	
574	磨製石鏃	5A4層	折損	2.21	1.36	0.13	0.51	sh	675	
575	磨製石鏃	北調査区北西部 1b層下面	完形	2.47	1.80	0.18	0.90	sh	-	
576	磨製石鏃	22B4層	折損	1.65	1.13	0.17	0.32	sh	-	
577	磨製石鏃?	28Z 清掃土	折損	2.14	1.73	0.18	0.77	sh	-	
578	磨製石器	22Z4層	折損	2.72	2.58	0.25	3.00	-	-	器種不明
579	磨製石器	北調査区北西部 1b層下面	折損	3.35	3.65	0.35	7.04	ss	-	器種不明
580	打製石斧	S8 北東3層・1A4層	折損	4.10	7.75	1.43	198.0	hf	918・1741	全体に磨滅、身部に同心円状の擦痕
581	打製石斧	S33 底上15cm	折損	11.66	8.20	1.57	176.6	hf	2683	刃部付近擦痕なし
582	打製石斧	S6一括	折損	8.45	9.05	2.20	183.5	an	-	両輝石安山岩
583	打製石斧	27A4層	折損	8.85	5.10	1.86	101.1	hf	3211	一部擦痕あり
584	打製石斧	6B一括	欠損	10.60	5.28	1.51	97.1	hf	-	
585	打製石斧?	28Z4層?	折損	10.65	5.55	1.98	137.4	hf	2829	
586	打製石斧	7B4層	折損	8.43	4.45	1.34	61.9	hf	-	
587	打製石斧	1A4層	完形	12.50	5.20	1.20	110.2	hf	2304・2305	刃部表裏で逆方向の擦痕
588	磨製石斧	6A4層	完形	11.30	4.85	3.42	268.5	hf	793	
589	磨製石斧?	22Z5a層	完形	14.10	5.10	3.90	474.8	hf	2789	表面風化顕著
590	磨製石斧	3B4層	折損	9.18	4.10	1.62	90.1	hf	2104	表面の風化顕著
591	磨製石斧	文化財課22トレンチ	折損	6.60	5.25	1.84	76.5	hf	-	
592	磨製石斧?	28Z4層	折損	4.60	5.75	1.20	44.0	hf	3194	研磨後の剥離あり
593	磨製石斧	6D4層	折損	4.35	4.18	1.27	35.7	hf	-	未使用か
594	横刃形石器	23A4層	完形	12.23	6.55	1.24	114.6	hf	2943	
595	横刃形石器	25Z4層	折損	12.95	6.75	0.81	80.4	hf	2722	
596	磨石?	S27 黒色土 (底上10cm)	完形	5.33	5.37	3.17	129.4	ss	2840	
597	敲石	3C5a層	完形	5.00	4.74	2.70	82.3	ss	2439	
598	敲石	北調査区北西部 1b層下面		5.26	4.98	3.71	157.2	hf	-	
599	敲石	4C4層	完形	4.38	4.25	2.28	59.3	ss	2117	
600	磨石	22Z5a層	完形	12.79	9.88	4.58	920	ss	2757	
601	磨石	3B5a層	完形	11.63	8.78	3.93	430	ss	2458	日南層群産出の有孔虫化石を含む砂岩
602	磨・敲石	23B4層	折損	8.08	9.86	4.82	560	ss	-	
603	磨石?	25A4層	折損	6.15	8.80	4.60	230	ss	3141	日南層群産出の有孔虫化石を含む砂岩
604	敲石	4C5a層	折損	6.94	8.54	4.21	390	gr	2440	雲母を多量に含む
605	磨石	5B5b層	完形	10.00	8.28	5.70	640	ss	-	
606	磨石	4D5a層	折損	6.70	9.95	4.60	495	ss	1322	
607	磨石	7B4層	折損	9.35	10.58	5.00	725	ss	2247	
608	凹石	3A4層	完形	9.32	9.62	4.70	645	ss	2106	全面が使用により凹む
609	磨・敲石?	S11 北西床上	完形	9.68	7.53	5.13	650	md	2218	自然礫の可能性あり
610	台石	S7 埋土上層	折損	11.8	3.6	2.34	184	ss	1802	コーングロス状の光沢あり
611	台石	18A5a層	折損	14.3	12.7	6.7	1445	ss	2760	
612	台石	S7 北東床上10cm	完形	24.7	25.8	6.4	5550	ss	2206	
613	台石	S8 北西床上3cm	完形	24.4	20.5	8.3	5950	ss	2202	
614	台石	1B5b層	折損	14.9	14.4	7.6	2100	ss	3240	
615	台石	S10 北東床上10cm	折損	24.6	19.8	11.5	6950	ss	2213	
616	台石	S11 南東床上5cm	折損	15.2	20.8	7.0	2850	ss	2214	
617	台石	25A 清掃土	折損	20.2	15.3	9.6	3900	ss	-	
618	台石	1C4層	折損	12.7	10.7	9.3	1300	ss	2333	
619	台石	4C4層	完形	22.2	19.1	9.0	5580	ss	2122	
620	台石・焼礫	S7pit5 埋土	折損	19.4	16.1	10.6	3200	ss	-	
621	転用金床石	S15 北東床上2cm	折損	25.7	14.5	10.6	4600	ss	2216	鉄錆が厚く付着
622	自然礫?	S17 北東床上5cm	完形	21.0	45.3	7.2	1800	ss	2217	
623	自然礫?	S7 埋土上層	完形	14.4	8.0	3.0	650	ss	1803	特に加工は認められない
624	軽石加工品	2C5a層	完形	43.1	24.1	7.6	1400	-	1996	風化顕著
625	軽石	2Z5a層	完形	27.4	28.1	18.3	2350	-	2462	
625	軽石	2A5a層	完形	38.3	24.1	22.4	4100	-	3233	
627	砥石	19C3層	折損	7.65	4.00	1.61	91.2	ss	2665	
628	砥石	5D3層上面	折損	6.20	3.90	2.83	88.7	ss	1701	
629	砥石	S7 南西埋土	折損?	9.05	3.50	0.69	41.5	ss	892	
630	砥石?	3B4-5a層	折損	4.82	4.58	0.55	12.0	ss	2369	節理面で剥離
631	砥石	1B5b層	折損	4.36	1.75	0.50	7.1	ss	-	
632	砥石	S8 床面	折損	4.30	2.17	0.37	5.9	ss	-	
633	管玉	S17 検出面付近	完形	0.68	0.57-0.62		0.47	翡翠	1813	孔径0.2cm
634	管玉	S17 埋土下層(床上20cm)	完形	0.89	0.41-0.43		0.24	碧玉	2599	孔径0.2cm
636	石鍋再加工品	19D4層、19D1層下面	完形	15.95	6.92	1.59	162.2	-	2672	出土時は折損
637	石鍋片	19D4層	折損	2.00	7.08	-	50.0	-	-	口縁部付近破片、厚さは最大値
638	石鍋片	南部調査区一括	折損	-	4.11	1.60	30.5	-	-	
635	円板形石製品	8C5b層	完形		4.70	1.05	40.0	ss	-	

附表6 鉄器・青銅器観察表

掲載番号	器種	出土位置	状態	大きさ (cm)			取上番号	備考
				長さ	幅	厚さ		
639	鉄鏃	7C4層	折損	6.40	3.97	0.40-0.50	-	
640	鉄鏃	S7北西床面	欠損	5.08	1.79	0.20	2277	
641	鉄鏃?	6D4-5a層	欠損	2.24	1.75	0.20	-	
642	鉄鏃	28Z4層	欠損	2.57	2.78	0.20	-	折れの一部は調査前のもの。
643	鉄鏃	S12北西51層相当	欠損	2.52	1.23	0.26	1599	
644	鉄鏃?	22C5a層	欠損	2.61	1.06	0.25-0.30	-	鏽化で空洞化
645	鉄鏃?	3B4層	欠損	5.03	0.63	0.40	1798	
646	鉄刀 or 鉄剣?	S9南西埋土	欠損	1.31	2.13	0.30	-	
647	刀子	S8床面	欠損	2.24	0.72	0.20	-	
648	鉈?	文化財課21T	折損	6.45	1.42	0.15-0.20	-	「U」字状に折り曲げ。本来は12~13cm程度の長さか。
649	板状鉄片	21Z4層	完形	4.50	1.71	0.20-0.25	-	刃部なし。
650	鉄片	23C4層	完形	1.85	3.00	0.18-0.35	-	刃部なし。
651	器種不明	7B4層	完形	3.23	1.21	0.85	-	楔?
652	棒状鉄器	S16南西埋土	完形	4.20	0.56	0.30	-	
653	器種不明	7B4層	完形	3.92	1.23	0.35	-	
654	鉄片	8C4層	折損	1.96	2.91	0.20-0.25	-	
655	鉄片	6A4層	完形?	3.13	1.42	0.15-0.25	-	端部折り曲げか。一部凹む?
656	板状鉄片	3A4層	欠損	3.18	1.44	0.10	-	
657	板状鉄片	3A4層	欠損	2.30	2.47	0.10	-	
658	板状鉄片	3A4層	欠損	3.05	3.37	0.10	2327	同一個体か。縁辺を折り曲げる。
659	板状鉄片	3A4層	欠損	2.30	2.97	0.10	-	
660	板状鉄片	3A4層	欠損	1.63	1.25	0.10	-	
661	針状鉄器	3A3層	折損	3.06	0.12前後	-	-	3本の針状の鉄器を束ね捻る。
662	器種不明	3A3層	欠損	1.40	0.10-0.20	-	-	細い鉄器が巻き付く
663	器種不明	3A3層	欠損	1.19	0.36	0.23	-	細い鉄器が巻き付く
664	煙管	26A一括	折損	8.94	0.84	0.08	-	

附表7 本報告関係の遺物取り上げ座標一覧

取上番号	X座標	Y座標	Z座標	種類	取上番号	X座標	Y座標	Z座標	種類	取上番号	X座標	Y座標	Z座標	種類
2	-146899.689	4981.924	161.886	土器	311	-146845.936	4994.509	161.279	土器	469	-146889.936	4992.693	161.781	土器
5	-146913.045	4988.181	161.801	土器	315	-146845.646	4995.735	161.230	土器	470	-146890.127	4992.556	161.733	土器
6	-146909.116	4993.347	161.760	土器	317	-146845.492	4995.861	161.244	土器	486	-146846.619	4999.796	161.294	土器
8	-146886.021	4988.478	161.798	土器	318	-146845.385	4995.949	161.249	土器	487	-146846.133	4996.249	161.235	土器
12	-146875.754	4989.167	161.799	土器	319	-146844.763	4996.366	161.229	土器	488	-146845.957	4995.433	161.244	土器
18	-146885.887	4978.975	161.874	土器	321	-146844.800	4996.800	161.258	土器	489	-146845.816	4995.305	161.240	土器
25	-146877.763	4979.656	161.913	土器	322	-146844.469	4996.923	161.219	土器	490	-146845.614	4994.874	161.284	土器
33	-146874.485	4994.531	161.140	土器	325	-146843.868	4997.616	161.168	土器	491	-146845.498	4995.009	161.251	土器
54	-146857.358	4993.218	161.492	土器	338	-146842.924	4996.862	161.174	土器	494	-146845.305	4994.983	161.258	土器
57	-146857.347	4996.114	161.495	土器	338	-146842.924	4996.862	161.174	土器	496	-146845.245	4994.902	161.256	土器
71	-146849.557	4985.246	161.294	土器	348	-146840.329	4996.488	161.171	土器	497	-146845.284	4994.771	161.280	土器
89	-146851.107	4990.280	161.442	土器	353	-146840.686	4995.328	161.170	土器	498	-146845.320	4994.774	161.257	土器
92	-146852.387	4990.111	161.466	土器	354	-146840.570	4995.297	161.172	土器	499	-146845.248	4994.756	161.254	土器
93	-146851.987	4989.832	161.475	土器	375	-146843.606	4999.353	161.227	土器	500	-146845.301	4994.703	161.248	土器
99	-146850.297	4987.388	161.411	土器	379	-146846.583	4999.831	161.303	土器	502	-146845.366	4994.826	161.232	土器
106	-146856.988	4997.874	161.447	土器	383	-146847.571	5000.505	161.339	土器	503	-146845.288	4994.838	161.227	土器
108	-146856.137	4991.632	161.473	土器	403	-146889.208	4992.860	161.704	土器	504	-146845.254	4994.823	161.226	土器
111	-146858.104	4984.884	161.612	土器	407	-146888.378	4994.008	161.744	土器	505	-146845.290	4994.755	161.245	土器
113	-146855.867	4985.354	161.568	土器	409	-146888.921	4993.824	161.755	土器	506	-146845.354	4994.759	161.237	土器
115	-146850.782	4992.486	161.426	土器	413	-146889.461	4993.974	161.741	土器	511	-146845.240	4994.465	161.271	土器
116	-146849.012	4989.639	161.332	土器	415	-146889.148	4994.061	161.764	土器	514	-146845.083	4994.596	161.264	土器
127	-146881.632	5000.990	161.551	土器	417	-146889.736	4993.056	161.771	土器	520	-146845.251	4994.736	161.244	土器
136	-146862.241	4995.641	161.588	土器	420	-146889.966	4992.676	161.801	土器	521	-146845.302	4994.683	161.234	土器
139	-146880.262	4982.831	161.806	土器	434	-146889.348	4996.814	161.724	土器	523	-146845.229	4994.762	161.221	土器
140	-146880.253	4982.831	161.806	土器	435	-146889.586	4996.794	161.726	土器	524	-146845.297	4994.747	161.218	土器
153	-146903.941	4989.763	161.706	土器	436	-146889.786	4996.118	161.741	土器	525	-146845.391	4994.771	161.233	土器
168	-146865.792	5010.371	161.289	土器	437	-146889.985	4996.224	161.736	土器	526	-146845.348	4994.812	161.230	土器
179	-146842.223	4991.747	161.207	土器	439	-146889.888	4995.963	161.743	土器	527	-146845.412	4994.728	161.249	土器
197	-146842.262	4992.944	161.202	土器	440	-146889.708	4995.773	161.772	土器	528	-146845.265	4994.612	161.253	土器
221	-146841.351	4995.691	161.191	土器	441	-146889.876	4995.697	161.734	土器	529	-146845.335	4994.650	161.256	土器
226	-146842.015	4995.345	161.216	土器	443	-146889.695	4995.609	161.748	土器	530	-146845.281	4994.738	161.200	土器
241	-146840.779	4996.469	161.192	土器	446	-146890.081	4995.978	161.714	土器	541	-146854.861	5008.765	161.279	土器
284	-146844.982	4999.126	161.192	土器	447	-146890.231	4996.401	161.735	土器	558	-146866.855	5008.066	161.387	土器
302	-146846.695	4995.769	161.247	土器	448	-146890.033	4996.911	161.717	土器	561	-146869.347	5005.645	161.422	土器
303	-146846.400	4996.249	161.220	土器	449	-146890.375	4996.325	161.738	土器	572	-146877.779	5011.303	161.338	土器
304	-146846.319	4995.960	161.259	土器	452	-146890.392	4995.662	161.715	土器	584	-146878.307	5013.033	161.343	土器
305	-146846.207	4995.837	161.247	土器	461	-146891.064	4990.949	161.755	土器	585	-146878.223	5007.514	161.428	土器
307	-146846.295	4995.008	161.272	土器	463	-146891.497	4992.420	161.789	土器	587	-146879.175	5007.392	161.417	土器
308	-146845.961	4995.444	161.254	土器	464	-146890.005	4996.333	161.704	土器	590	-146879.689	5007.564	161.407	土器
310	-146846.233	4994.363	161.316	土器	466	-146890.066	4995.904	161.706	土器	609	-146881.374	5001.301	161.538	土器

614	-146882.837	5001.015	161.517	土器	1011	-146860.620	5002.738	161.120	土器	1272	-146861.234	5003.316	161.081	土器
615	-146882.982	5001.005	161.548	土器	1017	-146860.307	5003.054	161.115	土器	1275	-146861.209	5003.165	161.058	土器
629	-146871.749	4994.009	161.501	土器	1018	-146860.216	5003.189	161.112	土器	1278	-146861.198	5003.151	161.059	土器
630	-146870.889	4990.454	161.621	土器	1019	-146859.780	5003.062	161.140	土器	1282	-146861.070	5002.432	161.136	土器
649	-146875.043	4989.764	161.659	土器	1020	-146859.817	5003.358	161.147	土器	1292	-146861.335	5004.028	161.051	土器
675	-146884.792	4982.406	161.798	石器	1022	-146859.977	5003.625	161.124	土器	1299	-146861.371	5003.732	161.037	土器
677	-146884.997	4985.313	161.771	石器	1024	-146860.028	5003.413	161.132	土器	1300	-146861.693	5003.414	160.726	土器
682	-146889.471	4982.491	161.832	土器	1026	-146860.222	5003.734	161.075	土器	1301	-146862.313	5002.164	160.908	土器
693	-146883.297	4989.960	161.675	土器	1030	-146860.669	5003.522	161.071	土器	1311	-146882.174	5009.376	161.144	土器
702	-146889.574	4995.691	161.709	土器	1032	-146860.657	5003.426	161.093	土器	1312	-146882.198	5009.306	161.152	土器
703	-146887.867	4997.374	161.707	土器	1041	-146858.770	5003.732	161.254	土器	1313	-146882.237	5009.346	161.139	土器
704	-146887.836	4997.403	161.705	土器	1043	-146859.672	5005.831	161.263	土器	1314	-146882.272	5009.234	161.151	土器
705	-146887.922	4997.399	161.722	土器	1044	-146860.114	5005.252	161.147	土器	1316	-146882.272	5010.799	160.953	土器
706	-146887.923	4997.464	161.720	土器	1045	-146860.380	5005.406	161.173	土器	1319	-146881.962	5010.768	160.971	土器
707	-146887.969	4997.407	161.723	土器	1046	-146860.403	5005.669	161.189	土器	1322	-146879.782	5012.410	161.132	石器
712	-146888.230	4997.471	161.714	土器	1048	-146860.919	5006.178	161.198	土器	1323	-146881.522	5011.733	161.014	土器
715	-146887.891	4997.433	161.696	土器	1052	-146861.358	5005.613	161.200	土器	1324	-146881.541	5011.831	161.021	土器
716	-146887.970	4997.435	161.711	土器	1056	-146860.538	5005.249	161.210	土器	1329	-146884.049	5008.517	161.232	土器
717	-146887.923	4997.471	161.697	土器	1058	-146860.524	5004.930	161.093	土器	1331	-146886.987	4978.875	161.876	土器
718	-146888.074	4997.414	161.690	土器	1062	-146861.003	5005.133	161.113	土器	1332	-146886.787	4978.864	161.845	土器
721	-146887.377	4998.655	161.678	土器	1066	-146861.154	5004.850	161.147	土器	1375	-146902.331	4982.483	161.702	土器
763	-146890.892	4993.828	161.673	土器	1067	-146861.136	5004.760	161.112	土器	1407	-146868.624	4994.473	161.049	土器
765	-146890.685	4994.051	161.686	土器	1068	-146861.156	5004.646	161.085	土器	1408	-146868.471	4994.624	161.003	土器
781	-146888.583	5002.205	161.596	土器	1069	-146861.055	5004.488	161.079	土器	1409	-146868.620	4994.844	160.936	土器
793	-146896.947	4982.090	161.829	石器	1070	-146861.012	5004.375	161.058	土器	1414	-146868.045	4995.109	160.946	土器
860	-146908.428	4993.046	161.740	土器	1072	-146861.069	5004.396	161.043	土器	1415	-146868.131	4995.133	160.938	土器
866	-146907.109	4995.846	161.647	土器	1076	-146861.177	5004.556	161.077	土器	1416	-146868.181	4995.030	160.938	土器
868	-146906.709	4998.151	161.739	石器	1081	-146861.681	5003.212	161.074	土器	1417	-146868.197	4995.263	160.872	土器
871	-146905.651	5001.853	161.775	土器	1083	-146861.782	5002.960	161.098	土器	1418	-146868.316	4995.298	160.851	土器
887	-146850.843	4981.890	161.255	土器	1085	-146862.170	5002.721	161.135	土器	1421	-146868.255	4995.468	160.833	土器
892	-146854.016	4980.157	161.345	石器	1086	-146862.215	5002.816	161.117	土器	1423	-146868.134	4995.657	160.884	土器
895	-146869.161	4988.875	161.668	土器	1088	-146862.114	5002.842	161.113	土器	1424	-146868.240	4995.602	160.803	土器
898	-146869.000	4988.863	161.646	土器	1091	-146861.859	5002.513	161.120	土器	1425	-146868.239	4995.666	160.790	土器
903	-146859.116	4987.879	161.567	土器	1094	-146861.619	5002.820	161.124	土器	1426	-146868.486	4995.725	160.815	土器
918	-146851.291	5001.701	161.165	石器	1095	-146861.575	5002.881	161.110	土器	1429	-146868.422	4995.436	160.897	土器
923	-146852.496	4998.551	161.059	土器	1099	-146862.350	5002.543	161.159	土器	1430	-146868.403	4995.454	160.913	土器
924	-146852.860	4998.127	161.070	土器	1102	-146862.051	5002.460	161.143	土器	1431	-146868.366	4995.456	160.910	土器
926	-146852.708	4998.084	161.099	土器	1103	-146861.900	5002.417	161.099	土器	1434	-146869.248	4995.463	160.986	土器
928	-146852.454	4998.050	161.110	土器	1104	-146861.911	5002.414	161.098	土器	1437	-146868.778	4995.995	160.784	土器
930	-146852.279	4998.077	161.097	土器	1110	-146861.875	5002.158	161.228	土器	1438	-146868.881	4996.023	160.786	土器
932	-146852.238	4997.928	161.139	土器	1113	-146861.978	5002.160	161.146	土器	1440	-146869.186	4996.198	160.763	土器
933	-146852.202	4997.851	161.140	土器	1115	-146861.549	5002.264	161.168	土器	1444	-146869.126	4996.275	160.837	土器
934	-146852.161	4997.719	161.177	土器	1116	-146861.470	5002.244	161.148	土器	1445	-146869.088	4996.168	160.808	土器
935	-146852.120	4997.653	161.170	土器	1118	-146861.417	5001.931	161.164	土器	1446	-146869.036	4996.168	160.797	土器
936	-146852.011	4997.419	161.146	土器	1119	-146861.420	5002.072	161.159	土器	1447	-146870.826	4997.297	160.792	土器
938	-146852.136	4997.187	161.287	土器	1120	-146861.378	5002.004	161.163	土器	1448	-146876.281	4988.156	161.552	土器
939	-146852.151	4997.138	161.296	土器	1121	-146861.513	5001.849	161.191	土器	1449	-146876.072	4988.046	161.574	土器
941	-146852.182	4997.065	161.303	土器	1132	-146862.550	5002.532	161.177	土器	1450	-146876.011	4988.055	161.575	土器
942	-146852.200	4997.041	161.297	土器	1135	-146863.096	5002.561	161.259	土器	1454	-146875.118	4986.824	161.472	土器
943	-146852.206	4997.028	161.311	土器	1139	-146862.441	5005.481	161.239	土器	1480	-146882.726	5011.044	161.028	土器
944	-146852.098	4996.634	161.305	土器	1140	-146862.393	5005.387	161.203	土器	1483	-146883.765	5012.775	160.927	土器
945	-146852.496	4996.847	161.336	土器	1143	-146862.399	5005.143	161.160	土器	1484	-146883.844	5012.691	160.918	土器
946	-146852.649	4996.828	161.322	土器	1147	-146862.676	5004.929	161.215	土器	1487	-146871.142	4998.847	161.024	土器
949	-146852.710	4996.937	161.326	土器	1149	-146862.603	5004.548	161.162	土器	1494	-146870.802	4997.633	160.787	土器
950	-146852.728	4996.983	161.305	土器	1152	-146862.624	5004.634	161.151	土器	1495	-146870.845	4997.572	160.787	土器
951	-146852.776	4996.949	161.306	土器	1161	-146862.471	5004.452	161.187	土器	1496	-146870.634	4997.533	160.817	土器
955	-146852.853	4997.034	161.273	土器	1170	-146862.294	5003.936	161.112	土器	1497	-146870.417	4997.282	160.774	土器
959	-146852.886	4997.186	161.225	土器	1171	-146862.307	5004.003	161.109	土器	1498	-146870.394	4997.444	160.777	土器
960	-146853.274	4996.859	161.327	土器	1173	-146862.441	5004.043	161.144	土器	1499	-146870.302	4997.393	160.792	土器
964	-146853.182	4996.591	161.355	土器	1197	-146855.619	4997.943	161.208	土器	1500	-146870.310	4997.479	160.787	土器
973	-146853.064	4997.449	161.195	土器	1203	-146860.491	5004.158	161.064	土器	1502	-146870.171	4997.926	160.786	土器
977	-146853.261	4997.321	161.279	土器	1206	-146860.681	5004.077	161.055	土器	1504	-146870.017	4997.125	160.799	土器
979	-146853.212	4997.313	161.186	土器	1208	-146860.521	5004.315	161.055	土器	1505	-146869.881	4997.289	160.798	土器
980	-146853.074	4997.374	161.169	土器	1218	-146861.249	5004.567	161.101	土器	1506	-146869.895	4997.300	160.777	土器
987	-146853.706	4999.572	161.025	土器	1219	-146861.306	5004.691	161.070	土器	1507	-146869.785	4997.325	160.746	土器
989	-146854.221	4998.952	161.086	土器	1220	-146861.450	5004.909	161.065	土器	1509	-146869.763	4997.878	160.897	土器
991	-146854.010	4998.665	161.072	土器	1227	-146861.623	5004.620	161.049	土器	1524	-146878.081	5009.136	161.365	土器
993	-146853.685	4998.978	161.037	土器	1231	-146861.551	5005.546	161.164	土器	1526	-146880.437	5007.037	161.425	土器
994	-146853.712	4999.020	161.037	土器	1234	-146862.829	5003.588	161.126	土器	1531	-146887.060	5001.410	161.501	土器
997	-146853.416	4999.490	160.969	土器	1239	-146862.894	5003.415	161.138	土器	1534	-146868.789	4986.515	161.694	土器
1000	-146853.256	4998.842	161.015	土器	1249	-146862.323	5003.590	161.140	土器	1537	-146866.452	5009.781	161.340	土器
1002	-146858.842	5000.965	161.260	土器	1251	-146862.209	5003.513	161.067	土器	1550	-146842.087			

1564	-146868.845	5001.374	161.477	土器	1782	-146848.011	5004.885	161.218	土器	1962	-146857.503	4980.265	161.041	土器
1567	-146853.392	4997.245	161.219	土器	1783	-146848.180	5005.256	161.210	土器	1965	-146858.051	4979.875	161.096	土器
1568	-146853.374	4997.390	161.184	土器	1784	-146847.841	5005.940	161.211	土器	1966	-146859.672	4980.992	161.083	土器
1569	-146853.480	4997.391	161.208	土器	1787	-146849.585	4993.932	161.360	土器	1967	-146859.292	4980.969	161.049	土器
1571	-146853.388	4997.422	161.189	土器	1788	-146851.804	4991.997	161.359	土器	1970	-146859.111	4981.005	161.063	土器
1573	-146853.397	4997.636	161.128	土器	1789	-146851.979	4992.227	161.363	土器	1971	-146859.180	4980.944	161.052	土器
1574	-146853.111	4998.503	161.030	土器	1790	-146852.201	4992.215	161.387	土器	1972	-146860.530	4979.584	161.082	土器
1575	-146853.159	4998.612	161.013	土器	1791	-146852.201	4992.025	161.379	土器	1973	-146860.537	4979.538	161.078	土器
1578	-146853.090	4998.905	161.005	土器	1792	-146854.460	4986.563	161.484	土器	1974	-146860.457	4979.474	161.088	土器
1579	-146852.956	4999.773	160.985	土器	1797	-146859.967	4998.877	161.428	土器	1975	-146860.686	4979.173	161.079	土器
1580	-146852.483	5000.576	161.026	土器	1798	-146862.483	4996.185	161.476	鉄器	1976	-146858.653	4977.503	161.097	土器
1581	-146852.510	5000.523	161.039	土器	1799	-146863.668	4995.903	161.485	土器	1977	-146858.627	4977.516	161.097	土器
1583	-146852.478	4999.948	161.055	土器	1800	-146864.161	4995.509	161.502	土器	1978	-146858.723	4977.393	161.105	土器
1584	-146852.538	4999.966	161.050	土器	1802	-146850.655	4981.665	160.879	石器	1979	-146858.780	4977.346	161.102	土器
1586	-146865.162	4982.083	161.456	石器	1803	-146849.912	4980.355	160.997	石器	1980	-146858.798	4977.383	161.105	土器
1594	-146866.876	4982.438	161.307	土器	1805	-146874.590	4985.713	161.392	土器	1981	-146858.772	4977.218	161.072	土器
1595	-146866.286	4981.433	161.277	土器	1806	-146874.011	4986.319	161.244	土器	1982	-146858.776	4977.354	161.096	土器
1599	-146866.822	4978.038	161.500	鉄器	1807	-146873.316	4987.992	161.265	土器	1983	-146858.786	4977.310	161.085	土器
1607	-146869.833	4981.087	161.215	土器	1808	-146873.315	4988.181	161.264	土器	2000	-146845.748	4986.787	161.096	土器
1612	-146869.327	4982.495	161.323	土器	1809	-146873.336	4988.237	161.270	土器	2004	-146845.421	4988.335	161.215	土器
1613	-146869.334	4982.600	161.314	土器	1811	-146875.706	4987.315	161.219	土器	2010	-146846.528	4988.058	161.181	土器
1617	-146868.140	4982.714	161.255	土器	1812	-146876.744	4985.936	161.361	土器	2011	-146846.567	4988.133	161.157	土器
1618	-146869.389	4978.859	161.393	土器	1813	-146886.452	4979.731	161.578	石器	2014	-146847.133	4980.424	161.203	土器
1619	-146869.457	4978.888	161.361	土器	1845	-146859.167	4981.376	161.060	土器	2016	-146844.567	4977.354	161.239	土器
1620	-146885.111	4988.985	161.584	土器	1846	-146859.239	4981.118	161.056	土器	2020	-146847.533	4990.576	161.219	土器
1622	-146884.330	4989.376	161.639	土器	1847	-146859.246	4980.872	161.086	土器	2025	-146851.561	4985.573	161.341	土器
1624	-146859.624	4978.245	161.371	土器	1848	-146859.082	4980.859	161.075	土器	2026	-146851.377	4985.897	161.330	土器
1625	-146859.676	4978.252	161.351	土器	1849	-146858.814	4977.577	161.107	土器	2029	-146851.577	4988.991	161.277	土器
1628	-146859.593	4978.485	161.328	土器	1850	-146858.632	4977.514	161.102	土器	2031	-146853.375	4988.812	161.334	土器
1629	-146859.442	4978.660	161.345	土器	1851	-146858.423	4977.427	161.133	土器	2032	-146853.982	4988.795	161.349	土器
1631	-146859.154	4979.233	161.357	土器	1852	-146858.775	4977.302	161.085	土器	2034	-146854.662	4988.010	161.426	土器
1632	-146859.027	4979.241	161.406	土器	1853	-146858.309	4977.780	161.097	土器	2035	-146855.019	4987.287	161.440	土器
1634	-146859.471	4979.472	161.360	土器	1854	-146860.688	4979.195	161.166	土器	2036	-146854.511	4986.466	161.408	土器
1635	-146859.898	4979.379	161.371	土器	1855	-146860.453	4979.405	161.174	土器	2037	-146852.817	4986.670	161.364	土器
1641	-146853.155	4998.896	160.994	土器	1856	-146860.501	4979.567	161.086	土器	2038	-146857.711	4985.820	161.471	土器
1642	-146852.849	5000.069	160.987	土器	1857	-146864.697	4981.850	161.050	土器	2039	-146849.111	4990.235	161.292	土器
1643	-146851.737	4979.282	161.153	土器	1858	-146864.780	4981.322	161.051	土器	2041	-146842.280	4992.680	161.159	土器
1646	-146848.645	4981.345	161.220	土器	1859	-146865.393	4981.357	161.024	土器	2042	-146841.990	4993.048	161.162	土器
1647	-146854.464	4983.447	161.313	土器	1860	-146865.270	4981.217	161.046	土器	2043	-146843.177	4993.841	161.182	土器
1667	-146870.817	4996.634	160.811	土器	1863	-146865.375	4979.953	161.018	土器	2044	-146842.876	4997.962	161.051	土器
1668	-146870.308	4997.110	160.765	土器	1864	-146865.690	4980.147	161.002	土器	2046	-146847.303	4996.859	161.215	土器
1669	-146868.534	4994.628	160.968	土器	1874	-146867.081	4977.824	161.066	土器	2047	-146848.719	4996.442	161.253	土器
1672	-146868.302	4995.262	160.860	土器	1875	-146867.143	4977.829	161.065	土器	2049	-146847.454	4995.150	161.150	土器
1673	-146868.316	4995.287	160.835	土器	1876	-146867.080	4977.992	161.056	土器	2051	-146851.199	4991.515	161.346	土器
1674	-146868.372	4995.360	160.861	土器	1879	-146866.848	4979.350	161.031	土器	2054	-146851.558	4992.915	161.319	土器
1675	-146868.315	4995.370	160.866	土器	1887	-146866.067	4982.003	161.036	土器	2055	-146852.154	4992.337	161.344	土器
1676	-146868.273	4995.435	160.843	土器	1890	-146866.930	4982.566	160.997	土器	2056	-146855.325	4994.227	161.355	土器
1678	-146868.295	4995.406	160.854	土器	1891	-146868.275	4981.773	161.049	土器	2057	-146853.429	4990.565	161.282	土器
1679	-146868.260	4995.334	160.830	土器	1892	-146868.107	4981.006	161.043	土器	2058	-146852.624	4990.001	161.239	土器
1680	-146868.238	4995.392	160.837	土器	1894	-146868.653	4980.874	161.048	土器	2063	-146856.461	4990.902	161.374	土器
1682	-146868.392	4995.451	160.883	土器	1896	-146867.816	4980.550	161.072	土器	2066	-146858.448	4994.523	161.448	土器
1683	-146868.388	4995.457	160.821	土器	1897	-146867.907	4980.425	161.000	土器	2067	-146858.649	4994.593	161.463	土器
1684	-146868.448	4995.561	160.826	土器	1898	-146867.847	4980.347	161.012	土器	2068	-146858.636	4994.554	161.460	土器
1685	-146868.170	4995.510	160.878	土器	1918	-146870.238	4979.911	161.057	土器	2070	-146856.636	4996.055	161.319	土器
1686	-146868.629	4995.456	160.841	土器	1919	-146870.099	4980.004	161.059	土器	2071	-146857.158	4995.951	161.353	土器
1687	-146868.396	4995.392	160.834	土器	1920	-146870.111	4980.046	161.064	土器	2075	-146845.163	5001.127	161.051	土器
1688	-146868.273	4995.402	160.826	土器	1924	-146869.911	4981.488	161.023	土器	2077	-146841.763	5002.936	161.026	土器
1690	-146868.329	4995.431	160.839	土器	1926	-146869.756	4981.722	161.025	土器	2078	-146848.012	5007.892	161.168	土器
1691	-146868.279	4995.389	160.818	土器	1927	-146869.106	4981.957	161.123	土器	2079	-146848.163	5008.457	161.206	土器
1701	-146889.562	5018.397	161.501	石器	1931	-146868.977	4982.754	161.050	土器	2080	-146848.350	5008.368	161.223	土器
1734	-146913.800	4998.363	161.589	土器	1932	-146870.182	4980.089	161.061	土器	2081	-146851.437	5007.670	161.221	土器
1741	-146841.942	4985.127	161.126	石器	1945	-146859.254	4980.392	161.071	土器	2083	-146852.468	5007.885	161.235	土器
1747	-146842.094	4988.942	161.141	土器	1946	-146859.231	4980.239	161.066	土器	2084	-146852.476	5008.409	161.208	土器
1751	-146842.585	4992.079	161.212	土器	1947	-146859.487	4980.233	161.067	土器	2089	-146857.428	5007.177	161.279	土器
1753	-146844.944	4989.687	161.258	土器	1948	-146859.464	4980.071	161.072	土器	2096	-146861.459	5009.224	161.264	土器
1754	-146845.669	4989.228	161.293	土器	1949	-146859.459	4980.027	161.076	土器	2098	-146862.130	5008.262	161.287	土器
1756	-146846.689	4984.012	161.262	土器	1950	-146859.436	4980.001	161.073	土器	2100	-146867.184	5008.327	161.244	土器
1760	-146846.791	4990.876	161.324	土器	1951	-146859.271	4979.941	161.067	土器	2102	-146862.437	4999.206	161.357	土器
1761	-146846.850	4991.165	161.313	土器	1952	-146859.227	4979.953	161.062	土器	2104	-146862.298	4990.276	161.518	石器
1764	-146848.712	4988.410	161.283	土器	1953	-146859.569	4979.703	161.109	土器	2105	-146865.723	4989.194	161.536	土器
1767	-146849.295	4989.954	161.328	土器	1954	-146859.967	4979.604	161.086	土器	2106	-146865.609	4989.048	161.603	石器
1772	-146850.793	4990.441	161.368	土器	1955	-1								

2124	-146879.417	5007.090	161.374	土器	2309	-146852.126	4987.030	161.300	土器	2616	-146841.199	5004.213	160.914	土器
2126	-146879.829	5006.974	161.401	土器	2313	-146854.720	4988.674	161.233	土器	2617	-146841.268	5004.289	160.906	土器
2127	-146879.910	5007.210	161.390	土器	2315	-146854.705	4988.969	161.277	土器	2625	-146839.383	4996.786	161.131	土器
2128	-146880.242	5006.712	161.406	土器	2319	-146855.806	4979.380	161.452	土器	2628	-146839.738	4996.476	161.188	土器
2129	-146880.685	5007.032	161.424	土器	2325	-146863.739	4986.616	161.429	石器	2631	-146837.860	4993.412	161.115	土器
2135	-146880.775	5015.107	161.277	土器	2326	-146865.284	4986.867	161.558	土器	2635	-146911.475	5012.946	161.434	土器
2136	-146881.180	5015.018	161.285	土器	2327	-146865.791	4987.567	161.441	鉄器	2637	-146913.591	5012.669	161.459	土器
2137	-146881.898	5016.147	161.248	土器	2328	-146856.637	4993.115	161.292	土器	2640	-146839.339	4996.917	161.057	土器
2138	-146884.634	5013.721	160.893	土器	2333	-146843.891	5000.243	161.014	石器	2644	-146904.689	5004.397	161.178	石器
2139	-146886.671	5012.330	161.329	土器	2334	-146856.777	4995.801	161.160	土器	2645	-146908.501	5011.433	161.284	石器
2160	-146879.412	4978.119	161.829	土器	2335	-146856.869	4996.125	161.243	土器	2665	-147026.154	5006.533	161.222	石器
2163	-146846.255	5005.649	161.129	石器	2342	-146858.205	4994.687	161.245	土器	2676	-147087.113	4973.138	161.552	土器
2164	-146859.157	4980.904	161.053	土器	2350	-146856.777	4998.735	161.200	土器	2680	-147098.526	4969.695	161.599	土器
2165	-146859.499	4980.204	161.059	土器	2356	-146860.030	4997.698	161.208	土器	2683	-147086.122	4974.006	161.359	石器
2166	-146859.528	4979.706	161.097	土器	2357	-146860.412	4997.900	161.213	土器	2712	-147084.987	4972.003	161.557	土器
2168	-146860.512	4978.350	161.135	土器	2360	-146860.617	4997.146	161.236	土器	2715	-147084.757	4971.389	161.461	土器
2169	-146860.191	4978.457	161.099	土器	2369	-146861.783	4998.080	161.287	石器	2717	-147084.934	4972.906	161.499	土器
2170	-146859.957	4978.642	161.096	土器	2373	-146870.665	4987.560	161.512	石器	2722	-147084.504	4974.964	161.514	石器
2172	-146858.822	4977.292	161.086	土器	2374	-146867.631	4990.055	161.372	土器	2732	-147086.770	4973.932	161.489	土器
2173	-146858.598	4977.597	161.055	土器	2375	-146870.873	4991.173	161.473	土器	2750	-147096.022	4972.300	161.567	土器
2174	-146858.907	4977.694	161.105	土器	2388	-146877.678	4997.457	161.332	土器	2757	-147050.947	4974.955	161.450	石器
2175	-146858.940	4977.784	161.104	土器	2389	-146875.374	4998.654	161.347	土器	2760	-147017.974	4986.666	161.187	石器
2176	-146858.882	4977.896	161.098	土器	2392	-146872.455	4999.230	161.281	土器	2765	-147085.081	4971.076	161.566	土器
2177	-146858.713	4977.790	161.099	土器	2393	-146872.466	4999.151	161.294	土器	2768	-147084.676	4971.464	161.554	土器
2178	-146858.149	4979.229	161.068	土器	2398	-146874.353	5001.380	161.306	土器	2771	-147084.504	4972.163	161.552	土器
2179	-146858.317	4979.396	161.074	土器	2399	-146874.075	5001.499	161.302	土器	2785	-147083.690	4972.663	161.559	土器
2180	-146858.322	4979.508	161.068	土器	2402-2	-146871.211	5001.315	161.358	土器	2789	-147058.604	4978.380	161.530	石器
2181	-146856.691	4979.900	161.077	土器	2404	-146852.801	4994.519	161.152	土器	2795	-147062.671	4990.360	161.525	土器
2182	-146856.865	4979.959	161.072	土器	2405	-146852.816	4994.601	161.153	土器	2829	-147117.253	4979.704	161.648	石器
2183	-146856.860	4980.037	161.078	土器	2408	-146852.857	4994.716	161.173	土器	2840	-147056.382	4992.784	161.146	石器
2184	-146856.949	4980.211	161.074	土器	2434	-146867.810	4980.245	161.016	土器	2842	-147037.639	5005.744	161.143	土器
2186	-146857.183	4980.486	161.104	土器	2437	-146868.099	5004.346	161.294	土器	2843	-147037.734	5005.680	161.104	土器
2187	-146858.292	4980.529	161.037	土器	2439	-146869.866	5007.403	161.151	石器	2844	-147037.936	5005.543	161.105	土器
2188	-146858.209	4980.742	161.046	土器	2440	-146871.515	5005.049	161.175	石器	2845	-147038.035	5005.453	161.043	土器
2189	-146857.885	4980.885	161.009	土器	2449	-146873.784	5011.221	161.144	土器	2849	-147037.620	5004.826	161.177	土器
2190	-146857.951	4980.945	161.016	土器	2451	-146874.140	5011.207	161.207	土器	2850	-147037.665	5004.782	161.183	土器
2191	-146857.865	4980.969	161.017	土器	2458	-146876.790	4990.271	161.385	石器	2851	-147037.953	5004.767	161.126	土器
2192	-146857.919	4980.991	161.020	土器	2462	-146856.354	4978.657	161.466	石器	2852	-147037.907	5004.674	161.131	土器
2193	-146857.943	4981.086	161.026	土器	2475	-146861.646	4978.461	161.413	土器	2853	-147037.825	5004.575	161.123	土器
2194	-146858.063	4981.113	161.029	土器	2478	-146857.004	5004.421	161.195	土器	2854	-147037.697	5003.901	161.174	土器
2195	-146858.135	4981.354	161.088	土器	2479	-146855.879	5005.239	161.187	土器	2856	-147038.427	5003.434	161.168	土器
2196	-146858.632	4977.616	161.058	土器	2491	-146880.111	5005.729	161.206	石器	2899	-147043.773	4977.923	161.498	石器
2197	-146859.067	4980.941	161.055	土器	2497	-146882.507	5003.240	161.328	石器	2943	-147061.368	4989.987	161.454	石器
2198	-146859.186	4980.987	161.055	土器	2500	-146882.076	5007.152	161.282	土器	2951	-147065.167	4997.981	161.397	土器
2199	-146859.132	4980.971	161.053	土器	2503	-146890.655	5011.246	161.371	土器	2958	-147065.232	5002.818	161.467	土器
2202	-146851.985	4998.820	160.735	石器	2504	-146890.639	5010.907	161.264	土器	2964	-147060.413	5005.422	161.200	土器
2206	-146850.280	4982.417	161.011	石器	2517	-146871.245	4999.723	160.765	土器	2993	-147046.437	4994.697	160.984	土器
2213	-146867.845	4996.589	160.773	石器	2518	-146871.271	4999.782	160.789	土器	2995	-147046.065	4994.771	160.992	土器
2214	-146876.688	4988.478	161.297	石器	2519	-146871.387	4999.805	160.825	土器	2996	-147045.812	4994.800	160.986	土器
2215	-146868.118	4981.028	161.054	土器	2522	-146871.237	4999.911	160.803	土器	2999	-147037.755	5006.166	161.153	土器
2216	-146882.168	5011.232	160.792	石器	2527	-146871.442	4999.874	160.861	土器	3007	-147048.038	5004.108	160.952	土器
2217	-146887.207	4979.090	161.334	石器	2530	-146864.048	4994.545	161.527	土器	3011	-147057.756	4995.063	161.407	土器
2218	-146884.909	4988.430	161.329	石器	2532	-146869.355	4994.541	160.829	土器	3020	-147070.092	4986.287	161.432	土器
2229	-146908.899	4993.533	161.690	土器	2533	-146872.048	4995.193	160.768	土器	3021	-147069.965	4986.238	161.445	土器
2230	-146908.970	4993.463	161.672	土器	2556	-146884.574	5013.719	160.801	土器	3066	-147085.259	4978.472	161.570	土器
2232	-146909.035	4993.428	161.672	土器	2566	-146857.763	4981.112	161.036	土器	3069	-147085.214	4979.285	161.530	土器
2233	-146909.067	4993.401	161.656	土器	2567	-146857.803	4981.060	161.013	土器	3070	-147084.998	4979.396	161.519	土器
2234	-146908.957	4993.652	161.679	土器	2569	-146857.797	4981.159	161.047	土器	3092	-147098.716	4976.579	161.602	土器
2237	-146909.908	4996.975	161.724	土器	2570	-146857.914	4981.142	161.013	土器	3112	-147093.788	4978.942	161.505	土器
2240	-146908.492	4996.018	161.616	土器	2571	-146857.920	4981.118	161.013	土器	3114	-147092.636	4979.124	161.493	土器
2247	-146903.536	4997.935	161.545	石器	2572	-146858.020	4981.200	161.040	土器	3131	-147089.485	4981.896	161.446	土器
2254	-146880.504	5006.835	161.405	土器	2574	-146857.744	4981.090	161.050	土器	3141	-147087.942	4982.998	161.515	石器
2255	-146880.667	5006.977	161.413	土器	2575	-146857.846	4981.105	161.030	土器	3142	-147087.937	4983.125	161.458	土器
2256	-146879.574	5011.005	161.203	土器	2576	-146857.832	4981.163	161.034	土器	3194	-147115.342	4979.259	161.640	石器
2258	-146878.163	5014.380	161.243	土器	2577	-146857.934	4981.157	161.036	土器	3211	-147105.709	4983.398	161.567	土器
2259	-146878.527	5015.211	161.309	土器	2578	-146857.942	4981.140	161.021	土器	3216	-147115.872	5007.327	161.563	土器
2262	-146887.116	5011.057	161.317	土器	2580	-146885.838	4979.574	161.760	土器	3218	-147045.577	4999.535	160.940	石器
2263	-146887.336	5011.027	161.307	土器	2581	-146885.839	4979.590	161.760	土器	3222	-147087.702	4983.048	161.486	土器
2266	-146890.014	5003.039	161.389	土器	2586	-146852.264	4979.164	160.843	土器	3223	-147087.791	4983.103	161.444	土器
2277	-146851.004	4980.179	160.821	鉄器	2591	-146866.934	5002.355	159.150	石器	3226	-147086.961	4981.005	160.576	石器
2288	-146846.562	4991.865	161.104	土器	2592	-146865.578	4988.024	159.923	土器	3230	-147078.910	4987.692	159.813	石器
2291	-146846.201	4993.339	161.179	土器	2599	-146886.286	4978.713							

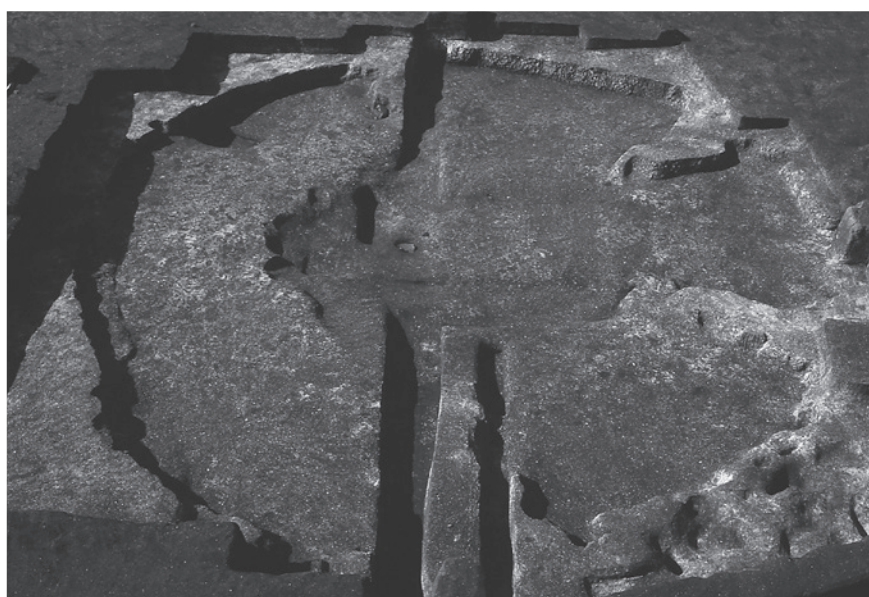
写真図版



1 旧石器剥片出土状況



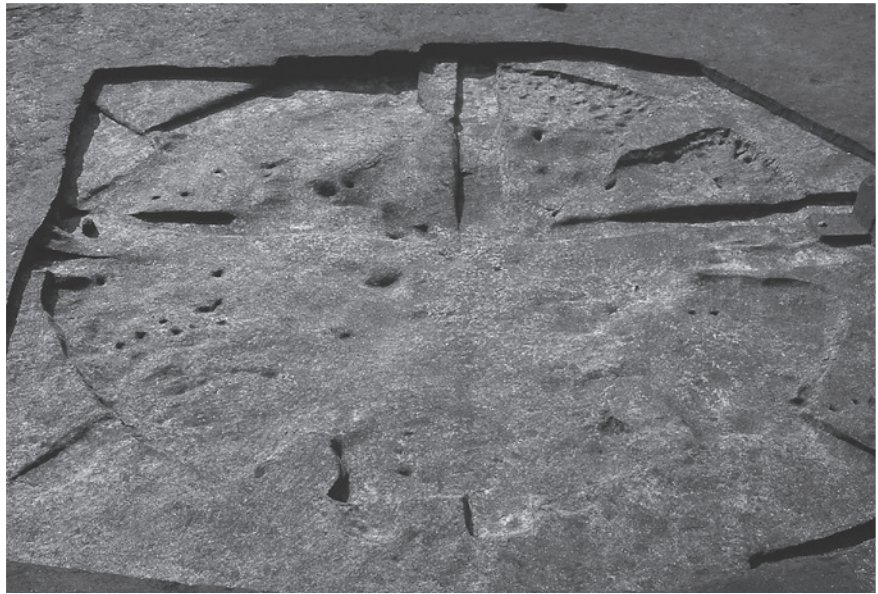
2 竪穴建物跡1検出状況
(平面形確定段階)



3 竪穴建物跡1
床面検出状況

写真図版二

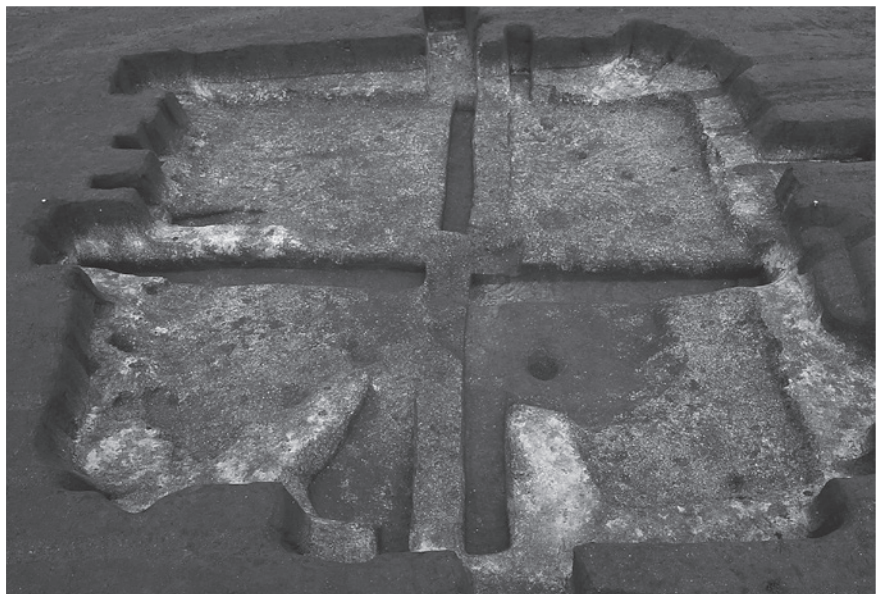
1 竪穴建物跡 2
床面検出状況



2 竪穴建物跡 3
床面検出状況



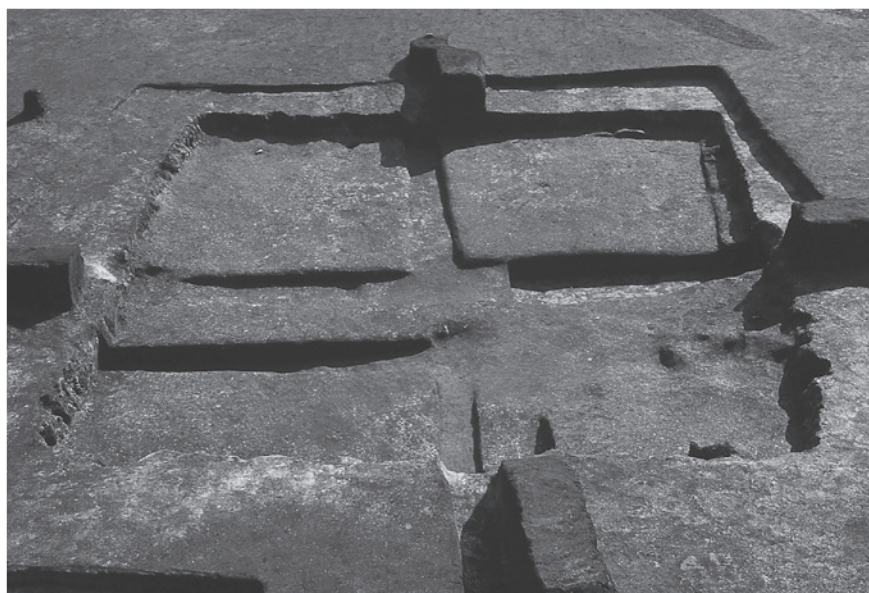
3 竪穴建物跡 4
床面検出状況



1 竪穴建物跡 5
床面検出状況



2 竪穴建物跡 6
床面検出状況



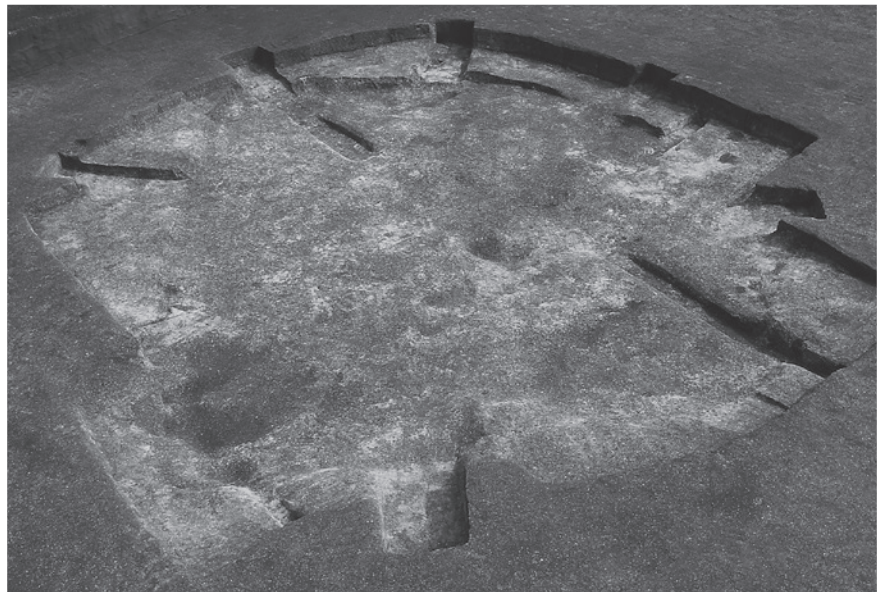
3 竪穴建物跡 7
床面検出状況



1 竪穴建物跡 8
床面検出状況



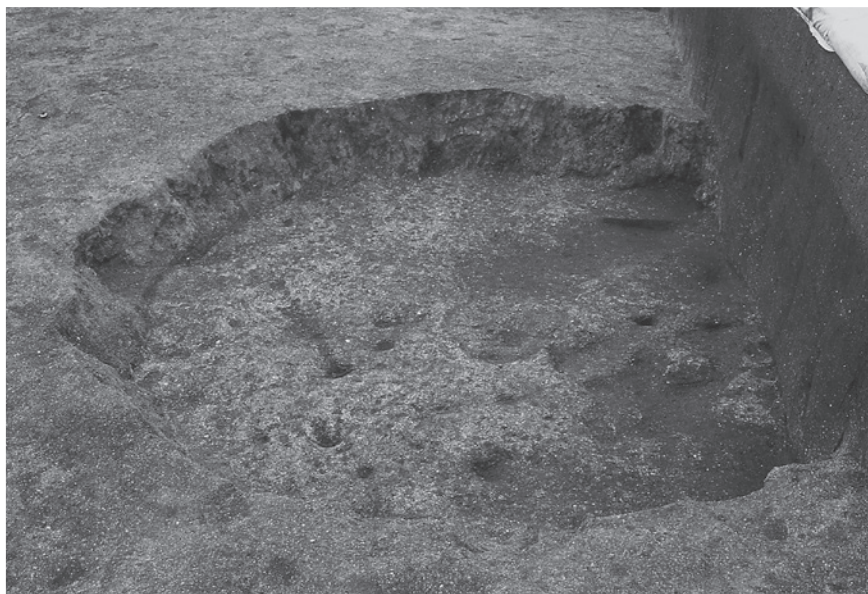
2 竪穴建物跡 8
床面検出状況



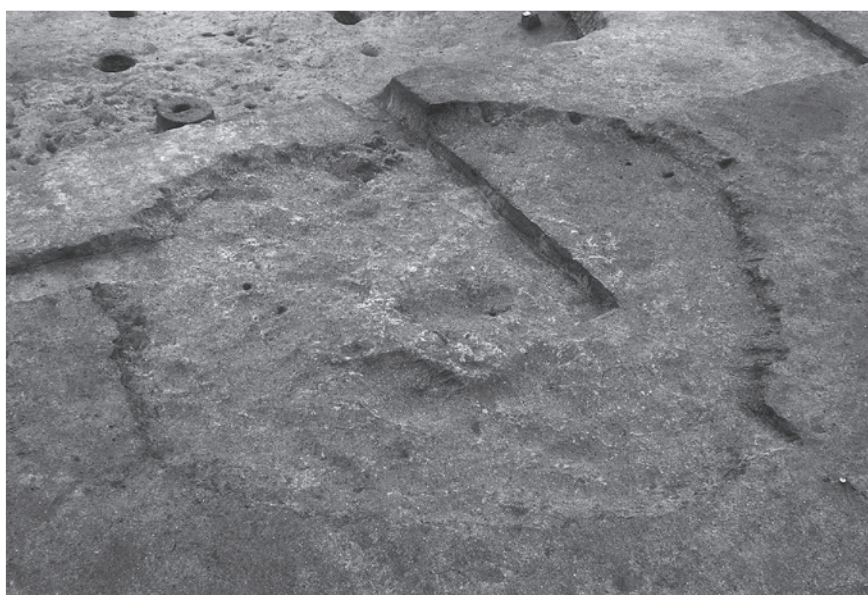
3 竪穴建物跡 10
床面検出状況



1 竪穴状遺構 1
床面検出状況

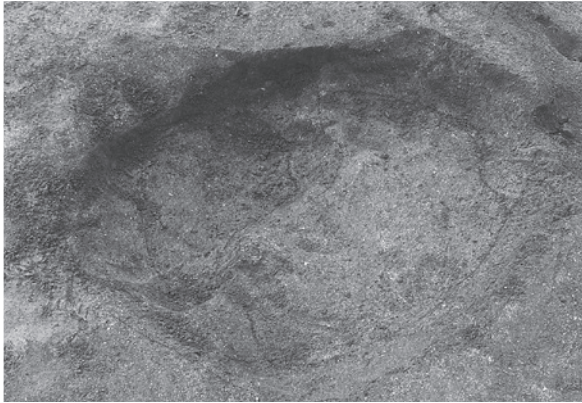


2 竪穴状遺構 2
床面検出状況



3 土坑 2 内壺出土状況
(写真奥は竪穴建物跡 10)





1 土坑 1 完掘状況



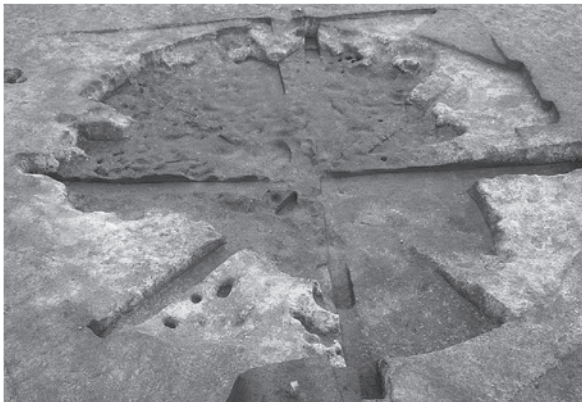
2 竪穴建物跡 1 突出壁内土器出土状況



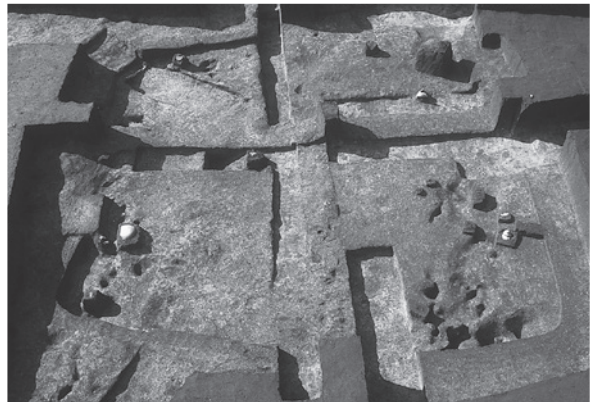
3 竪穴建物跡 1 ピット上礫出土状況



4 竪穴建物跡 1 完掘状況



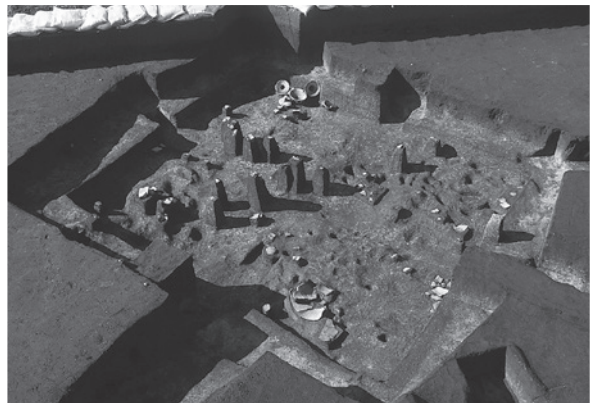
5 竪穴建物跡 2 完掘状況



6 竪穴建物跡 3 遺物出土状況



7 竪穴建物跡 4 完掘状況



8 竪穴建物跡 5 遺物出土状況



1 竪穴建物跡 5 西北部遺物出土状況



2 竪穴建物跡 5 完掘状況



3 竪穴建物跡 6 東側灰状物質堆積状況



4 竪穴建物跡 6 遺物出土状況



5 竪穴建物跡 6 灰色粘土検出状況



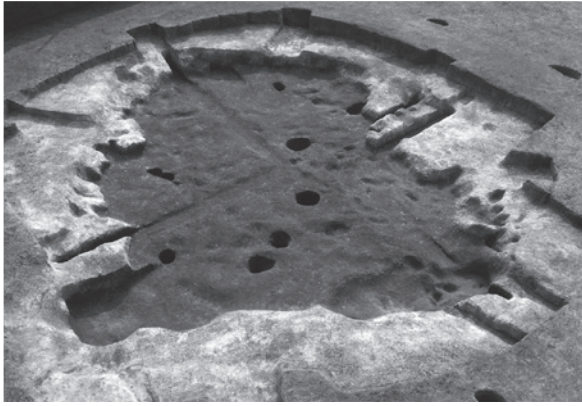
6 竪穴建物跡 6 完掘状況



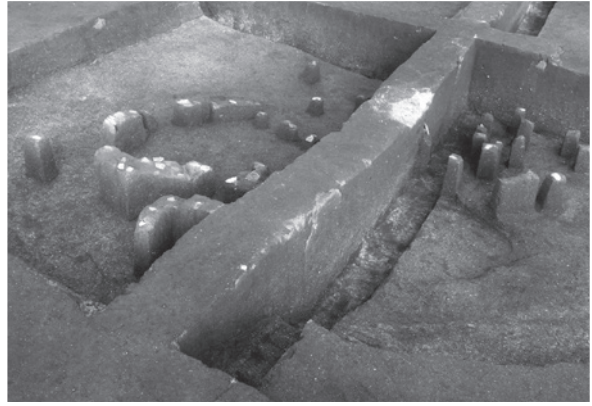
7 竪穴建物跡 8 遺物出土状況



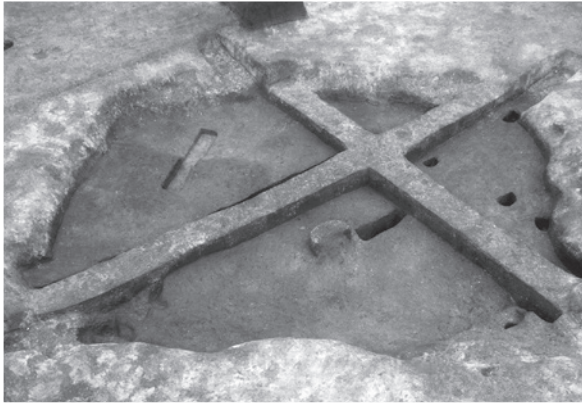
8 竪穴建物跡 8 完掘状況



1 豎穴建物跡 9 完掘状況



2 豎穴建物跡 10 埋土中遺物出土状況



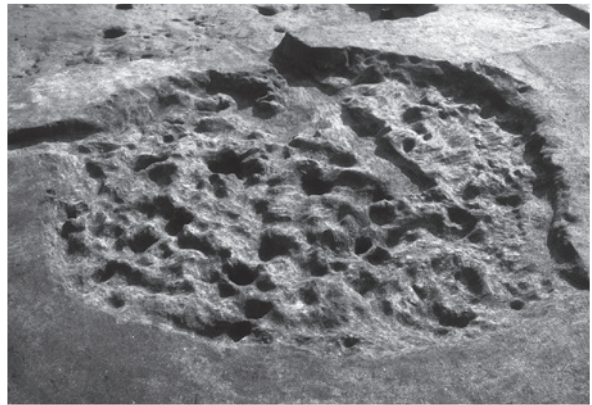
3 豎穴建物跡 10 完掘状況



4 豎穴状遺構 1 遺物出土状況



5 豎穴状遺構 1 完掘状況



6 豎穴状遺構 2 完掘状況



7 土坑 3 内壺 (190) 出土状況

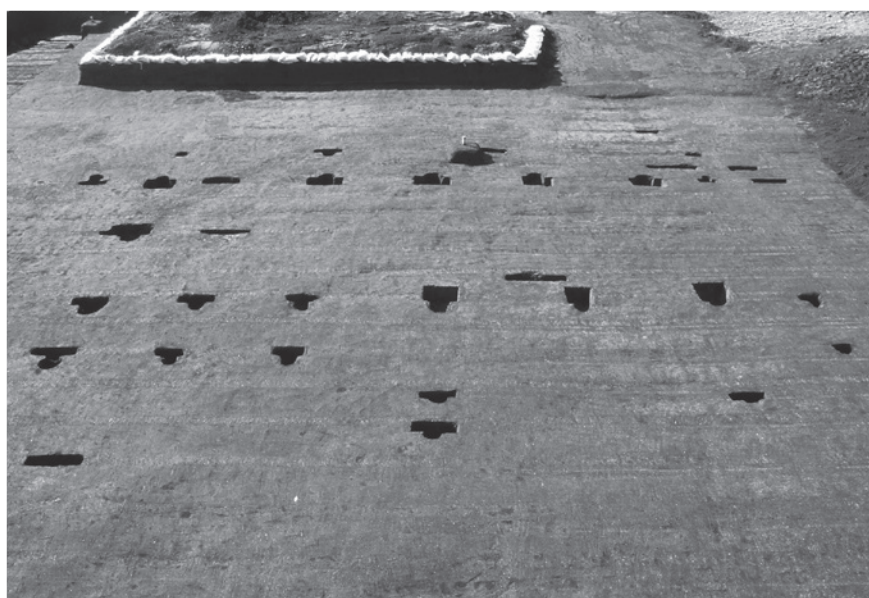


8 土坑 3 完掘状況

1 遺跡北部
桜島3テフラ検出状況



2 掘立柱建物跡1
柱穴完掘状況



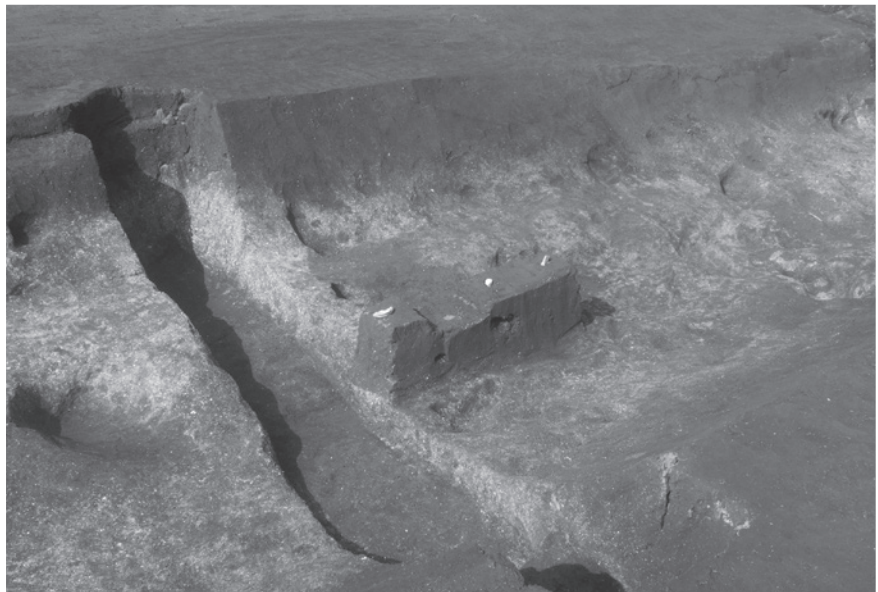
3 畦状遺構1
北端部掘削状況



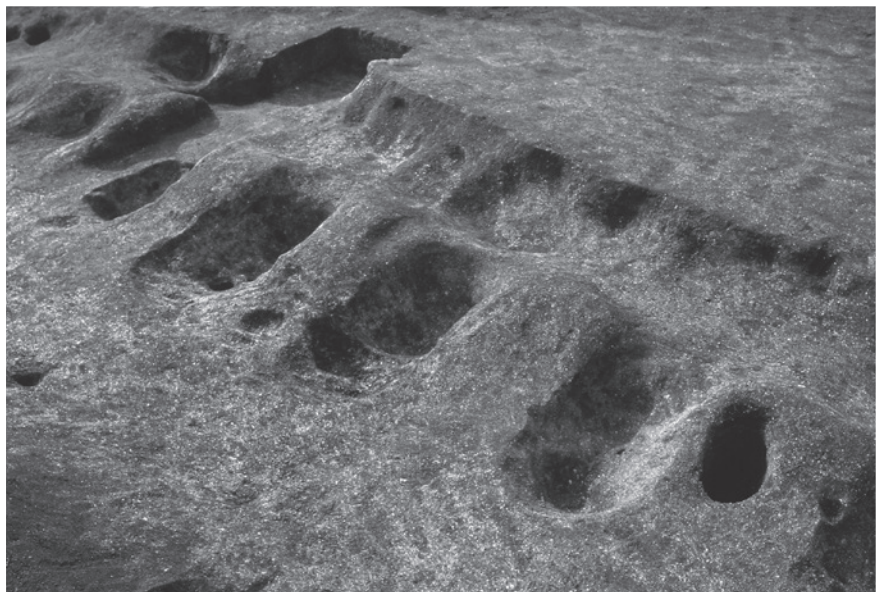
1 道路状遺構 1・
畦状遺構 2 掘削状況

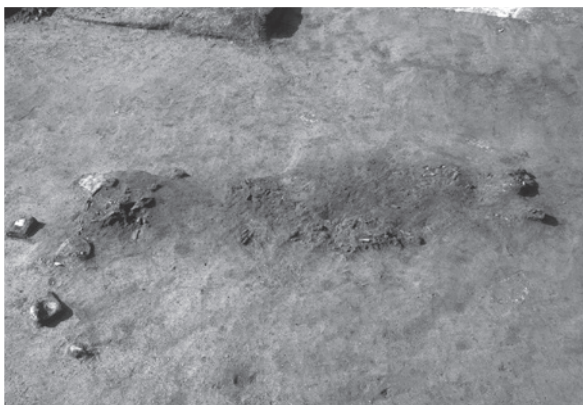


2 道路状遺構 1 内
白磁 (491) 出土状況



3 道路状遺構 1 底面
「波板状凹凸面」
完掘状況

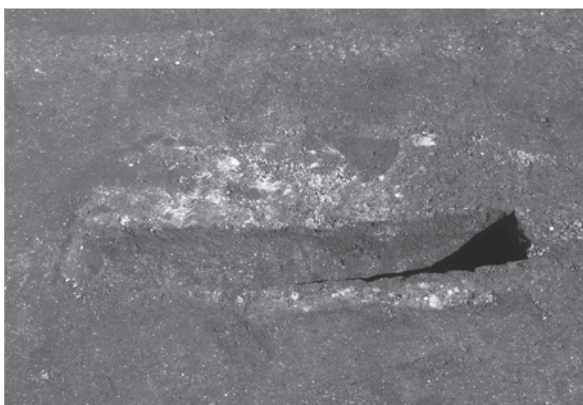




1 炭集中土坑検出状況



2 炭集中土坑断面



3 掘立柱建物跡 1 炉跡断面



4 掘立柱建物跡 1 柱穴断面



5 畦状遺構 1 調査風景



6 溝状遺構 5 完掘状況



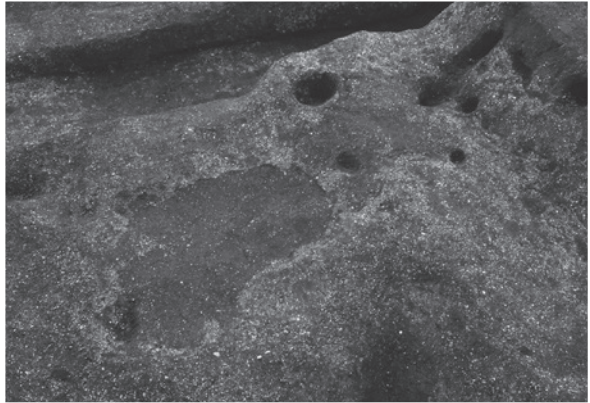
1 小溝列完掘状況



2 道路状遺構 1 北西部の土橋状部掘削状況



3 道路状遺構 1 硬化面検出状況



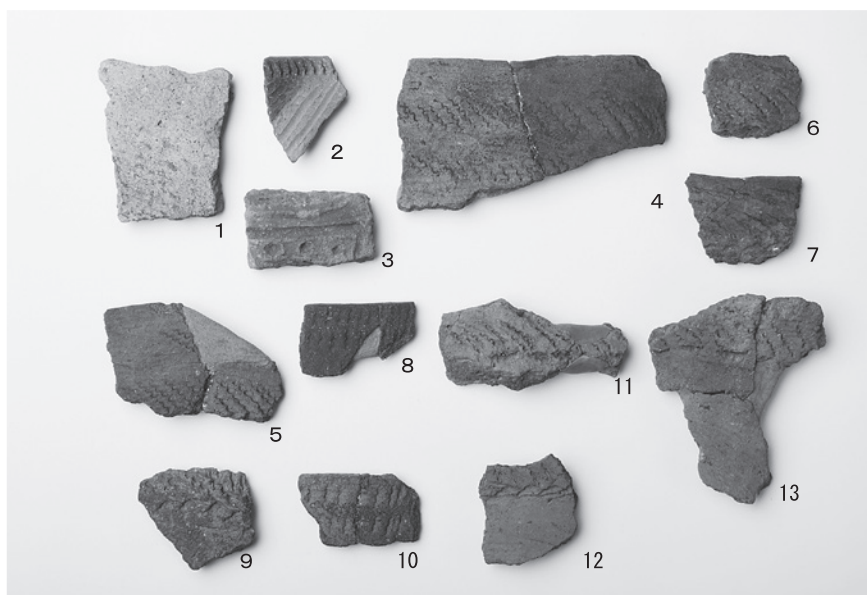
4 「波板状凹凸面」検出状況



5 道路状遺構 1 検出状況



6 道路状遺構 1 完掘状況



1 縄文土器 1

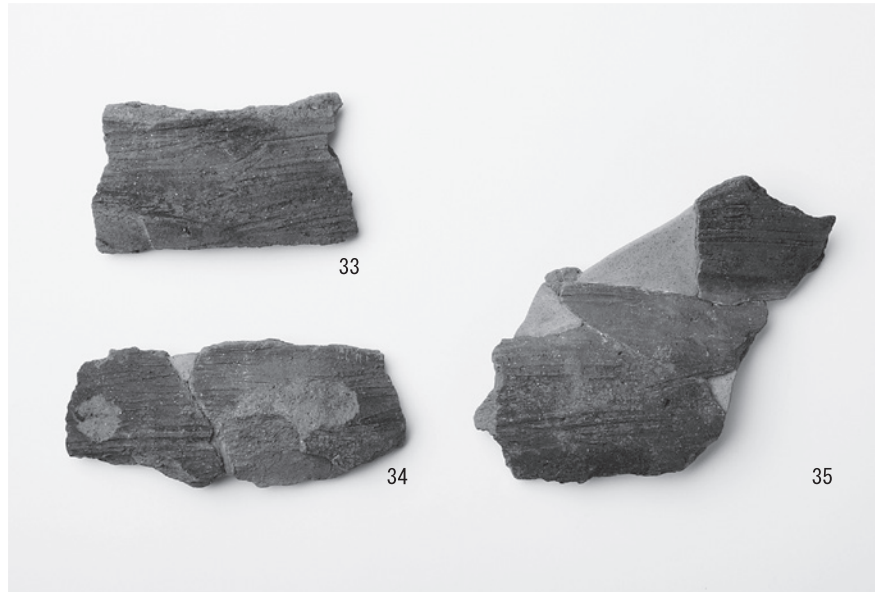


2 縄文土器 2



3 縄文土器 3

1 縄文土器 4

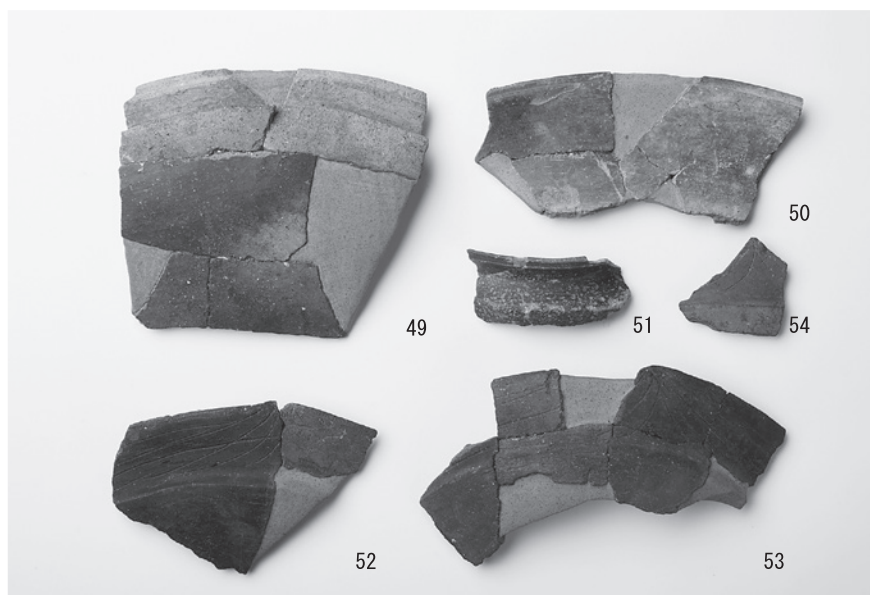


2 縄文土器 5

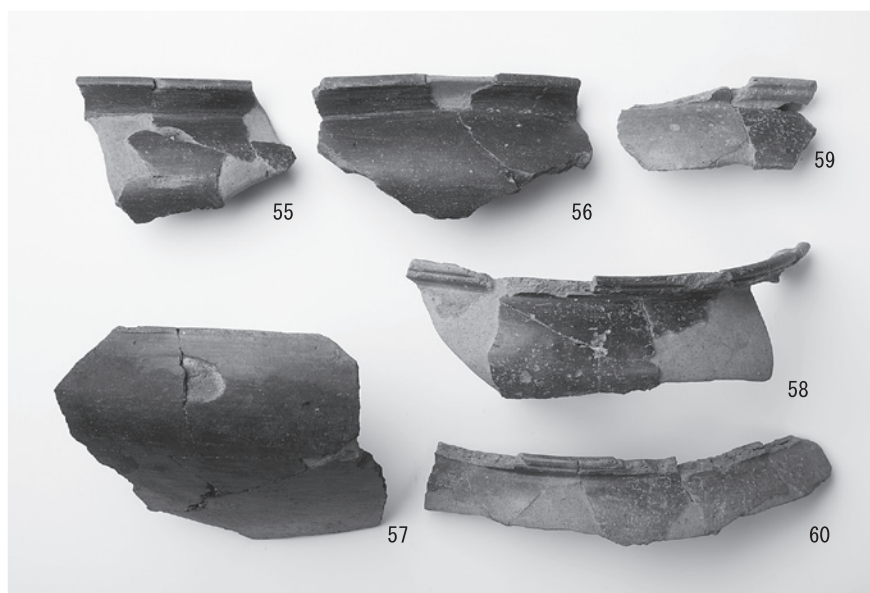


3 縄文土器 6

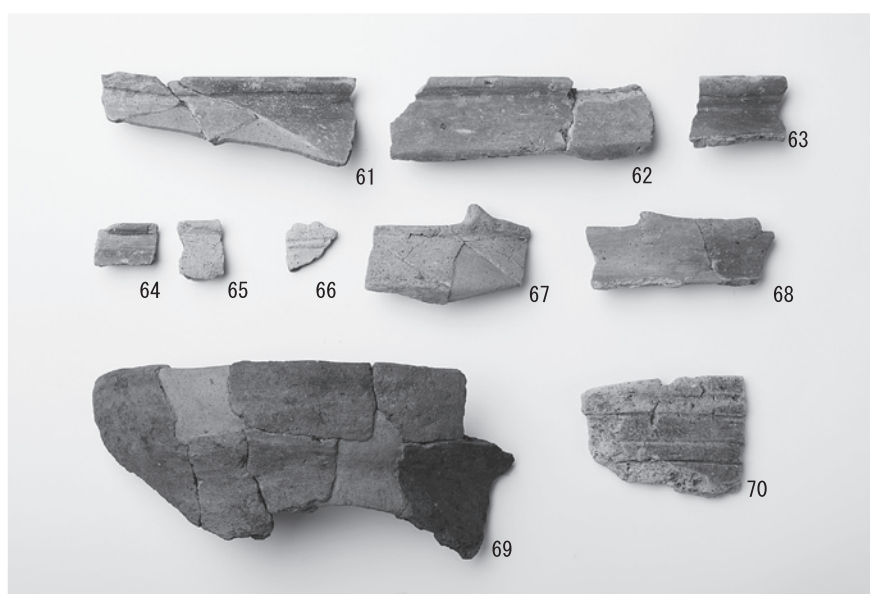




1 縄文土器 7

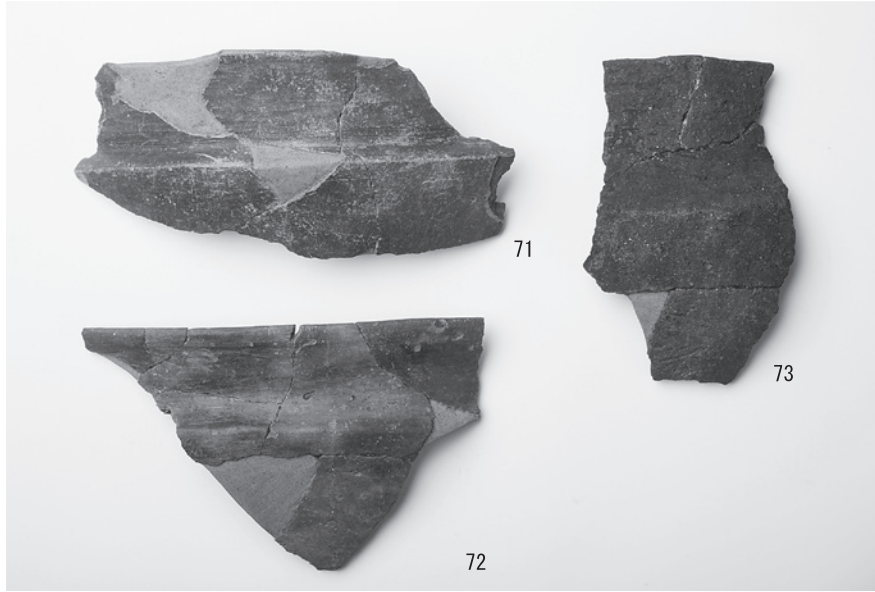


2 縄文土器 8



3 縄文土器 9

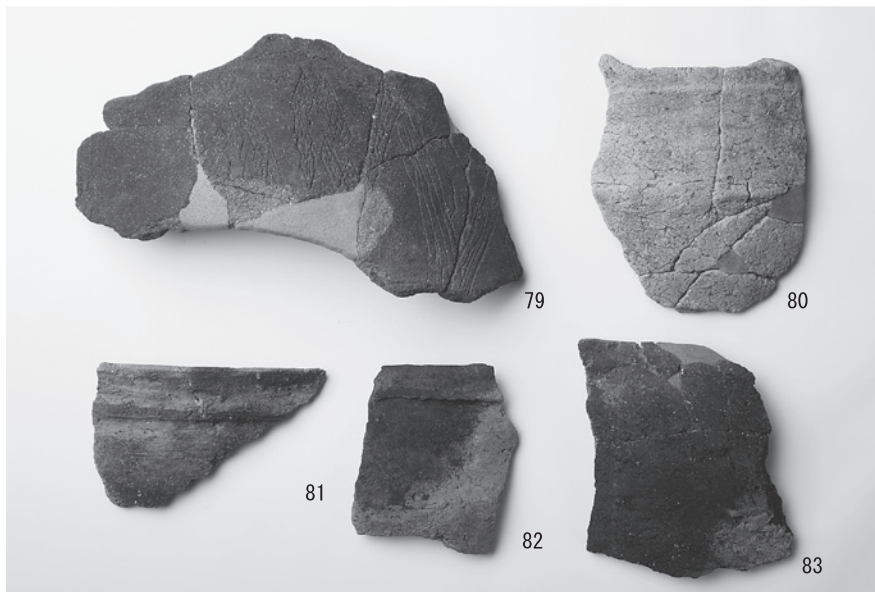
1 縄文土器 10



2 縄文土器 11



3 縄文土器 12

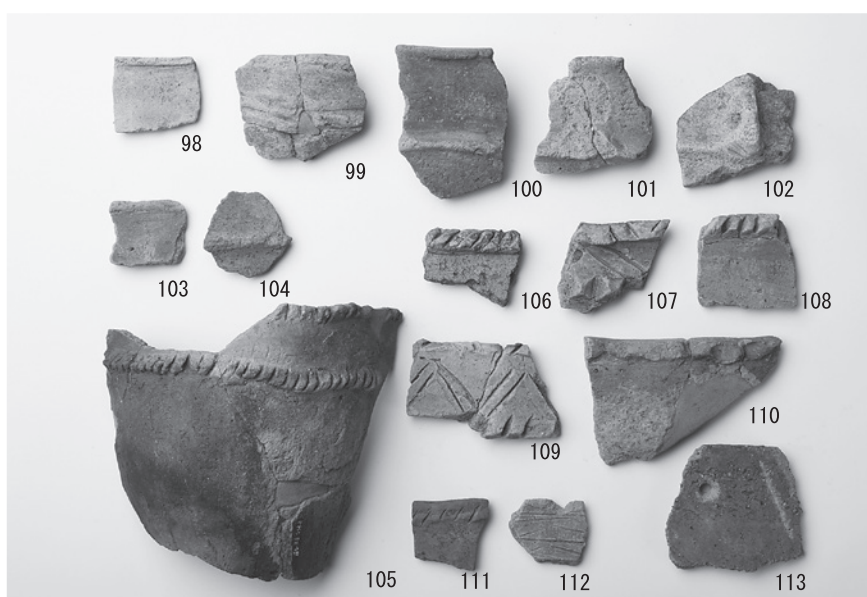




1 縄文土器 13



2 縄文土器 14



3 縄文土器 15

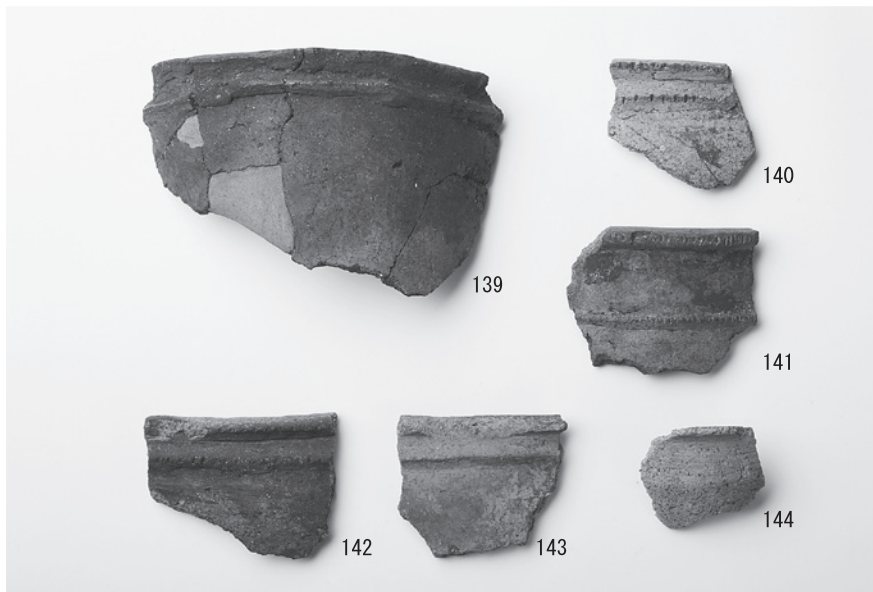
1 弥生土器 1

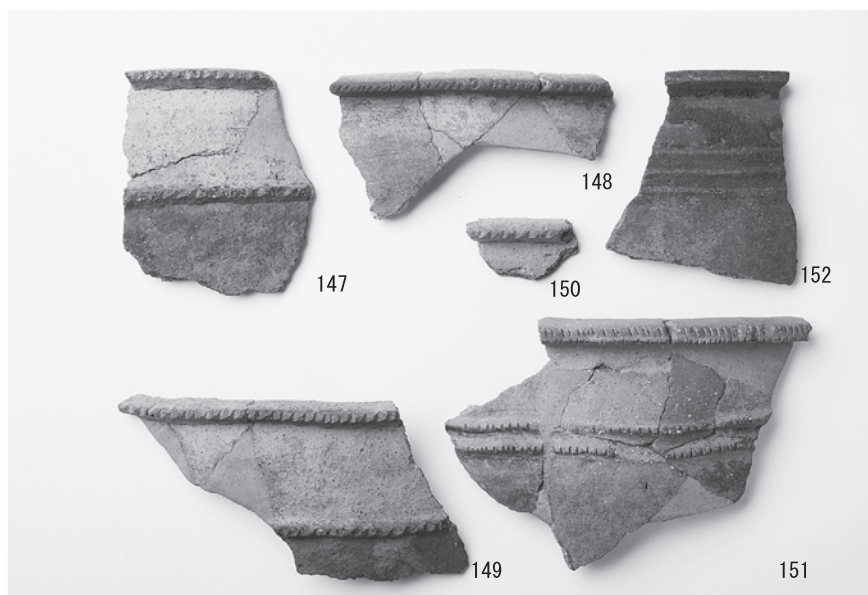


2 弥生土器 2



3 弥生土器 3

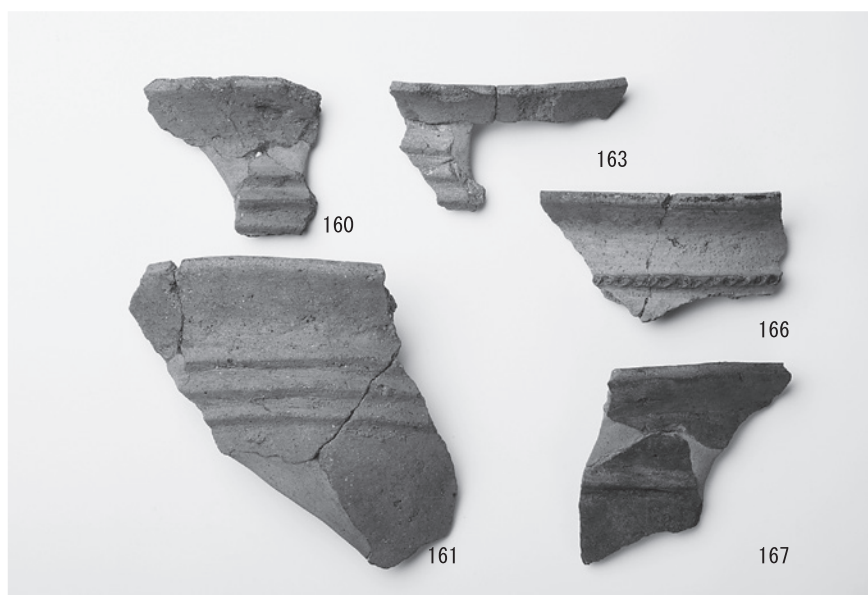




1 弥生土器 4

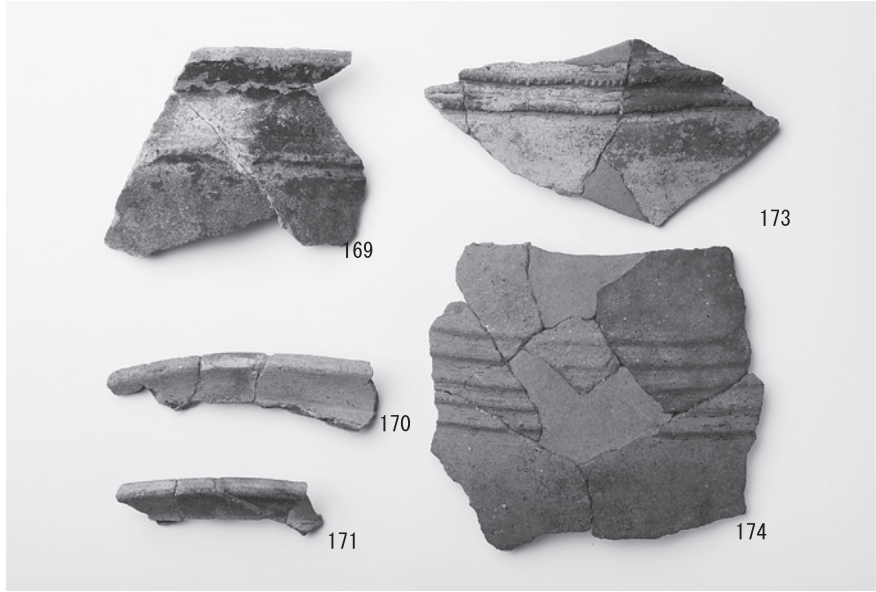


2 弥生土器 5



3 弥生土器 6

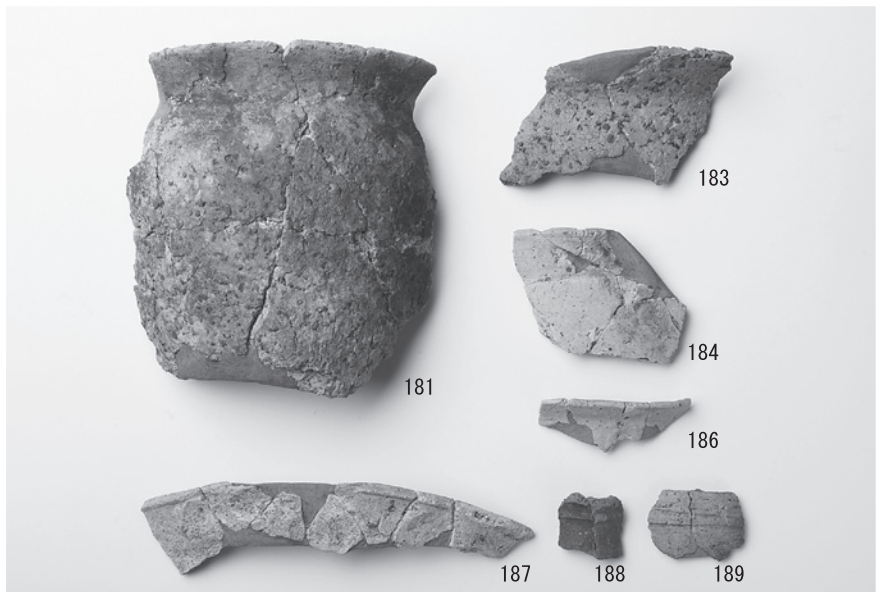
1 弥生土器 7



2 弥生土器 8



3 弥生土器 9













273



295



273



306



281



311



324







368



410



379



412



384



413



385



415



387



418



417



424



419



425



420



426



421



427

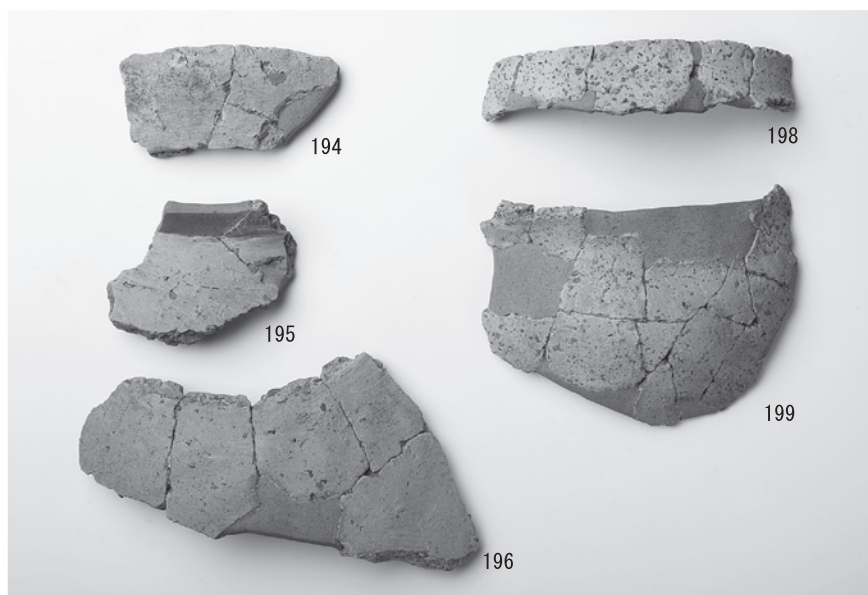


423

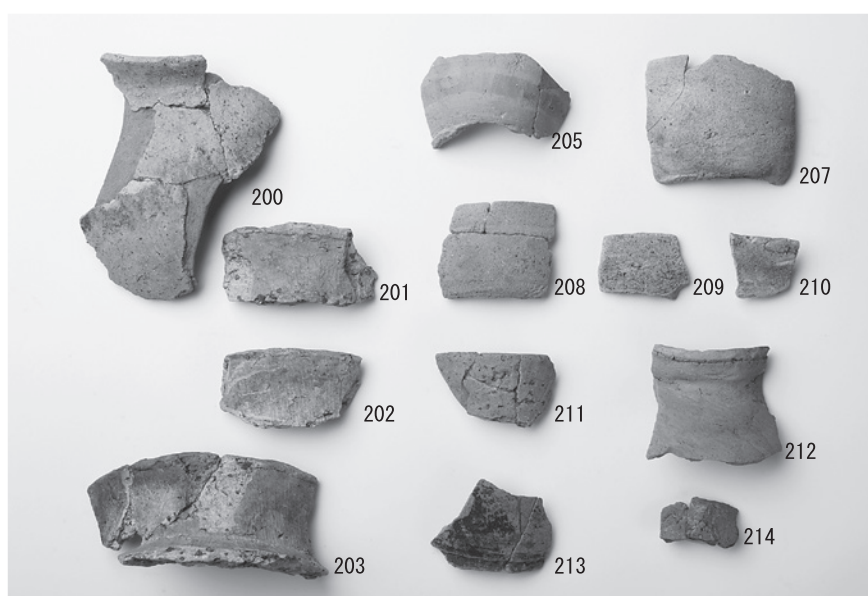


428





1 土師器 10

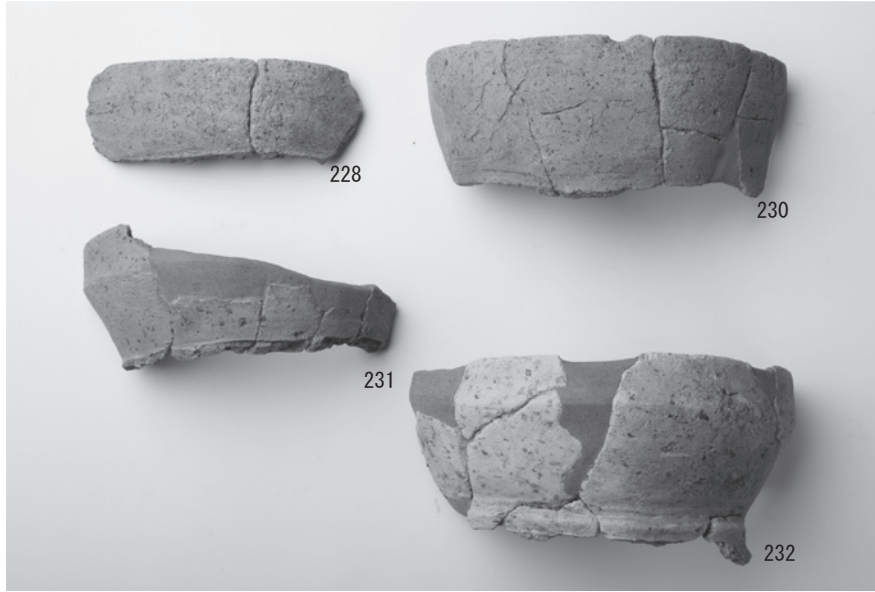


2 土師器 11

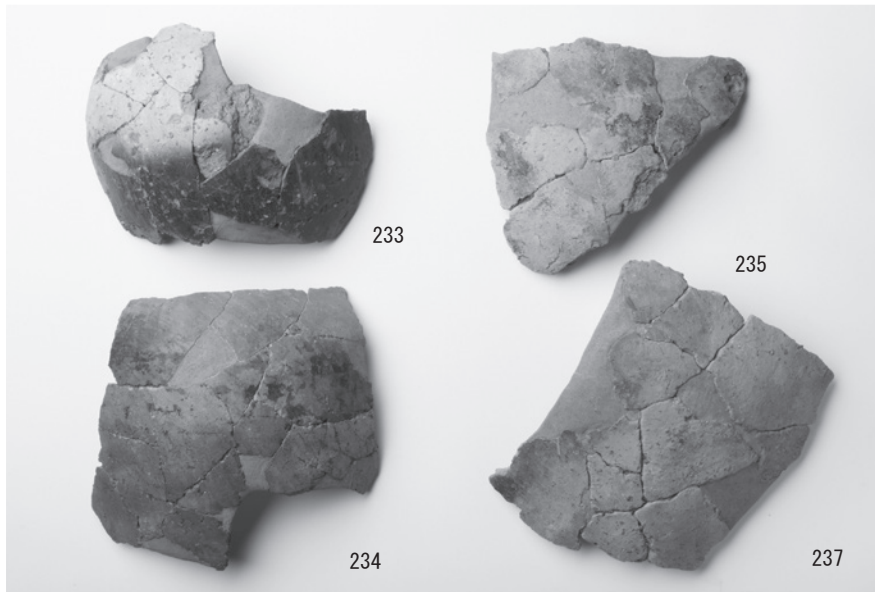


3 土師器 12

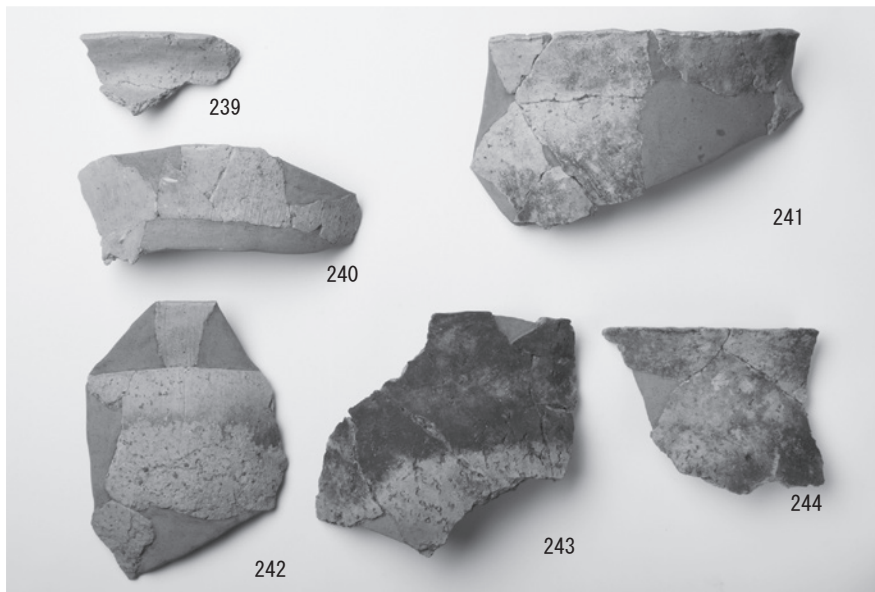
1 土師器13

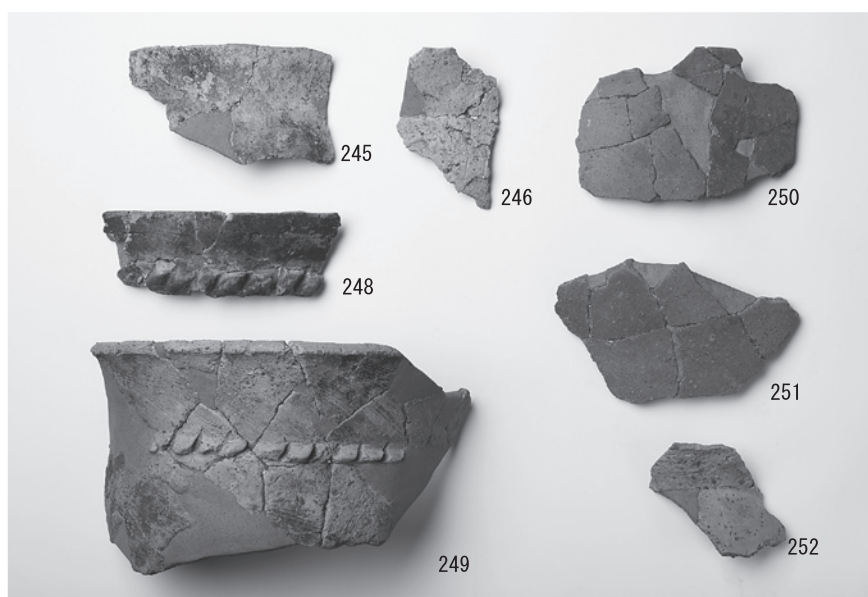


2 土師器14

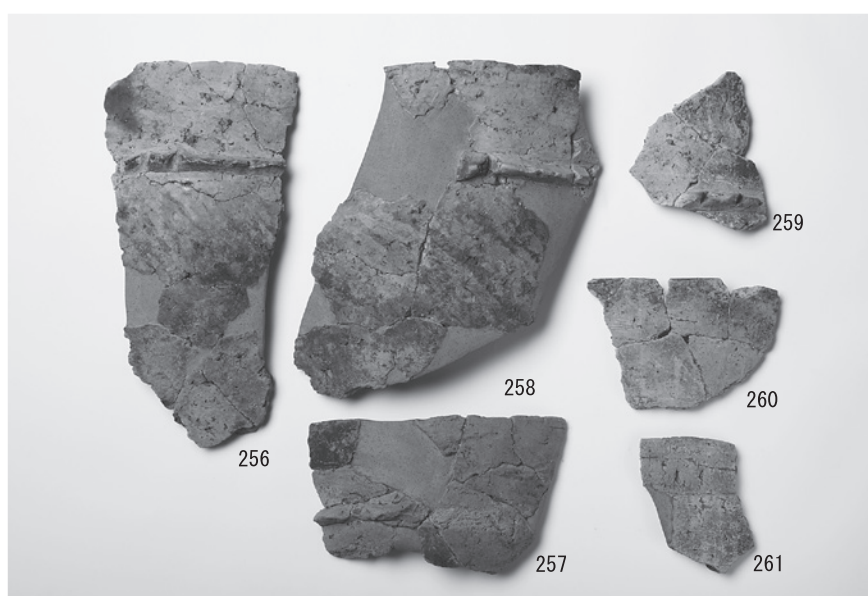


3 土師器15

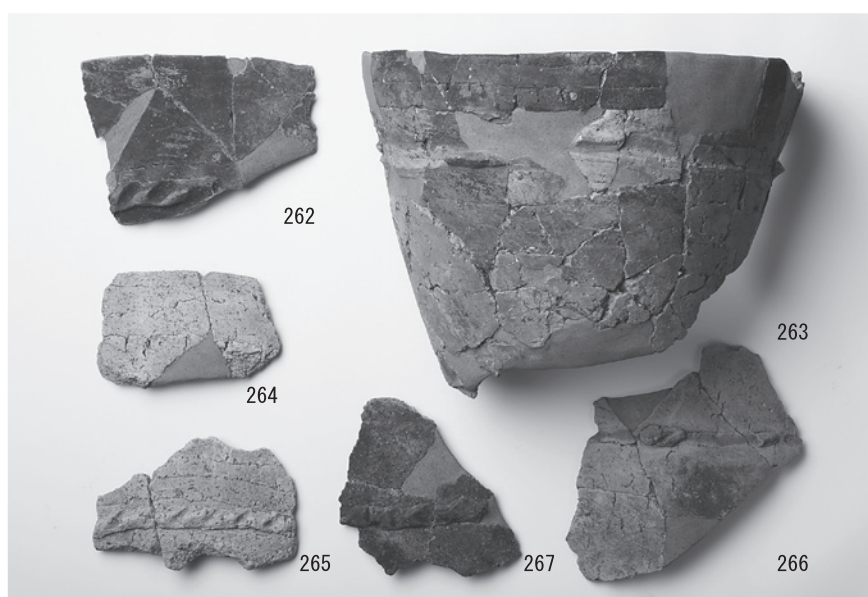




1 土師器 16

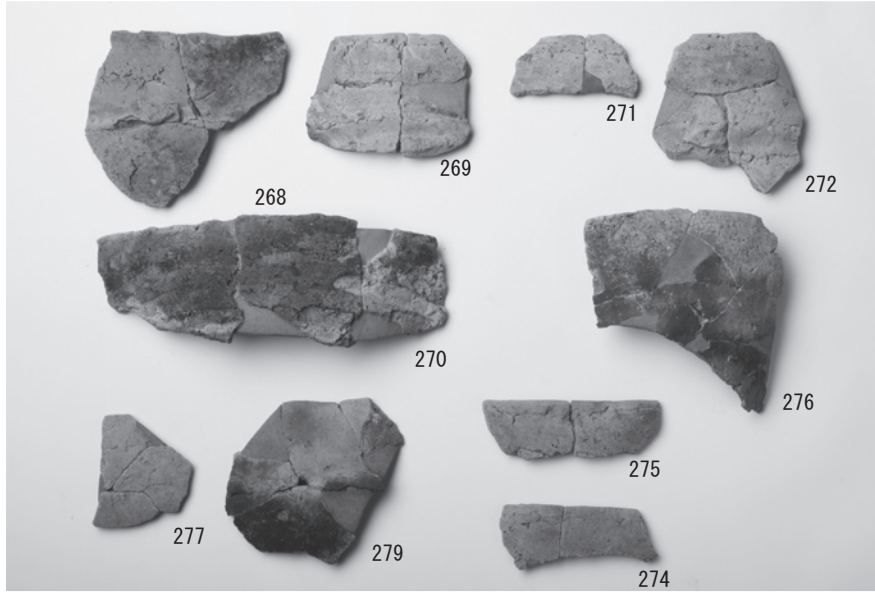


2 土師器 17

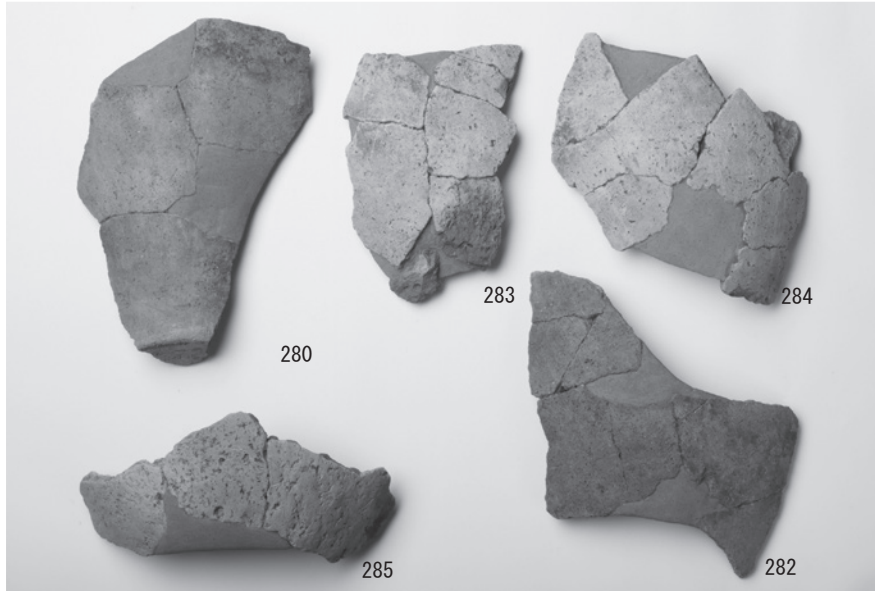


3 土師器 18

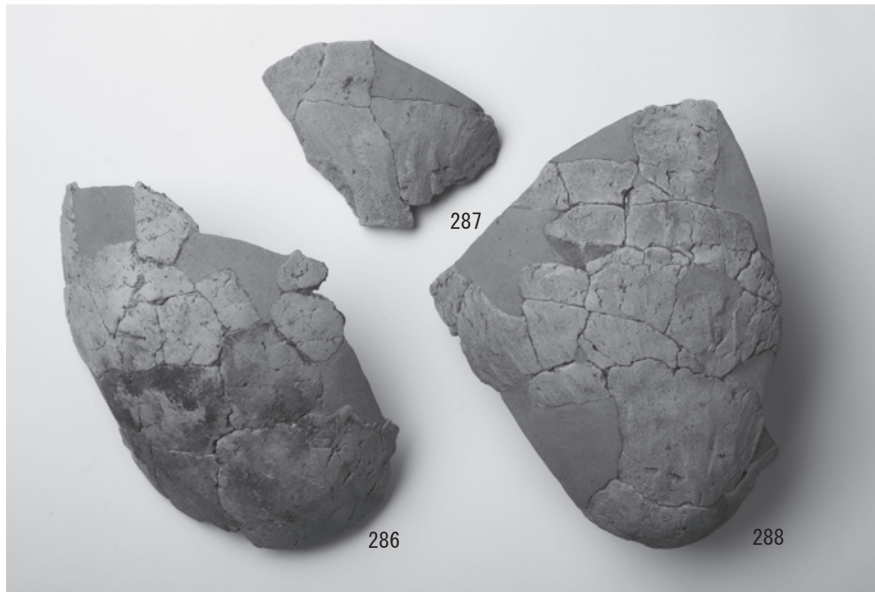
1 土師器19

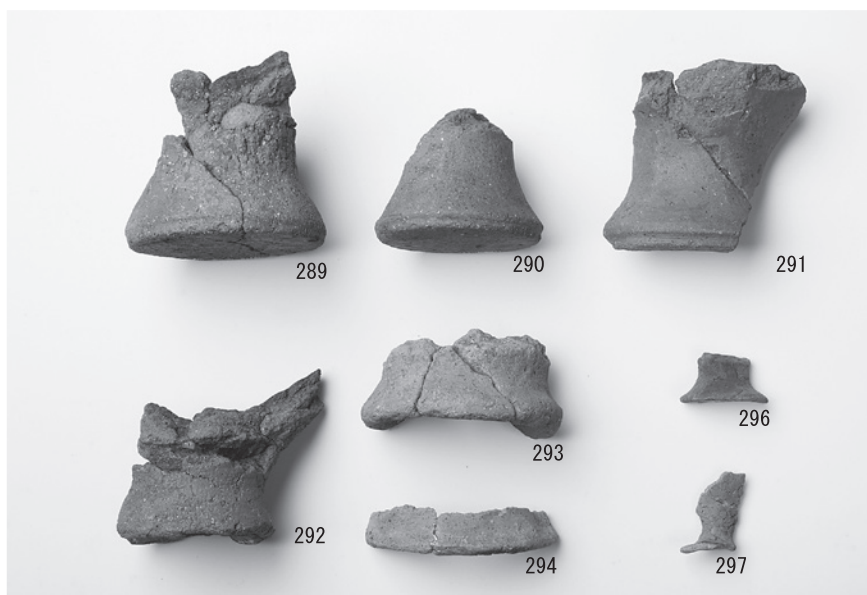


2 土師器20

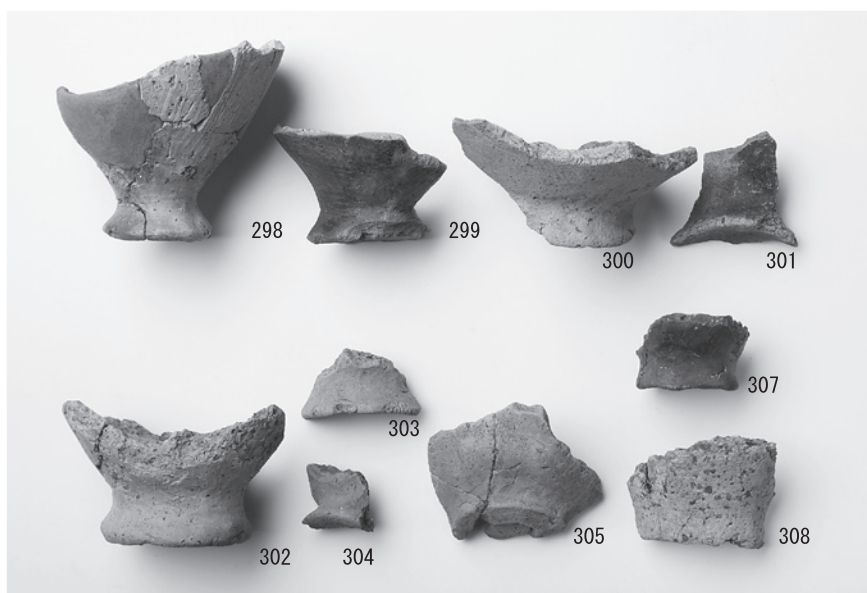


3 土師器21

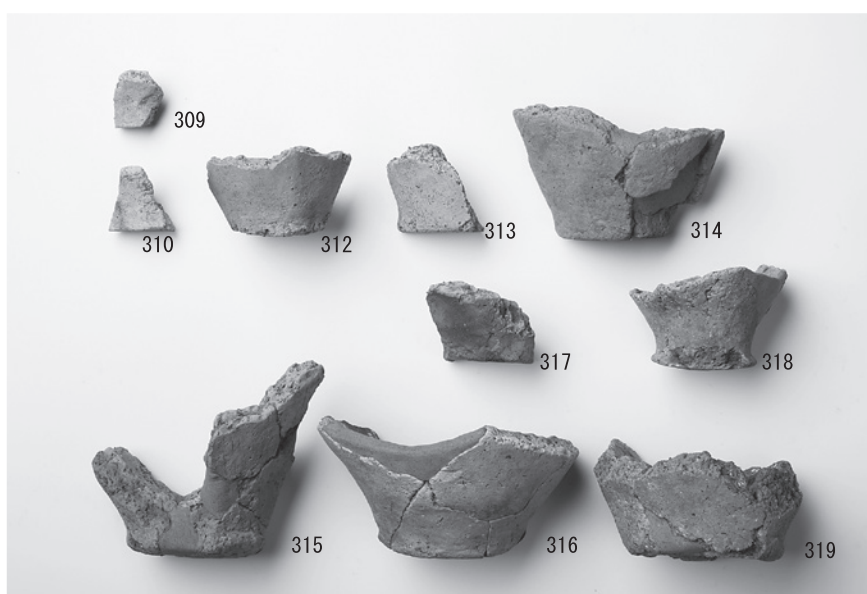




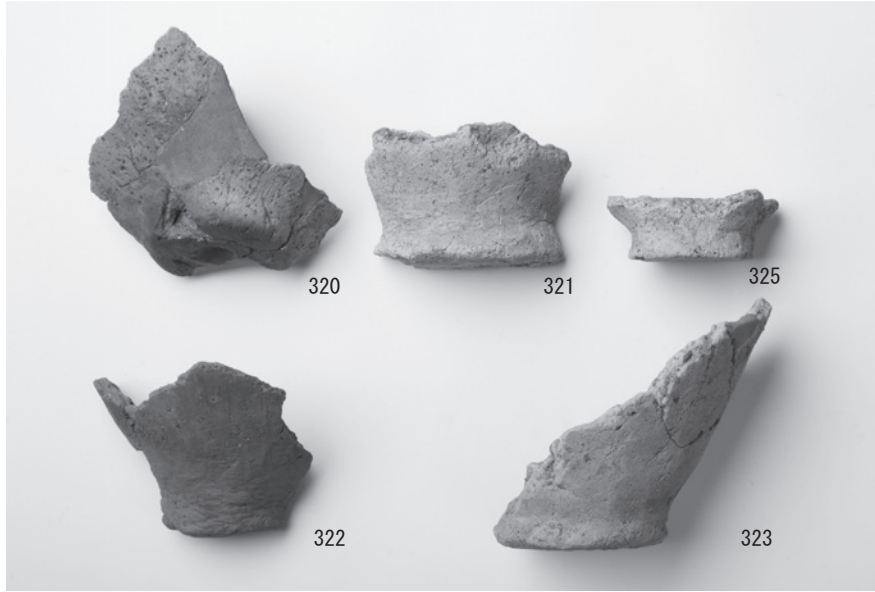
1 弥生土器・土師器底部 1



2 弥生土器・土師器底部 2



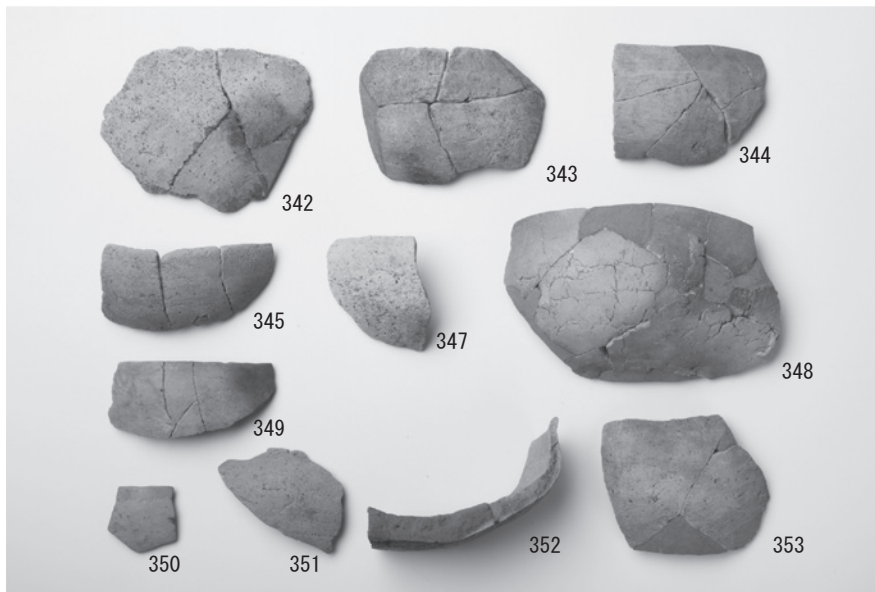
3 弥生土器・土師器底部 3



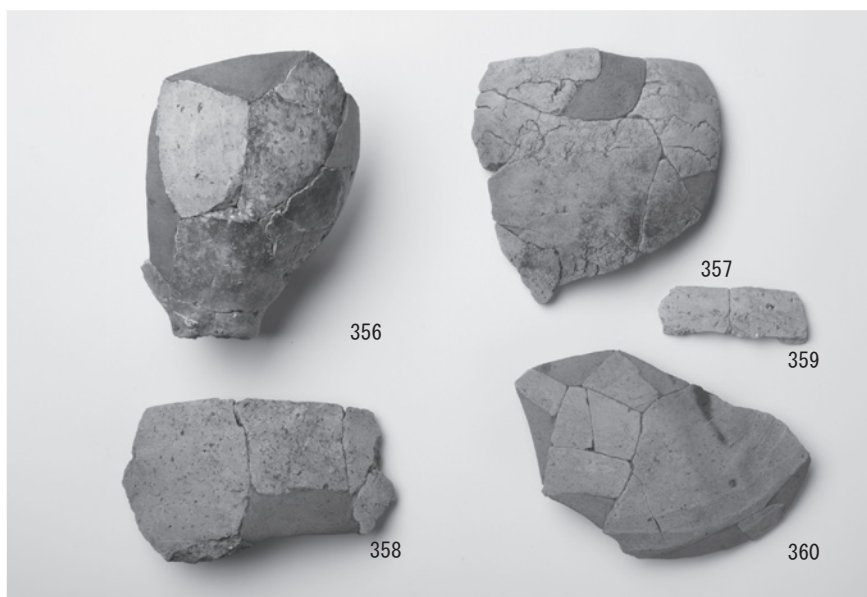
1 弥生土器・土師器底部 4



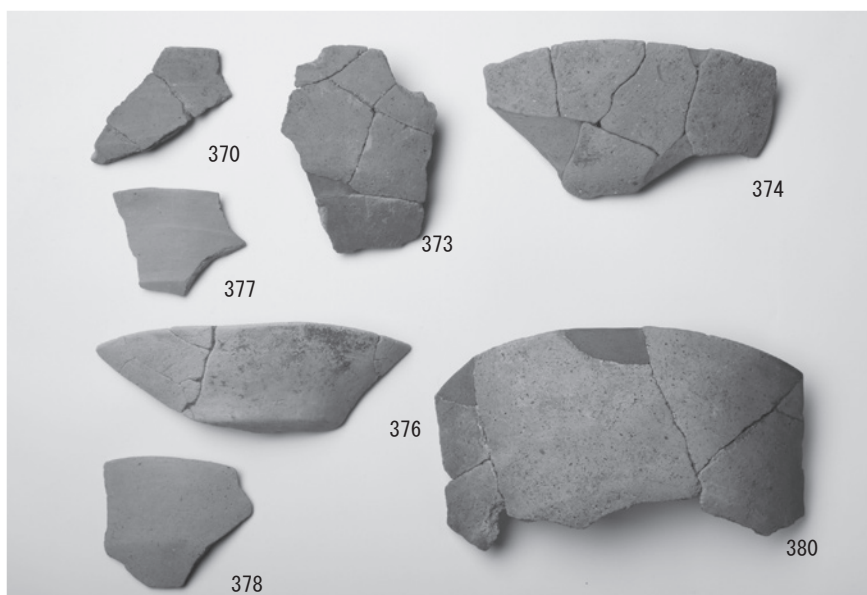
2 弥生土器・土師器底部 5



3 土師器22



1 土師器23

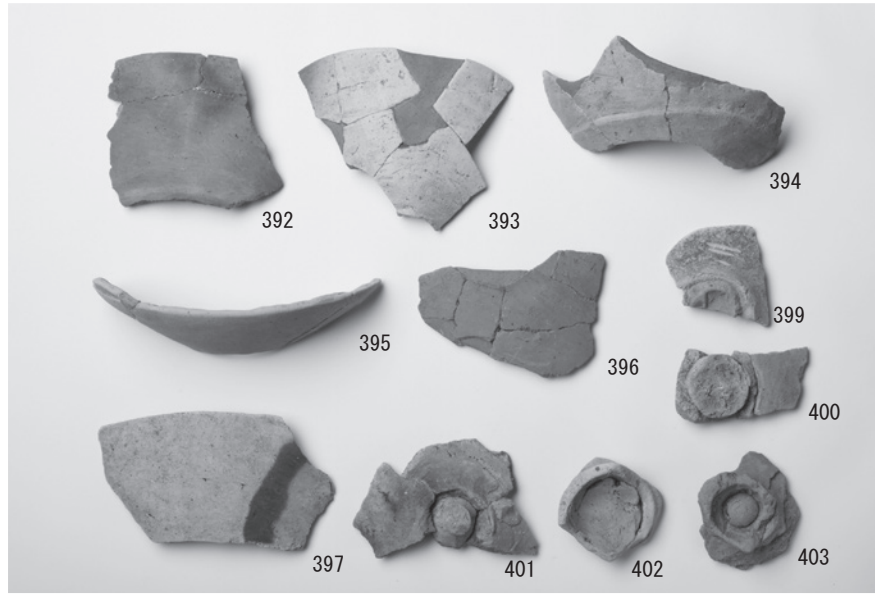


2 土師器24



3 土師器25

1 土師器26

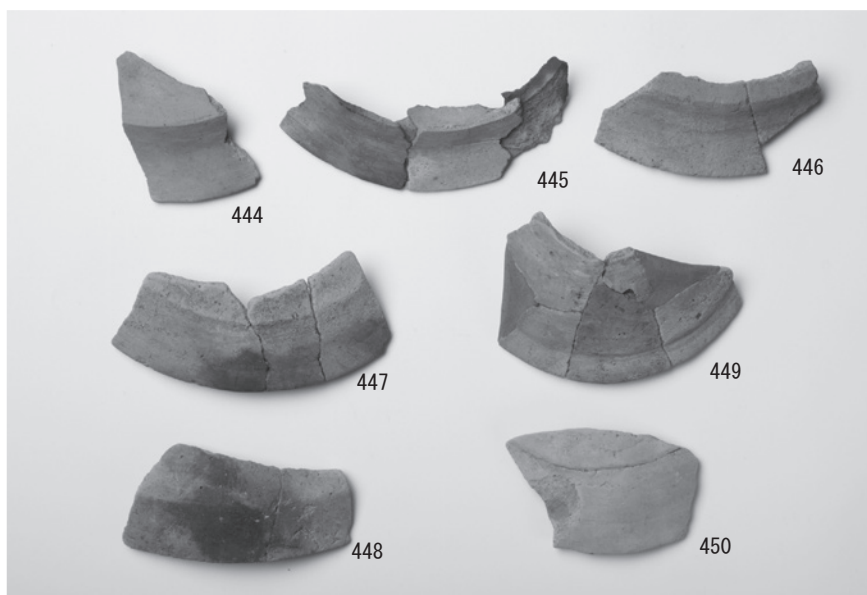


2 土師器27

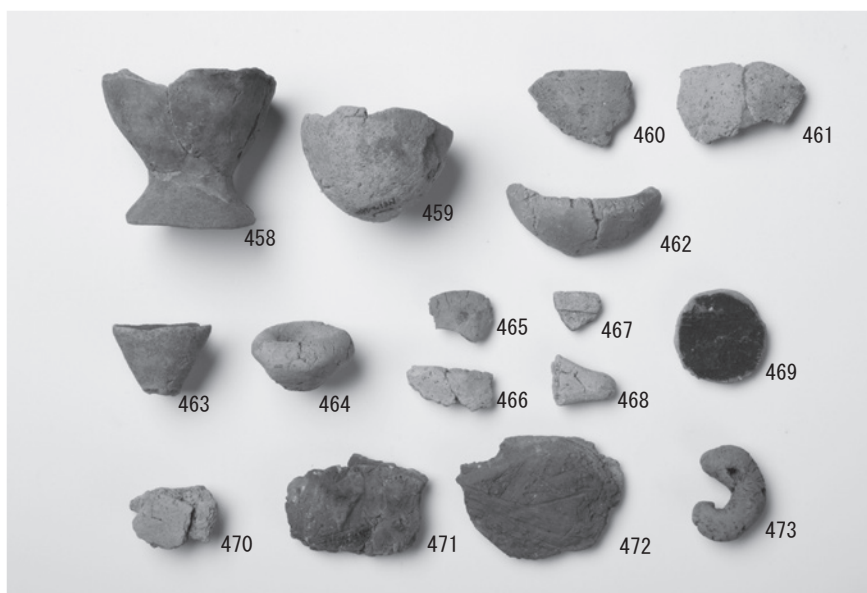


3 土師器28

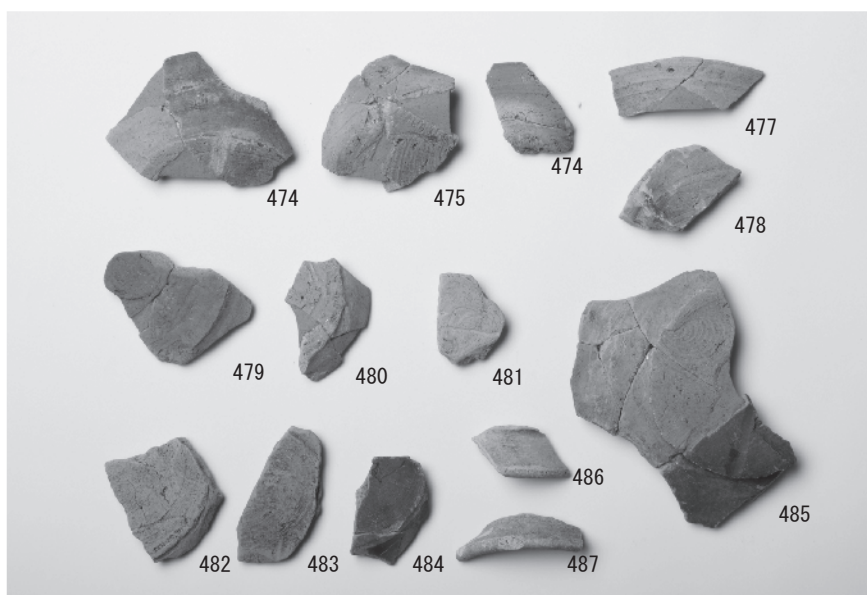




1 土師器29

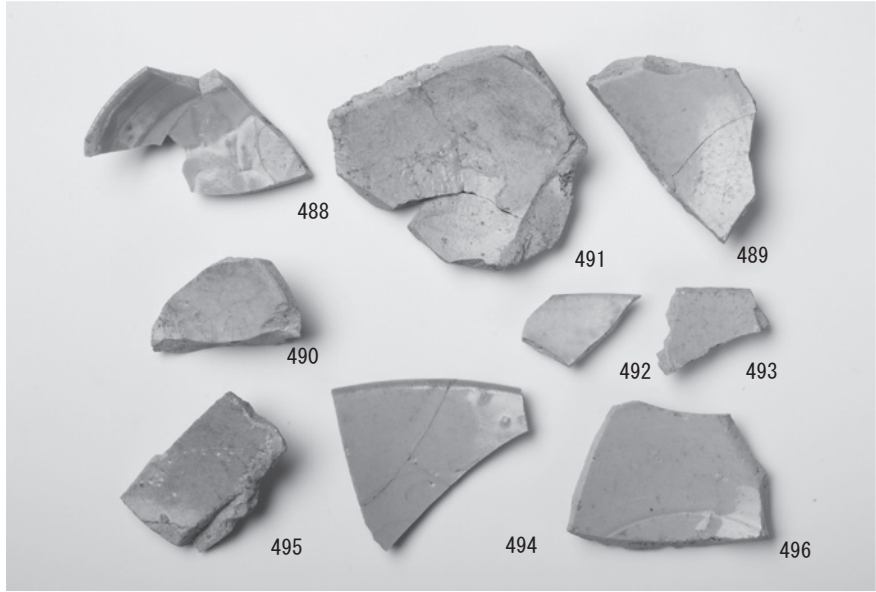


2 土器ミニチュア品
・土製品

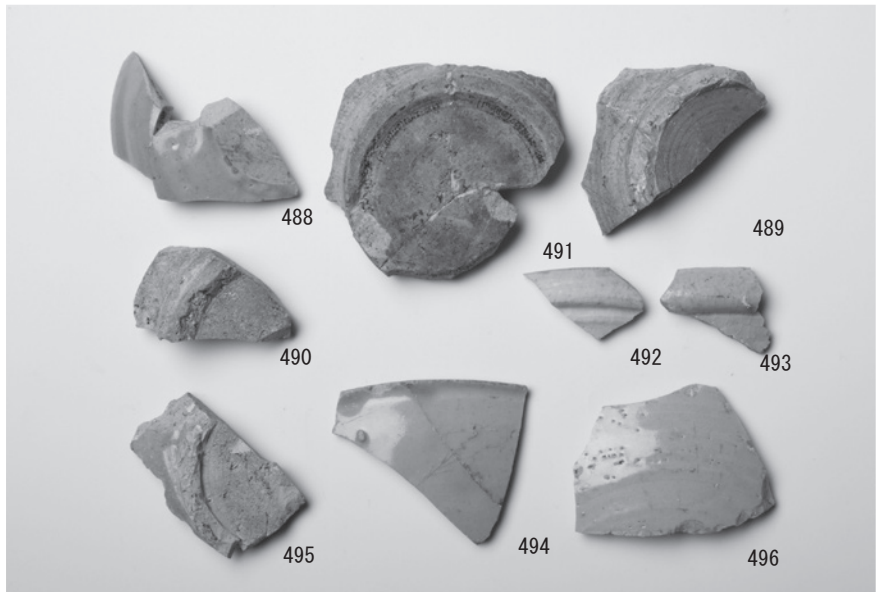


3 土師質土器 (底部外面)

1 白磁 1 (内面)

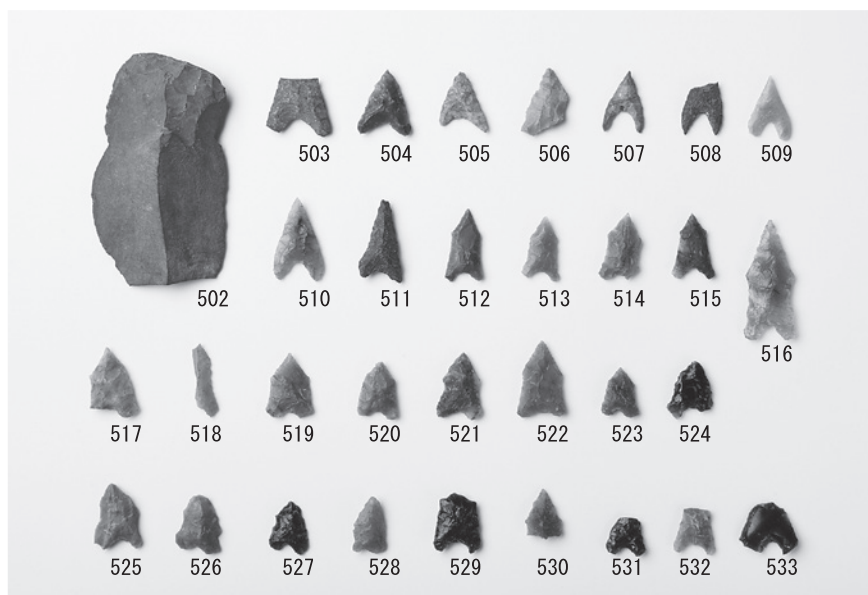


2 白磁 2 (外面)

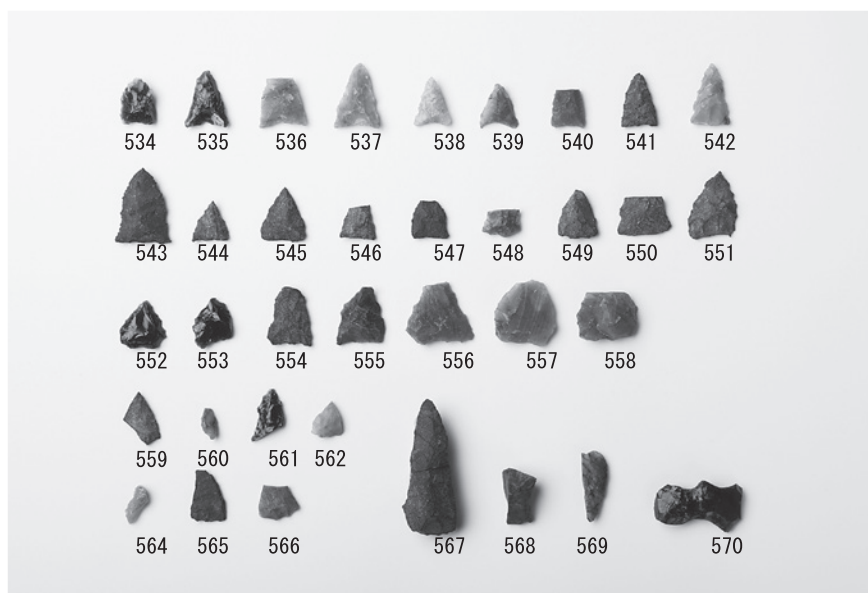


3 青磁・青花





1 石器 1

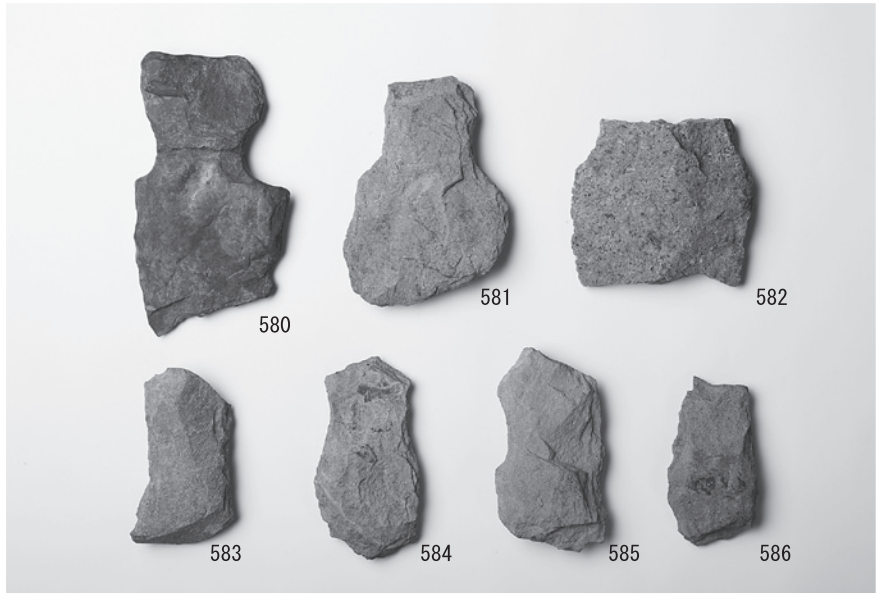


2 石器 2

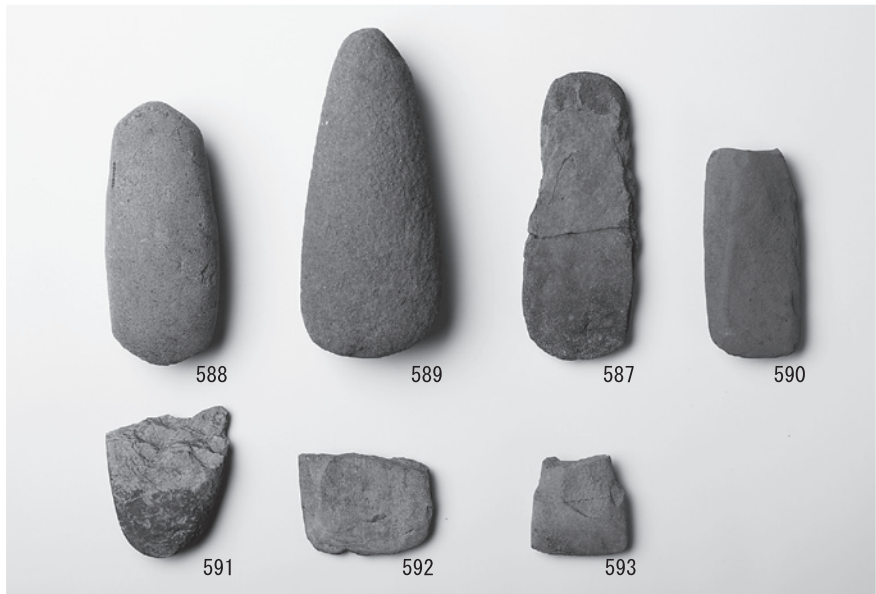


3 石器 3

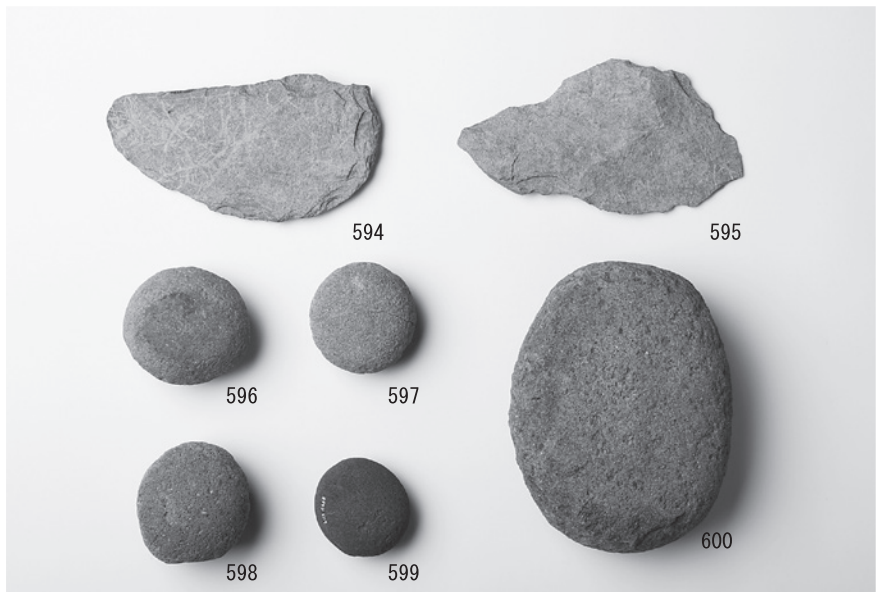
1 石器4

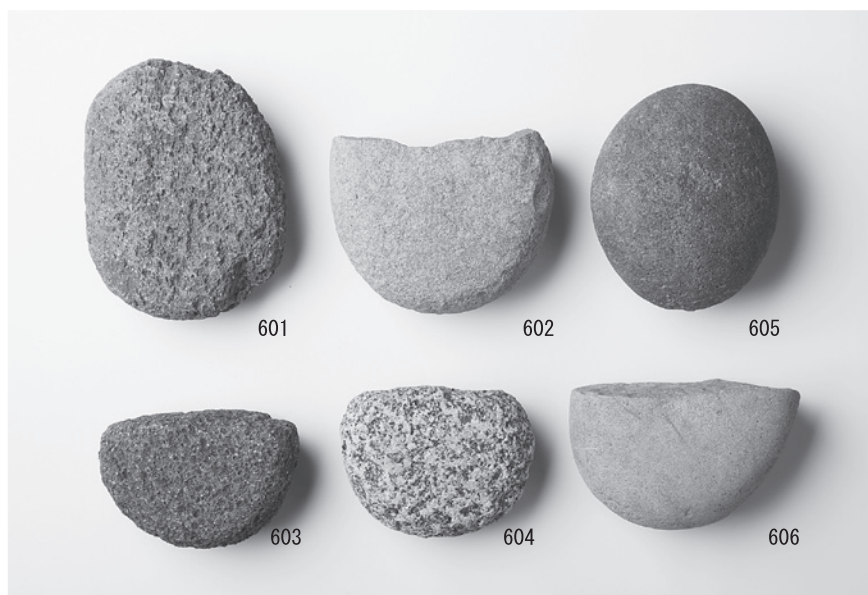


2 石器5

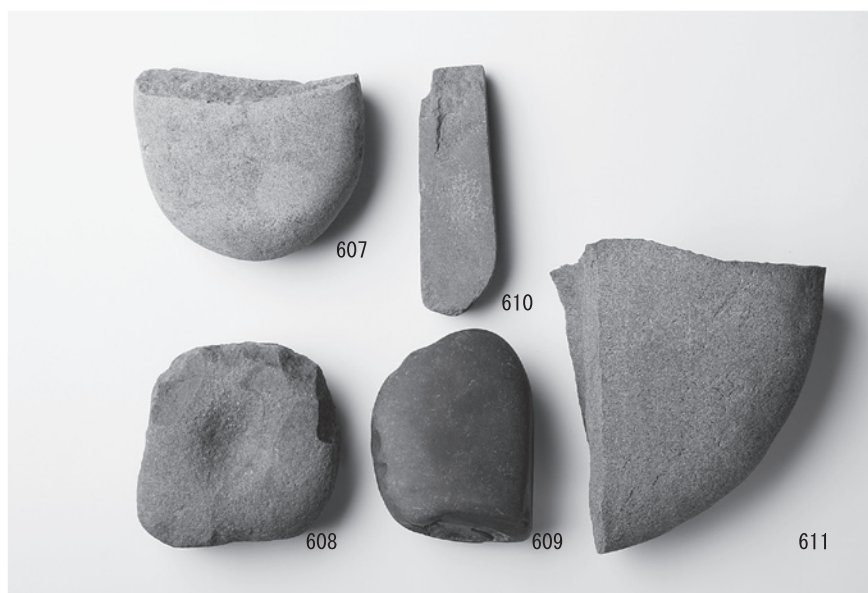


3 石器6





1 石器 7

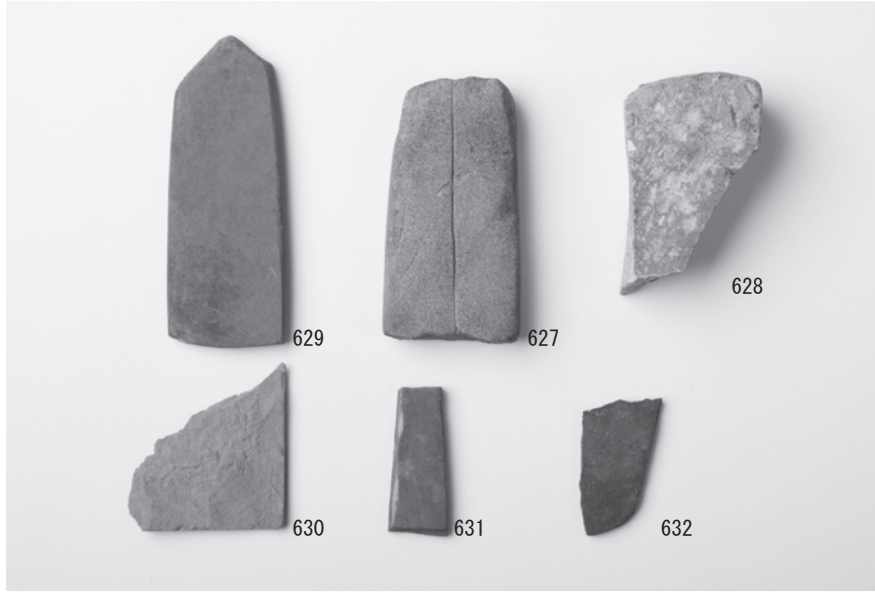


2 石器 8



3 石器 9

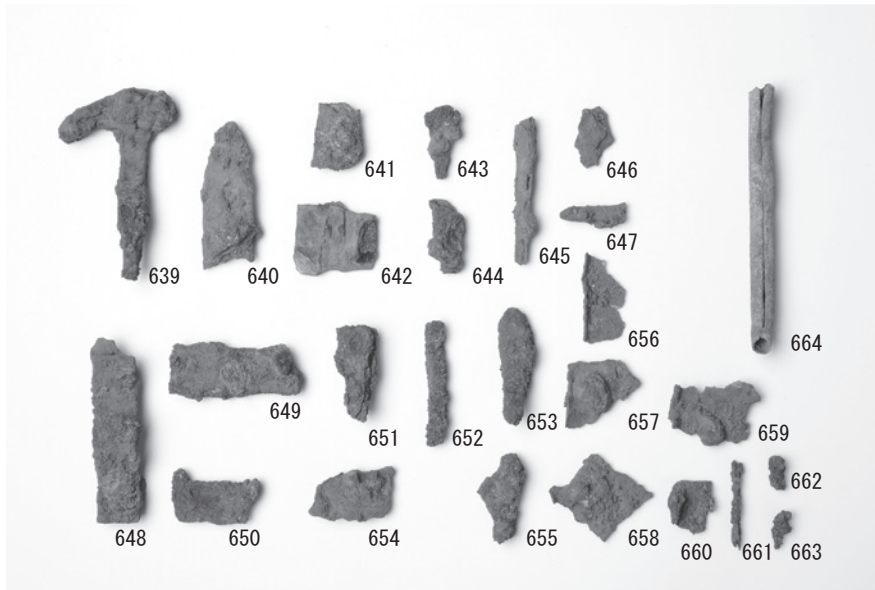
1 石器10



2 石製品



3 鉄器・青銅器





611



614



612



615



613



616



619



617



620



618



624



620



625



623

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおとしいせき							
書名	大年遺跡							
副書名	県道飯野松山都城線（都城志布志道路）梅北工区道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第237集							
編著者名	加藤 徹							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地							
発行年月日	2016年 3月 18日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおとしいせき 大年遺跡	みやざきけんみやこのじょうし 宮崎県都城市 うめきたちょう 梅北町 ばんち 4019番地	452025	7031	31度 40分 29秒 付近	131度 03分 09秒 付近	第1次調査 2012. 9. 12～ 2012. 3. 22 第2次調査 2013. 5. 7～ 2014. 1. 29	約7,400㎡	県道飯野松山 都城線（都城 志布志道路） 道路整備工事
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大年遺跡	集落・ 散布地	旧石器時代 縄文時代 早期 後期・晩期 弥生時代 ～ 古墳時代 (古代～) 中世	土坑	2基	剥片 縄文土器・石器	弥生土器・土師器・ 石器・石製品・鉄器	桜島薩摩火山灰から 30cm下で旧石器時代の 剥片が出土した。 弥生時代～古墳時代の 、間仕切付建物跡を 含む建物跡を10軒検出 した。 古代に遡る可能性の ある道路状遺構を検出 した。	
要 約	<p>大年遺跡は、旧石器時代以降の各時代の遺物が出土しており、人々が断続的にこの場所で生活を営んでいたことが明らかとなった。その中で、旧石器時代の剥片は、約12,800年前に噴火した桜島薩摩火山灰の下約30cmから出土しており、都城地域の中でも古手の石器と考えられる。縄文時代後期～晩期の土器も一定量出土しているが、建物跡は検出していない。遺跡の中心となる時期の一つである弥生時代～古墳時代においては、弥生時代後期～古墳時代初頭、古墳時代前期後半～中期前半、古墳時代後期前半頃と、断続的に営まれた10軒の竪穴建物跡が見つかった。遺跡が形成されたもう一つの中心的時期である中世では、道路状遺構や溝状遺構、そして畦状遺構など多くの遺構が見つかった。これらの遺構から、当時の土地利用について知ることができた。また、道路状遺構は、ほぼ同じ位置で近・現代まで使用されている。さらに、古代まで遡る可能性があり、1000年以上にわたって道路として、遺跡の場所が利用されていた可能性があることが明らかとなった。</p>							

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 237 集

大年遺跡

県道飯野松山都城線（都城志布志道路）道路整備工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 1

2016 年 3 月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地
TEL. 0985 (36) 1172 FAX. 0985 (72) 0660

印刷 株式会社 宮崎南印刷
〒880-0911 宮崎市大字田吉 350-1
TEL. 0985 (51) 2745 FAX. 0985 (52) 2682

Miyakonojo City

OTOSHI Site

The Excavational Investigation Report of Miyazaki Prefectural Archaeological Center
vol.237

2016

Miyazaki Prefectural Archaeological Center